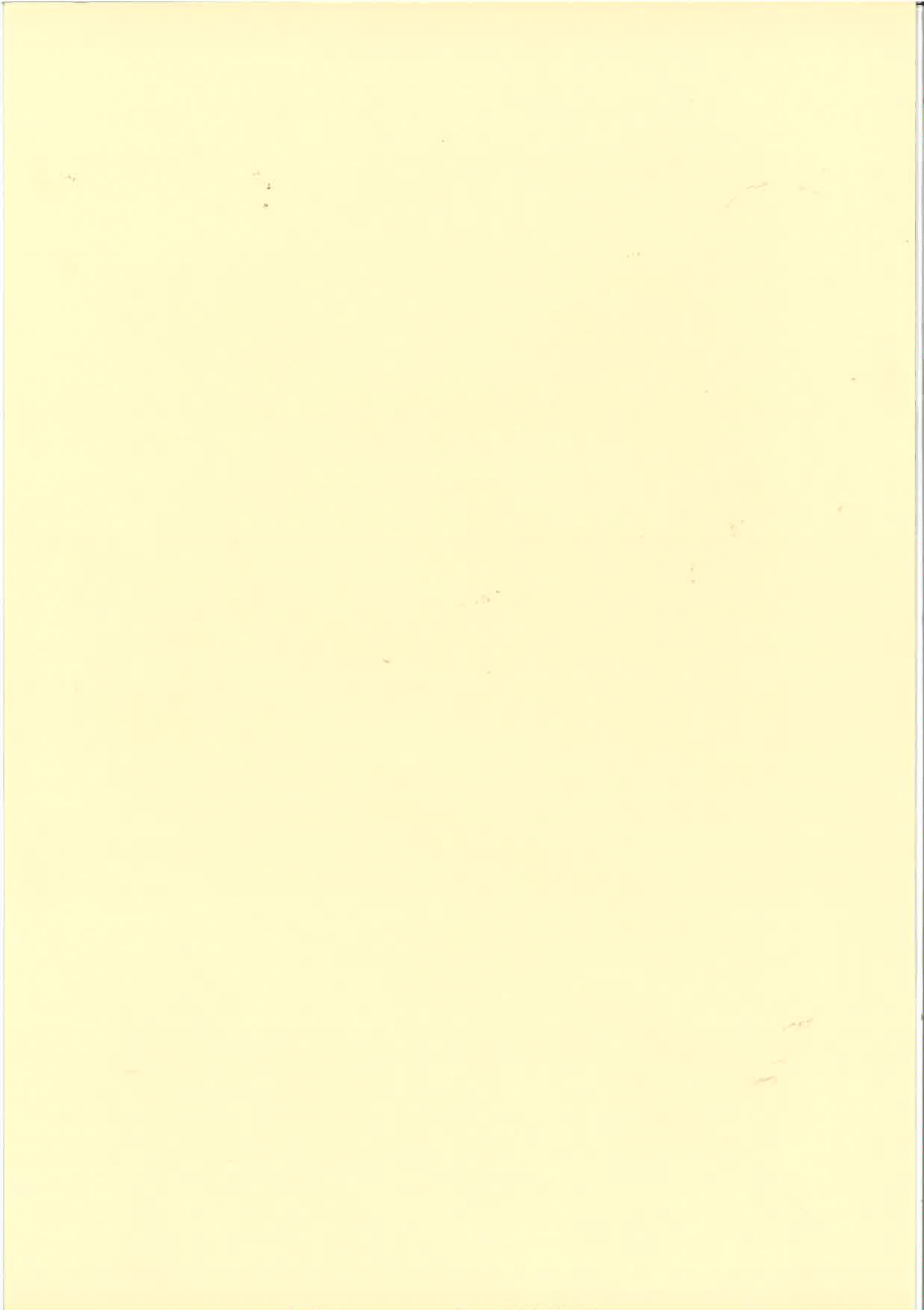


**2nd WORLD CONFERENCE OF MAYORS  
FOR PEACE  
THROUGH INTER-CITY SOLIDARITY**

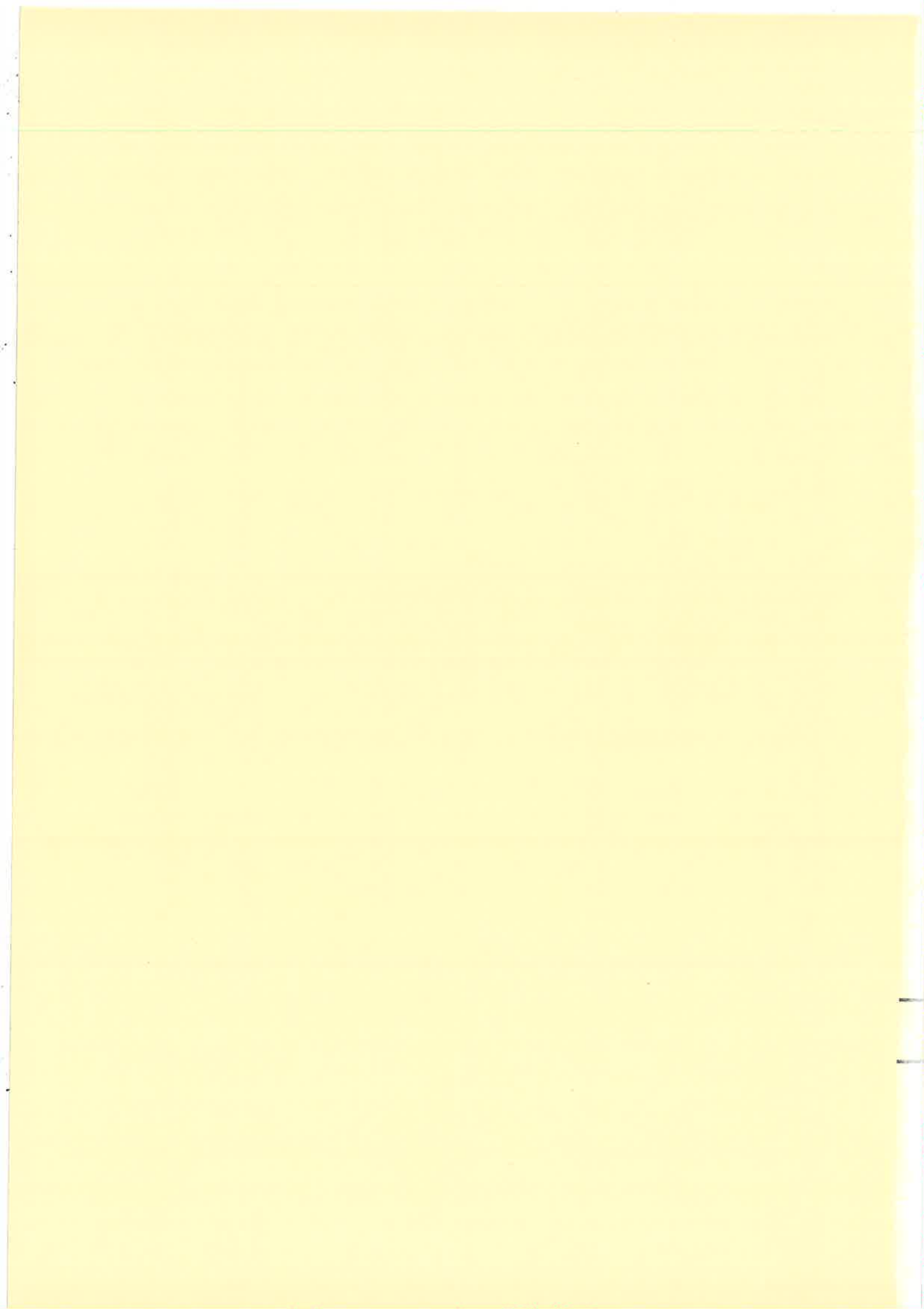
第2回世界平和連帯都市市長会議報告書



HIROSHIMA & NAGASAKI 1989





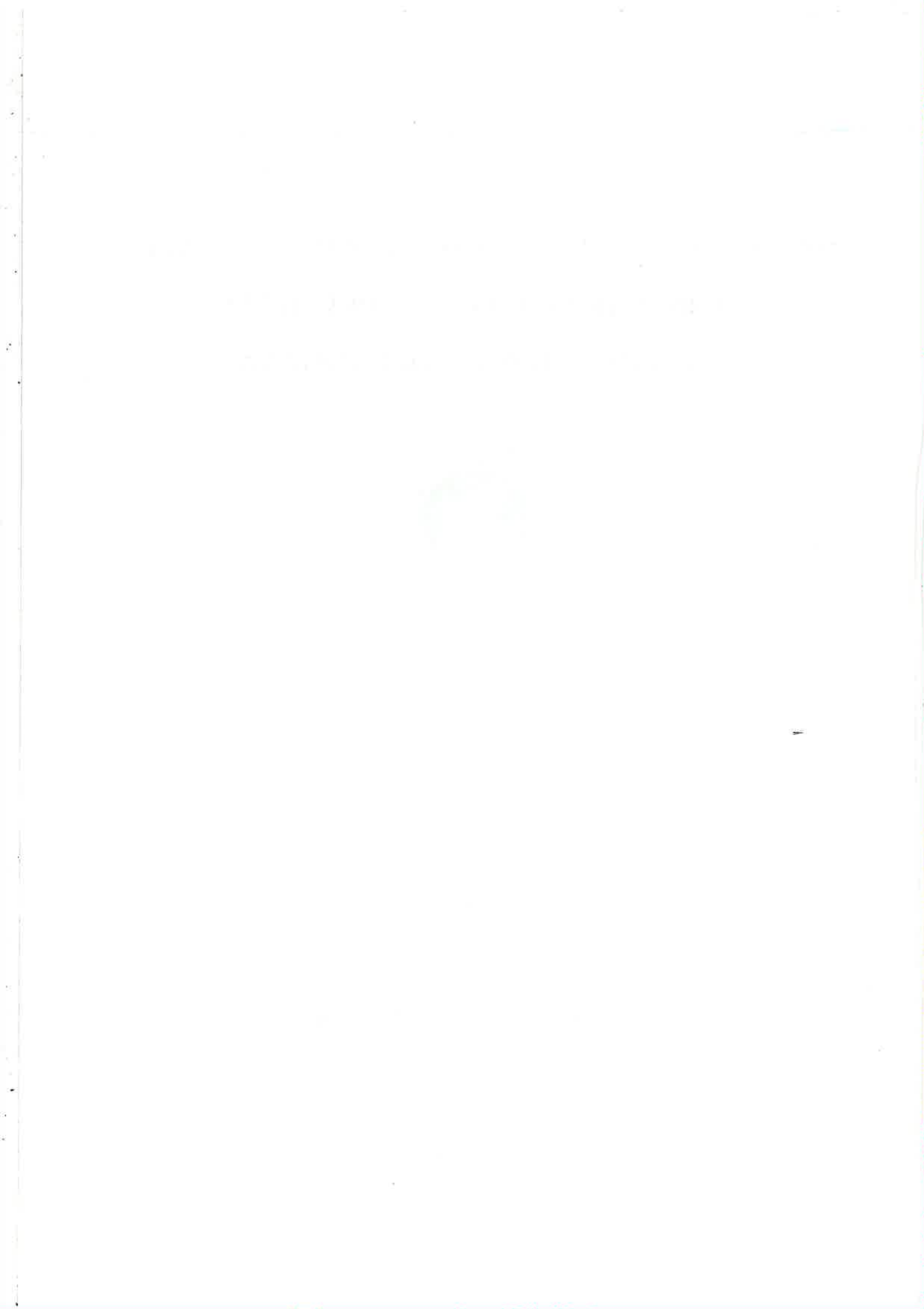


2nd WORLD CONFERENCE OF MAYORS FOR PEACE  
THROUGH INTER-CITY SOLIDARITY

第2回世界平和連帯都市市長会議報告書



HIROSHIMA & NAGASAKI 1989



## 会議報告書の発刊にあたって

広島市長 荒 木 武  
長崎市長 本 島 等

第2回世界平和連帯都市市長会議を平成元年8月4日から同月9日までの間、海外26か国81都市、国内38自治体、合計27か国119都市の参加を得て、広島・長崎両市で開催しました。核兵器の廃絶に向けて都市連帯を推進している世界平和連帯都市市長会議にとって大変実り多い会議でした。

被爆地広島・長崎で再び開かれたこの度の会議に、第1回をはるかに上回る多くの都市の参加が得られましたことは、平和を願う国際世論の高まりを反映するものであり、主催者として誠に喜びにたえません。会議を終始盛り上げていただいた関係各位に心からお礼申し上げます。

原爆の恐ろしさを体験した私ども広島・長崎の市民は、核兵器が再び使われないことを願って核兵器の廃絶と世界の恒久平和を訴え続けてきました。

米ソのINF全廃条約の発効や戦略核兵器削減に向けての両国の努力は、世界の人々に希望と期待を与えました。しかしながら、核兵器をめぐる国際情勢は依然として厳しく、核兵器全廃への道には幾多の困難と障害が横たわっております。また飢餓や貧困、更には地球環境の破壊など全人類が共に解決しなければならない問題も現出しております。

今回の会議は、こうした状況のもと、「核兵器廃絶を目指して一核時代における都市の役割」を基調テーマとして開催し、パネルディスカッションのほか、都市報告を行い、世界恒久平和への確立に向けて真剣な議論が繰り広げられました。

これらの討議の結果、核兵器廃絶の緊急性を訴えた広島アピールと長崎アピールが採択されました。

この6日間の会議を通して、都市と都市との連帯の輪がさらに大きく広がり、世界平和に果たす都市の役割の重大性について、共通の認識が得られたことは大きな成果だったと思います。

今後、世界各地において、核兵器廃絶に向けての都市連帯推進の動きがますます活発になることを念願し、本書がそのための一助となれば幸いです。





# 目 次

5

会議報告書の発刊にあたって	3
会議プログラム	7
参加者リスト	11
写真で見る会議プロフィール	17
開 会 式	25
全体会議 I	43
被爆者との懇談	58
全体会議 II	63
分科会 I	63
分科会 II	81
パネルディスカッション	97
全体会議 III	119
広島アピール発表	121
開 会 式	123
パネルディスカッション	127
被爆者との懇談	145
全体会議 IV	155
分科会 I	155
分科会 II	175
特別講演	193
全体会議 V	197
長崎アピール発表	200
閉 会 式	203
資 料 編	209



# 会議プログラム

7

## 8月4日(金)

8:00-21:00	登録	(広島グランドホテル) (広島全日空ホテル)
17:00-18:00	ブリーフィング	(広島国際会議場、コスモス)
18:30-20:30	広島市長主催歓迎レセプション	(広島国際会議場、ダリア)

## 8月5日(土)

8:20	平和記念公園視察	
	平和都市記念碑 (原爆死没者慰霊碑) 参拝	
	平和記念資料館 (原爆資料館) 見学	
10:00	開会式	(広島国際会議場、フェニックスホール)
	合 唱	崇徳高校グリークラブ
	開 会 宣 言	福島 隆義 (広島市助役、ヒロシマ・ナガサキ平和アピール推進委員会委員長)
	開会あいさつ	荒木 武 (世界平和連帯都市市長会議会長、広島市長)
	来 賓 祝 辞	明石 康 (国連事務次長)
		竹下虎之助 (広島県知事)
		瀬川 吉郎 (広島市議会議長)
	メッセージ披露	ウィリアム・モニング (核戦争防止国際医師会議事務局長)
	基 調 講 演	チャドウィック・アルジャー (オハイオ州立大学教授)
		鴨 武彦 (東京大学教授)
12:10	昼食	(広島国際会議場、ダリア)
13:30	全体会議Ⅰ	(広島国際会議場、ヒマワリ)
	—ヒロシマ・ナガサキ、核戦争は何をもたらしたか—	
	コーディネーター: 永井道雄 (国際文化会館理事長、国連大学学長特別顧問)	
	基調報告 飯島 宗一 (元広島大学学長)	
		重松 逸造 (財放射線影響研究所理事長)
		秋月辰一郎 (財長崎平和推進協会理事長)
		高橋 昭博 (財広島平和文化センター事業部長)
	質疑応答	
15:35	映画鑑賞	(広島国際会議場、ヒマワリ)
	「ヒロシマ・原爆の記録」	
16:25	被爆者との懇談	(広島国際会議場、ダリア)
18:30	海と島の博覧会見学	(広島、西区商工センター)
	ハノーバー ビアテント及び“ジャラン マカナン”で夕食	

## 8 会議プログラム

---

8月6日(日)

---

- 7:45 平和記念式典参列 (平和記念公園)
- 9:30 全体会議Ⅱ (広島国際会議場、ヒマワリ、ダリア)  
—核軍縮と地球的平和達成に都市は何をなすべきか—  
分科会Ⅰ  
分科会Ⅱ  
コーディネーター：永井 道雄 (国際文化会館理事長、国連大学学長特別顧問)  
飯島 宗一 (元広島大学学長)  
各都市の現況と展望の報告 28都市
- 11:30 昼食 (広島国際会議場、コスモス、ラン)
- 13:00 パネルディスカッション (広島国際会議場、フェニックスホール)  
—信頼醸成への道程—  
コーディネーター：磯村 尚徳 (NHK特別主幹)  
パネリスト：アンジェロ・メダ (コモ市長)  
シリ・マヒンダー・シン・サーティ (デリー市長)  
ヘルベルト・シュマルステーク (ハノーバー市長)  
アン・ルーディン (サクラメント市長)  
ユーリー・スタロバトフ (ボルゴグラード市長)  
馬場 伸也 (大阪大学教授)  
鴨 武彦 (東京大学教授)
- 16:00 全体会議Ⅲ (広島国際会議場、ヒマワリ)  
広島アピール
- 16:40 記者会見 (広島国際会議場、ヒマワリ)
- 18:30 平和コンサートの夕べ (広島国際会議場、フェニックスホール)
- 20:40 夕食 (広島国際会議場、ダリア)

---

8月7日(月)

---

- 〈広島から長崎へ移動〉
- 9:10 ホテルを出発
- 10:09 広島発 (新幹線ひかり191号)
- 11:38 博多着  
博多都ホテルで昼食
- 13:27 博多発 (臨時列車)
- 16:35 長崎着
- 19:00 長崎市長主催歓迎レセプション (ホテルニュー長崎、鳳凰閣)

## 8月8日(火)

- 9:00 歓迎あいさつ 長崎市長 本島 等 (ホテルニュー長崎、鳳凰閣)  
 来賓祝辞 長崎県知事 高田 勇  
 長崎市議会議長 佐藤 了
- 9:30 パネルディスカッション (ホテルニュー長崎、鳳凰閣)  
 —今、地球の平和を考える—  
 コーディネーター：飯島 宗一 (元広島大学学長)  
 基調講演：坂本 義和 (明治学院大学教授)  
 パネリスト：エアハルト・クラック (ベルリン市長)  
 L.クウィア・ジョンソン (モンロビア市長)  
 ロニー・ハンコック (パークレー市長)  
 葉山 峻 (藤沢市長)  
 土山 秀夫 (長崎大学学長)
- 11:40 映画鑑賞 「原爆の長崎」 (ホテルニュー長崎、鳳凰閣)
- 11:55 被爆者との懇談 (ホテルニュー長崎、鳳凰閣)
- 12:45 昼食 (ホテルニュー長崎)
- 14:30 全体会会Ⅳ (ホテルニュー長崎、鳳凰閣)  
 —核軍縮と地球的平和達成に都市は何をなすべきか—  
 分科会Ⅰ  
 分科会Ⅱ  
 コーディネーター：坂本 義和 (明治学院大学教授)  
 土山 秀夫 (長崎大学学長)  
 各都市の現況と展望の報告 25都市
- 17:00 グラバー園見学
- 19:00 夕食 (各宿泊ホテル)

## 8月9日(水)

- 9:00 国際文化会館 (原爆資料センター) 見学
- 10:30 平和祈念式典参列 (平和公園)
- 12:30 昼食 (ホテルニュー長崎)
- 14:30 特別講演 明石 康 (国連事務次長) (ホテルニュー長崎、鳳凰閣)
- 15:00 全体会議Ⅴ  
 長崎アピール (ホテルニュー長崎、鳳凰閣)
- 15:30 閉会式 (ホテルニュー長崎、鳳凰閣)  
 閉会あいさつ 荒木 武 (世界平和連帯都市市長会議会長、広島市長)  
 本島 等 (世界平和連帯都市市長会議副会長、長崎市長)  
 謝 辞 参加都市代表  
 閉会宣言 古井一喜 (ヒロシマ・ナガサキ平和アピール推進委員会副委員長)
- 16:00 記者会見 (ホテルニュー長崎、鳳凰閣)
- 16:30 市内観光
- 19:00 さよならパーティー (ホテルニュー長崎、鳳凰閣)

# 同伴者プログラム

10

## 広島

8月5日(土)

14:00 上田宗箇流和風堂

講話

献茶

庭園散策

15:30 現代美術館

8月6日(日)

7:45 平和記念式典参列

11:35 宮島

厳島神社参拝

ショッピング

## 長崎

8月8日(火)

9:30 愛野展望台

10:40 雲仙国立公園、仁田峠

11:30 地獄巡り

8月9日(水)

14:30 日本舞踊観賞

## 参加者リスト (国外)

## アフガニスタン

## カブール

市長 モハマド・ハキム  
ファロック・アセーフィ

## オーストラリア

## キャンベルタウン

市長 ジム・A.クレマー  
市長夫人 ケリー・E.クレマー

## カンタベリー

市長 ジョン・F.ゴリー

## ウォーロンゴング

助役 ウィリアム・モーブレイ

## ベルギー

## アントワープ

助役 ゲオルゲス・ド・コルテ  
同夫人 M.ド・コルテ=モエルマンズ

## ブルガリア

## ソフィア

市議会文化科学教育委員会委員長  
プラメン・D.ネシエフ  
市議会報道部専門官  
ボイコ・N.ゲオロギエフ  
市議会国際部主席専門官  
プラメン・N.マテエフ

## カナダ

## バーナビー

市議会議員 デレク・R.コリガン

## モントリオール

助役 ジョン・ガーディナー

国際課長 ジャン・マルシャン

## トロント

助役 ケイ・ガードナー  
レイモンド・ガードナー

## 中華人民共和国

## 重慶

人民政府外事弁公室主任  
魏司鋒  
通訳 屈慶璋

## フランス

## オバーニュ

市長 ジャン・タルディト

市長夫人 ルネ・タルディト

## カーン

助役 モーリス・ミゲール

## マラコフ

助役 ミシェル・シボ

同夫人 ミホ・シボ=シンマ

## ブレンヌ・シュール・メール

## 芸術祭責任者

ピエール・ギレ

同夫人 ダニエル・ギレ

オーフレット

同夫人 オーフレット

ラッセル

## ヴェルダン

国際ピースメッセンジャー都市会議議長

ジャック・バラ=デュボン

## 産業開発部長

ジャックリーヌ・アントワーズ

キャサリン・ボアレット

## ドイツ民主共和国

## ベルリン

市長 エアハルト・クラック

市長秘書 ディーター・グツシェバウフ

## ドレスデン

助役 ホルスト・バーシュ

東独国際友好連盟理事

ヘルムート・シフナー

## マグデブルグ

市長 ヴェルナー・ヘルツィグ

ドイツ大使館三等書記官

フランク・バイヤー

## ドイツ連邦共和国

## アーヘン(郡)

郡長 ハンス=ギュンター・ベームック

## アルツァイ

助役 アクセル・ギュンター・ゲルドゼツァー

## ベルリン

州大蔵大臣 ノルベルト・マイスナー

大臣秘書 ローター・ストック

ドイツ総領事館副領事

ヨルク・ツイマーマン

## 12 参加者リスト

### フランクフルト アム マイン

助 役 アンドレアス・フォン・シェーラー  
フルト

市 長 ウベ・リヒテンベルグ

市長夫人 ウルスラ・リヒテンベルグ

### ゲッチンゲン

市 長 アルトゥール・レヴィ

### ハノーバー

市 長 ヘルベルト・シュマルスティーク

社会民主党議長

ウベ・ラインハルト

ハノーバー市観光局日本代表

ホルガー・ヴィッティッヒ

### レムゴー

助 役 ハンス・ポール

市議会議員 ヴェルナー・ゲールケ

書記官補 ブリジット・シャウアー

### ノインキルヘンブルイン

市 長 オスカー・ミカエル・ベーム

### チュービンゲン

市 長 ユーゲン・シュミット

### ギリシャ

ペリステリ

市 長 ディミトリス・フォロポウロス

### インド

デリー

市 長 シリ・マヒンダー・シン・サーティ

与党党首 ディープ・チャンド・バンドゥー

市長秘書 オムカー

### イラン

テヘラン

市 長 ビード・モルテザ・タバ・タビー

調査企画協会会長

モーベン・エブラヒミ

広報国際局局長

アリ＝レザ・グァファーリ

### イスラエル

ハイファ

市 長 アリー・シャロモ・グレル

### イタリア

アッシジ

助 役 エマニュエル・ピアッティ

市議会議員 マリアーノ・ブルゴーニュ

ボローニャ

ダンテ・クリッツィ

カンペジネ

助 役 イメリオ・カントーニ

コモ

市 長 アンジェロ・メダ

市議会議員 ジアンステファノ・ブッツィ

アドリアーノ・サンピエトロ

アンジェラ・ベルトゥーツィ

コルシコ

市 長 ジョルジョ・ベルベルシ

市議会議員 ジュセフ・スパータ

市議会議員 ミケーレ・インセラート

フォルリ

市 長 バンダ・バルナッチ

ラクイラ

市 長 エンツォー・ロンバルディ

市議会議員 カルロ・イアニーニ

広報担当顧問

エリコ・チェントファンティ

バルマ

助 役 エルビオ・ウバルディ

サレルノ

グイセベ・ベルート

同 夫人 ベルート

エアベルト・マンツォー

同 夫人 マンツォー

アンファンソ・ペコラーロ

テラモ

リノ・シルピノ

アントニオ・ガッティ

ピアレージオ

ウォルター・ゲセーリ

市議会議員 ジアンカルロ・ジアネチーニ

市議会議員 ビンセンツォ・スタージ

### リベリア

モンロビア

市 長 L.クウィア・ジョンソン

WCM・姉妹都市担当

アスタ・ヘイグ・サノー



## ルクセンブルク

## ビルツ

市長 アンドレ・ビベール

## オランダ

## ハーグ

市長 アド・ハーベルマン

市長夫人 ハーベルマン

行政長官 クーズ・ファン・ボイゼコム

同夫人 ファン・ボイゼコム

## ミデルブルグ

市長 クリス・G.J.ルッテン

## ロッテルダム

前助役 ヘンク・ファン・デア・ボルス

市議会議員 ヤン・M.J.D.ヤンセン

## ペルー

## ビラ エル サルバドール

市長 ミゲル・G.アズクータ

市長顧問 ジュアン・カルロス・G.グルスキー

同夫人 マリービ・G.グルスキー

## フィリピン

## カルーカン

市長 マカリオ・A.アシステイオ Jr

基地司令官 アンヘル・H.キソン

## モンテンプルバ

市長 イグナツィオ・R.ブーン

市長補佐 アルフレド Jr.M.ブーン

同夫人 ミラフロア・T.オカ=ブーン

## バシグ

市民保安対策部長

ロレンソ・A.レジェス

## バレンスエラ

市長 サンティアゴ・A.デ・グスマン

市長夫人 オフェリア・C.デ・グスマン

アドリアン・E.コンセプシオン

## ポルトガル

## アマドーラ

市長 オルランド・ゲレイロ・アルメイダ

市議会議員 アントニオ・サルディダ

## ポルト

市長 フェルナンド・ソアレス・カブラル・モンテイロ

市長夫人 コンセイソン・カブラル・モンテイロ

市議会議員 ラファエル・カンポス・ペレイラ

市議会議員 アントニオ・シルバ・モレイラ

市議会議員 フスティノ・ダ・クルス・ドス・サントス

市議会議員 ルイス・ホルヘ・デ・オリベイラ・ディアス

## スイス

## ジュネーブ

市議会副議長

アンドレ・ヘディガー

## シリア

## クネイトラ

市長 アブドゥール・モネイム・アサド・アル・ハムイ

市長夫人 クォーヌル・テンクイズ

## イギリス

## ブライトン

市長 ブライアン・R.フィッチ

## コベントリー

市長 デイヴィッド・J.ケアンズ

市長夫人 ナンシー・ケアンズ

行政長官補佐

ジョン・M.ペイン

## グラスゴー

市長 スーザン・ベアード

ジョージ・ベアード

市議会事務局長

ジョージ・マッカロー

## シェフィールド

市長 トニー・ダムス

## アメリカ

## アルバニー

アルバニー・ウーマン・オブ・ザ・イヤー

ジョセフィーヌ・デイビス

## オースティン

市議会議員 ジョージ・ハンフリー

## バークレー

市長 ロニー・ハンコック

加州下院議員

トーマス・H.ベイツ

市議会議員 モーデル・シレク

## 14 参加者リスト

### バーリントン

女性問題委員会メンバー

エスター・D.ロスブラム

### クリーブランド

クリーブランド医師財団人工臓器部長

ユキヒコ・ノセ

### コーパスクリスティ

コーパスクリスティ州立大学学生部長

ティト・ゲレーロ

### ユージーン

市議会議員 ショーン・ボールズ

国際非核自治体会議理事

バーバラ・ケラー

### ヒューストン

バージニア・E.マンパー

### アーバイン

市長 ラリー・A.アグラン

市長夫人 フィリス・F.アグラン

環境政策部長

ジェブ・ブラグマン

同 夫人 ブラグマン

フリードマン

同 夫人 フリードマン

### ジャージー・シティ

市議会議員 ジェイミー・ヴァズケス

### ランカスター

市議会議員 ジョン・C.リヨンズ

マーリーン・S.アーノルド

### ミネアポリス

ミネアポリス公園連盟理事

ナンシー・リー・アンダーソン

平和と自由のための国際女性同盟代表

マーン・ヤングデイル

ジェームス・ヤングデイル

広島長崎記念委員会代表

マージョリー・ワンダー

### サクラメント

市長 アン・ルーディン

郡行政長官 グラントランド・ジョンソン

同 夫人 ジョンソン

同 令嬢 ジョンソン

### セントポール

市議会議員 ロバート・C.ロンゲ

ドン・ヨロフスキー

### ソビエト

キエフ

副市長 ガリーナ・メンゼレス

レニングラード

副市長 アレキサンダー・Y.アフデアフ

トビリシ

グルジア平和委員会委員長

アレキサンダー・アレキシゼ

ピースメッセンジャー都市文化情報センター部長

ヴィータン・リチュリシヴィリ

ゴルギラゼ

### ビリニュス

市執行委員会書記

ヴィクトラス・リンケピチェス

### ボルゴグラード

市長 ユーリー・スタロバトフ

工場長 アレクセイ・シェフチェンコ

国際部長 ヴィアチェスラフ・シュストフ

### ベトナム

ホーチミン

市長 グエン・ヴィン・ゲップ

市長顧問 グエン・ハオ

通 訳 ダオ・ホアン・リエン

## 参加者リスト (国内)

## 東京都

## 品川区

区 長 高橋久二  
 総務課長 黒川昌廣

## 大田区

区 長 西野善雄  
 総務課国際交流主査 雨宮謙二

## 中野区

区 長 神山好市  
 企画部長 中村武

## 板橋区

助 役 石塚輝雄  
 総務部長 藪崎義輝

## 葛飾区

収入役 磯崎信彦  
 建築環境部長 北野俊策  
 総務課総務係長 横山成雄  
 宅地指導係長 宮地是守

## 港区

区 長 山田敬治  
 企画部長 中村宏

## 日野市

市 長 森田喜美男  
 総務部秘書課主査 清水護

## 保谷市

市 長 都丸哲也

## 神奈川県

## 横浜市

総務局長 広瀬良一  
 国際室長 田村敏忠

## 川崎市

市民部長 上田博久  
 主査 安岡幹雄

## 藤沢市

市 長 葉山峻  
 秘書課長 石沢尚  
 秘書課主査 杉 武

## 山梨県

## 甲府市

助 役 神宮寺英雄  
 井上袈裟一

## 愛知県

## 名古屋市

総務局企画部主幹 都築英男

## 京都府

## 京都市

総務局総務部長 平野之夫  
 総務局企画調整室調整課主事 多田吉宏

## 大阪府

## 大阪府

国際交流課主幹 真田和男  
 国際交流課主査 守村茂男

## 大阪市

総務局行政部長 吉田博  
 総務局行政部総務課主査 杉尾英司

## 堺市

人権啓発局企画調整課長 下尾信哲

## 豊中市

市 長 下村輝雄  
 助 役 峰岸郁夫  
 都市政策推進部長 三野胖  
 都市政策推進部次長兼企画課長 松本友氏

## 枚方市

市 長 北牧一雄  
 助 役 橋本巧  
 秘書課長 三宅一俊  
 秘書課 山下寿士

## 兵庫県

## 神戸市

企画調整局長 中田善司  
 総務局庶務課庶務係長 小川順一

## 西宮市

収入役 中村哲也

## 広島県

## 広島県

知 事 竹下虎之助

16 参加者リスト

広島市

市長室室長 荒木 武  
 助 役 福島 隆義  
 市長室室長 池田 正彦  
 (財)広島平和文化センター理事長  
 河合 護郎

三次市

助 役 岩崎 健 壮

府中町

町 長 林 原 亘

大野町

町 長 沼 津 久

香川県

高松市

市長 脇 信 男  
 助 役 矢野 輝 男  
 秘書課秘書係長 池 尻 育 民  
 秘書課主事 石 川 浩

愛媛県

松山市

助 役 牧 野 清 文  
 秘書課主任 西 山 秀 樹

高知県

高知市

市長 横 山 龍 雄  
 秘書広報課主査 岩 本 富士雄

福岡県

北九州市

総務局長 大 島 良 隆  
 総務局総務課長 岡 田 光 由

福岡市

総務局総務課長 荒 牧 孝

長崎県

長崎県

知 事 高 田 勇

長崎市

市長 本 鳥 等  
 助 役 古 井 一 喜  
 長崎国際文化会館館長 加 藤 彰 彦  
 (財)長崎平和推進協会理事長  
 秋 月 辰一郎

佐世保市

市長 棧 熊 獅  
 事務吏員 本 田 善 久

大村市

市長 松 本 崇

大分県

大分市

助 役 長谷目 源 太  
 秘書課主任 渡 辺 博 文

沖縄県

沖縄市

市長 桑 江 朝 幸  
 秘書課長 池 原 清

北中城村

村 長 安 里 高 治



開会式であいさつする 荒木武広島市長



基調講演を行うチャドウィック・アルジャー、オハイオ州立大学教授



開会式で合唱を披露する崇徳高校  
グリークラブの皆さん



全体会議 I で質問する参加都市の代表



被爆者と懇談する会議参加者



全体会議 II で平和への取組について報告する参加都市の代表



パネルディスカッション（左から磯村NHK特別主幹、コモ市長、デリー市長、ハノーバー市長、サクラメント市長、ボルゴグラード市長、馬場大阪大学教授、鴨東京大学教授）



講演を聞く会議参加者



広島アピールを発表する  
荒木武広島市長



原爆被災の状況を聞く会議参加者  
(平和記念資料館)



8月6日の平和記念式典で献花する参加者代表（前列右からサクラメント市長、永井道雄氏、ボルゴグラード市長、後列右からベルリン市長、コモ市長、ハノーバー市長、チャドウィック・アルジャー氏）



歓迎レセプション会場で海外参加者からの表敬を受ける荒木武広島市長夫妻





開会のあいさつを行う  
本島等長崎市長



基調講演を行う坂本義和  
明治学院大学教授



「今、地球の平和を考える」をテーマに行われたパネルディスカッション



被爆体験と平和の願いを訴える被爆者



分科会IIで都市報告するアルトゥール・レヴィ・ゲッチンゲン市長



長崎アピールのために熱心に話し合う起草委員



8月9日の平和祈念式典で献花する参加者代表



長崎国際文化会館で原爆資料を見学する参加者



「国連から見た平和と軍縮の展望」について特別講演する  
明石康国連事務次長



着物を着て日本舞踊を楽しむ国外市長夫人一行

# 開 会 式

25

8月5日(午前10時～正午)  
広島国際会議場 フェニックスホール

司 会 広島市国際交流協会  
中 原 薫

合 唱 崇徳高校グリークラブ

指 揮 天 野 守 信

伴 奏 新 宅 雅 和

曲 目 ヒロシマにかける虹

1. 開 会 宣 言 ..... 27  
ヒロシマ・ナガサキ平和アピール推進委員会委員長  
広島市助役 福 島 隆 義
2. 開会あいさつ ..... 27  
世界平和連帯都市市長会議会長  
広島市長 荒 木 武
3. 来 賓 祝 辞  
国際連合事務次長 明 石 康 ..... 29  
広島県知事 竹 下 虎之助 ..... 30  
広島市議会議長 瀬 川 吉 郎 ..... 30
4. メッセージ披露 ..... 31  
核戦争防止国際医師会議事務局長  
ウィリアム・モニング ..... 31
5. 祝 電 紹 介 ..... 32
6. 基 調 講 演  
オハイオ州立大学教授  
チャドウィック・アルジャー ..... 33  
東京大学教授 鴨 武 彦 ..... 39



合唱 崇徳高校グリークラブ

司会 (中原 薫)

ただ今の合唱は、崇徳高校グリークラブの皆様でした。指揮は天野守信先生、伴奏は新宅雅和先生、曲目は津田定雄作詞、新実徳英作曲の「ヒロシマにかけの虹」でございました。皆様、もう一度、崇徳高校グリークラブの皆さんに大きな拍手をお願いいたします。

崇徳高校グリークラブは、1968年に現指揮者の天野守信教諭により創立されました。音楽を通して、豊かで社会性のある人間形成を目指して、日夜厳しい練習に励んでいます。全日本合唱コンクールでは、全国優勝6回、準優勝5回の成績をあげ、日本を代表する合唱団として高い評価を得ています。また、度々、海外演奏にも出かけ、これまでにハワイのホノルル市、ドイツのハノーバー市、フランクフルト市、イタリアのコモ市、パルマ市で演奏を行い、来年3月には、米国ニューヨーク市やワシントン市で演奏を行う計画をたてております。

なお、開会式には同時通訳が入ります。同時通訳装置についてお知らせいたします。お手元のイヤホンのスイッチをONにして下さい。次に御使用になるチャンネルを合わせて下さい。チャンネル1は日本語、チャンネル2は英語、チャンネル3はドイツ語、チャンネル4はフランス語、チャンネル5はロシア語、そしてチャンネル6はイタリア語でございます。なお、本日の開会式の司会進行は、広島市国際交流協会、中原薫がいたします。

皆様、お早うございます。世界各都市からお越しいただいた代表の方々、ようこそ広島にいらっしゃいました。私は、本日の進行を務めさせていただきます広島市国際交流協会の中原薫でございます。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。これより第2回世界平和連帯都市市長会議の開会式、並びに基調講演を開催させていただきますと存じますが、ここで皆様に、プログラムの一部変更についてお知らせ申し上げます。本日、基調講演をいただく予定でございました第43回国連総会議長ダンテ・カプート様が御都合により、急きよ来日できなくなりました。したがって、本日の基調講演は、アメリカ、オハイオ州立大学教授チャドウィック・アルジャー先生と、東京大学教授、鴨武彦先生をお願いいたしております。あらかじめ御了承お願ひいたします。それでは、これより第2回世界平和連帯都市市長会議の開会式を行いたいと思ひます。最初に、世界平和連帯都市市長会議の開会宣言を、ヒロシマ・ナガサキ平和アピール推進委員会委員長であります広島市助役、福島隆義が行います。

## 開会宣言

ヒロシマ・ナガサキ平和アピール  
推進委員会委員長  
広島市助役 福島隆義

ここに第2回世界平和連帯都市市長会議の開会を宣言いたします。

司会

続きまして、主催者を代表して、第2回世界平和連帯都市市長会議会長であります広島市長、荒木武が開会のあいさつを申し上げます。

## 開会あいさつ

世界平和連帯都市市長会議会長  
広島市長 荒木 武

世界平和連帯都市市長会議の皆さん、並びに御列席の皆さん、本日、第2回世界平和連帯都市市長会議の開催にあたり、国の内外から多数の都市の出席のもと、明石康国連事務次長、チャドウィック・アルジャー、アメリカ、オハイオ州立大学教授をお迎えして、新築になったばかりのここ広島国際会議場で会議が開催できますことを誠に光栄に存じますとともに、皆様方を心から歓迎申し上げる次第でございます。

顧みれば、あと10年余りで別れを告げようとしている今世紀は、まさしく波乱に富んだ激動の時代でありました。人類は今日まで幾多の戦争を引き起こし、その度ごとに尊い生命を失い、かけがえのない自然を破壊してきました。今世紀前半には、二度にわたる世界大戦を経験し、特に、第二次世界大戦においては原子爆弾の投下という人類史上、類例のない悲惨な体験をいたしました。

1945年8月6日午前8時15分、広島に投下された原子爆弾は、その強烈な閃光と凄じい衝撃波により、これまで営々と築いてきた人間の営みを一瞬にして破壊し、死の街にしてしまったのであります。およそ35万人が被爆し、被爆後4か月間に14万人前後の人々が死亡したと推定されております。爆心地から半径2キロメートル以内の木造家屋は全壊、全焼いたしました。原子爆弾による被害の特質は、大規模破壊が瞬間的に引き起こされ、老若男女の区別なく、非戦闘員を含め

て無差別に殺りくされ、熱線・爆風・放射線の3つの複合作用によって被害が増幅されたところにあります。本年3月31日現在、被爆者は広島、長崎を中心にして、全国およそ35万6,500人が生活しております。しかし、そのほとんどは、被爆によるいろいろな障害と闘いながら健康に対する不安を訴え続けているのであります。この会場内で、今、44年前の原爆投下の惨状を写した写真や、被爆者が描かれた絵を展示いたしております。私は被爆者の1人として、これらの写真や絵を見るにつけ、当時の惨状を思い起こし、改めて核兵器の残虐性というものに強い脅威を感じざるを得ないのであります。

また、我々はヨーロッパ、アジア、アフリカの多くの都市が他の大量破壊兵器によって灰じんに帰した事実を決して忘れることはできません。去る6月、ドイツ連邦共和国のニュルンベルグ市で開催された第2回ドイツ連邦共和国連帯都市会議において採択された「ニュルンベルグ宣言」では、「ポーランド侵略から犯罪的第二次世界大戦が始まり、今年で50年になる。大戦が終わって残されたのは5,500万人を超える死者と破壊された町、そして戦争とそれに続く事態によって自分の故郷を失った何百万人もの人たちである。大戦が終わって残されたのは、広島と長崎への原爆投下であり、これは新しい次元の恐怖と破壊をもたらし、全人類を脅かすものとなった。この恐怖に抵抗し、暴力や戦争のない世界を求める人々の願いを訴え続けることは、国家や社会で責任を持つ者全ての義務である。」と述べられており、最後に自治体レベルでも可能な限り、平和や相互理解そして軍縮への貢献を果たそう、と結んであります。私は、この「ニュルンベルグ宣言」を都市間の対話と連帯の拡大に資するものとして高く評価し、ドイツ連邦共和国だけでなく、広く世界の国々において、こうした都市レベルでの会議が開かれることを強く望むものであります。また、こうした状況の中、この度、ドイツ連邦共和国ベルリン市の初めての参加を心から歓迎いたすものであります。

私は、4年前の第1回世界平和連帯都市市長会議において、世界の都市と都市との連帯の輪を広げることにより、核兵器廃絶への展望を切り開くべきであることを強調いたしました。今、核兵器廃絶への世界の世論を喚起するためには、市民レベル、都市レベルの平和への取り組みが最も実質的かつ効果的な方法であると改めて強く感じているところであります。私が、7年前の第2回国連軍縮特別総会で、この市長会議の真髓である都市連帯推進計画を提唱して以来、これを契機として、世界の多くの都市から賛同いただき、現在、東西両陣営及び非同盟の国々49か国270都市が賛

同し、賛同していただいた都市の人口を合計いたしますと、1億人を超える大きな組織になっております。私は、このようにわずか7年で五大洲すべてを網羅し、多くの都市が賛意を示された背景には、それが核兵器廃絶への熱意の表れであることはもちろん、通常兵器の削減や化学兵器の廃止、さらには、飢餓・貧困・人権問題など、全人類的課題に都市の関心が向けられていることの証左であると考えます。昨年、ニューヨークの国連本部で開かれた第3回国連軍縮特別総会では、核兵器の廃絶と世界恒久平和の実現を強く訴え、この市長会議からのアピールを提出いたしました。また、去る4月には、わが国で初めて開催された国連軍縮会議の参加者を本市に受け入れ、市民を対象とした「国連と軍縮」広島講演会を開催し、市民の平和意識の高揚を図るとともに会議参加者に対し、被爆の実相を知っていただく機会を持ちました。

ところで今日、深刻な問題として取り上げられておりますものに、地球的環境破壊の問題があります。去る7月、この国際会議場の開館を記念した「米ソ宇宙平和サミット」を開催いたしました。私はその時、今ただちに緑の地球を守る方策を考えなければ、地球は滅んでしまうのではないかと危機感を強く持ったものであります。フロンガスによるオゾン層の破壊、酸性雨や熱帯林の喪失と砂漠化現象などの環境破壊は、1個人、1都市、1国内にとどまらず国境を越え、まさに地球規模での広がりをみせております。そして、我々人類の生存を脅かすまでになってきております。我々は、地球の未来を守るために人類の英知を結集して、この問題の1日も早い解決を図る必要があると考えます。

次に、最近の国際情勢について申し述べてみたいと存じます。私が特に感じますことは、昨年米ソ両国による中距離核戦力全廃条約の発効後、この条約を弾みとして軍縮機運が大変な盛り上がりを見せてきたこととあります。その底流には、明らかに世界世論の軍縮を志向する大きな歴史の高揚があります。ヨーロッパでは最近、通常兵力の削減が具体化してきておりますし、去る6月には、ジュネーブで米ソ両国による包括軍縮交渉が7か月ぶりに再開されました。私は、これらのことを大変喜ばしく思うと同時に、中距離核戦力全廃条約発効後の重要課題である戦略核兵器半減を近い将来、米ソ間で合意されるよう期待するものであります。米ソ交渉の成功は、単に戦略核兵器の半減にとどまらず、さらに世界の緊張緩和を促進し、安定した東西関係、ひいては世界の軍縮への機運を一段と盛り上げさせるとともに、新たな国際平和秩序への輝かしい胎動であると信じます。しかしながら、一方こう



した米ソ雪どけムードにもかかわらず、依然として核実験が強行されている事実には、私は胸の痛みをおぼえるものであります。私は、これまであらゆる国の核実験に対して反対を表明して参りました。現在まで抗議すること480回以上にも及んでおります。私は核実験が禁止されれば、核軍縮への道がさらに一層開け、すべての核兵器廃絶も可能になると考えます。核兵器の近代化につながる核実験をどうしてもやめさせなければならぬと思います。

広島市は今年、国内法により市制度が敷かれてから100周年を迎えました。また、市の発祥の起源となった広島城築城から400年を迎える大きな意義をもつ年にあたります。現在、広島市は106万人を超える中核都市として発展して参りましたが、振り返って思えば、戦後の混乱期から本市をいち早く立ち上がらせたのは、国内外からの温かい援助と市民のゆるみない努力によるものであります。1949年には、「広島平和記念都市建設法」が公布され、広島市を恒久の平和を誠実に実現しようとする理想の象徴として建設することが決められたのであります。今日、広島市は被爆の苦しみ、悲しみ、憎しみを乗り越え、世界人類の平和の原点として永遠に位置づけられております。

明日、6日は44回目の平和記念式典をとり行い、私は、世界恒久平和を願う平和宣言を発表いたします。平和記念式典を行います平和記念公園の原爆死没者慰霊碑には、「安らかに眠って下さい 過ちは繰返しませぬから」という碑文が刻まれております。これは、この碑の前に立つ総ての人々が原爆犠牲者の冥福を祈り、戦争という過ちを再び繰り返さないことを誓い合う言葉であります。私は、この言葉こそが、全人類の共存と世界恒久平和を願う「ヒロシマの心」そのものであると固く信じております。

広島市は現在、原爆ドーム保存募金を行っております。これは崩壊するおそれのある原爆ドームを原爆投下の証として後世に伝えるため、広く国の内外に募金を呼びかけているものであります。この場をお借りいたしまして是非とも、皆様方に御協力をお願いしたいと存じますので、よろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、世界最初の被爆地広島で、本日から始まります第2回世界平和連帯都市市長会議が、実り多い会議となりますことを心から祈念するとともに、広島市の被爆の実相をつぶさに御覧いただき、「ヒロシマの心」をそれぞれお国の皆様方に広く伝えていただくようお願い申し上げます、開会のごあいさつといたします。大変ありがとうございました。

司会

荒木武広島市長でした。

さて、本年は被爆44周年であると同時に、第二次世界大戦の終戦44周年でもあります。大戦の犠牲となった多くの方々の御冥福を祈り、再び戦争の過ちを繰り返すことなく、世界恒久平和の誓いを新たにすため、ここで皆さんとともに黙とうをささげたいと存じます。会場の皆様、全員で黙とうを行いますので、御起立をお願いいたします。

黙とう。

黙とうを終わります。御着席下さい。

ここで、本日の御来賓の方々からごあいさつをいただきたいと存じます。先ず、最初に、国際連合を代表して国際連合事務次長、明石康様をお願いいたします。

## 来賓祝辞

国際連合事務次長 明石 康

国連事務総長デクエアル事務総長に代わりまして、ここで第2回世界平和連帯都市市長会議に、心よりの祝辞をお届けいたします。27か国より119都市の市長がここに集まり、そして核軍縮、並びに世界平和実現に向けて、世界の各都市が果たすべき重要な役割を論じることは、非常に意義深いことであります。広島そして長崎は、核時代の始まりを告げました。それは、平和にとっての恐怖であり、そして人類にとっての言語に絶する破壊力をあらわした時代の始まりでありました。広島、長崎という都市、並びにその市民は、地上の生命の脆弱性、また、一人ひとりの人間の尊さ、そして人間の不屈の精神、また、とりわけ現代科学技術がつくり出してしまった未曾有な力の雄弁なる証人でいらっしやいます。NATO及びワルシャワ陣営の間で、そして両超大国の間で、軍縮に向けましての実質的な措置のための積極的な傾向が、最近みられておりますことは、全員にとっての喜ぶべきことであります。また、世界のその他、幾つかの地域におきまして、平和があらわれ始めておりますが、これは国連に結集された諸国の努力によるものであります。これらの動向は、我々の心を強くさせるものがありますが、ここで私どもは、まだ未解決の問題、緊張、敵意があり、これらが多数の国々を分け隔てしている事実をも認識しなければなりません。また、経済、生態系そして社会的な性格をもった新たな危険が、この地球に脅威を投げ掛け、その回りの空気の脅威となっている事実も

見逃してはなりません。また、私どもの努力は今後、相互不信の減少、並びにあらゆる国民とグループの間の協力、理解の強化に向けられなければなりません。この5日間を通しての皆様の討議が、今日の世界が直面している複雑な問題点を明確にし、並びに文字通り一つになりつつある小さな世界の各都市を強固に結びつけることの利益と展望の共通性を明確にすることができるとを、確信しております。それを通してこそ、この会議が、世界平和及び軍縮の道を切り開くことに貢献したと言えるでありましょう。ありがとうございました。

司会

ありがとうございました。続きまして、広島県知事、竹下虎之助様をお願いいたします。

## 来賓祝辞

広島県知事 竹下虎之助

第2回世界平和連帯都市市長会議の開催にあたりまして、一言御祝いを申し上げます。この度は、世界各都市から遠路、平和都市広島にお越しいただき、開催地の知事といたしまして、心から歓迎を申し上げます。皆様には、世界の各地におきまして、世界恒久平和の実現のために、たゆみない努力を傾けておられることに対しまして、深く敬意を表するものであります。

この広島市は、44年前は人口33万人余りを擁する都市でありましたが、原子爆弾により一瞬のうちに廃墟に化し、10数万人に及ぶ尊い人命が失われるという人類史上初めての惨禍を受けました。しかしながら、広島市は、市民の不屈の精神と粘り強い努力によりまして、御覧のように我が国における中枢都市としてよみがえり、更に、世界へ向けて国際平和文化都市建設を目指して、新たな努力を積み重ねているところでございます。このような繁栄は、40数年前の尊い犠牲の上に成り立っていることを、私ども広島県民は、片時も忘れることができません。また、今日の繁栄を将来に向かって持続していくためには、世界の恒久平和の実現が不可欠でありまして、広島県といたしましては、1986年3月に、核兵器廃絶に関する広島県宣言を行い、平和実現に向けての決意をいっそう新たにしたところであります。

一方、世界の潮流は、昨年米ソの首脳会議によってINF全廃条約が締結されたり、国連のイラン・イラ

ク戦争停戦決議が受け入れられるなど、急速に緊張緩和や軍縮に向かっております。このような時、広島、長崎両市長の呼びかけにより、世界各国から多数の市長さん方が一堂に会されまして世界平和実現のためにいろいろと議論を尽くし、お互いの連帯の絆を強化されますことは、誠に意義深いことであります。この会議の開催のために、ひとかたならぬ御尽力を賜りました広島、長崎両市長に対しまして、改めまして敬意を表しますとともに、この会議が実り多いものになりますことをお祈りいたしまして、私の御祝いの言葉といたします。ありがとうございました。

司会

ありがとうございました。続きまして、広島市議会議長、瀬川吉郎様をお願いいたします。

## 来賓祝辞

広島市議会議長 瀬川吉郎

第2回世界平和連帯都市市長会議の開会にあたり、広島市議会を代表いたしまして一言ごあいさつを申し上げます。本日御出席の皆様をはじめ、世界平和連帯都市の市民の皆様が、日夜積極的な活動を展開しておられますことに対し、心から敬意と感謝の意を表すさせていただきます。さて、皆様御承知のとおり、昨年米ソINF全廃条約が発動され、世界は軍拡から軍縮へ、対立から対話へと大きく動き始めました。このことは、反核、平和という世界世論を喚起するに至った第1回世界平和連帯都市市長会議の大きな成果であると言えると思います。今回の世界平和連帯都市市長会議では、第1回に比べ平和問題を広くとらえ、核兵器廃絶に加え、環境破壊、飢餓、貧困、人権問題等についても討論されると伺っております。これらの問題は、地球的平和の達成のために欠かせないものであり、緊急に解決すべき人類全ての課題と言えます。こうしたことから、この会議において、広島、長崎の悲願であります核兵器廃絶をはじめ世界の掲げるいろいろな平和問題について実り多い成果が得られますことを、大いに期待するものであります。さらには、人種・国籍・宗教・イデオロギーの違いを越えて、平和を希望する連帯都市の輪がますます広がり、広島市民と長崎市民が体験いたしましたあの惨禍が二度と再び繰り返されることのないよう、しっかりと手を結ぶことを期待して止まないものであります。私ども、広島市議会と

いたしましても、被爆の実相、ヒロシマの心を世界に訴え続け、一日も早い恒久平和実現に向け、皆様方とともに努力を傾注してまいりる覚悟であります。

最後になりましたが、国内はもとより、世界各地から遠路はるばるお越し下さいました皆様に、厚く御礼を申し上げますとともに、第2回世界平和連帯都市市長会議の成功を念願いたしまして私のごあいさついたします。ありがとうございました。

#### 司会

どうもありがとうございました。引き続きまして、核戦争防止国際医師会議会長バーナード・ラウン博士のメッセージを同会議事務局長でございますウィリアム・モニング様より御披露願います。

## メッセージ披露

### 核戦争防止国際医師会議事務局長 ウィリアム・モニング

ありがとうございます。荒木市長、御来賓、来場の皆様。核戦争防止国際医師会議（I P P N W）は、61か国におきまして、20万人以上の医師を代表するものでありますが、I P P N Wの共同議長、米国バーナード・ラウン、そしてソ連ミカエル・クジン、また、I P P N W執行委員会を代表し、ごあいさつをさせていただきます。今週、広島における皆様の会議、また、広島原爆の日の式典は、非常に意義があります。広島という都市は、世界の中で民間人に対して初めて、原爆が使われた都市として知られておりますが、それだけではなく、広島市は、世界平和の努力をする人々、そして核兵器の廃絶の努力の中心地としての評判を確立されました。私どもは、広島を誇りに思っております。広島は、世界の政治、コミュニティーのリーダーのお手本であり、世界的に考え、そして国内で行動をとるものの模範であります。国際地域、国際社会での平和・正義でのリーダーシップを明確に示されておりますが、これは21世紀に向けて真の国際的な家族がづくられることのあらわれであり、始まりであります。I P P N Wは、1985年、ノーベル平和賞を受賞させていただきました。私どもは皆様に、招待状をお送りしたいと思います。I P P N Wの第9回世界大会が、この素晴らしい会議場におきまして開かれることになっております。I P P N W第9回世界大会は、10月7日から10日まで広島におきまして、そして10月11日、12

日長崎において開催されることになっております。荒木市長が主催されますし、また、I P P N W日本支部会長、杉本博士も主催者のひとりであり、広島県医師会も主催者であります。80か国から3,000人の代表を結集させたいと考えております。この世界大会のテーマは、「ノーモア・ヒロシマ」であり、そして核保有の道義的、倫理的な側面を強調することになっております。I P P N Wは、世界の中で最も拡大していく大きな医師の組織であります。完全な廃絶主義であり、あらゆる核兵器の廃絶を誓っており、これは医学的、道義的、絶対的な課題として位置付けられております。核兵器廃絶に向けての重要な歩みとして、I P P N Wは、われわれの処方せんとでもいえる全面的核実験の禁止を採択いたしました。また、私どもは、他の組織と協力し、全面的核実験禁止条約のための国際的なキャンペーンを行っており、この運動をシース・ファイヤーと呼んでおり、61か国でI P P N W加盟支部を通して活動しております。核実験は、核兵器競争に燃料を与え、加速化しています。新しい核兵器システムの製造を促進し、核拡散を促進しております。核実験禁止は、検証可能です。容易に実現できます。まだテーブルに残っておりますものは、ソ連のゴルバチョフ議長の提案であり、米国がソ連と同様のジェスチャーを示しさえすれば、即時に核実験のモラトリアムを行うというものであります。我々はネバダ運動がソ連におきまして、セミパラチンクに反対する抗議運動に発展していることを心強く思っております。また、私どもは、核実験反対、核兵器製造、戦争反対の世界世論を喚起しています。シースファイヤー・キャンペーンを通し、私どもは、国連のアmendメント・カンファレンス、つまり1963年部分的核実験禁止条約を包括的条約にするべく努力をしており、国連加盟全ての国に、この努力への参加を呼びかけたいと思います。私どもの地球は、環境的な危機に直面しています。核兵器の製造、実験、配備は、私どもの脆弱な、ひ弱な世界の生態系に対しての最も大きな脅威であります。しかし、これは予想されたことではなく、現存する脅威です。国の安全保障の名のもとに、核兵器製造工場の労働者、その地域の市民は、放射線廃棄物そして有害物の悪い影響にさらされております。これは、国民に対して計り知れない健康環境の害悪を与えるものであります。ウラン採掘から兵器の配備、そして放射性核物質の処分にわたって、核兵器生産の全サイクルは、国民の保健、世界の環境への脅威であります。最近のアメリカのニュース報道をみまますと、エネルギー省が核兵器生産設備の管理不適を行っていることが明らかになっております。核廃棄物の処理に関する過失、

それからまた情報非公開ということが、忍びよるチェルノブイリ症候群にも似たものを思わせます。また、1957年ソ連でプルトニウム生産設備の事故が起こったことが、最近になりまして明らかになっておりますけれども、ソ連における兵器生産において、環境的健康への障害があったのではないかという疑いが持たれていきます。

I P P N Wは、科学者、環境学者、医師等の委員会をつくっております。核兵器生産によってどのような環境破壊、健康への破壊が生ずるかということを調べております。I P P N Wは、今までの機密という歴史的な障害を乗り越え、そして一般の市民の人達が情報を得た上で、核兵器に対する選択ができるようにしたいと考えております。これからは、ますます環境、それから公衆衛生問題の相互依存が深まってくると思っています。地域社会、国、国際的なレベルで安全保障という利益についての新しい提議、理解を考えていく必要があると思います。そしてお互いに生き残れるような有効なシステムを作るための新しいレベルの協力が必要であります。このような政治的な指導者の方々の前でごあいさつができることをうれしく思っております。皆様方は平和そして正義のために一生懸命仕事をしておられます。I P P N Wは、世界平和連帯都市市長会議の皆様と協力をし御支援をさせて頂きたいと思っております。そして核の脅威がない世界をつくらうということで皆様方が御尽力を下さっていることに、I P P N Wは敬意を表します。私共としても是非これから先、将来皆様方と共に仕事をしていきたいと思っております。I P P N Wの支部と皆様方がこれから自国で色々な協力ができればと思います。また是非、I P P N W第9回世界大会にも御参加頂きたいと思っております。これから先、平和、軍縮をお互いに求めていく中で将来の協力を実現していきたいと思っております。こういった中で、広島市の荒木市長そして広島市民の皆様方の素晴らしい精神に学ぶことが多いと思っております。ありがとうございました。

## 祝電紹介

### 司会

どうもありがとうございました。さて、ここで当会議へ祝電及びメッセージが届いておりますので、その中からいくつか披露させていただきます。

NGO軍縮委員会委員長 マリー・ベス・ライセン

8月6日、私は精神的に広島を訪れるでしょう。第2回世界平和連帯都市市長会議が成功し、軍縮への突破口となりますことを念願します。

重慶市長 孫同川

市長会議の開催にあたりまして、謹んでお祝いのおよろびを申し上げます。貴市と同じように重慶市も戦争で破壊された都市であります。このような都市の市長として、平和友好は重慶市が長期にわたってとるべき原則であると思っております。これからの平和友好と国際交流のためにお互いに努力いたしましょう。最後に今回の会議が円満に成功する様心から祈念しております。

### 司会

国務大臣、総務庁長官、池田行彦様、核軍縮を求める二十二人委員会、参議院議員、宇都宮徳馬様、衆議院議員、中川秀直様、衆議院議員、増岡博之様、他にも多数の祝電及びメッセージを頂いております。どうもありがとうございました。以上これをもちまして開会式を終了いたします。引き続きまして基調講演に移らせていただきますが、準備のため5分間休憩を頂きます。恐れ入りますけれども着席のまましばらくお待ち下さい。

## 基調講演・講演者紹介

### 司会

ただいまから「核兵器廃絶をめざして一核時代における都市の役割」というテーマにより基調講演を頂きます。最初にも御案内申し上げましたが、本日の基調講演は、チャドウィック・アルジャー先生、鴨武彦先生にお願いいたしております。まず最初は、チャドウィック・アルジャー、アメリカ、オハイオ州立大学教授にお願いいたします。アルジャー教授は、1950年にジョン・ホプキンス大学を御卒業されました後、1958年にはプリンストン大学で政治学の博士号を取得されました。1966年から71年まで、シカゴのノースウェスタン大学の準教授を務められた後、1971年からオハイオ州立大学の教授でいらっしゃいます。また、1978年から79年にかけて国際政治学会の会長をお務めになられております。先生は、オハイオ州の州都コロンバスで、市民レベルによる地域に密着した国際交流を推進されており、世界平和はコミュニティから始まると

いうことを主張されていらっしゃる。現在の研究の主なテーマは、地域主義と地球主義であり、都市と平和・国際化との接点についての研究をなされています。それでは講演をお願いいたします。

## 基調講演

オハイオ州立大学教授  
チャドウィック・アルジャー

どうぞ前の方にお進み頂きまして、集まって頂けますでしょうか。もっと近くに座りあうことができればと思います。荒木市長、明石国連事務次長、竹下県知事、瀬川市議会議長、モニング事務局長、国連そして各県、そして各都市、そして市民運動の代表の皆様とここでお目にかかれることは、そして私共がこれから平和実現のために必要な連帯の話をするのは大変な喜びとするところであります。荒木市長は、私に基調講演を要請して下さい、私に大きな名誉を与えて下さいました。私は、このように感動的な会議のもとで、使命を果たすべく努力をしたいと思っております。私共は、あらゆる大陸の代表であり、多種多様な文化、人種、宗教、イデオロギー、国民を代表してまいりました。私共は、広島原爆死没者慰霊碑の碑文に書かれていることを達成しようと努力をしております。碑文にはこう書かれています。「安らかに眠って下さい 過ちは繰返しませぬから」。

これはただ単に1つの国際会議ではありません。私共は平和を求める都市連帯推進計画を推進させるためにここに集まったのであります。長年にわたり広島市と長崎市の市長だけが平和のためのキャンペーンを進めていらっしゃいました。他の諸国の市長は名ばかりの支持をしていました。ところが第二次世界大戦の苦しい経験から、広島と長崎の市長はこう悟ったのであります。国家元首というものは、しばしば都市そして市民を犠牲にするものであり、そして国家安全保障を達成しようとするということでもあります。

1945年以来、核兵器の生産が未曾有に拡大してまいりました。これは恐怖を広めたこととなります。これに対して、広島・長崎市長は国連や世界の多くの都市を訪問され、核兵器廃絶のアピールをしてこられました。こうして多年にわたり孤独な努力をしていらっしゃったのであります。ところが、他の市長は行動を起こしませんでした。そこで私の学生に言ったものであります。他の国の他の都市の市長もこの核兵器廃絶の

運動に加わるためには、それらの市長も核の破壊を経験しなければいけないのであろうか。当時の情勢をみますと、いやいやながら私共学生はイエスと答えざるを得ない状況でありました。ところが今、希望が持てるようになってきております。この問題に対する答えは今やノーであり、希望が持てるのであります。

1988年6月、広島・長崎の市長が第3回国連軍縮特別総会で声明文を発表されました。その時に、世界平和連帯都市市長会議の副会長もそれに参加をされました。孤独な戦いではなくなったのです。1989年3月以来この運動は拡大しております。49か国270都市の市長が支援をしております。国内にもさまざまな問題を抱えております。しかし、それにもかかわらず、この運動を進めているのです。現在、世界の市長は、その市民を核による大虐殺から保護する責任を受け入れようとしているあらわれが見えるのであります。皆様方今日ここに結集されたということは、各都市の若者にとってのモデルとなるということであり、非常に意義のあることだと思っております。

4つのトピックを論じてみたいと思っております。第1に、平和の意味は何でしょうか。そして第2に、各都市と世界との絆が強くなってきたということです。第3に、世界の変革に対応する市民の努力であります。それから第4に、地方政府の行動についてであります。

第1の、平和とはどういう意味でしょうか、についてです。この質問は非常に重要であります。世界平和連帯都市市長会議の規約は、平和に対して2本柱のアプローチをとっております。つまり核兵器廃絶を目指すと同時に、人類にとっての重要な問題の解決の努力をしようとしています。飢餓・貧困の撲滅の努力もするというアプローチをとっていらっしゃいます。これは国境を超えた対話ということから平和の深い意味が理解されるようになってきたということでもあります。この対話がさまざまな国際的非政府組織、国連において、また学術会議、学者のネットワーク、さらには市民のネットワークを通して国境を超えた対話へと広がっております。これらの討議は辛らつな面も含んでおります。アフリカ、アジアそしてラテンアメリカの新しい参加者、新たな声がヨーロッパ、北米に参加をしているのであります。しかし、この言葉の対立から重要な理解が現れました。つまり平和は、世界のどこにおきましても尊ばれ、大切な目標であるということが理解されるようになり、また自分の国民のために平和を追求するものは、それが他の国民によっていかに認識され理解されるかについて、関心を持たねばならなくなったのです。私共は、平和を求める市民の連帯を強化しようとしております。ここで、この国境を超え

た世界的対話から私共は学んだことを想起しなければなりません。6つのことを思い浮かべるべきではありません。

まず第1に、平和の完全な意味を私共はより良く理解するようになってきた、ということでもあります。平和を玉ねぎに例えましょう。実践・対話・演説を通して、玉ねぎの皮をむいてまいりました。その結果、私共は今日平和の深い意味について、包括的な理解を得るようになりました。平和は、砲火・銃撃のないことを意味するだけではありません。経済的な幸福、社会主義、そして生態系のバランスをも意味するものであるということに悟るようになったのであります。

第2に、こうして平和の意義の理解が得られ、それによって平和でない、つまり平和不在の原因も深く理解することができるようになってまいりました。平和不在は単に銃身からくるものではありません。死そして寿命が短いということ、また体力、知力の喪失は、地域的な貧困の結果であり、また冷酷な支配者の行為によるものであり、文化と人類の生息地の破壊の結果であるということでもあります。

第3に、平和不在の原因は、相互に関連し合っているということです。平和不在の1つを克服すれば、それによって他の平和不在を克服する努力にもなるということでもあります。平和を強化しようとする名のもとに行われている軍備増強のもとで、戦争、汚染、軍国主義が発生いたしました。これは人類の剝奪の原因となっております。また1つの平和不在を克服しようとする努力は、もう1つ別の平和不在を克服しようとする努力を助けるのであります。貧困撲滅によって暴力の根源をたちきることができるのであります。

第4に、世界のすべての地域の人々がますます相互依存を深めている今日にあって、1つの地域の平和を達成しようと望む人々は、他の地域の平和願望のニーズをも理解すべきであり、その意味でも国際的会議は重要であります。相互依存の世界にあって平和不在の主要な原因は、世界の各地域において同時に取り組みがなされていないところにあります。つまり、まず経済保障を持っている者が保障のない者に対して、まず暴力を断ちきりなさい、そして次に私共はあなた方が望んでいる経済繁栄、経済発展、社会主義の努力をしましょう、ということはこれは現実的ではありません。

第5に、実践を通して私共は非常に多くの平和戦略、平和手段をつくり出してまいりました。それによって平和不在の多くの局面に取り組んでおります。ただこれが膨大な数にのぼっていることが残念です。一世紀を振り返りましょう。国際連盟規約は、火砲の直接的

な暴力をコントロールする手段しか提供しませんでした。つまり集団安全保障・軍縮・紛争の平和裡解決しか提供しませんでした。これらに対して国連憲章は、人権、経済、社会協力、民族自決の原則を導入し拘束をいたしました。新しい手段を国連はつくり出しました。平和維持軍、公平な国際経済秩序、そして諸国間のコミュニケーションの流れの均衡、それから人類の共有財産についての管理、例えば国際海洋法であります。

第6に、20世紀が始まるにあたって私共が前提とした考え方は、国の政治家は国民のために平和を提供する責任があるということでありました。しかし平和に打ち込んだリーダーをまだ我々は必要としている状態であります。平和のあらゆる局面は相互依存しているということ。そしてまた、平和のあらゆる側面が人々の日常生活に依存しているということを私共は理解するようになりました。全面的な平和を達成するためには、知識を持った積極的な人間が、日常生活の中で平和を追求することが必要です。町民・市民・県民・国民・世界経済参加者、そして他の人種、文化とおのずと関係をもっている地球の国民として、環境管理人として積極的に日常レベルで平和を追求しなければなりません。ベルリン、ボン、ブラジリア、ジャカルタ、ラゴス、モスクワ、東京、ワシントン等の世界の首都の専門家だけが、あるいは専門家が一義的に平和の責任を持っているという考えを捨てなければなりません。困難な仕事かもわかりませんが、都市はその市民に対しまして、教育と経験を提供し、それをもって市民が平和を実践できるようにさせなければならないのです。

第2のテーマですが、都市と世界の絆の深まりであります。特に各都市間の経済的な絆の深まりについて述べたいと思います。古来、都市は異文化の出会いの場所でありました。商品、技術、情報、思想、宗教の交流の中心地でした。都市間には長い歴史が実際にはあるのです。歴史は国ばかり強化してまいりました。都市間の交流の速度は、最近、輸送技術、通信、生産技術の発展と共に加速化してまいりました。ジェット飛行機、通信衛星、国境を超えた自動車生産などによって、都市の絆が密接化してまいりました。世界の人々は、商品、製品の消費者として、資源あるいはメディアの消費者として、それから他国籍企業の社員として、さらにはそれらの競争会社の社員として、現在大量の世界的な取り引きの真ただ中にあるのであります。都市の指導者及び市民、または平和の実現に創造的に参加をしようと願っている者は、このように各都市が世界に、また都市間で密接な深い結びつきがあるということを経験的に理解しなければなりません。

そして、これらが人々の国内国外における日常生活に大きな影響を与えることを理解すべきであります。都市間の相互依存の増大は、平和を助長しているだけではありません。日常生活の世界的な関係が深まるにつれ、各都市の人々はお互いに学び合うことができ文化をつなぐことができるようになってきていることは確かであります。これらの可能性を創造的に使用することによって、各都市はより平和的な世界をつくりだす役割を担うことができます。しかし、都市経済と世界経済のつながりの密接化ゆえに経済社会的な変化が生じてしまった。これによって対立と貧困が生じていることも否めません。これが平和不在の原因となっています。これらの問題も私共の討議で取りあげるべきだと思います。各都市はユニークでありますけれども、都市の国際化のためには、ある標準化ということが考えられております。各国際都市は、世界のシステムの一部であることからくる要求に応えることが必要であるとされています。こういう標準化プロセスの不可欠な部分は、いわゆるテクノクラートという新しい階級、会計士、弁護士、エンジニア、建築家、情報専門家であり、この特徴は、国境を超えた資金の世界的な拡大の利益を実現するということであります。この結果、都市はもしかすると国境を超えたいわゆるエリートと各都市の利益とローカルな利益文化の対立、闘争の場になる可能性もあるのです。これも注意すべきであります。都市への資金の流れにつれて、地方から都市へ人々が流入し、いわゆる過度の都市化が起きました。これは第三世界の都市化を分析する者にとって重要な問題です。「オーバー・アーバナイゼーション」という言葉が使われました。ある都市は、雇用の供給力を超えて多くの人口の流入を受け入れてしまった。あるいは現在の先進国が、同じような発展段階において持っていた都市の人口をはるかに超える人口が都市に流入しています。これは誤った移住の流れであり、これが荒廃地の経済の力を絞り取っており、都市の生産には大きな便益を与えておりません。これは開発の兆候であるのではなく、「オーバー・アーバナイゼーション」は経済的病気の現われであります。この結果、都市の貧民街、みじめさ、貧困、失業という害悪が発生してしまいました。ある学者は、国境を超えた生産システムが、第三世界の都市諸国に与える影響力を調べております。他の者は工業都市に目を向けました。例えば、デトロイトについての研究ですが、デトロイトの経済的な力が停滞した原因として、資金の流動性、特にデトロイトから低賃金地域への生産施設の移転をあげています。ニューヨーク市の研究は、ニューヨーク市をグローバルシティと言っておりますが、そこは

世界の金融企業、意思決定の中心地となっており、東京、ロンドンもそのような中心地であります。ここには大きな銀行、大規模多国籍企業の本部が所在しており、これらは、電気通信、それから航空輸送の蜘蛛の巣を張り巡らせ、それによって資金を再配分しており、世界経済の体制を基本的に決定しているのです。しかし、ニューヨーク市は他のグローバルな都市と同じ様に逆説であり矛盾であります。つまりそこには資金が集中しており、資金のコントロールの力が集中しております。しかし、ニューヨーク市に住む多くの居住者にとっては、みじめな生活状態となっています。資金のグローバル化によってニューヨーク市の製造業の雇用が外に流出してしまい、空洞化現象が起こっており、1950年以来50%以上の製造業の雇用が失われ、製造業の賃金が急速に低下いたしました。30年前よりも製造業の賃金が下がったのであります。ニューヨーク市では、家屋を賃貸している多くの者が貧しくなっております。乳児の死亡率が第三世界の乳児死亡率に匹敵する位高くなっている所があります。ニューヨーク市というグローバルな都市では賃金、生活状態がいわゆるワーキングクラスの状態を反映しているのです。世界の貧しいところの状況がニューヨーク市に出現しております。将来をみてみましょう。発展途上国の都市におきましては、外国、他国籍企業の小会社が設置されるようになっております。他国籍企業の銀行がそれを促進しております。こうして高賃金のコスト、また法人部門への資本の投資によりまして、資本集約的な発展が行われ、第三世界での労働吸収力の低下となってしまう可能性があります。これは市長にとって困難な状況でありましょう。都市の危機となりえます。その国のG N Pが増大してしまっても、製造業部門が十分な雇用をつくり出すことができなければ、家内工業部門での雇用が破壊され、そして多くの人々が都市にどんどん流入してしまうのであります。

以上、私が強調したかったことは、世界の都市間の絆が強められる結果、平和の実現が促進されうるし、また同時に平和の達成が危うくされうるということです。都市化した世界の中で、世界の都市の関係を決定する力を持った者が世界の国民にとって、平和の生活をするのか、あるいは平和のない生活をするのかをも決めてしまう力を持っている可能性があるのです。国そして他国籍企業の行う決定の方が、市長そしてその他の都市の指導者の行う決定よりもより多くの影響力、インパクトを持っていると皆様考えていらっしゃるかもしれません。そうかもわかりません。しかし否定はできません。世界の中で都市の地位が変わってきたということは、今こそ都市のリーダーが新

たなクリエイティブな考え方をしなければいけないのであります。

次に4点ある内の3点目にいきたいと思います。市民が変わりゆく世界に、どのように対応していけばいいかという事です。多くの国の市民は、意識を高めていくためにいろいろな努力をしています。スピーカーの1人がおっしゃったように、グローバルに考えそしてローカルな行動をおこそうということです。どのような地球的な問題であれ、これは人にいろいろな影響を与えていくものだと思います。従って、そういった問題がローカルに現れた場合に、それに対応していく、例えば戦争を防止したり、軍縮を行ったり、貧困をなくしたり、人権を守ったり、ということでもあります。そして、いろいろなクリエイティブな行動が現在行われており、それが私たちに希望を与えてくれているわけですが、例えば軍事支出、そしてそれが人のニーズを満たすということと、どのようにかかわっているのか。そして地域レベルで軍事生産、軍事配備の問題について考えていくということでもあります。例えば、ローカルで軍事的な活動が行われているような場合、それが個人の価値と優先政策とどのようにかみ合っていかなければならないのかということを見ていかなければなりません。そしてなかには軍事生産から民生の生産に切り換えていくというようなことも行われています。このような軍事から民生への転換としては、1976年のイギリスのルーカス航空宇宙労働者のプランがあります。このプランというのは、非常に創造的に具体的に、そして詳細にわたって、自分の町がより平和的な生産活動に従事し、軍事的な生産をしなくてすむようにするかという提議であると思います。

それから軍事配備の分野をみてみますと、もっともよく知られている活動としては、グリーンハムコモンの女性の闘いがあります。これは英国で行われているものですが、アメリカの基地の封鎖をこの女性たちは行っており、そして兵器が配備されないようにしているわけです。何年も前だったらば、不可能であったようなことが、現在は行動となって行われております。ここ20年を振り返ってみますと、先進工業国の自主的な努力により、第三世界の問題を解決していこう、均衡を克服し、そして長期にわたって経済、社会開発ができるようにしていこうという努力がなされています。しかしながらよく考えてみますと、低所得国の問題というのは、高所得国の政策によって引き起こされる場合が多いと思います。政府やそれから自主的ないろいろな援助が行われていますけれども、いくら低所得国でこういった援助を行っていても、高所得国の政策が同時に変えられていかなければ、貧困を断ち切るこ

はできないでしょう。それから開発教育ということが先進工業国で行われるようになってきました。つまり、自分たちの町が第三世界とどのようなかかわりをもっているのか、そしてお互いにどのような影響を及ぼし合っているのかということを開発教育ではみています。この開発教育というのは、ヨーロッパ及びカナダで最も進んでいると言われております。そして開発教育を通じて、第三世界と第一世界の人々が世界的経済の中でどのようなつながりをもっているかということを考えていくわけです。そして、地方の政策をつくっていくにしても、第三世界のコミュニティーのニーズに合ったようなものをつくっていくことができるのではないかと、また人権の基準をつくりあげるということでも、ローカルの市民は重要な役割を果たしております。これは往々にして中央政府の役割だと考えられていると思いますけれども、市民及び政治的権利の国際規約それから、経済、文化、社会的権利の国際規約をみますと、こんなことが前文で書かれております。「個人というのはその他の個人、またその人が住む地域社会に対する責任をもっており、この憲章に書いてある権利を促進、そして遵守していかなければならない」。このような権利を地域社会でも遵守していかなければならないわけです。人権といいますと、アムネスティ・インターナショナルがすぐに頭に浮かぶと思います。地元のアムネスティ・インターナショナルの各グループが良心の囚人を解放しようということで世界的に活躍をしています。パブリシティーを通じて他国政府に圧力をかけ、また手紙、電話などで活動を行っています。南アフリカのアパルトヘイト反対の闘争も行われております。例えば、地元の銀行やそれから会社で南アと取引のあるところをボイコットするとか、それから、株主総会で積極的に意見を言う。また多くの大学をみてみますと、その理事会などで南アフリカとビジネスをしているような会社からは資金を引き上げようというようなことが行われています。ですからこういったローカルのキャンペーンは、国の政策にも大きな影響を与えてきていると思います。もう1つローカルの人権活動をみてみますと、政治的な迫害を受けたり、戦争、経済などの問題で難民となった人に新しい住む所を提供するという活動であります。アメリカでは、サンクチュアリ・ムーブメントというのが起きてきています。これは、政府は非合法と考えている移民、特にエルサルバドルから来た移民ですけれども、こういった人たちは自国に戻ると、恐らく刑罰を受けるであろうということで、1981年から200ほどの教会やそれから多くの町がこういった人々に対して、サンクチュアリ（聖域）ということで、住む所を提供して



います。そしてこれらの活動は、1980年のアメリカ難民法では合法と考えられるのではないかと彼らは考えています。難民条約などに鑑みても正しいことではないかということで、アメリカの歴史、南北戦争をみてみても、奴隷が地下の鉄道を使って解放されたという例があります。インファクト・キャンペーンというのももう1つの人権キャンペーンで有名であります。お集まりの中でご存じの方もいらっしゃるかと思いますが、西ヨーロッパそれから北米で行われておるもので、ネスル株式会社で第三世界で粉ミルクをマーケティングしている、そのやり方に反対をしているわけです。ネスルの製品を買わないボイコット運動、ネスルから資本を引き上げる、そして第三世界における粉ミルクのマーケティングのやり方を変えさせるというものであります。そしてそれが結集いたしまして、WHO総会で望ましい基準というのがつくりあげられるようになりました。アメリカだけが、反対票をここでは投じまして、最終的にはネスル株式会社がこのWHOの基準を受け入れるようになったわけがあります。核兵器の廃絶を考えておられる方はわかると思いますが、ローカルレベルそして国レベル、またこのキャンペーンではWHOまで、つまり国際組織まで進んでいったというステップがわかると思います。

さて最後のトピックになりましたけれども、地方の行動ということを考えていきたいと思えます。これは恐らく一番新しい活動分野ではないかと思えます。多くの町ではその地元の市民がグローバルに考え、ローカルに行動をとるという考えを支持してくれております。反アパルトヘイト、核兵器の凍結、非核地帯をつくる、核実験停止、軍事生産から民生生産へ、サンクチュアリを難民のために提供する、第三世界の経済援助など、いろいろな分野でこういった活動が行われております。そしていろいろな法律が市レベルでつくられるようになっていきます。1つ例をあげてみますと、アイオワ州のバーリントンという小さな町があります。ここでは、あらゆる形態の人権差別撤廃に関する規約を市議会が法令として受け入れるということにしたわけであり、これは非常に創造的なやり方であり、いろいろな人権宣言それから人権規約が地元の法律として公布される、そしてそれが遵守されるといういい例であると思えます。また市長の皆様方はご存じでいらっしゃると思えますけれども、やはり市町村には市町村の役割があるから、そういう活動はすべきではないという意見があるのも事実であります。自分たちはそのローカルの問題を扱うために選出された議員であり、それから決定を行う権限もないし、国レベル、国際レベルのゴールを設定できる立場にもないと

……。従って、地元の市町村の議員というのは、地元の問題を扱い、国際あるいは国レベルの問題はそういった議員がやればいいのではないかという意見であります。ここにお集まりの多くの皆様方は、こういった意見に対して、例えば核戦争の問題というの、これは本質的にはローカルの問題としてとらえられると考えていらっしゃるのではないのでしょうか。核戦争を防止するというのは、地方政府の関心事であるのではないのでしょうか。

広島、長崎の市長さんに加えまして、ラリー・アグランというカリフォルニアのアーバインの市長さんのお話をちょっといたしたいと思えます。最近この方にお会いしましたけれども、核の脅威をなくさなければならぬということで、カリフォルニアの市長を集めまして、「ローカル・エレクトイド・オフィシャルズ・オブ・アメリカ」という市長と市議会議員の組織をつくりました。核兵器の凍結、軍拡競争をストップさせる、軍事支出をより民生的な生産に切り換えるというようなことをここでは訴えかけています。それから市町村レベルにおける外交政策の重要性を認識して、市の外交政策ニュースというのがカリフォルニアでつくられるようになりました。ここにお集まりの方々の中に、ラリー・アグラン市長がいらっしゃいますからもっと詳しくお話が聞けるかもわかりません。またこの組織は、市民や市会議員のための「ビルディング・ミュニシパル・フォーリン・ポリシー・アンド・アクション・ハンドブック」というような本も作られています。ですから、こういったようなものを見てみますと変化が起こりつつあるということがわかってきます。核兵器を廃絶しようということで、非核地帯がつけられている所が多いのです。これはまず最初に英国の核軍縮キャンペーンが行ったものです。世界23か国で4,278の非核地帯がつけられています。アルゼンチン、オーストラリア、ベルギー、カナダ、デンマーク、フィンランド、英国、西ドイツ、ギリシャ、アイルランド、イタリア、日本、オランダ、ニュージーランド、ノルウェー、フィリピン、スペイン、スウェーデン、タヒチ、ポルトガル、アメリカ、バヌアツといったところがそういった国々でありまして、本日、非核都市からいらした代表の方も多いのではないかと思えます。こういった非核地帯でありますけれども、次の7か国においては半分以上を非核地帯にしている所もあります。オーストラリア、カナダ、英国、アイルランド、ニュージーランド、ポルトガル、日本、その他いろいろな良い例があると思えます。それからもう1つ非常に興味深い運動が、町の議会で行われております。これは開発協力の分野でありまして、第三世界の町と

開発協力を行うタウンズ・アンド・ディベロプメントというプロジェクトであります。ヨーロッパと第三世界の町が姉妹都市になり、ヨーロッパの都市で第三世界の問題について教育をしていこうというものです。1988年にヨーロッパ地方自治体の会議、これは欧州理事会のものでありますけれども、行われました。そして、1,000のヨーロッパの町がこういったプログラムを行っているということが明らかになっています。そのうちの1つの例はベルギーでありまして、開発協力担当の市会議員というのが各市で任命されております。そして、開発協力担当議員は、15名から成る第三世界委員会に出席をするというようなことを、例えばブルージュの町では行っています。そしてブルージュの町では開発協力を行い、それからブルージュの町の人々の意識を高め、第三世界における活動に従事している地方のいろいろな団体のイニシアチブを調整するような役割をしています。

またオランダのタウンズ・アンド・ディベロプメントの活動のみをみますと、町の見方が随分変わってきていることがわかります。例えば、1925年でありますけれども、今では信じられないようなことですが、オランダのある町がハリケーンの被害を受けまして、それに対してある町がその被災者に対して10ギルダーを献金しようとしたのですけれども、それができなかったのです。なぜかという、その法律によりましてその町のお金というのはその町のために使わなければならない。こんな法律があったからです。しかしながら、1972年になりますと、オランダの議会では、オランダの町が第三世界の町をサポートすることを許すようになりました。そのコミュニティーの人たちがそういったプロジェクトに積極的に参加しているということであれば、支援ができるようになったわけであります。現在250のオランダの市町村、これはオランダの市町村の3分の1になりますけれども、こういった開発協力を行っています。153,000の人口を擁したティルブルクもその1例でありまして、開発協力の中心となっています。第三世界のローカルのグループを支援し、それからまたニカラグア、タンザニアでのプロジェクトを行っており、また市役所の1人がこういった開発、平和の問題担当ということで従事しています。私はオハイオから来てこれを大変うらやましく思っています。このような活動に209,000米ドルがこの町では使われているということでもあります。

では、まとめをさせていただきますけれども、平和というのは何なのだろうかという真の理解が深まってきているように思います。そして都市の間の連帯が深まってきており、平和を求める運動の中で市の果たす役割が重

要だということが認識されるようになってきました。自分たちが果たして平和に対して貢献をしているのか、あるいは平和から離れるような行動をしているのか、そしてこういった地域社会が平和に対して貢献できるのだということが認識されるようになってきたわけがあります。そして市民、市議会が平和のためにいろいろな責任を感じるようになってきました。今申し上げたいいろいろな例というのは、どの町でもまねのできるようなモデルではありません。文化的、経済的、政治的な違いを考えながら、自分たちの平和戦略を、自分たちの状況に合った形で導入していくことが大事であると思います。自分たちの地元の環境の中で、平和の問題にどうやってアプローチをしていけばいいのか、自分たちの困難とどのように直面していけばいいのか、今、いろいろな話をしてきましたけれども、一体どんなことができるかということが、いろいろとわかってきたと思います。ここにお集まりの方々の中には市町村ではなく、国のリーダーの人たちに任せられた方が、平和は容易に達成できるのではないかと考えていらっしゃる方もいるでしょう。「船頭多くして船山に上がる」という諺もあるぐらいでありますから。しかしながら、国のリーダーの人たちが一生懸命、平和を達成しようとしても、市町村の指導者の人たち、それから市民の人たちの深いかわりがなければ、平和は達成できないでしょう。ですから、国のリーダーの人たちの闘争に対して、いろいろな支援をしていかなければなりません。ただ、私たちの経験からもわかるように、平和というのは上から押し付けられて生まれるというものではないと思います。平和の意味を本当に達成していく非暴力、経済的な福祉、安寧、社会正義、エコロジーのバランスをとるということには、全ての政府のレベルでのサポート、参加が必要であります。市民団体、それから個々の市民の協力も必要であると思うのです。こういった人たちが全員参加することによって初めて、本当の平和とは何か、ということが明らかになってくるのではないのでしょうか。ですから、私たちみんなが、この平和というものに対して参加をしていかなければ、本当の平和は訪れないと思います。世界の市長の方々が国のリーダーよりも市民により近い所におられると思いますから、重要な役割を果たさなければならないと思います。

以上、私はこの会議におけるオーガナイザーの方々に、16ページ原稿を準備して読むようにと言われてましてその責任は今、果たしたところであります。そして、これから先は、皆様方の今度は聞き役にまわりまして、世界の市民、市長、市会議員の皆様方のお話から、いろいろと勉強したいと思います。市長の方々、

それから市会議員、市民の方々が、どのような行動をしておられるのか、どういう問題があるのか、それから、どのような形で平和へのアプローチができるかということ、いろいろな文化の背景の方々から伺いたいと思います。そして、私の期待は決して裏切られないと思います。御清聴ありがとうございます。

## 司会

オハイオ州立大学教授チャドウィック・アルジャー先生による講演でございました。どうもありがとうございます。

続きまして、鴨武彦東京大学教授をお願いいたします。

鴨教授は、1966年に早稲田大学政治経済学部を御卒業された後、早稲田大学大学院にて、博士課程を修了されました。また、1970年から73年までは、エール大学大学院に留学され、博士号を取得されております。その後、早稲田大学政治経済学部教授を務められ、本年よりは、東京大学法学部教授を務められております。先生の主な著書としては、1982年の「軍縮と平和への構想」、また1985年の「国際統合理論の研究」等がございます。

それでは先生、よろしくお願い申し上げます。

## 基調講演

東京大学教授 鴨 武彦

ただいま御紹介にあずかりました鴨武彦でございます。このような大変大事な、貴重な会議にお招きいただきまして、しかも基調講演をさせていただくことは、大変な光栄でございます。どのようなお話ができるかわかりませんが、ひとつ今日は、国際政治の構造的な変化というものと、そしてこの世界平和連帯都市市長会議の歴史的な役割りといったことに焦点をあてながらお話をさせていただきたいと思っております。まず最初に申し上げたいと思っておりますのは、今日ほど国際政治で重要な、現実の変化というものがおきている時代はないのではないかと思うわけでありまして。国際政治は常に動いておりますけれども、現実の性格がこれほど重要な変化を示している時は戦後の歴史ではないと思っております。では、どういう変化であろうかということですが、これは世界で多くの人々が現在、この1989年の時点で、認識するようになっておりますけれども、これはアメリカとソビエトの関係を中心と

しまして、デタント（緊張緩和）というものが着実に進行をしてきているのではなからうかと思っております。しかも、このデタントというものが、一過性のもではない。すなわち、緊張が揺り戻されるというものではなくて、むしろ、戦後長く国際政治を支配してきましたこの東西の冷戦の構造と対決の構造というものを徐々に溶解させ、変質させ、さらには崩壊させていくという方向で変化をみているのではなからうかと思うのであります。このような国際政治の重要な現実の性格という変化をみますと、これはやはり、私たち考えますのに、核軍縮への方向へ国際的に好ましい環境が徐々につくられ、そして広がっているのではないかと考えてございます。ところで、米ソの戦後の国際関係と申しますのは、国際政治のゲームの理論の言葉を借りますと、囚人のジレンマ（プリズナーズ、ダイレンマ）といったような関係に部分的に似てたのではないかと思うのであります。それはどういうことかと申しますと、米ソの指導者に対して、失礼かもしれませんが、指導者たちは、外交関係を持ってはいなくても、基本的には囚人のように、独房に入った形で、お互いに本当の意思疎通というものができない状況にあったと思われまして。従って、ディスコミュニケーション、意思疎通というものが基本的に欠けているために、特に、軍備の問題を巡りましては、いつも相手の方が強い軍備を持つのではなからうかと危惧をいたします。こちらが、仮に軍縮という措置をとりましても、相手は、こちらの軍縮の意思というものを受けとめず、むしろ、軍備の拡張に突っ走るのではないかと心配する。そこでは、お互いに言葉は少し悪いのですが、背信行為を当り前のように行うのではなからうかと思われるのであります。相手を信頼できずに、相手に背信される前に自分の方から相手に対する背信行為を行ってしまう。そこではやはり、相手に対する不信と、あるいはそういう対決といったような感情が非常に大きく作用してきたのではないかと思うのであります。もっと言えば、米ソ関係というのは、安全保障の問題を巡りまして、囚人のジレンマの如くに不信が、相手を裏切るという方が、合理的な、戦略的な行動のように見えてきたわけでありまして。そこでは相手を信頼できないために限りなく、軍備競争、核兵器を巡る軍拡というものが続いてきたのだらうと思っております。現在、重要なことは、こういうディスコミュニケーション、意思疎通のなかった状況から、新しく対話や交渉を重ねることによって、米ソの間で何とか相互の信頼というものを高めていかなければならない。大事なことは、いかにイデオロギーや体制、利益が異なっても、核戦争の危険というのはゼロにすることができ

るものであるということであり。そしてそういった方向で共存のためのルール・オブ・ゲームズ、行動規範というものをつくることのできるのだということで、現在、米ソ関係のデタントが始まっているのではないかと思うわけであり。米ソの意思疎通のレベルでの関係改善というのは、御承知のように1980年代の中頃、ソビエトではゴルバチョフ政権が登場してからでございますが、首脳会談をレーガン前大統領とゴルバチョフ書記長との間で4回も重ねましたし、またジュネーブにおきましては、包括軍縮交渉というものを進めてまいりました。現在、確か11ラウンドに入っていると思います。しかも、その成果というものが今日、具体的にあらわれているような気がいたします。その端的な事例は、1987年の12月に調印をみまして、翌年の5月モスクワで批准書を交換しました、米ソ間のINF（中距離核戦力）全廃の条約でございます。私は、核軍縮、軍備管理という状況を見ますと、このINFというものの成立というのは、決して過小評価してはならず、かなり大きな出来事であろうと思います。なぜかと申しますと、核兵器のシステムの中で、4、5%しか占めない中距離核兵器であろうとも、システムそのものを廃絶する軍縮というものが政治的な決断によって可能であるということ、米ソが初めて世界に示しえたのだらうと思うのであります。これまでも核兵器を削減するという交渉はいろいろございました。1970年代にも、SALT（戦略攻撃兵器制限）交渉がございました。1960年代にも、部分的核実験の禁止条約とか、ホットライン（直通電信電話）条約もございました。しかしその一つの兵器、核兵器のシステムを半分や3分の2ではなくて、全てこれを解体するということにつきまして、その政治的な決断を行えたというのは、私は全く初めてのことだろうと思うのであります。これは何を物語っているか。核軍縮を行うにあたって、超大国の指導者やその政策の担当者たちが、検証の方法を含めて、政治的に決断や合意が可能なのだということ、を悟ったのだらうと思うのであります。これは、米ソ間において、真の平和をつくり出すためには、国際的な安全保障、先程申しました共通のルール・オブ・ゲームズというものを求めていかざるをえないという状況にきたのではないかと考えるわけであり。もう少しこの米ソを中心とした国際政治の現実の性格の変化というものを、核兵器や核戦略の面から特色づけてみたいと思うのであります。これは異論があるかもしれませんが。また専門家によっては反論があるかもしれませんが。しかし私は、核戦略政策というものが行き詰まりの状況にあるのではなかろうかと考えます。これは、先程は四人のジレ

ンマという言葉を使いましたけれども、米ソは第二次大戦後、バランス・オブ・テラー「恐怖の均衡」といったような暗黙のルールをつくって、核戦争の危機を避けようとしてきた。要するに抑止という考え方でもって、お互いの安全を守る考え方をずっと戦後持ってきたわけであり。その「恐怖の均衡」という考え方で、この米ソの間も、東西関係も、世界においても、安全保障を全うしようとしてきた。しかし、「恐怖の均衡」の限界というものがある。米ソの指導者、政策決定者、そして市民、また平和の運動家たちがこの考え方について大きな批判を加えるようになった。特に、ヨーロッパではそのような動きが1980年代に顕在化しました。少し物騒なお話を申し上げて恐縮ですが、この「恐怖の均衡」というのは、やはり原理的にプリンスプルの視点から、私たちが考え直しておかなければいけない問題なのであります。1960年代の中頃にアメリカで、当時のマクナマラ国防長官が中心になって打ち出したアイディア、ミューチュアル・アシュアード・ディストラクション「相互確証破壊」という戦略概念がございます。このミューチュアル・アシュアード・ディストラクション、これをつづめてマッド（MAD）という風に言っておりますが、このマッドが、米ソのお互いの「恐怖の均衡」ないしは、「相互の核抑止」というものを支える基本的な考え方であると言われてきたのであります。「相互確証破壊」というものを支えにした相互抑止の状況、しかし、実際には、決して充分なものではない。国際安全保障の立場から、相当な危険性をはらんでいるものであるということであり。人によっては、MADというのは、実はこれは、政策の選択肢ではなくて現実なのであるとみています。米ソがこれから抜け出せない現実なのであるとの見方でございます。ところが、現実が変わってきているのであって、このMADよりももっと安心感のある、もっと安全な道、軍備管理なり軍縮を進めていくという方向によって、この相互抑止というものを脱却しようとしている動きがみられるのではないのでしょうか。MADというのは、二つの条件から成っていると思われ。一つは、戦略基地といわれる大陸間弾道弾ミサイル（ICBM）とか、それから弾道ミサイルと潜水艦に搭載したSLBMとか、あるいは爆撃機とか、巡航ミサイルとか、そういった戦略基地は、これは絶えず相手の奇襲攻撃から安全にしておく、つまり、戦略基地は限りなく非脆弱にしておくという条件であります。しかしこれは、逆に裏返しますと、戦略基地は限りなく安全にしておいても、ここは皆様、大変重要なところであります。都市や市民、そういった社会の全体は米ソとも核兵器によって守りきれな

くとも致し方ない。つまり都市、国民、市民というものを防御的なシステムによって守りきれない。こういう条件が課せられております。つまり、戦略基地が限りなく非脆弱であるということは、逆に申しますと、都市や国民というのは常に脆弱な状況に置かれるかも知れない。脆弱な状況に置かれているからこそ、お互いに奇襲、先制をかけられませぬし、また仮にかけても相手からの報復をうけて、社会として機能しなくなるということでもあります。もう一つは、都市や国民というものを守りきれような防御的なシステムの技術を開発しないことという条件であります。米ソが、防御的なこのシステムを開発しないために、実は、1972年、ABM（迎撃弾道弾ミサイル）を開発することを制限する条約をつくりました。まさにここにあらわれていますように、都市や国民を守る技術を開発しないという証をABM制限条約で部分的に示したのだらうと思います。しかし、ちょっと人の名前を出しますけれども、3年前に、アメリカの国務省の主催でSDI（戦略防衛構想）についての視察討論のプロジェクトがございました。私も、幸い、このプロジェクトに参加できました。そして、いろいろな国からの専門家とともに、戦略防衛構想の担当者及びそれを批判をする人々に会いました。その時に、私は非常に印象に残っていることがあります。それは、マンハッタン・プロジェクトに早くから携わり、現在も、戦略防衛構想につきまして、科学者の立場から積極的に推進しているE博士に会ったことでもあります。このE博士が、MADというものを維持することがいかに難しいかということ語ったのであります。なぜか。すなわち、ひとつは、戦略的な防衛、都市や国民というものを絶えず安全にするような、防衛システムというものを実際に技術的に開発可能であるかも知れず、それからもうひとつは、徹底的にソビエトが信頼できないからである。博士はふたつの理由を掲げておりました。しかし、こういう不信感とそれから科学的な技術によって、自分たちだけが一方的に防衛的なシステムを開発しても、ソビエトがそれを容認するわけがないわけであります。私はなぜこの軍縮交渉が進んでいる中で、宇宙兵器あるいはSDIと言われる領域が、重要な分野として交渉のテーマになってきたのか。なぜかと申しますと、科学技術のイノベーションといいますか、核兵器をいかに技術的に改善していくかという科学者や政治家の欲求、このダイナミズムというものが常に、軍縮や軍備管理よりも、先に進んでいるのであります。そうしたテクノロジーの発展をどう押さえていくかというような、知恵というものを、私は非常に重要なものであると考えるわけであります。私は、先程申しましたよ

うに、米ソの核戦略政策というものが行き詰っているからこそ、ヨーロッパにおいても、様々な国々が、米ソの軍縮交渉だけではなくて、この軍備管理、軍縮への動きを示してきているのではないかというように考えるわけであります。この核軍縮への動きというものは、ヨーロッパの舞台にだけとどまるものではなくて、私はこのアジア・太平洋においても、世界の各地において、発展していく方向にあると思うわけであります。

アメリカのコロラドスプリングスにあるシャイアンソン。そこにノラッド（北米航空防衛指令部）というのがあります。そこを訪ねた時、驚きました。それは、ソビエトが核攻撃をする可能性があるのか、する予兆があるのか、あるいは単に実験なのか、これを日夜、判断しているところがございます。しかしこの場合でも、最終的にはホワイトハウスとクレムリンのホットラインというものを通して、誤解をお互いに解くというケースが出てくるようでございます。核兵器というものの自己管理というものが極めて難しいということ考えますと、この米ソの核軍縮の動きというものが一過性の、ちょっと続いてまた逆戻りというよりは、どうしてもやらざるをえない、進めていかざるをえない、その状況に現在きているのではなかろうかと思われま。それはなぜかと申しますと、その点が、私は大事であると思うのであります。こういう現実の性格の変化、特に、冷戦の構造というものを変えていこうとするのは、決して、特定の大国の政治指導者、あるいは軍部の人々の外交的な駆け引きとか、思惑だけによって決まるのではないということでもあります。実はいかに世界の多くの国々の人々、市民が、より安全な、もっと共通の安全保障というものを打ち立てたいと、そういう欲求にかられて毎日を生きているかです。本日お集まりの市長会議の皆様は、まさにその歴史的な意味を担っておられると思うのであります。都市や市民の平和感覚がこれほど重要になっている時代はないのではないのでしょうか。私、国際政治を勉強しておりますが、これはあるいは間違いかもしれませんが、歴史上、国民投票にかけてから戦争を始めた国があったであらうでしょうか。戦争は絶えず国民投票にかけるというのではなくて、指導者のレベルで、不幸なことに、敵対的な感情とか、国益の対立というようなことを大きな理由として始まった。あるいは戦略的な利益が損なわれるということをおそれて戦争に走ったケースが大変多かったのではないのでしょうか。戦争も、平和も、軍縮も、やはり人々がどう政治的に判断するかということにかかっているのでありまして、私は国際政治の分野におきまして、「恐怖の均衡」というのは動かし難い平和の与件であるとは考えません。

米ソ超大国の大きな核兵器も、これも決してなくなると見方をするのではなくて、人々のこういう平和感覚、これは共通の安全保障への動きであり、国際的な安全保障を達成しようとする動きであろうと思うのであります。ですから、その中で都市の役割というのは、国境を越えて、国益に拘束されずに、もっと広い立場から、ナショナル・セキュリティよりもっと広いトランスナショナルなセキュリティであり、グローバルなセキュリティというものを求めていかざるをえないということであり、それは、主権国家の体制が違おうと、イデオロギーが違おうと、利害が対立しようと、人々の共有の意思によって、国際安全保障を求め、確立することが私はできるのだと思うのであります。そういう意味で、国際政治における冷戦の構造の変化というのは、一部の国の、一部の人々の考え方が変わってきているから起っているのではなくて、むしろその下にある市民の、いかにして安全な体制を、国際的につくっていくかという真摯な願いというもの、最も重要なその動因になっていると考えるわけでございます。諸外国では、最近、ジャパン・バッシングとか日本たたきとか、あるいは日本は経済的には強いけれども、政治的な役割や責任を担っていないのではないかという批判も相当にあります。そのような現象を日本社会は敏感に受けとめ、心配し始めています。そしてしかも、日本では私たちはそう関心をもっていないのですが、フェイスレスであると、顔の無い国家であるというような批判もござります。しかし、私は、そうではないと思います。例えば、日本人の考え方として、広島、長崎のこの原爆の悲惨な歴史というのは、これは人類が続く限り残るわけであり、私たちは平和への志というものを、これは決してフェイスが無いのではなくて、それぞれ我々の顔を持ち、志として世界に訴えていくというこの考え方が、日本の国民に根付いてきていると考えることもできます。ですから、いかにして、トランスナショナルな国益に拘束されない、もっとそれぞれの市民の安全というものを優先する安全保障というものを考えていけるのか。強い国が秩序をつくるとか、あるいは核戦略政策の「恐怖の均衡」が平和をつくるといったような考え方では、極めて不十分で、行き詰まりにほかなりません。今、歴史の重大な段階だろうと思うのでございます。そういう観点に立ちますと、この第2回の世界平和連帯都市市長会議に集まりました各国の市長や助役の皆様、それから日本の方々、専門家の人々、そしてお聴きになっている皆様、現実を変えられないのではなくて変えられるのであれば、共に考えようではありませんか。このことに関して、人々がいかに決断

するか、どういう形で国境をこえた運動にするかによって、私は、歴史はさらに変わっていきたく思うのであります。そこに私は、非常に歴史的な意義というものを、この連帯の中に生み出そうとしているわけであり、

本日は、基調講演をさせていただく機会を得ましたことを大変名誉なことであると思っております。

デタントは、今や現実になりつつあるのであります。両超大国間の現実になりつつあります。ここで、デタントがさらに包括的に、そして深く国際政治に浸透することを希望したいと思います。緊張緩和の結果、対話、そして交渉が一層、国々の各層で進められていくべきです。我々市民、そして国民が、国際平和、世界軍縮を促進する担い手にならなければなりません。そして、国境を越えた連帯、協力が、共通の安全保障の実現、そして世界核軍縮の実現にとって、最も必要なことでもあります。御清聴ありがとうございました。

#### 司会

鴨武彦東京大学教授による御講演でございました。どうもありがとうございました。

これもちまして、基調講演を終わります。皆様、どうもありがとうございました。

お知らせいたします。参加都市代表の方々、先に退場されますので、拍手でお送り下さいませ。一般の参加者の方々、今しばらく、お席でお待ち下さい。

～ヒロシマ・ナガサキ、核戦争は何をもたらしたか～

## 基調報告

8月5日（午後1時30分～3時30分）

広島国際会議場 ヒマワリ

広島市国際交流協会  
司 会 中 原 薫

1. 議長指名受諾および会議の運営方法についての説明 …… 45  
広島市長 荒木 武
2. コーディネーターあいさつ …… 45  
国際文化会館理事長 永井道雄  
国連大学学長特別顧問
3. 基 調 報 告  
元広島大学学長 飯島宗一 …… 46  
(財)放射線影響研究所理事長 重松逸造 …… 47  
(財)長崎平和推進協会理事長 秋月辰一郎 …… 49  
(財)広島平和文化センター事業部長 高橋昭博 …… 51
4. 基調報告に対する質疑応答 …… 54





司会（中原 薫）

ただ今より、第1日目の「ヒロシマ・ナガサキ、核戦争は何をもたらしたか」をテーマに、全体会議Iを始めたいと思います。

私は、広島市国際交流協会の中原薫でございます。

この会議の進行にあたりまして、議長は当会議の会長でございます広島市長、荒木武が務めさせていただきますと存じますのでよろしくお願い申し上げます。

それでは、荒木市長お願い申し上げます。

広島市長 荒木 武

ただ今御指名にあずかりました、広島市長の荒木でございます。広島市での会議を通じまして、議長の大役を務めさせていただきますのでよろしくお願いいたします。

まず、会議の運営方法について説明させていただきます。本日の会議は、原爆による被害の実態について、広島・長崎両市の関係者から説明していただき、その後、質疑応答をしていただきます。明日午前開催いたします2日目の全体会議では、二つの分科会を設け、それぞれ各都市から平和への取組について報告をしていただきます。午後からパネルディスカッションを行います。この2日間にわたる会議の総まとめといたしまして「広島アピール」の発表を行い、広島での会議を終わりたいと思います。

なお、広島アピール起草委員会には、広島・長崎両市長のほか、次に申し上げます各都市の市長を御指名させていただきますので、よろしく御了承をお願い申し上げます。ベルリン市エアハルト・クラック市長、コモ市アンジェロ・メダ市長、ハノーバー市ヘルベルト・シュマルスティーク市長、サクラメント市アン・ルーディン市長、ボルゴグラード市ユーリー・スタロバトフ市長でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、これより会議に入りたいと思いますが、2日間の会議を通して、元文部大臣で現在国際文化会館理事長、国連大学学長特別顧問を務められております、永井道雄先生にコーディネーターをお願いしたいと存じます。

それでは、永井さんよろしくお願い申し上げます。

コーディネーター（永井道雄）

それでは、座って司会をいたします。

ただ今、荒木広島市長からお話がありましたような順序で進めていきたいと思っております。最終的には、この市長会議からアピールを出して、日本の政府はもちろんですが、日本の国民、それから世界の政府や国民に

対してこれからどうしていったらいいか、という市長さん方の意見というものをアピールの形で出すこととなります。

しかし、何事もアピールする場合には、具体的な事実がどうであったのかということをよく勉強して、そして合意をして出すべきものであります。

今から始まります会議は、いったい広島で何が起こったのか、それはどういうことであるのか、広島だけではなく、言うまでもなくもう一つ、長崎というところがありますが、その広島・長崎において何が起こったか、ということ客観的に、事実を以てして、でき得る限り冷静に把握するというのがこの最初の会議の目的であります。

私のしゃべり方が少し速過ぎますか、速過ぎると思う人は手を挙げて下さい。通訳は「OK」サインを出している人が多いようですから、このスピードでしゃべります。

そこで、その実情について報告をする人がこちらにおいでになります。4人の方であります。一番私に近い所においでになるのは、元広島大学の学長でおられました、飯島宗一先生です。（拍手）

それから、その次が、財団法人広島放射線影響研究所理事長、これはもう一回言ってみろといわれても簡単に言えないと思いますが、なかなか長い名前の肩書きの方であります。財団法人広島放射線影響研究所理事長の重松逸造先生であります。（拍手）

その次が先程申し上げたように、実は広島のことだけを私たちは問題にするのではなくて、広島・長崎でありますから、長崎の平和推進協会理事長でおられる秋月辰一郎先生をお願いいたします。（拍手）

4人目の方は、今度は、広島平和文化センター事業部長の高橋昭博さんであります。（拍手）

それでは最初に、飯島先生からお話を願うわけですが、非常に簡単に、できる限り簡単に飯島先生のことを御紹介申し上げます。先生は1946年というわけですから、戦争が終わりました後、直ちに名古屋大学を御卒業になって、医学博士の学位を取得されました。名古屋大学においでになりましたが、やがて広島大学に移られて、広島大学の学長を8年間お務めになるんですが、更に名古屋大学に帰られまして、そこでまた名古屋大学の学長をお務めになりました。愛知県の総務部顧問でもあります。私は、長い間先生の委員で得るところ非常に大きかったことを感謝しております。

ではまず飯島先生に御発言をお願いいたします。約15分間でお願いします。

## 基調報告

元広島大学学長 飯島 宗一

1945年に広島・長崎に起こった出来事は、人類が初めて核エネルギーの解放に成功し、その巨大なエネルギーを現実利用するに当たって、それをまず戦争の手段として用いたという点において、人類史上画期的であったとともに、人類の運命に極めて深刻な課題を提供したといえることができます。

実際、ただ一人の人がボタンを押すことによって、その簡単な操作を行うことによって、ほとんど一瞬にして巨大な都市が壊滅に陥り、おびただしい数の市民が殺傷されるという事態は、それまで予想すらできない事柄でありましたが、それがあの日以来現実可能であることが示されたのであります。

この核時代の幕開けを端緒に、以後人類社会は様々な新しい経験を重ねて今日に至っているのですが、その一つの方向は、戦力、破壊力の技術的増強、つまり核軍拡競争でありました。初めアメリカの独占するところであった原子爆弾は、間もなくソビエトもまた保有するところとなり、この二つの国の対立を軸に、核軍備は日に日にエスカレートしました。その経過を今ここで詳しく顧みる必要はないと思いますが、水素爆弾、つまり熱核兵器の開発、ロケット技術の進展、それをめぐる諸種の科学技術並びに戦略戦術の研究が進められて、戦略核兵器、中距離核兵器、戦場核、更にはSDIなど多彩な核兵器使用体系が準備され、今や全地球を何回か破壊し尽くすに足りるほどの、極めて大量の核弾頭が蓄えられ、世界は正に、いつ爆発するか分からない火薬庫の上に置かれている状態に立ち至りました。これが、ヒロシマ・ナガサキ以後展開してきた一つの現実であります。

しかしながら一方、ヒロシマ・ナガサキの惨禍の意味するところを深い憂慮をもって受けとめた人々の声も、ヒロシマ・ナガサキの被爆直後から少なからず聞かれました。1945年8月7日、バチカンからのAP電報は、バチカン市ニュース広報が、「原子爆弾の開発が公表されたことに、法皇庁は重大な関心を寄せているが、それは人類殺戮の新兵器が使用されたこと自体よりは、その兵器が人類の将来に投げ掛ける暗鬱の影のゆえである。」と述べたと伝えられております。また、クリスチャン・サイエンス・モニター、シカゴ・トリビューン、サンフランシスコ・クロニクルなど当時の多くの新聞の報道や社説にも、原子爆弾の破壊力の危険性とその非人道的特質を指摘する意見を少な

く見ることができました。そして、このような反核の声とその運動が、より明確な、自覚的なものとなるに至ったのは、ビキニ環礁における水爆実験が伝えられて以後のことです。1955年7月9日の「ラッセル・アインシュタイン宣言」は、その一つの最も貴重な人類的な声明でありました。

このような反核の運動の世界的な広がりにもかかわらず、核軍備競争はますます激しさを加えていきました。1980年代に入って、中距離核ミサイルは欧州及びアジアに配備され、核戦争の現実の危険性が人々に実感されるようになって、核戦争防止は地球上の広汎な市民の切実な関心となりました。それとともに、スウェーデン王立科学アカデミー、IPPNW、WHO、更にはICSSU-SCOPEなど科学者のレベルでの核戦争の危険性に関する研究と分析及び更にそれらに基づく核軍縮、核廃絶、平和への提言が続々として現われ、それらが国際政治の上へもようやくして影響を与えつつあるというのが現況であります。これらの流れを通じて、ヒロシマ・ナガサキの体験は一貫して核戦争防止、核軍縮そして世界平和の探究の原点をなしてきたと言うことができ、ノーモア・ヒロシマ、ノーモア・ナガサキのスローガンは、人々に反核・平和の精神の深層での支柱を与え続けてきたと言えるのではありますまいか。

そればかりではなく、ヒロシマ・ナガサキは唯一の都市レベルでの原子爆弾破壊体験をもち、核戦争の結果とその影響についての実証的な数多くのデータを人類社会に提供する責任を背負ってまいりました。それは悲しむべき災害であり、苦悩に満ちた悲劇的体験でありましたが、被爆直後以来、今日に及んで、なおやむことのない医学的、自然科学的、社会科学的、更には人文領域における調査研究、創作活動、それらに基づく社会施策並びに行政の在り方についての集積は膨大なものがあり、これらの経験は数多くのモノグラフ、レポートの形で公刊され、国際的にも各種学会、ICSSU-SCOPE、WHO、IPPNW、あるいは更に国際連合などで国際的協同作業を行うに当たって、それらに重要な寄与を果たし、核戦争の防止と平和の探究のため大きく貢献しております。

また、私の専門である病理学の立場から申しますと、およそ放射線、放射能の急性及び長期的な人体並びに人間社会に及ぼす影響をより明確にとらえる上で、ヒロシマ・ナガサキの経験は貴重な知識を少なからずもたらしました。その意味で、ヒロシマ・ナガサキでの痛ましい犠牲者の方々は、いわば、身を捨てて、人類の未来の生活環境問題に無言の教を残されたといえることができましょう。「過ちは二度と繰返さない」と

いう誓いに加えて、無言の死者の教えたまうところを精一杯学び、それをくみ取ることは、犠牲になられた方々へのせめてもの私どもに果たし得る供養であります。

レーガン・ゴルバチョフ会談以来、米ソ両国の間で核軍縮は、やや具体的に前進し始めたように見えます。また、東西の緊張も新しい転換の兆しを示しつつあるように思われます。ヒロシマ・ナガサキ以来、40年有余にして初めてのこのような実現に向かいつつあることの希望を私たちは喜び、また心からその進展を期待するものではありませんが、しかし冷静に現実の世界を眺めるとき、まだ道は遠いと思わざるをえません。ヒロシマ・ナガサキの被爆の傷痕は、今日なお被爆者の心身に残っております。いつの日、ヒロシマ・ナガサキは真の意味での完全な過去になり得るでしょうか。

どうもありがとうございました。

#### コーディネーター（永井道雄）

どうも、飯島先生ありがとうございました。もっと時間がかかる事柄について、重要点をまとめていただいたことに感謝いたします。

では次に、重松先生にお願いするわけですが、重松先生は東京帝国大学を御卒業になりまして、やはり医学博士号を取得されました。アメリカ合衆国でも御研究を進められまして、ハーバード大学で公衆衛生学修士課程を修められたわけですが、その後御帰国になって、金沢大学医学部教授、国立公衆衛生院疫学部長を歴任されておられます。

現在は、放射線影響研究所理事長でいらっしゃいます。WHO衛生統計専門家諮問委員会の委員でもあり、あるいは、国際放射線防護委員会第1部会委員、WHO核戦争と保健問題検討グループメンバー等、非常に重要なお仕事を多方面にわたって行なっておられるわけでございます。

では、重松先生お願いを申し上げます。

## 基調報告

### 放射線影響研究所理事長 重松逸造

どうぞスライドをお願いします。

御承知のように、人類最初の原子爆弾が1945年8月、広島と長崎に投下されました。広島型原爆は初めはヤセ男 thin man、後でチビっ子 little boy とあだ名が付

けられましたが、原爆材料にウラニウムが用いられた例は、後にも先にもこの爆弾だけであります。それでも、爆発力はTNT火薬に換算して15キロトン、つまり1トン爆弾の15,000個分ということになります。

長崎型原爆の材料には、ウラニウムに中性子を照射して人工的に作り出した放射性物質プルトニウムが用いられております。その後の原爆はもっぱらプルトニウムが材料になっております。爆発力も強大でありまして、長崎型の場合、TNT火薬の21キロトンに相当します。あだ名は太っちょ fat man と付けられました。

原爆の効果は、爆風と熱線と放射線の三者の混合によるものでありまして、エネルギー分布から言いますと、爆風が50%、熱線が35%と両者で大部分を占めており、放射線は15%と、言うならば副産物的ということになります。広島の場合では、爆風が4km、熱線が3.5kmぐらいにまで達しているのに対し、ガンマ線は2km程度、中性子は更に到達距離が短くなっています。

長崎原爆の場合、爆風、熱線、放射線のエネルギー分布は広島と同様であります。それぞれの到達距離はいずれも広島の場合より0.5ないし1km程度長くなっています。また、放射線の種類別には、広島とは違って、長崎では中性子の占める割合の少ない点の特徴といえます。

被爆当時における広島と長崎の人口は、それぞれ約30数万人と20数万人といわれていますが、原爆投下による即死者と放射線による急性死亡者の数を合計しますと、両市とも人口の約3分の1程度と推定されています。被爆生存者の住所地をコンピュータでプロットいたしますと、広島では爆心地を中心に半径数百mの円内が死亡者のためぼっかりと空洞になっております。

これは長崎の場合ですが、爆心地周辺の空洞が広島より大きいように見えます。

原爆による外傷で重要なのは火傷であります。

強烈な熱線によって皮膚の深層部までおかされるためか、後でしばしばケロイドと呼ばれる厚い<sup>はんこん</sup>癒痕を残します。

被爆放射線量が300 rad、すなわち、新しい国際単位の3 gray ぐらいになると、2週間目ごろから脱毛が起ります。

ソ連のチェルノブイリ原発事故における被曝者でも脱毛患者が見られましたことは、やはり被曝線量がかなりの量に達したことを示しております。

このチェルノブイリ事故で被曝線量が高くて高い10数名の人はモスクワの病院で骨髄移植の手術を受けて、無菌的な病室に収容されました。

被曝線量の更に高い人は、3週間目ぐらいから皮下出血や口の中に潰瘍<sup>かいよう</sup>ができて、間もなく死亡すること

になります。

以上のような急性の健康影響のほかに、放射線には長期的な慢性の健康影響があることは以前から言われていましたが、その実態はほとんど分かっていませんでした。この慢性影響を明らかにする目的で、1947年より広島と長崎に米国政府は原爆傷害調査委員会、いわゆるABC Cを設立し、日本政府も国立予防衛生研究所の支所をABC Cに併設して、共同で原爆被爆者の追跡調査を実施してきました。この間、1975年には、現在の放射線影響研究所がこれらの仕事を引き継いで今日に至っております。

約40年間に及ぶ追跡調査の研究計画は、大きく分けて三つに区分することができます。第1は、被爆者を対象とした調査で、寿命の長さや死亡の原因を調べる寿命調査、解剖などで病気の原因を調べる病理調査、定期的な健康診断で病気の有無や病気の状態を調べる成人健康調査及び母親の胎内で被爆した人を調べる胎内被爆者調査の4調査があります。

第2は、被爆者の子供の調査で、二世の人たちの死亡調査、遺伝生化学的調査及び細胞遺伝学的調査の3調査があります。

第3は、その他の調査で、これには循環器疾患やがんの調査、実験病理や免疫学の調査及び原爆線量の再評価などが含まれます。

さて、今日まで得られましたこれらの調査研究の結果を、①被爆者間に明らかに増加が確認された影響、②増加の傾向が認められる影響、及び③増加が認められない影響の3グループに分けて申し上げたいと思います。

まず、増加が明らかだった影響ですが、これには白血病を始めとする甲状腺、乳房、肺、胃のがん、と多発性骨髄腫といった悪性新生物があります。白内障や染色体異常は割合早い時期に起こっています。お母さんのおなかの中で被爆した人では、小頭症と知恵遅れの例がみられます。また、乳幼児の時期に被爆した人では、発育と成長に遅れが認められています。

被爆後に白血病やその他のがんがいつごろ発生するかはこの模型のとおりであります。チェルノブイリの被爆者にも白血病がそろそろ増えだすかもしれません。

この写真は気の毒な小頭症の子供を示しています。現在、20数名の小頭症の人が生存しておりますが、年齢も43才になっておられるわけであります。

被爆者の間で増加の傾向が認められたのは、ここに示すようながんと免疫の異常であります。今後更に観察を続けていくと、増加が確実とされるものが出てくるかもしれません。

この表に示す健康影響につきましては、今日まで被

爆者と非被爆者との間で差を認めていません。それは一部の白血病や骨肉腫、がん以外の原因による死亡、老化の促進、不妊症それに遺伝的な影響であります。

この表は、広島と長崎における被爆者の生存状況を、男女別に非被爆者と比較したものでありますが、広島を男を除くと、6割以上の被爆者の方がまだ生存しておられますし、生存率は非被爆者に比べてそれほど差があるわけではありません。

広島と長崎の経験をもとに、核戦争と健康に関する本は既にたくさん出版されております。

この中で重要なのは、WHO（世界保健機関）が各国の専門家を集めて発表した「核戦争の健康及び保健サービスに及ぼす影響」と題する報告書であります。これは4年前に出ましたが、既に6か国語で翻訳されて出ております。今ここには、中国語・英語・フランス語・スペイン語があります。昨年、これの第2版も出ております。

最後に、このWHO報告書の結論だけをこのスライドに示します。日本語だけを読みますと、「核爆発の健康に及ぼす影響に対処するただ一つの方法は、そうした爆発の一規模、すなわち核戦争の防止しかない。」何年かかかって、世界中の専門家が集まって当り前みたいな結論で、大分いろいろ言われましたが、結局どんなに知恵を絞っても、核戦争と健康という問題の唯一の解決策は、やはり核戦争の防止しかないという、これが結論でございます。

以上で終わります。

コーディネーター（永井道雄）

どうもありがとうございました。

大変簡単な結論ですが、重要な結論であると思います。

では次に、秋月先生にお願いしますが、秋月先生もやはり医学部の御出身であります。京都大学で医学部を出られてから臨床医師として活動を始められました。

8月9日、長崎被爆の日でございますが、爆心から約1.5kmの浦上第一病院で被爆されたわけであります。被爆されますと、御自分の被爆を顧みずに非常に人々を助けるとか、あるいは医療活動に当たるということで大変な御努力をなさいました。今日、長崎原爆被爆者対策協議会の委員等々いろいろ重要なお仕事に当たっておられます。先生は長崎のお話をして下さるわけでございます。

お願いします。

## 基調報告

(財)長崎平和推進協会理事長  
秋月辰一郎

秋月でございます。

平和を願う皆様、平和連帯都市の市長様に、この被爆地広島で私の長崎体験を述べます機会を与えられましたことを心から光榮に思います。

1945年8月9日、長崎市に原子爆弾が投下されたとき、私は長崎市の北西部のカトリック経営の小さな病院の療養所の医師でした。入院患者は70人で、医師1人、修道士、司祭、看護婦のわずかの従業員。戦争末期、食糧も医薬品も非常に乏しい状況でした。

8月6日、広島市の爆撃は一発で全市を灰燼<sup>じん</sup>に帰したのですが、「広島市に新型爆弾、相当な被害」と小さく報道されました。戦争は敗戦必至であったのですが、国民には真実は知らされず、「最後は勝つ」と言いつのりしました。

8月9日、晴れた日でした。午前8時ごろ、毎日のように空襲警報が鳴り、やがて解除されました。今日も何事もなかった、と私は外来診察室で患者に人工気胸を始めました。そのとき、「ぴかり」と白色閃光が輝いて、数秒後、「ぐわん」と建物と頭に大衝撃を受けて、私の傍らの看護婦も床の上に伏せました。背に天井や壁の破壊物が落ちてきて、一時は頭がががんしましたが、幸いに私も看護婦も起き上がることができました。

黄色の煙かほこりが部屋中に満ちています。「しまった、病院が爆撃された。入院患者たちは——」と思ったんです。そして壊れた階段から「助けて」と叫んで降りてくる患者は不思議に傷は軽いのです。

私は院内から屋外へ走り出たのですが、風景がガラリと変わっている、太陽がぼんやりと赤く暗く、一面に黄褐色の煙が立ち、地上の建物は燃えています。浦上天主堂も工業学校も、また家々も電柱も樹木も煙を出しています。畑の野菜も燃えています。私の病院も大屋根から燃えています。その煙と火の間を、裸の白っぽい血まみれの人が「助けて、やられた」とうめいています。まるで地獄絵の亡者のようでした。世の終わりか夢のようでした。その時以来、私たちは病院の焼け跡で、数百人の死者や焼死者に取り囲まれ、薬品も医療器具もほとんどない、修道士、看護婦と私は無力な医者として生きるのです。市内の医療施設も大学病院を始めほとんど全滅して、私達は孤立しました。

これが新型爆弾という原子爆弾とは知りませんでした。

た。

負傷者はガラス片、コンクリート、木材などにつぶされた挫傷が最初でした。また、全身火傷の人々が数多くいたのです。初めは皮膚が白く、やがて黒く腫れる。それらの火傷の人が苦悶しつつ、翌日までに死亡<sup>うし</sup>する。挫傷の人も、不潔と抵抗力の欠乏で化膿して蛆がわいてきます。

これらの重傷の人々に、3、4日後から不思議な病人が加わります。これまで傷の無い人、軽い人が急に皮膚が紫色になって、髪が抜けて、血を吐いて死んでいく。初め、赤痢か紫斑病か、あるいは中世の悪疫ペストみたいなものか、死が広がっていく。これが大量の放射線を浴びた急性放射線症で、被爆地を恐怖に落としたのです。

1945年8月15日、日本は敗戦、降伏しました。8月16日、私は天皇の言葉を聞きました。重傷者に囲まれて、私たちは涙を流しました。「遅すぎた」と思いました。「何のための戦いだったのか、戦争とは何か」ということでした。そのころから、急性放射線症による死者は1ヶ月後、また9月中ごろまで続きます。

戦後、原子爆弾という言葉が言われだしました。長崎市の大半は廃墟となって、そこに米軍が進駐しました。原子爆弾の学術調査が始められ、医薬品も少し出てきました。しかし、その時期はもう死ぬべき人はほとんど死んだように感じました。それからの学術調査はその年の10月から行われ、米日合同の科学的調査でありましたが、既に被災者の死亡者の内90%はもう死んでいたと思います。しかし、その公表も6年後でした。

長崎の原子爆弾はプルトニウム、米国のアラモゴードの実験、8月6日の広島ウラニウム爆弾に次いで、3発目でありました。

長崎の場合、爆心は市の中央からはずれて、北西部松山町の上空でありました。その威力は、TNT火薬21キロトン、22キロトン、広島より大であります。そのエネルギーは爆風圧と高熱と大量の放射線でありました。爆圧によって半径2 kmまでは、日本家屋は倒壊、焼失。火球の中心は数10万度、1500 mの地でも、人は全身火傷で死亡しました。直射熱と類焼で、家屋の全焼は2万戸ほどです。放射線は数万 rad、1500 mの地点でも500 rad 近く、人を殺害するのです。

私の病院は爆心から1500 mの距離で、生と死の境であったのです。れんが、コンクリートの壁で私は助かりました。

長崎市の北西部、4 km四方は無人の焼野となり、原子野（アトミックフィールド）と言われて、75年間、人は住めないと言われました。また、フォールアウト

(放射性投下物) 死の灰は黒い雨となって、あるいは風で遠く運ばれました。長崎市の東部の西山地区は長く残留放射線があったのです。

焼失家屋2万戸、死者73,000人と推定され、被災者もそれに相当し、市の中心が爆心でなかったため、広島の大災害の3分の1であります。数10万の人が一度に大量の放射線にさらされた経験は人類にはなかったのです。

この調査が始まったときに、一時急性放射線症による死亡が少なくなったために、12月に「原爆災害は終わった。」と報告されました。戦後、医療も研究も極めて不十分で、また人々の不安と混乱を防ぐためにそう報告されたのでしょう。報道管制も厳重であったのです。

しかし、原爆の恐さ、残酷さは後になって疾病が起こる後障害であります。これは、半年後、1年後、あるいは5年後、10年後に続くのです。先ほどの重松先生のお話のとおりでございます。皮膚の異常、ケロイド、癬痕異常、眼瞼、耳、口唇が萎縮して顔面の醜形を残し、女性には死以上の苦痛でございます。性腺異常、先天異常、奇形、近距離胎内被爆、小頭症、白内障、あるいは血液疾患、悪性腫瘍、遺伝的影響など言われております。生き残った被爆者も、今なお長崎に数10万生存しています。皆それぞれ老齢になっております。懸命に生きていますけれども不安をもっていると思います。

次に、都市の破壊についてです。原子爆弾の放射線、熱線による人間の生命、生物学的障害は恐るべきものです。しかし、本来その巨大な爆発エネルギーによるものは、人間の集団、都市社会の打撃、破壊がその目的であります。

長崎市の場合、爆心が北西に片寄り、甚大な被害が全市の域でなかったとはいえ、7万人が死亡し、7万人が負傷しています。

原爆の都市の破壊の特徴は、被害をあらかじめ知ることができない、知ってもどうしようもない、瞬間性です。戦闘員も非戦闘員も、民間も軍人も、老幼、男女、病人、無差別に、すべての生物が、それで生きていくための環境を徹底的に破壊される根絶性。人間の体のみでなく、精神生活にわたって全面的な打撃、被害が一時的でなく、将来にわたって、世代を超えて持続するということでございます。言い換えると、集団虐殺、社会抹殺、生物抹殺、地球破壊抹殺であります。

原爆の社会的影響。長崎原爆の被災を写真で見ますと胸がつまります。中央部に山岳地帯があり、北西部浦上川流域はすべてほうきで掃いたように破壊しつくされています。山すそには壕があり、少しの人の営み

が残っています。東部中島川流域には市街がそのまま、またかわら屋根が残っております。この二面性、対照性が長崎被災の特徴で、壊滅と残存の悲劇であります。

廃墟に学校も多く、長崎医科大学を始めとして20数校が全壊、全焼しました。コンクリートの残がいが残っています。病院も医科大学病院など6病院、診療所も20数か所、医者は診療中に即死しています。

この地区は1870年、明治以後、近代都市の発達の過程においては新興地帯でございます。長崎駅、浦上駅など交通の拠点、また大工場もあれば小工場もあります。学徒報国隊、学徒動員隊も多数おりました。長崎の原爆死者には、20歳、30歳が広島に比較して多いのでございます。

また、特にカトリック信徒の受難、「浦上五番崩れ」についてです。この爆心地区は、(1550年以來)400年前よりカトリック教信者の村でありました。その後、300年間の迫害に耐えて信仰を継いだ人々がようやく陣を獲得した町です。中央の丘に、信徒が30数年かけて建てた東洋一の赤レンガの「カテドラル」がありましたが、瓦解しました。被災信徒14,000人のうち約9,000人が爆死。これらの信徒は、家族親類相寄って住んでいたため親族20数人死亡という家庭もあります。この人々は日本カトリック信徒の中心集団で長い間ありました。

400年来徹底した弾圧追放が4回もあったので、この原爆災害が第5回目の神の試練といっています。全滅に近い被害を「浦上五番崩れ」といいます。このほか、60年の歴史のフランス修道女会、女子少女会、日本の純心少女会、女学校も全滅しました。

外国人被爆。原爆は日本人のみ爆撃したものではありません。米国は、長崎市に外国人が居留していたことを既に知っていました。爆心地近くに外国人捕虜収容所があって、南太平洋戦争の初期、日本軍がイギリス兵、オランダ兵、オーストラリア兵、インドネシア兵を捕虜にしました。彼らは軍需工場で強制労働です。末期には、栄養が悪く、環境悪化で肺炎で死亡しました。原爆時には百数十人おったのですが、即死した人数は少数でした。

朝鮮人は20,000人ほど長崎市に居留していました。炭鉱や工場、土木、壕掘りに強制的に働かされ、これらの人は、戦前、戦中内地に強制連行された者であります。推定ですが、爆死者は4,000人ほど、被爆者は10,000人ほどです。

長崎市には、13,000人の中国人が労務者でいました。そのうち30人はスパイ容疑で刑務所におりまして、全滅いたしました。長崎医科大学には台湾の方の留学生もいました。以上で、我々医療に属する者も、ある

いは患者が殺到した救護所でも全滅の状態、本当に医術は無効だと思います。

最後に結びますが、私たちは核兵器の使用による人間の被害を見ました。しかし、私たちはただ過去を語るのではなく、また自分らが受けた苦痛を被害者意識をもって訴えるではありません。私たちも戦争を始め侵略したことに協力した一人の人間であることを遺憾に思い、核兵器の被害者として、私たち長崎市民を最後の被爆市民とするために訴えるのであります。

人類地球の未来は、核兵器を使用するか否かにかかっています。44年以前に長崎市に投下された原爆一発でも世の終わりと思いました。今、世界の核兵器は量・質ともにその数10万倍であります。「核の冬」というのは、地球に生物が住めないということで考えても分かることであります。世界の平和を維持するために核兵器を保有して、その核軍備をどんどん進めなければならないという議論はむしろ人類の危機であります。

私たちがここで考えることは、一国の危機ではなくて人類の危機であります。そしてこれは、政治家とか軍人の発想を超えて、神とか、草の根の問題だと私は思います。国連軍縮特別総会でも、度々広島市長、長崎市長が出席して訴えました。また、1981年にローマ法王ヨハネ・パウロ二世が日本の広島、長崎に来て、核兵器廃絶を、平和を説かれています。第2回国連軍縮特別総会、ニューヨークで100万人の市民大行進が行われました。これは草の根で世を変えようとするものであり、世界の世論を草の根が動かすという確信がありました。

ヨーロッパの核配備もそれであります。米ソ両巨頭のレイキャビックの核軍縮会談は、その神の声、民の声が動かしたのであります。今、欧州の問題でなく、太平洋の問題でもあります。市長たちは権力によって選ばれたのではなく市民の代表でございますので、どうぞ神の声、民の声を信じて、超大国の核拡大の方向を変えていただきたいと思っております。長崎市も努力するつもりでございます。

御清聴を感謝します。

コーディネーター（永井道雄）

聴衆の方には、長い間静かに聴いていただいて感謝しております。しかしあとお一人予定の方がおりますので、その方にお願いをいたします。高橋さんでございます。

高橋昭博氏は広島平和文化センター事業部長です。やはり14歳のときに経験をされました。その後、世界各地を回りまして核の恐ろしさについてお話をしたり、

あるいは展示を見せるというようなことを、中国のような隣の国、あるいはヨーロッパでもやってきておられます。そういうこれまでの御経験を中心にお話をお願いしたいと思います。

## 基調報告

（財）広島平和文化センター事業部長  
高橋昭博

ただ今御紹介いただきました高橋と申します。

人間の能力の中で最も弱いのは想像力であり、最も強いのは忘却力であるといわれます。しかし、私たちは核兵器を全廃し、戦争の廃絶された世界を構想する能力を失ってはならないと思っております。私は“あの日”を忘れようと思ったことはありません。いや、決して忘れることはありません。たとえ思い出すのは苦しくても、忘れてはならないと自戒して生きてきました。そして“あの日”がその後の私の人生の出発点であると言いつけて生きてまいりました。“あの日”の惨状は、まるで昨日のこのように、次から次へと私の脳裏によみがえってきます。

1945年8月6日午前8時15分、世界最初の原子爆弾は、広島の上空で炸裂しました。あの魔の閃光や地軸を揺るがす轟音と衝撃波によって広島は街は廃墟と化し、生きとし生きるものすべてが焼き尽くされました。“あの日”私は中学2年生14歳でした。爆心地から半径1.4kmの地点にあった中学校の校庭で、およそ150名の生徒が朝礼を受けるために整列しようとしておりました。空襲警報、警戒警報がともに解除されたあとでした。しかし、なぜかB29、1機が私たちの上空に差し掛かろうとしておりました。「アッ！B29だ！」と私たちは口々に叫び、空を仰いで、指差しながらその飛行機を眺めていました。「整列！」と級長が号令をかけ、私たちの顔が正面に向いたそのときです。一大音響とともに、あたり一面真っ暗闇になりました。

5分、いや10分ぐらいたったのでしょうか。ようやく煙が消え、校庭一帯が明るくなりました。私は爆風で10mぐら以後方に吹き飛ばされておりました。級友たちも皆、後ろへあるいは左へ右へと吹き飛ばされ、校庭のあちこちに倒れておりました。校舎はべっしょんこ、付近の家々は全くありません。遠くの建物もわずかを残してなくなっていました。「広島がなくなった!」、一瞬私はそう思いました。

我にかえって自分自身の体を見ました。制服はボロ

ボロに焼かれていました。後頭部、背中、両手、両足に大火傷を負っていました。特に両手、両足の皮がむけてボロ切れのように垂れ下がり、表面は赤身がむき出しになっていました。体の数か所にガラスの破片が突きささっていました。「万一空襲を受けたら川に逃げろ！」という平生の避難訓練を私は思い出し、校庭から道路に出て、急ぎ足で川の方へ向かいました。

しばらく行くと、後ろの方から私の名前を呼ぶ声がします。振り向くと、同じ町から一緒に毎日通学をしていた、同じクラスの山本達也君が助けを求めています。彼は「お母さん、お母さん」と泣いてばかりいました。私は「もう泣くな！泣いても始まらない！早くここを立ち退くんだ！」と言って、彼を時には叱り、時には励まして一緒に川の方へ向かって逃げて行きました。

被爆した人たちが列をなし、ふらつきながらゾロゾロと足を引きずるようにして、こちらに向かって来ていました。両手を前にだらりと下げ、衣服はボロボロ、裸同然の人もいました。人間とは思えませんでした。まるで幽霊の列のようでした。その列の中には、上半身ガラスだらけの男の人がいました。別の男性は上半身の皮がむけて赤身が出ていました。女の人の片方の眼球がとび出し、全身血だらけになっていました。全身ずるむけの母親のそばで、全身焼けただれた赤ん坊が泣きわめいていました。死体もいくつかころがっていました。その中には内臓が破裂して地面に出ている女の人の死体もありました。馬が全身の体の皮をはがされ、赤身をむき出しにして、首を水槽の中に突っ込んで死んでおりました。まさに凄惨そのものです。とても言葉だけでは言い尽くせない、生き地獄さながらの光景を目の当たりにしながら、私たち二人は一生懸命川の方に向かって逃げていきました。

しかし、川岸へ通じる小路という小路が、すべて爆風で壊された家屋の残がいによってふさがれ、歩いて通ることができませんでした。私たちは無我夢中で、その家屋の残がいの上を四つんばいにはって、やっとの思いで川岸に出ることができました。はい出たところに、運よく小さな木の橋だけが残っていました。その橋を渡ろうとしたときでした。道路の両側にあった家屋の残がいから一斉に火の手があがりました。みるみるあたり一面火の海になってきました。3 m、4 m、5 m、それ以上の火柱が大きな音をたてて天に向かって吹き上げてきました。ちょうど火山が噴火するような情景でした。私たちは幸い、火災の外側に出ていました。逃げ足が一步遅かったら、恐らく火の海に巻き込まれて焼け死んでおったと思います。友人の山本君はそのときはぐれていなくなっていました。私は一人

で木の橋を渡って向こう岸へ行きました。向こう岸へたどりつくまではもう逃げるが一心で、無我夢中でした。向こう岸までようやく逃げのび、気が緩んだとたんに、背中がヒリヒリと猛烈に熱いのを強く感じました。それで、私が川の中に3回つかったことを今でもはっきり覚えています。川の冷たい水は、燃えるように熱い私の体にとっては本当に宝のようでありました。「ああ、助かった！」と、そのとき初めて涙が出て止まりませんでした。

私は川から上がって、人に教えられ、山の竹やぶを利用して作られた仮の救護所へ行き、応急手当をしてもらい、しばらく休息していました。そこへ雨が降ってきました。初めて見る「黒い雨」でした。大粒の雨が大きな音をたてて降ってまいりました。「この世に果たして『黒い雨』なんてあるのだろうか？」不思議な気持ちで雨が降るのをしばらく眺めていました。雨が止むのを待って、私は自宅へ向かって歩き始めました。

しばらく行くと、また私の名前を呼ぶ声がしました。道端を見ると、これも私と毎日同じ町から一緒に通学しておった、同じクラスの八田徳次郎君がうずくまっていた。彼は「助けてくれ！助けてくれ！一緒に家まで連れて帰ってくれ！」と、うめき声を上げ、私に助けを求めました。彼はなぜか両足の裏側をひどく火傷していました。足の裏側の皮がむけて赤身がむき出しになっていました。これでは歩けるはずがありません。私も大火傷を負っていましたが、助けを求める友人を見捨てて一人だけで自宅に帰る気にはとてもありませんでした。何とか一緒に連れて帰ってやろうと思いました。しかし、歩けない友人をどうやって助けようかと、しばらく考えこんでしまいました。幸いにも、足の裏側以外は、彼の体は火傷も切り傷も比較的軽いものでした。それで赤むけになっている足の裏側が地面につかないようにする2つの方法を思いつきました。その一つは、八田君の両手と両足の膝を使ってはわせました。もう一つは、八田君の両足のかかとで立たせ、私が彼の体を支えてやって、やっと歩きました。この二つの方法を繰り返しながら、私たちは助け合って、牛の歩くようにゆっくりゆっくりと自宅へ向かいました。

疲れ果てて、二人は道端で休んでいました。何気なく私は後ろの方を見ました。大伯父と大伯母がこちらに向かって歩いてきているではありませんか。私は声を振り絞り、大伯父夫婦を呼び止めました。田舎の法事から自宅に帰る途中、本当に偶然に私たちと出会ったのでした。大伯父夫婦に助けられて、私たち二人はそれぞれの自宅に帰ることができました。大伯父夫婦



に助けられなければ、学校から自宅までおよそ6 kmの道のりを、いくら助け合ったとはいえ、2人の大火傷を負った少年が自分の力だけで自宅にたどり着くことはとてもできなかったでしょう。

私は、帰宅後約3週間、失神状態が続きました。その後、自宅に往診に来てくれた耳鼻科の医師の治療を、朝夕2回受けることができました。普通であれば火傷の治療を耳鼻科の医師がするはずがありません。市内にいた医師、看護婦が全滅に近い状態の中で、例えば耳鼻科が専門であっても、医師と名が付く人に治療を受けることができた私は、幸せであったと思っております。治療の間、生死の境をさまよいながら、1年半の闘病生活を続け、文字どおり九死に一生を得ました。友人の山本達也君は1か月半後に、また、八田徳次郎君は1週間後に、共に急性症状にかかり、帰らぬ人となりました。

私は、今日まで生き長らえたとはいえ、右手の肘と、親指を除く4本の指は曲がったままで固定して動かず、両手、両足にはケロイドが残っております。右手の人差し指には今も「黒い爪」が生え続けています。原爆資料館に、抜けた私のその「黒い爪」がケースの中に二つ入れられ、展示してあるのをお気付きになったと思います。また、被爆の後障害と思われる慢性肝臓炎にかかり、国の認定を受け、1971年から7回入院し、今なお通院加療中であります。肝臓障害のほかにも多くの病気をかかえております。私は一日一日が不安でなりません。病弱な身体を引きずりながら、「こんなに苦しみながらも、なお生き続けなければならないのだろうか。」と、絶望的になることすら度々ありました。その都度、「せっかく生き残ったのだから」と思い直しては、今日まで生きてまいりました。「被爆後、長い間本当によく生きてきたなあ」というのが、今の私の偽らざる実感でございます。

級友およそ60名のうち、50名は原爆によって無残にも殺されました。現在まで、私を含めて11名の生存を確認しております。私はわずかな生き残りの一人であります。「級友たちの死を決して無駄にしてはならない。死んでいった者たちの声なき声を後世に伝えるのは、生き残った私たちの使命であり、責任である。」私はこのことを心に刻み、自らに言い聞かせて生きてまいりました。私の友人たちは、大人になる前に、何もできないで原爆の犠牲となり、苦しみもだえながら死んでいきました。「お国のために」と死んでいった若くて短い命でした。さぞ無念であったでしょう。さぞ悔しかったと思います。私は友人たちの死を思いますとき、私たちに与えられた命がいかに大切かを考えないではおれません。「ヒロシマ」は、生きることの

意味を再確認し、生きることとは何かを問い続け、生命の尊厳を学ぶところであります。

現在、この地球上には5万個、広島型原爆にして100万個の核兵器が存在しております。核戦争には勝者も敗者もあり得ません。そこに待っているのは紛れもなく人類の死滅であり、地球の終えんにほかなりません。核兵器廃絶のためには、世界のすべての人たちが同じ人間同士であることの立場で対応すること、しかも、国であれ、人であれ、共に相互依存度が高いという認識を持つことこそ最大の解決策であると思えます。いつまでも狭わいなナショナリズムにしがみつき、人類全体の主権よりも一国家の主権に価値を置き続ける以上、真の平和への希望はないでありましょう。核兵器を持つ国の、それもごく一握りの指導者たちに、この地球の運命をゆだねていいわけがありません。

先に締結されたINF条約は、一つのタイプの核兵器を全廃した内容であるだけに、史上かつてなかったものとして、私が高く評価する立場は人後に落ちるものではありません。しかし、INF条約に続いて最も重要な包括的核実験禁止措置が早急に講じられなければ、この条約そのものの意味を失う恐れがあります。1963年に締結された部分的核実験停止条約は、単に核実験を地下に追いやったにすぎず、その後核実験のペースは衰えるどころか逆に加速し、その数は増加の一途をたどってまいりました。したがって、包括的核実験禁止条約の早期締結が緊急の課題であります。さらに進んで、戦略核兵器の半減、海洋における核兵器の廃絶に向けて、米ソ2国間、あるいはあるい多国間において速やかなる交渉の進展が図られることを、私は心から期待してやみません。

地震専門家たちは、「15キロトンの広島型原爆より小規模の地下実験でも探知可能である」と主張しております。したがって、「核実験の検証ができない限り、核実験の全面禁止には応じられない。」とする主張もはや通用いたしません。核保有国は、核実験をこれからも継続したいがために検証のせいにするのでしょうか。核実験の全面禁止のためには、技術論を先行させるのではなく、相互の信頼と政治的な決断こそが必要であります。核兵器廃絶を決して夢物語りにしてはなりません。

核兵器は人間によって造り出されるものであります。戦争も人間によって起こされてきます。ですから、人間の努力で、人間の英知を結集すれば、核兵器を廃絶しえないわけがありません。戦争も、人間同士が知恵を出し合えば、きっと防ぐことができるはずで、私たちは美しい地球を、平和を脅かすあらゆる脅威から守り、確実に21世紀へと、引き継がなければなりません。

ん。私たち被爆者は、核戦争や環境破壊など地球を危うくする行為はすべて否定いたします。私たちは美しい地球を「人類のかけがえのない遺産」として、子々孫々にまで残していかなければなりません。戦争の相次いだ20世紀を生き抜いた私たちは、その反省を込めながら、平和に生きる権利を持つ時代への責務と義務を、誠実に果たしていかなければなりません。

核戦争によって大きな被害を受けるのは、何といっても都市であり、そこに住む市民であります。世界の都市と都市、市民と市民が、過去の憎しみや悲しみ、苦しみの一切を乗り越え、人種や国境の別なく連帯し、不信を信頼へ、憎悪を和解へ、分裂を融和へと歴史の潮流を転換させなければなりません。私たちは、堂々と「世界恒久平和」の理想を高く掲げ、核兵器廃絶を望む声を絶やすことなく、叫び続けていかなければなりません。そして、東西融和の理念ともいべき「共通の家」を欧州のみならず、世界に建設していかなければなりません。

私はこれからも、飢餓、貧困、人権抑圧等の問題も黙視することなく、世界の人々と痛みを共に分かち合い、私に残された命を燃やし続け、「私の被爆体験とヒロシマの心」を国の内外に訴え続けていく決意であります。世界の各都市の市長の皆様、どうか私の切なる願いをお酌み取りいただき、核兵器廃絶へ向けて、なお一層の御努力を心からお願い申し上げます。

御清聴感謝いたします。

ありがとうございました。

コーディネーター（永井道雄）

どうもありがとうございました。

それでは、まもなく休憩をしたいと思います。しかし、休憩の前に20分から25分ぐらい時間が残っております。いろいろ質問もあろう、御意見もあると思いますので、手を挙げて、そして発言をしてください。

はい、どうぞ。

谷内真理子(核軍縮を求める二十二人委員会事務局長)

冒頭に発言を許していただきまして議長に感謝いたします。

先ほど、基調講演の中で、鴨武彦教授が諸外国の方々の中から「日本人は何を主張しているか」いわゆる顔が見えないという指摘があると御披露なさっていました。私はその汚名を晴らすためと申しませうか、そのために一つ具体的な事例を御報告申し上げたいと思います。

日本には、ここに御参加の皆様には御存じだと思

ますけれども、核兵器を造らず、持たず、持ち込ませず、という非核三原則というのがございます。これは1975年に国会で全会一致によって国会決議というものがなされて、それ以来日本の国是ということで、日本の非核国としての証としてきたわけです。

これは被爆者の方々の、この非核三原則を政府に厳しく守ってもらうというのは長年の要求でありました。

これを広島市長、長崎市長も常に支持をしてきて下さいました。そして、国民の多くもこの非核三原則の厳守を心から求めております。ところが、この非核三原則が守られていないのではないか、とりわけ、核兵器を持ち込ませずという点について守られていないのではないかという疑惑をこれまたほとんど多くの日本人は持っているわけでございます。

こうした矛盾、これをそのまま放置しておくということは政治の大きな不信につながるわけでございます。このところ政治不信というのが日本中を覆っております。合言葉のようになっております。この政治不信というものをこれ以上放置はできない。それから、こういうものをそのまま放置するということは、我々自身の、国民のモラルの問題であるというふうなことで、これを法制化しようという動きがございまして。

先ほど、メッセージの紹介のときに、参議院議員の宇都宮徳馬氏を代表する「核軍縮を求める二十二人委員会」というメッセージが寄せられました。御紹介をいただいたはずでございます。この核軍縮を求める二十二人委員会と申しますのは、超党派の国会議員の方々、昨年亡くなられた三木武夫元首相もメンバーでございました。それから、今議長をしていらっしゃる永井道雄先生もメンバーのお一人でいらっしゃいます。広島・長崎の両市長もこの22人の中のメンバーでいらっしゃいます。この核軍縮を求める二十二人委員会は、今、非核三原則を実行のあるものにするために、これを国是から更に進めまして法律にしようということに取り組んでおられます。

基調講演をなさって下さった鴨教授は二十二人委員会のメンバーではないのですけれども、二十二人委員会の中に設けました、非核法制化のための小委員会というところに御参加下さりまして、大変大きな力を注いで下さっているわけです。

私、当事者のように申し上げますけれども、自己紹介が遅れましたが、この核軍縮を求める二十二人委員会の事務局長をしております。ですから、当事者の一人としてお話をしているわけでございます。

つい数日前の7月31日に、東京での「非核三原則の立法化」という題でシンポジウムを行いました。大変大きな世論の反響を呼んだところであります。近年日

本では、残念なことながら厚い現実政治の壁に阻まれて、平和を求める世論というものが、もちろん心はあるわけでございますけれども、大きな願いはあるわけですが、現実政治の壁の前に現実はいくらも変えられないのではないか、ということで若干あきらめによって支配をされてきたような観がございます。

しかし、先ほどアルジャー教授もおっしゃいました。すべての人々が参加して、下から声をあげることによって平和の実現が達成されるのである。それから、鴨先生も、現実はいくらも変えられるのであるということをおっしゃられました。

核軍縮を求める二十二人委員会の考え方の基本もここにございます。常に世論に働きかけながら、そして自分たちが、国会議員、学者、自治体の長、様々な立場を、その責任を果たしつつ、またその立場を超えながら世論とともに現実を変えていこうということで、この非核三原則を法制化、立法化して、そして日本に非核法を実現できたなら良いなあということで、今のこの取組といいたいでしょうか、運動を始めたところでございます。

このことを一つ具体的な例として皆様に御報告をしたくて、せん越ながら一番最初に手を挙げました。

失礼いたしました。

コーディネーター（永井道雄）

どうもありがとうございました。

今のは、非核三原則といって、日本人がこれをめぐって盛んに議論をしている事柄であります。

しかし、その前に飯島先生に始まって、いろいろ御報告がありました。まだ時間が余っておりますから、どうぞ御遠慮なく御発言下さい。

はい、どうぞ。

ちょっと自己紹介をして発言して下さい。

ギャーリ・デービス

ギャーリ・デービスと申します。私、市長ではありませんけれども、新しい世界市民、政府の代表であります。世界市民の多くの者といえますのはヨーロッパの都市の市民でもあります。

私、1949年にフランスで始まりましたプログラムについて御説明をしたいと思っております。これは主権の行為というものでありまして、ある特定の都市が世界都市として宣言をするということでもあります。1948年にフランスで開始いたしました、世界中に広まっております。973のそういった都市がありまして、広島・長崎もその中に含まれております。

この動機でありますけれども、これは明白でありま

す。つまり、核の時代というものが、広島・長崎で悲劇的に幕開けをしたわけでありまして、それによりまして、全世界のコミュニティが一致団結をしたということでもあります。

私、第二次世界大戦におきましては、爆撃機のパイロットをしておりました。原爆とは直接かかわりはありませんでしたけれども、西独において爆弾投下をいたしました。こういった暴力的な行為というのは、この場にいらっしゃいます多くの都市の市長、そして、世界中の市長によって非難されています。全世界の都市の壊滅の脅威があると、脅威になるということでもあります。ですから、全世界の全都市が、いわば核戦争の前戦にあるといえると思うわけでもあります。そういったことから、我々としては団結をして共通の危険を認識している。そしてまた、人間的な共通の目的も認識しているわけでもあります。つまり、我々全員は世界という枠組みの中にあるということでもあります。

この世界都市でありますけれども、昨日、一つの宣言を出しております。世界法の下で組織化されるということでもあります。共通した世界法というものが、各国の法律を超えた形で支配するということでもあります。

ですから、私、この会議に対しまして称賛の意を表したいと思っておりますし、その価値を十分に認識するものであります。そして、全世界の全都市がこの会議にぜひ参加してほしいと思っております。いかなる小さい都市でありましても、我々は世界は一つであると、そして、一つの世界に属しているということでもあります。我々全員が世界市民であります。

今回の御努力に対しまして敬意を表し、かつ、感謝を申し上げたいと思っております。

ありがとうございました。

コーディネーター（永井道雄）

どうぞ。

ボローニャ(イタリア)市代表

ダンテ・クリッツィ

私、ダンテ・クリッツィと申します。イタリア姉妹都市の会長でございます。

先ほどの御報告を伺いましたけれども、我々は協力して何をしなければならぬのでしょうか。我々としては、人間の条件からすべての形の暴力を排除しなければいけないということでもあります。理性に基づいた平和の文化を築かなければなりません。そのためには、我々市長、そして行政担当者としては平和教育に対して力を注がなければいけません。平和というのは、文化的なファッションということだけでなく、はく奪で

きない不可分の権利ということでもあります。我々人類の歴史を人間的なものにしなければなりません。

先ほどアインシュタインのお話ができましたけれども、我々としては、平和の文化のために必要な条件整備をしなければならないということでもあります。人類に対しまして、人類としての権利を十分保障されるような機会を与えられなければいけないということです。

#### コーディネーター（永井道雄）

ポローニャの方でいらっしゃるんですね。

ほかにもこちら側で挙手をしていらっしゃる方があったようですが。

どうぞ。

#### フルト(西ドイツ)市長 ウベ・リヒテンベルグ

私は一つ質問があるのですが、それは4人の発表者の方々についてのお話です。私の名はウベ・リヒテンベルグと申しまして、フルトというバイエルン州にあります西ドイツの都市の市長でございます。

私たちはこの会議におきまして、現在そして未来の問題とかかかわっているわけがございますけれども、今お聞きいたしました四つの報告は、皆過去のことについてのお話であります。1945年8月6日の出来事でございますが、その時の話を聞きまして、私は非常に次のような疑問を禁じざるを得なかったわけです。つまり、御発表なさった4人の方々の話を聞きまして考えましたのは、原爆の投下というものが、どうも自分自身の責任によって起きたものだ、というふうにお考えになっているのではないかとございまして。もう少し別の言い方をいたしますと、戦争は既に8月6日には終わっていたはずであって、もっとも、まだ日本は無条件降伏をしておりませんでしたけれども、事実上日本は当時戦争を継続する力はもうなかったはずであります。その意味では、戦争はもう終わっていたといえるのではないのでしょうか。もしもそうだとするならば、そのような原爆の投下というような形をもって戦争を終わらせるというのは、いかなる形でも正当化できないものではないか、と私は思います。

広島と長崎の2回の原爆の投下というものは、私の考えるところ、意図した、原爆を試験した、そういうケースではなかったかと思うわけです。実際には、こうした悲惨な形で戦争を終わらせることは必要ではなかったわけです。それにもかかわらず、こうした残忍な実験が行われたということは、我々は考えてみなくてはならないのではないのでしょうか。

#### コーディネーター（永井道雄）

皆さんにもいろいろ御意見があると思います。といいますのは、この休憩の後に、我々是我々の会からの社会に対するアピールを書くわけです。8月6日、9日、その大きな事件をどう考えるか、というようなことも自ら考えるべき事柄の1つです。

どうぞ、まだ時間がありますから、遠慮なく発言して下さい。

#### 藤沢市長 葉山 峻

藤沢の市長の葉山と申します。日本の非核宣言自治体の会長を務めさせていただいております。人口35万ほどの東京の近くの市長を18年務めております。4人の先生方のお話を聞いて、改めて広島・長崎の悲劇を繰り返してはならないという思いを新たにいたしました。

それについても思いますのは、この広島市、長崎市で作っていただきましたアブストラクト、抄録集というのがございまして、今その63ページ、64ページを読んでおたのでありますが、アメリカ、カリフォルニア州のアーバインの市長さんのラリー・アグランさんが次のようなことをおっしゃられております。それは、ゴルバチョフさんが核実験の停止を申し出たときに、アメリカはネバダで実験を繰り返していたと。そういう点から、アーバインの市長さんは「ブッシュ大統領とゴルバチョフ書記長が相対してほしい、そして、特にこの二人に広島・長崎の街を歩いて、この二つの都市を襲った恐怖が、2度と他の戦争で罪のない市民を犠牲にしないことを誓ってもらいたい。そして、今後、核兵器増強のために1ドルも1ルーブルも市民から奪わないことを約束してもらいたいと思います。」と、こういうふうに言っておられるわけです。

私は全く同感でありました。実は、私たち日本の非核自治体の市長は、昨日広島に集まりまして、先ほど出ました非核三原則の重視と、太平洋に非核地帯を作るということを決議として採択をいたしました。

この日本の非核自治体の数は、今1,400になろうとしております。世界では4,300を超える自治体がもう非核宣言をしているわけです。そして、第1回はマンチェスター、第2回がスペインのコルドバ、第3回がイタリアのペルージャ、そして第4回が今年2月、アメリカのオレゴン州のユージーンで開いたわけでありました。

私も代表団表として参加を、ペルージャと今年のオレゴンには行ってまいりました。その時に、前回のイタリアのペルージャの会議の際に、私は、ちょうどレイキャビク会談の前でしたので、米ソ両首脳に広島で

この米ソ首脳会談を開いて核兵器廃絶を両首脳に誓ってもらいたい、それをこの決議として送ってもらいたいということを提案いたしました。満場一致で、その翌日から開かれたレイキャビク会談に送られました。残念ながら、その時は実現しなかったわけでありすけれども、その時の最大の願いであった陸のINFは、その次の米ソ両首脳の会談で全廃されることになって、私たち非核自治体の主張は、ヨーロッパ市民、そして世界の市民と連帯して、それが世論となって実現したんだと大変希望を持ったわけです。

私は、そういう点から結論を申しますと、パルメ前スウェーデン首相も「広島に全世界の指導者たちも訪れるべきである。」とおっしゃられていましたけれども、4人の先生方のお話を伺って、何らかの形で、この米ソ両首脳、そして、世界の核大国の指導者は広島・長崎へどうぞいらしていただいて、その思いを新たに、核兵器廃絶に向かってやってほしいというようなことを何らかの表現で表わしていただければ幸いに思います。

以上であります。

コーディネーター（永井道雄）

ありがとうございました。

その次の方をお願いするのですが、その前に、先ほど発言なさったドイツの方は、お名前と都市の名前を言うていただけないように思うんですが――。

言われましたか。それではいいです。

手を挙げておられる、黄色いシャツを着ておられる方。

はい、どうぞ。

（ジョン・ティーブリアムズ）

ありがとうございます。

私はジョン・ティーブリアムズと申します。カリフォルニアのロサンジェルスからまいりました。

私は、まずロサンジェルス名誉市長、ブラッドレーからのごあいさつを申し上げたいと思います。

広島に原爆が投下されました。これはもう40年以上の前のことになるわけですがけれども、私はその当時海軍におりました。潜水艦に乗っておりまして、日本の沖合の方におりました。原爆が投下された朝、船長が船員に何が起きたか説明いたしました。そして、その潜水艦の乗員、私も含めまして皆ワーという声を発したわけです、拍手をした――。

そして、私はまた日本に来る機会を、その後得ることができました。私は15回日本に来ております。そして、この記念式典に参加させていただいております。

私は、その時に拍手したことを非常に後悔しており、そして、その後悔の意味で来ているわけです。

私たちは、やはり皆記念式典に参加をし、そして、実際に何が起きたのかを本当に理解するためにここに来るべきではないか、と思うわけです。そういったことの結果として、私はできるだけ機会をみて来日するように努めてまいりました。どこでも、そしてどのような形であれ、できるだけ私の力の限りを尽くして努力を続け、あのようなことが日本であれ、どこであれ、決して起こらないようにしていかなければならない、と決意を新たにしております。

ありがとうございました。

コーディネーター（永井道雄）

まだ発言を希望される方は非常に多いのですが、もう一つの約束は休憩をするということでもありますから、ここで休憩をいたします。そして、約20分休憩をして、35分に集まっていただきますが、その部屋は全部の方がおいでになるのではなくて、今から名前を読む方に出させていただきます。というのは、その方たち少数でアピールを書くわけです。アピールを書くので、あまり大勢いるとなかなかドラフトは書けません。

ベルリン市長、エアハルト・クラック、コモ市長、アンジェロ・メダ、ハノーバー市長、ヘルベルト・シュマルスティーク、サクラメント市長、アン・ルーディン、ボルゴグラード市長、ユーリー・スタロバトフ。

この今、名前を読み上げた方は起草委員でありますから、ドラフトを書く、ドラフト・ライティング・コミティー、したがって、35分にはお集まりを願いたいわけです。部屋の名前は「ラン」です。このフロアに「ラン」という部屋がありますから。お分かりですか。そこに今名前を上げた方はお集まりを願いたい。35分にお集まりを願いたい。

どうも長い間ありがとうございました。

ここで休憩に入ります。

## 被爆者との懇談出席者リスト

8月5日(午後4時25分～5時40分)

広島国際会議場 ダリア

カブール(アフガニスタン)

モハマド・ハキム, 市長

キャンベルタウン(オーストラリア)

ジム・A.クレマー, 市長

カンタベリー(オーストラリア)

ジョン・F.ゴリー, 市長

ウォーロンゴング(オーストラリア)

ウィリアム・モーブレイ, 助役

〔阿部 静子〕

〔寺前 妙子〕

ハイファ(イスラエル)

アリー・シャロモ・グレル, 市長

モンロビア(リベリア)

L.クウィア・ジョンソン, 市長

アスタ・ハイグ・サノー

WCM・姉妹都市担当

〔渡辺 美代子〕

ソフィア(ブルガリア)

ブラメン・D.ネシエフ

市議会文化科学教育委員会委員長

ボイコ・N.ゲオロギエフ, 市議会報道部専門官

ブラメン・N.マテエフ, 市議会国際部主席専門官

バークレー(アメリカ)

ロニー・ハンコック, 市長

トーマス・H.ベイツ, 加州下院議員

モデル・シレク, 市議会議員

〔煙石 二三枝〕

ハーグ(オランダ)

アド・ハーベルマンス, 市長

クーズ・ファン・ボイゼコム, 行政長官

ミデルブルグ(オランダ)

クリス・G.J.ルッテン, 市長

〔加藤 礼子〕

ロッテルダム(オランダ)

ヘンク・ファン・デア・ポリス, 前助役

ヤン・M.J.D.ヤンセン, 市議会議員

〔久保浦 寛人〕

バーナビー(カナダ)

デレク・R.コリガン, 市議会議員

モントリオール(カナダ)

ジョン・ガーディナー, 助役

ジャン・マルシャン, 国際課長

トロント(カナダ)

ケイ・ガードナー, 助役

レイモンド・ガードナー, 随行者

〔小松 キクエ〕

重慶(中華人民共和国)

魏司鋒, 人民政府外事弁公室主任

屈慶璋, 通訳

バシグ(フィリピン)

ロレンソ・A.レジェス, 市民保安対策部長

〔桑原 千代子〕

モンテニルパ(フィリピン)

イグナツィオ・R.ブーン, 市長

アルフレドJr.M.ブーン, 市長補佐

バレンスエラ(フィリピン)

サンティアゴ・A.デ・グスマン, 市長

アドリアン・E.コンセプション, 随行者

〔宮田 幸子〕

デリー(インド)

シリ・マヒンダー・シン・サーティ, 市長

ディープ・チャンド・バンドゥー, 与党党首

オムカー, 市長秘書

〔笹村 弘志〕

テヘラン(イラン)

ビード・モルテザ・タバ・タビー, 市長

モーベン・エブラヒミ, 調査企画協会会長

アリ=レザ・グアファール, 広報国際局局長

クネイトラ(シリア)

アブドゥール・モネイム・アサド・アル・ハムイ

市長

〔下江 武介〕

## コベントリー (イギリス)

デイヴィッド・J.ケアンズ, 市長  
 ジョン・M.ペイン, 行政長官補佐

## グラスゴー (イギリス)

スーザン・ベアード, 市長  
 ジョージ・ベアード, 随行者  
 ジョージ・マッカロー, 市議会事務局長  
 [伊藤 サカエ]

## ブライトン (イギリス)

ブライアン・R.フィッチ, 市長

## シェフィールド (イギリス)

トニー・ダムス, 市長

## ユージーン (アメリカ)

ショーン・ボールズ, 市議会議員  
 バーバラ・ケラー, 国際非核自治体会議理事

## アーバイン (アメリカ)

ラリー・A.アグラン, 市長  
 ジェブ・ブラグマン, 環境政策部長  
 [池田 精子]

## ビルツ (ルクセンブルク)

アンドレ・ビベール, 市長

## ヒューストン (アメリカ)

バージニア・E.マンパー

## ランカスター (アメリカ)

ジョン・C.リヨンズ, 市議会議員  
 マーリーン・S.アーノルド, 随行者

## ミネアポリス (アメリカ)

ナンシー・リー・アンダーソン  
 ミネアポリス公園連盟理事  
 マーン・ヤングデイル  
 平和と自由のための国際女性同盟代表  
 マージョリー・ワンダー  
 広島長崎記念委員会代表  
 [宮川 裕行]

## アルバニー (アメリカ)

ジョセフィーヌ・デイビス  
 アルバニー・ウーマン・オブ・ザ・イヤー

## バーリントン (アメリカ)

エスター・D.ロスブラム  
 女性問題委員会メンバー

## サクラメント (アメリカ)

アン・ルーディン, 市長  
 グラントランド・ジョンソン, 郡行政長官

## カルーカン (フィリピン)

マカリオ・A.アシステイオ Jr., 市長  
 アンヘル・H.キソン, 基地司令官

[山瀬 明]

## オースティン (アメリカ)

ジョージ・ハンフリー, 市議会議員

## クリーブランド (アメリカ)

ユキヒコ・ノセ  
 クリーブランド医師財団人工臓器部長

## コーバスクリスティ (アメリカ)

ティト・ゲレーロ  
 コーバスクリスティ州立大学学生部長

## ジャージー・シティ (アメリカ)

ジェイミー・ヴァズケス, 市議会議員

## セントポール (アメリカ)

ロバート・C.ロング, 市議会議員  
 ドン・ヨロフスキー, 随行者

[奥元 厚]

## アントワープ (ベルギー)

ゲオルゲス・ド・コルテ, 助役

## オバーニュ (フランス)

ジャン・タルデイト, 市長

## カーン (フランス)

モーリス・ミゲール, 助役

## マラコフ (フランス)

ミシエル・シボ, 助役

## ブレンヌ・シュール・メール (フランス)

ピエール・ギレ, 芸術祭責任者

オーフレット

ラッセル

[山本 雅人]

## ヴェルダン (フランス)

ジャック・バラ＝デュボン

国際ピースメッセンジャー都市会議議長

ジャクリーヌ・アントワヌ, 産業開発部長

キャサリン・ボアレット, 随行者

## ジュネーブ (スイス)

アンドレ・ヘディガー, 市議会副議長

[坪井 直]

## アマドーラ (ポルトガル)

オルランド・ゲレイロ・アルメイダ, 市長  
 アントニオ・サルディダ, 市議会議員

## ポルト (ポルトガル)

フェルナンド・ソアレス・カブラル・モンテイロ  
市長

ラファエル・カンボス・ペレイラ, 市議会議員

アントニオ・シルバ・モレイラ, 市議会議員

フスティノ・ダ・クルス・ドス・サントス

市議会議員

ルイス・ホルヘ・デ・オリベイラ・ディアス

市議会議員

[中谷 玉江]

## ピラ エル サルバドール (ペルー)

ミゲル・G.アズクータ, 市長

ジュアン・カルロス・G.グルスキー, 市長顧問

[上田 正紀]

## ベルリン (ドイツ民主共和国)

エアハルト・クラック, 市長

ディーター・グツシェバウフ, 市長秘書

## ドレスデン (ドイツ民主共和国)

ホルスト・バーシュ, 助役

ヘルムート・シフナー, 東独国際友好連盟理事

## マグデブルグ (ドイツ民主共和国)

ヴェルナー・ヘルツィグ, 市長

フランク・バイヤー, ドイツ大使館三等書記官

## アーヘン(郡) (ドイツ連邦共和国)

ハンス＝ギュンター・ベームック, 郡長

## アルツァイ (ドイツ連邦共和国)

アクセル・ギュンター・ゲルドゼッツァー, 助役

[原 広司]

## ベルリン (ドイツ連邦共和国)

ノルベルト・マイスナー, 州大蔵大臣

ローター・ストック, 大臣補佐官

ヨルク・ツィマーマン, ドイツ総領事館副領事

## フランクフルト アム マイン (ドイツ連邦共和国)

アンドレアス・フォン・シェーラー, 助役

## フュルト (ドイツ連邦共和国)

ウベ・リヒテンベルグ, 市長

## ゲッチンゲン (ドイツ連邦共和国)

アルトゥール・レヴィ, 市長

## ノインキルヘンブルイン (ドイツ連邦共和国)

オスカー・ミカエル・ベーム, 市長

## チュービンゲン (ドイツ連邦共和国)

ユーゲン・シュミット, 市長

[森本 範雄]

## ハノーバー (ドイツ連邦共和国)

ヘルベルト・シュマルスティーク, 市長

ウベ・ラインハルト, 社会民主党議長

ホルガー・ヴィッティッヒ

ハノーバー市観光局日本代表

## レムゴー (ドイツ連邦共和国)

ハンス・ポール, 助役

ヴェルナー・ゲールケ, 市議会議員

ブリジット・シャウアー, 書記官補

[吉野 豊子]

## アッシジ (イタリア)

エマニュエル・ピアッティ, 助役

マリアーノ・ブルゴーニュ, 市議会議員

## ラクイラ (イタリア)

エンツォー・ロンバルディ, 市長

カルロ・イアニーニ, 市議会議員

エリコ・チェントファンティ, 広報担当顧問

[梁 在植]

## ボローニャ (イタリア)

ダンテ・クリッツィ

## カンペジネ (イタリア)

イメリオ・カントーニ, 助役

## コモ (イタリア)

アンジェロ・メダ, 市長

ジアンステファノ・ブッツィ, 市議会議員

アドリアーノ・サンピエトロ

## サレルノ (イタリア)

ダイセペ・ベルート

エアベルト・マンツォー

アンファンソ・ペコラーロ

[李 実根]

## コルシコ (イタリア)

ジョルジョ・ベルベルシ, 市長

ジョセフ・スパータ, 市議会議員

ミケーレ・インセラート, 市議会議員

## パルマ (イタリア)

エルビオ・ウバルディ, 助役

## テラモ (イタリア)

リノ・シルビノ

アントニオ・ガッティ

[松重 美人]

## フォルリ (イタリア)

バンダ・バルナッチ, 市議会議員



## ピアレッジオ (イタリア)

ウォルター・ゲセーリ

ジアンカルロ・ジアネチーミ, 市議会議員

ビンセンツォ・スタージ, 市議会議員

〔石田 明〕

## キエフ (ソビエト)

ガリーナ・メンゼレス, 副市長

## レニングラード (ソビエト)

アレキサンダー・Y.アフデエフ, 副市長

## ビリニウス (ソビエト)

ヴィクトラス・リンケピチェス

市執行委員会書記

## ボルゴグラード (ソビエト)

ユーリー・スタロバトフ, 市長

アレクセイ・シェフチェンコ, 工場長

ピアチェスラフ・シュストフ, 国際部長

〔川本 千秋〕

## ホーチミン (ベトナム)

グエン・ヴィン・ゲップ, 市長

グエン・ハオ, 市長顧問

ダオ・ホアン・リエン, 通訳

〔定信 多紀子〕

## 品川区 (東京都)

高橋 久二, 区長

黒川 昌廣, 総務課長

## 大田区 (東京都)

西野 善雄, 区長

雨宮 謙二, 総務課国際交流主査

## 中野区 (東京都)

神山 好市, 区長

中村 武, 企画部長

## 板橋区 (東京都)

石塚 輝雄, 助役

藪崎 義輝, 総務部長

〔山岡 ミチコ〕

## 葛飾区 (東京都)

北野 俊策, 建築環境部長

宮地 是守, 宅地指導係長

## 港区 (東京都)

山田 敬治, 区長

中村 宏, 企画部長

## 日野市 (東京都)

森田 喜美男, 市長

清水 護, 総務部秘書課主査

〔山根 力男〕

## 横浜市 (神奈川県)

広瀬 良一, 総務局長

田村 敏忠, 国際室長

## 川崎市 (神奈川県)

上田 博久, 市民部長

安岡 幹雄, 主査

## 藤沢市 (神奈川県)

葉山 峻, 市長

石沢 尚, 秘書課長

杉測 武, 秘書課主査

〔中本 剛〕

## 甲府市 (山梨県)

神宮寺 英雄, 助役

井上 袈裟一

## 名古屋市 (愛知県)

都築 英男, 総務局企画部主幹

## 京都市 (京都府)

平野 之夫, 総務局総務部長

多田 吉宏, 企画調整室調整課主事

## 大阪府 (大阪府)

真田 和男, 国際交流課主幹

守村 茂男, 国際交流課主査  
大阪市 (大阪府)  
吉田 博, 総務局行政部長  
杉尾 英司, 総務局行政部総務課主査  
〔郭 福順〕

北中城村 (沖縄県)  
安里 幸治, 村長  
〔西名 洋子〕

〔 〕内は被爆者の氏名

堺市 (大阪府)  
下尾 信哲, 人権啓発局企画調整課長

豊中市 (大阪府)  
下村 輝雄, 市長  
三野 胖, 都市政策推進部長

枚方市 (大阪府)  
橋本 巧, 助役  
山下 寿士, 秘書課

神戸市 (兵庫県)  
中田 善司, 企画調整局長  
小川 順一, 総務局庶務課庶務係長

西宮市 (兵庫県)  
中村 哲也, 収入役  
〔辛 福守〕

三次市 (広島県)  
岩崎 健壯, 助役

府中町 (広島県)  
林原 亘, 町長

大野町 (広島県)  
沼津 久, 町長

高松市 (香川県)  
矢野 輝男, 助役  
石川 浩, 秘書課主事

松山市 (愛媛県)  
牧野 清文, 助役  
西山 秀樹, 秘書課主任  
〔松原 美代子〕

高知市 (高知県)  
横山 龍雄, 市長  
岩本 富士雄, 秘書広報課主査

大分市 (大分県)  
長谷目 源太, 助役  
渡辺 博文, 秘書課主任  
〔松田 雪枝〕

沖縄市 (沖縄県)  
桑江 朝幸, 市長  
池原 清, 秘書課長

～核軍縮と地球的平和達成に都市は何をなすべきか～

## 都市報告

分科会Ⅰ 8月6日（午前9時30分～11時30分）

広島国際会議場 ヒマワリ

司会 広島市市長室次長 久保田 浩 二

コーディネーター 国際文化会館理事長 永井道雄  
国連大学学長特別顧問

### 1. 各都市の報告

- (1) ハノーバー(ドイツ連邦共和国)市長  
ヘルベルト・シュマルステイーク ..... 65
- (2) サクラメント(アメリカ)市長  
アン・ルーディン ..... 66
- (3) ボルゴグラード(ソ連)市長  
ユーリー・スタロバトフ ..... 67
- (4) アントワープ(ベルギー)市助役  
ゲオルゲス・ド・コルテ ..... 67
- (5) ベルリン(ドイツ連邦共和国)州大蔵大臣  
ノルベルト・マイスナー ..... 68
- (6) クリーブランド(アメリカ)医師財団人工臓器部長  
ユキヒコ・ノセ ..... 69
- (7) 藤沢市長  
葉山 峻 ..... 70
- (8) フュルト(ドイツ連邦共和国)市長  
ウベ・リヒテンベルグ ..... 71
- (9) キエフ(ソ連)副市長  
ガリーナ・メンゼレス ..... 72
- (10) ハーグ(オランダ)市長  
アド・ハーベルマンス ..... 73
- (11) 東京都大田区長  
西野善雄 ..... 74
- (12) クネイトラ(シリア)市長  
アブドゥール・モネイム・アサド・アル・ハムイ ..... 75

(13) ロッテルダム(オランダ)市前助役 ヘンク・ファン・デア・ポルス .....	75
(14) テヘラン(イラン)市長 ビード・モルテザ・タバ・タビー .....	76
(15) ウォーロンゴンク(オーストラリア)市助役 ウィリアム・モーブレイ .....	77
2. 都市報告に対する質疑応答 .....	77

## 司会（久保田広島市市長室次長）

おはようございます。大変お待たせしました。ただ今より「核軍縮と地球的平和達成に都市は何をなすべきか」これをテーマに全体会議Ⅱを分科会形式で始めたいと存じます。

申し遅れましたが、私は世界平和連帯都市市長会議の事務局長を務めております広島市市長室次長の久保田でございます。よろしく願いいたします。

それではコーディネーターは、昨日に引き続きまして永井先生をお願いを致しております。それでは永井先生どうぞよろしく願いいたします。

## コーディネーター（永井道雄）

みなさんおはようございます。昨日と同じように私はコーディネーターを致します。最初にこのイヤホンの使い方、それから言語の説明をして下さい。

## 事務局

では皆様にもう一度お知らせいたします。この会議は英語、ドイツ語、ロシア語、日本語の同時通訳により行います。

チャンネル1は日本語、チャンネル2は英語、チャンネル3はドイツ語、チャンネル4はロシア語でございます。以上お知らせを終わります。

## コーディネーター（永井道雄）

みなさんよく聞こえますか。

それでは会を始めたいと思いますが、今日は昨日より数の多い都市の代表者が発言することになります。そこで非常に多くの都市の方がいらっしゃいますが、その方たちとの話し合いをし、そしてまた計画を立て、今朝は15の都市の各都市の方に決まった席に座っていただきたいのですが、まず、ハノーバー市のシュマルスティーク市長の席、サクラメント市のルーディン市長はあの席で結構です。ボルゴグラード市のスタロバトフ、アントワープのド・コルテ、ベルリンのマイスナー州大蔵大臣、それからアメリカのクリーブランド市のノセさん、日本の藤沢の葉山市長、次にフルト市のリヒテンベルグ、次にソ連のキエフ市のメンゼレス副市長、次にハーグ市のハーベルマンス市長、それから大田区の西野区長、クネイトラ市のアサド・アル・ハムイ、オランダのロッテルダム市のヘンク・ファン・デア・ポルス前助役、テヘラン市のビード・モルテザ・タバ・タビー、ウォーロンゴング市のモーブレイ、以上15人の方々みんなそこに座っておられますから、そちらからよく見えると思います。そしてこの15人の方々は1人が5分あるいは5分より少し短かく

話していただきます。

それからみなさんの発表が終わってからディスカッションがあります。つまり質問をしたり意見を述べたりすることができます。それだけのことを理解していただけましたから、ではさっそく始めます。それでは、ハノーバー、シュマルスティーク市長、発表を始めて下さい。

## ハノーバー(ドイツ連邦共和国)市長

ヘルベルト・シュマルスティーク

議長、御参会の皆様、平和政策といいますのは、自治体にとりまして非常に重要な事でございます。

ドイツでよく議論されていることですが、果たして個々の自治体が、そんな平和政策ができるのかということが議論されております。確かにドイツには、州がいろいろありまして、その州の政府によりましてはいろんな見解が違います。

州政府によっては、防衛問題、外交問題、こういうことは、ボンの中央政府がやることであって、地方は関係してはならないという見解の州政府もございます。しかし、私どもドイツの町では違った意見を持っております。個々の町の議会ではやはり平和問題そして防衛問題は、実際には個々の自治体の問題でもあるんだという見解が強く支持されております。

というのは、広島、長崎、これは都市であります。そしてほかの町々も戦争を経験しております。つまり都市で人々が単に働いたり、そして余暇を過ごしたりするだけではなくて、実際に個々の都市で戦争が起きたということも経験しております。

したがって都市は、平和問題にエンゲージする当然の権利があると思います。

私どもは、広島と姉妹都市の関係を結んでおります。ハノーバーはドイツのニーダーザクセン州の州都でありますけれども、そして様々なレベルで広島と、とにかく関係を持っております。

そして私ども個々の町からイニシアチブが出て、平和問題に取り組むように努力しております。特に8月6日には私どもハノーバーでも式を催しております。

それだけでなく、私どもの町の学校でも平和教育がなされるように努力しております。そして、私どもの町では、住民運動として様々な平和運動が行われております。特にこの2年前から非常に強い住民運動が行われております。

大きな催しが様々に行われまして、そうした市民運動の連合団体もできまして執行委員会ができております。私ども広島との姉妹都市関係では特に重要な感情を持っておりますのは、ドイツの様々な町がこの世界

平和連帯都市市長会議に加わるように努力しております。そして、今、93のドイツ連邦共和国の都市がこの世界平和連帯都市市長会議に参加しております。

このことを私どもは、大変、誇らしく思っております。

もっとこれを拡大したいと思っております。ただ拡大するためには、この平和問題そして安全保障の問題は実際には個々の都市の問題でもあるという認識が広がらなければいけないわけでありまして。そして最終的な目標としては世界中のすべての都市がこの世界平和連帯都市市長会議に参加することでございます。これは私どもハノーバーとしてできるだけそのために努力を致したい所存でございます。そのために大いに闘うつもりでもあります。そして市民の意識をできるだけ高めたいと思います。

そして両超大国のまだまだ今なお存在している大変な核兵器のポテンシャル、これは確かにゴルバチョフの努力によってだいぶ減りつつありますけれども、しかしまだまだ存在しているこの大きなポテンシャルこれを撤廃するためにできるだけ我々は闘うつもりであります。そして単に核兵器だけでなく、一般に軍備そのものが撤廃されることが私どもの理想でございます。

これは私どもハノーバーの市民に毎日語っていることでございます。

ありがとうございました。

コーディネーター（永井道雄）

それでは、ルーディン市長。

ルーディン市長はカリフォルニア州のサクラメントの市長です。

サクラメント(アメリカ)市長

アン・ルーディン

おはようございます。

代表者そして出席者の皆様、私はサクラメントが都市として行っております地球平和のための事業についていくつか述べたいと思います。

ここサクラメントは州都でありまして、軍事基地が閉鎖されるということになっております。

ほかの多くの米国の都市と同じであります。

この動機づけというのはペンタゴン及び国防省がコスト削減の措置として、そして財政赤字削減のために考えているものであります。これは両超大国間の緊張緩和及び最近の軍縮へのイニシアチブによって可能になったものであります。

当初はこの基地が閉鎖されると失業が増えるので

はないかということで、憂慮があったわけですが、実際的には経済的なメリットが出てくるであろうというふうに好意をもって受け取られております。そしてこの土地と申しますのは民間利用に転用されるということでありまして、失業よりもむしろ雇用の喪失につながるということでありまして。

二番目の活動と申しますのは、姉妹都市であります。姉妹都市関係にありますのは、中国の済南市、残念ながら今回は出席していらっしゃいません。

スイスのリーステッド、日本の松山、ニュージーランドのハミルトン、そしてソ連のキチネフと姉妹都市関係を結んでおります。更に中米の都市と双子都市関係を結ぶというような動きもあります。

経済的そして技術的な援助というものを我々の市民がその民間の形で政府の関与がなしに行っていることでありまして、中米の独裁政権下の都市に対し援助をするというものであります。連邦政府と申して我々の都市の市民の間には、この件に関しまして意見の相違があるかもしれません。

それからまた、国家安全保障の問題に関しましても、現在では見直しがなされております。連邦政府と一般市民の間では考え方が違うかもしれませんが18のコミュニティーのグループが協力をして、そしてある国の力を計る考え方を変えなければいけないということを考えております。

国の威力というものは破壊力によって計るものではありません。創造力によって計らなければいけないということでもあります。どれだけの善意を示すことができるかということでもあります。それからまた、地球を破壊する力ではなくて地球を改善する力ということによって計らなければなりませんし、人々を搾取、抑圧する力ということではなく、人々に対して権限を与え人々を尊重するという形で計らなければならないわけでありまして。

我々、全世界の市長といたしましてはこういった真実を一般の市民に対して広く伝えていかなければなりません。

すべての被爆者の方々のために、そして戦争の犠牲者のために我々全世界の市長というのは、人間性をもって平和にそして平和のためにこのようなことをしなくてはなりません。

コーディネーター（永井道雄）

それでは、ボルゴグラードのスタロバトフ市長。

ボルゴグラード(ソ連)市長

ユーリー・スタロバトフ

お集まりの皆様方、まず最初に私の意見を述べさせていただきますと思います。今日、朝、式典に参加させていただきましたけれども、その経験を通じてもう一度自分たちの生命について考え直す機会ができたと思います。広島であれ、ボルゴグラードであれ、市民の運命は同じであると思います。どのような爆弾が使われたとしても破壊されることには変わりはありません。

私たちは資料館に参りましたが、原爆投下の4か月以内に14万人の人が亡くなったということがあります。

1942年8月、ボルゴグラードそれからストレンジラードという所で10万人以上の人を二日間の間に殺されました。そして戦争終結時には、その町には3万人しか残らなかったのです。

今、私たちの町には100万人の人が住んでおります。広島それからボルゴグラード、またほかの市の皆様方も同じであると思いますけれども、お互いに相手をアジテートする必要はないと思います。

戦争がいいのか、悪いのかも、これは当たり前のことであると思います。

私たちは、これから更に努力を続けて、平和が訪れるようにしなければなりません。私、昨日の会議にも参加しましたが、私の町に住んでいる人たちが、市に住んでいる人たちはできる限りのことを平和のためにしています。多くの平和活動家の人たちが私の市にはおり、そして新しい世代、平和を愛する世代を育てていこうとしています。これが私たちの非常に大きな課題であります。戦争の恐ろしさを知らない子供たちが、例えば母乳を飲んで育てていくわけでありませぬけれども、そういった人たちが平和に暮らせる世の中を作っていくことが私たちの役割であると思います。

ボルゴグラードでは、S S20ロケットを壊しました。ボルゴグラードでは、このS S20を初めて廃棄した都市として大変、誇りに思っております。こういったものを今度は、平和的に利用していかねばなりません。

ボルゴグラード市には、自由な労働者がたくさんおります。

今までは軍事的な目的に用いられた人たちが今度は平和の目的に使っていかねばならない。今までロケット生産工場であったものが、例えば酪農製品、例えばロケットのかわりにソーセージを作る工場に変わっております。

ですからこういったことを私たちは、誇りに思っ

ています。

そして、ほかの都市にも同じようなことをしていただきたいと思います。

昨日、広島アピールのディスカッションを私たちは、ちょっといたしました。

そして、そのときに核実験はどここの国でも禁止するべきであるという話をしました。核兵器のある国は、もちろん核実験を停止しなければなりません。核兵器を持っている国、それからまた核兵器を持ち得るような国も実験を停止しなければなりません。

したがって、これから先、将来のこの地球という惑星からまったく核実験をなくしていかねばならないと私は思っております。

この重要性については皆様、同意していただけると思っています。私、5分というふうには思っておりませんでしたので、ちょっと短くしなければなりません、皆様もうデタントとか、そういうような話しばかりを聞くのは飽きてきたのではないのでしょうか。それからまた、もう兵器がたくさんあるような町に住むのにはうんざりしているのではないのでしょうか。

ですから、その代わりに新しい家、新しい公園、新しい学校、そして新しい子供たちの環境をつくっていかうではありませんか。そういった希望を胸に抱きながら私のスピーチを終わらせていただきます。

コーディネーター(永井道雄)

どうもありがとうございます。アントワープのコレテ助役。

アントワープ(ベルギー)市助役

ゲオルゲス・ド・コレテ

皆様、おはようございます。

私、ゲオルゲス・ド・コレテ、アントワープ市の助役であります。ベルギーの最大の都市でありまして、50万人ほどの人口があります。ベルギーといえますのは、イギリス、フランス、西独には含まれている国でありまして、そしてアントワープは貿易の都市でもあります。

一時は、中世の時代におきましては、戦場と化していたところでもあります。アントワープの市民といえますのは、過去に関しましては十分、尊重をしておりませぬけれども将来に関しましても多くの希望をもっております。

そして1993年に文化的なプロジェクトが行われるということでもあります。1962年に平和センターが設立されまして、平和に関するセミナー等が開催されました。私、平和のカリキュラム、平和教育について述べたい

と思います。この平和教育ですけれども、気が付く前にそれは行わなければいけないということです。

実際、すべての良い教育というのは、平和教育であると、そして教師は平和教育に毎日直面しているということがいえると思います。つまり、学校の校庭におきましてもケンカをしている生徒たちもいますし、教室においても偏見などが見られるわけでありまして。協力することを学ぶというのが重要であります。そして平和教育のためにはより直接的な、国際的なアプローチが望ましいということがいえます。毎日、様々な状況を認識して、そして徐々に、より広い世界的な思考を持たなければいけない。より広い世界観を持つということでありまして。その目標というのは、普遍的な教育を提供するということでもあります。

このためには、いくつかのテーマ、あるいはプロジェクトというものを選択しなければなりませんし、道徳的な意味合いを持った教育も必要であります。

平和教育のためには、知識と態度というものが必要であります。

一つの態度を確立するためには知識とそして認識を持つということが前提条件となるわけでありまして。このためには産物よりもプロセスの方が重要であるということが言えると思います。

そして社交性、社会性というものも重要であります。様々なテーマに関係する平和教育でありますけれども、このためには生徒自身の貢献というものが必要であります。

自由に意見を表現させる。そしてほかの人の見解にも耳を傾けるということが重要なわけでありまして。平和教育というのは、恒久的にそして本質的に教育の教科の一部を成さなければなりません。この平和教育というのは数時間でできることではありません。

平和教育というのは教育に関するすべての側面に対するアピールということがいえるわけです。学校の環境、雰囲気というものも関係がありますし、それから生徒と教師との間の関係もかかわってくるわけでありまして。

そして、児童、学生のメンタリティ、行動というものに対しても多くの影響を及ぼし、そして人格形成にもつながるわけでありまして。平和教育ということになりますと、一部議論を醸し出すような教科についても教えなければならないことになるわけです。平和と戦争の問題というものに関しましては慎重かつ客観的に教えなければいけませんし、討議をしなければならないということでもあります。

我々は、児童、生徒とともにその適切な教育水準において指導しなければいけないということでもあります。

これはチャレンジであり、そして義務である。つまり子供に対して徹底した平和教育をするということとはチャレンジでもあり義務でもあるということでもあります。

これにはかなり時間がかかるとは思いますけれども、親そして教師、生徒すべての献身的な努力によりましてこういった平和教育も実現されると思います。ありがとうございました。

コーディネーター（永井道雄）

それでは次にベルリンのマイスナーさん。

ベルリン(ドイツ連邦共和国)州大蔵大臣  
ノルベルト・マイスナー

御参会の皆様、これから1か月もたちますと1939年9月1日の50回目がやってきます。この1939年9月1日というのは人類の歴史にとって非常に重要な日であります。この日に第二次世界大戦が始まりました。そしてこの第二次世界大戦は、広島と長崎への原爆投下によって終わったわけでありまして。ベルリンがこの第二次世界大戦の始まりの町でありました。また、ベルリンでは、実は核分裂の実験が初めて行われた町であります。

この核分裂の実験の結果、原爆というものが可能となったわけでありまして。そしてこの原爆の実際の開発はアメリカで行われ、ドイツそしてベルリンに投下するために開発されたわけでありまして。

実際にはベルリンには投下されませんでしたけれども、しかしその点でベルリン、それから広島、長崎は歴史的に根拠のある運命共同体であります。このことを私どもは、この世界平和連帯都市市長会議に入ることによって、この運命共同体であることを確認したいと思っております。

私どもは各都市の間の国際的な連帯の網の目をつくりたいと思っております。

特に第二次世界大戦の被害を受けた都市の国際的なネットワークをつくりたいと思っております。そして、様々な社会政治グループの間のコンタクトを深めることによって、この平和の価値を高めたいと思っております。私どもは確かに軍縮だけで平和が訪れるとは思っておりません。しかし軍縮がやはり平和の絶対の前提であることも確かであります。しかもこの軍縮の問題は軍縮の専門家や外交官だけにまかせていいような問題ではございません。最終的にはすべての核兵器を廃絶することを目指した核軍縮というものは、それが可能になるのは、実際に人々がそれを要求しなければなりません。

子供たち、女性の人々そして新しい価値をつくろう



とするすべての人々がこれを要求しなければなりません。

ベルリンでは12万人以上の人々がこの核兵器廃絶の署名をしてくれました。核兵器というのはテロの武器であります。そしてテロの武器が向けられているのは各都市であります。したがって都市から平和運動が起きなければなりません。

ベルリンという町は、その歴史から、また地理的な理由から、そして現在分裂しているという理由からこの東西がコーポレーションすることに大きな関心をもっております。

したがって私どもは、この広島、長崎の市長がイニシアチブを執ってくださいました世界平和連帯都市市長会議に入ることによりまして、私どもは、東ベルリンつまりベルリンのもう半分との共通性をつくったわけであります。つまり東西ベルリンともこの市長会議のメンバーであります。

そのことによりまして、私どもは、国境を超えた対話とそして経験の交流をすることができるようになったわけであります。

しかも多くの人々の出会いが可能になりました。私ども、広島と長崎の市民にそして世界中の市民に私どもが訴えかけたいことは、対話とそして国境を超えたコーポレーションによって平和な未来を築こうではないかという言葉でございます。

その意味でこの会議が御成功をすることを願っております。ありがとうございました。

コーディネーター（永井道雄）

クリーブランドのノセ・ユキヒコさん。

クリーブランド(アメリカ)医師財団人工臓器部長  
ユキヒコ・ノセ

皆様方、クリーブランド、ポイノビッチ市長の代理といたしまして、今回の世界平和連帯都市市長会議に御招待していただきましたことに対しまして心よりお礼を申し上げます。クリーブランド市でありますけれども主に重工業の都市でありまして、東海岸の方に位置しております。

残念ながら10年前に日本企業が進出いたしましたので、この都市の方向性を変える必要がありました。現在の主要産業といいますのは医療であります。ポイノビッチ市長の方から個人的な書簡を荒木市長にお渡しするようにというふうに言われました。

今回、市長自身が出席できないということで、おわびをいうということであります。私がお名代として、今回出席しております。私は心臓外科医でありまして

クリーブランド市の最大のメディカルセンターのクリーブランド医師財団の人工臓器部長を務めております。

約5年前ですけれども、クリーブランドの健康保険博物館が、特別な展示会を計画いたしました。

これは、原爆及びその人体への影響という名前の展示会でありました。この展示会を成功させるためにクリーブランドといたしましては、広島市からいくつかの物をお借りしたいと思ったわけであります。私が日本人であるということからこのクリーブランドの博物館の方から私に依頼がありました。

幸運なことに私の弟が、その当時、広島県庁の方に勤めておりましたので、弟の方から荒木市長にお願いいたしまして、クリーブランド市にいろいろ送っていただくようお願いいたしました。荒木市長は、初めて広島から外へ出ることになった非常に貴重な多くのものを送っていただきました。そして、昨日、平和記念資料館におきまして、このうちのいくつかの展示物を見ることができました。そして、広島市の御援助のお陰で、私どもクリーブランドの健康保健博物館の歴史上最も成功を収めた展示会を開くことができました。

クリーブランドで6か月、展示をしまして、その後、ほかの都市に巡回いたしました。

クリーブランドのほとんどの学童がこの展示を見まして、そして非常に大きな衝撃を受けました。

我々全員、昨日、資料館を訪問いたしまして見学をいたしまして、同じような衝撃を受けたと思うわけがあります。

例えば、壊れた時計であるとか、そういったような実物を見るということで百聞は一見にしかずといいますが、言葉は必要はないということでもあります。

この展示を見たすべての人がこのような原爆投下というような非人間的な行為は二度と許してはいけないということを強く感じたわけであります。

子供たちというのは、政治的な洗脳によって汚染はされておられませんので、乾いたスポンジのようにすべてのものを吸収するわけであります。

そして純粋な感情を持っております。

ですからこういったメッセージといいますがすべての世界に対しまして、最も効果的かつ力強いメッセージであると思います。

広島及び長崎市長に対しまして原爆の様々な遺物をクリーブランドの方にお送りいただくということをお願いしたいと思っております。どうもありがとうございました。

コーディネーター（永井道雄）

それでは、この次は日本の都市である藤沢市の葉山市長、お願いします。

藤沢市長 葉山 峻

藤沢の市長の葉山でございます。藤沢市は東京から南西へ50kmのところにあります。今は、夏で海水浴でにぎわっております。風光明媚な美しい都市、人口35万の都市であります。昨日、広島、長崎の被爆の実態を伺い、あるいは、諸先生のお話を伺いまして、改めて市民による平和の大切さを感じております。

私は、この場で三つのことを申し上げたいと思います。

一つは非核自治体の活動についてであります。マンチェスターで1980年に非核宣言をしてから、非常に非核宣言自治体というのは世界に広がって現在では4,300を超えと言われています。

日本におきましても約1,400の自治体が、県あるいは市町村で非核宣言をしております。私は、その会長をさせていただいておりますが、8月4日、おととい、その全国大会がこの広島で開かれました。

そして、この広島市と長崎市の主催で行われます世界平和連帯都市市長会議の成功を願うアピールを發しました。

固い連帯の意思を表明したところでございます。また、そこにおきまして、日本の国会決議、つまり国是となっております非核三原則というのがございます。つまり、核をつくらず、持たず、持ち込ませずということ非核三原則を守るために特にその法制化を強く政府に要請する決議をいたしました。なぜならば、去る5月に1メガトンの水爆を積んだ艦載機が沖縄北東の沖永良部島に沈んだままであるという21年前のタイコンデロガ事件が、アメリカの市民団体から衝撃的な事実として発表されました。

日本の国民の持ち込ませずに対する疑いと不信が大きくなってきています。日本の非核自治体は、様々な平和教育や姉妹都市を通じての世界の仕事としての連携や、またいろいろな事業を行って活発な活動をしていますけれども、これからも世界の市長さん方と一緒に、また市民と一緒に非核平和のための努力をしていきたいと思っております。

第二は海の非核化、そしてアジア太平洋の非核化の問題であります。そしてこのヨーロッパから始まった草の根の市民と非核自治体の運動というのが国際世論になりましてINF全廃条約が実現し、史上初めて、核軍拡から核軍縮へと大きな転換を遂げ、軍縮への方向が打ち出されたことは、大変すばらしいことだとい

うふうに私たちは思っております。

しかし、INF全廃条約に見られますように、陸のINFは、全廃されましたが、アジア太平洋あるいは地中海の海洋核はかえって増強され、野放しになっているのが現状でございます。私たちにとって、とりわけアジア太平洋の市民にとりまして、海の非核化を実現し、すべての国に開かれている海が平和のために利用されなければいけないと思っております。私たちは、海洋条約の持つ重要性を認識し、公海を核保有艦船が航行するなど核保有国が、核戦略の場として公海を利用することを禁止しなければならないと思っております。

そして、中南米のトラテロルコ条約とか、南太平洋の条約に続いてこの東北アジアでも非核地帯を創設していかなければならないというふうに考えています。

非核自治体運動は、非核の家から非核のシティーへそして非核のプリーフェクチャーへそして非核の国へ、そして非核の地帯へ、そして最後は核のない世界を実現する、そういう地道な運動でありますけれども、私たちは市民とともに、そのための絶え間ない努力をしていきたいというふうに思っています。

第三に平和問題におけるそして非核問題における自治体の役割についてです。先ほどハノーバーの市長さんもおっしゃられておりますけれども、日本でも外交とか防衛問題、核問題等は国の専決事項であって、自治体がそれを口に出すべきではないという意見がありますけれども、私たちは決してそうではない。自治体も当然発言すべきだというふうに思っておりますし、そのために参加する権利があるというハノーバーの市長さんと私も全く同意見でございます。

なぜならば、私たち自治体は病院を造ったり、公園を造ったり道路や上下水道を造ったり様々な市民サービスをして市民の身近なことからやっていくことももちろんですけれども、広島、長崎あるいは先ほどボルゴグラードの市長さんも言われましたけれども、一たび戦争が起これば、中でも核戦争が起こった場合には、我々が市民とともに営々として築き上げた都市の施設とその文化は一気にして廃墟化してしまうからです。

そういう点で市民、一人一人とともにアルジャーさんも基調講演で申し上げられましたけれども、市民に最も身近な自治体が力を合わせて非核平和を築くことができるというふうに思っております。私たちの藤沢市は、今年の4月から議会の満場一致の賛成を得まして、平和基金制度というのを作りました。約5億円の基金の金利と申しますか、その果実を運用しまして平和のために、国際交流のため、親善のためにやっという、こういうことで平和基金を今年作りました。平和予算を恒久的に確保していくことにより、この世界

の平和に寄与していきたい。こういうふうにしておりま

ります。  
また、非核宣言自治体が日本でも勢力が非常に大きくなろうとしておりますけれども、この宣言から今度は非核の条例を作ろうと、ここに一つの日本の非核自治体運動の目標をおいて、これからも努力をしていきたいと思ひます。そして、藤沢市はアメリカのマイアミビーチとか、カナダのウィーンザー市とか、中国の昆明市とかあるいはソビエトのヤルタ市と市民相互の国際交流としてそして姉妹都市、あるいはトゥインシティという双子都市とか、友好都市の関係を結んでおりますけれども、核をなくすために一層、市民、都市間の交流を深めて、世界中の諸都市と交流を深めて、地球の環境を守り、そして地球の平和と核兵器廃絶へ向けての明るい展望を開いていきたいと思ひます。

我々は、「シンク・グローバリ・アクト・ローカリー」ということをモットーとして非核平和のために皆様とともに不断の努力をしていくことを誓って私のスピーチといたします。ありがとうございました。

コーディネーター（永井道雄）

次にリヒテンベルグ市長。

フルト(ドイツ連邦共和国)市長

ウベ・リヒテンベルグ

議長そして御参会の皆様、広島平和文化センターの理事長であります河合護郎さんが私たちの町にいらしてくださいました。1989年6月のことでございますが、その時に私どもが抱えている問題のやっかいさについてお話しいたしました。

つまり、私どもが世界平和連帯都市市長会議に加わって、核兵器廃絶の声明に賛成していることが、抱えているやっかいな問題であります。

この声明は第1回の1985年の会議のとき出された声明ですが、それを私どもの市議会が支持したわけですが、それが実はやっかいな問題を引き起こしました。そして、河合さんはその話を聞きまして、この問題を是非この会議で話してほしいと言われましたので、私は喜んでそのことをお話ししたいと思います。非常に簡単に申しますと、フルトの状況は次のよう

でございます。

約5年前からフルトの町は法律裁判に巻き込まれております。

つまりバイエルンの州政府は、私どものやっていることと反対でありまして行政裁判になっているわけ

です。

この行政裁判はまだ終わっていません。

つまりフルトの市議会は、まだ正式の最終判決が出ていない裁判の係争事項であります。現在のところ市議会は、この平和問題について発言してはならないという判決が一応、係争中ではありますが、中級審で出ております。つまり、こうした問題は個々の町の問題ではないと、そしてこうした外交問題はあるいは防衛問題はボンの中央政府だけの問題であるという中級審の判決が今のところ出ているわけでございます。

しかし、私どもの市議会の多数派、そして市民の多数派の名前によりまして、私は、この判決に対して現在、闘っているわけでありま

す。

と申しますのは、ドイツの町は第二次世界大戦のあと、実際に普通の都市が抱えている行政問題以上に戦争の結果の様々な問題を引き受けたわけでありま

す。

ナチス・ドイツ帝国が戦争をある意味では勝手に始めたわけでありま

すが、その結果は、実は各都市が抱え込むことになったわけでありま

す。

例えば、私の町だけでも2万人の東側からの避難民をインテグレートしなければなりません

でした。

しかし、こうした事実だけでも、既にお分かりになりますように、個々の町もやはりこうした平和問題、そして戦争の悲惨な結果が起きないように防止することが都市の役割だということがお分かりだと思ひま

す。

したがいまして、どうもこの数日後、私がドイツに帰りますとバイエルン州の中央政府が私がこの会議に参加したことに対しまして、また裁判を引き起こすのではないかと私は恐れてお

ります。

このフルトの町の市長といたしまして、私、また恐らくやっかいな裁判を抱え込むことになると思ひま

す。

特にこの広島、長崎、世界平和連帯都市市長会議の声明に賛成いたしますと、また、上の役所からいろ

んな制裁が加わってくるのではないかと思ひま

す。

しかし、私どもは、実は第1回の声明に賛成したときも実は中央政府つまりバイエルン州の中央政府ですが、それを挑発するつもりは全然ありません

でした。

ただ、私どもはこの広島と長崎のプログラムに賛成しただけであります。そんな意味で私は、ハノーバー市の市長のシュマルスティークさんが広島市と姉妹都市の関係を結ばれて、そしてその姉妹都市の関係に基づいて、この世界平和連帯都市市長会議のプログラムに賛成するようにドイツのすべての町に手紙を書いてくれたことを非常に感謝して

おります。

このシュマルスティークさんは、一時期、ドイツの都市連盟の会長でもありました。その点で、バイエルンの州政府のやっていることに私は賛成しかねてお

り

ます。私は、平和を望む一般の人々の要求というものが、これは基本的な人権の一つであると思います。

そして基本的人権を守るのは、ボンの中央政府だけの仕事ではなくて、個々の自治体の仕事ではないかと私は思っております。

いや、それどころか個々の自治体の義務であると思います。

特に自治体の平和政策に参加することは地方政治家の義務であります。

その意味で私は広島と長崎がこのイニシアチブを執ってくださいましたプログラムに大変、感謝しております。

そして、私どもはフルトでこの広島、長崎の精神に照らして、さらに仕事をしていきたいと思っております。

フルトの多くの市民そしてフルトにあります軍縮委員会の方々はこの会議に連帯のあいさつを送るよう私に頼んできました。

特に広島と長崎の市民にも連帯のあいさつを送るようにと私は言われております。

そして、私がこの日本にいる間、特に今日ですが、フルトの市民にフルトの中央駐車場の広島メモリアルの記念碑の前で立ち止まり、そして黙とうをしてくれるだろうと私は確信しております。

御清聴ありがとうございます。

コーディネーター（永井道雄）

それでは、ソ連のキエフのメンゼレス副市長。

キエフ(ソ連)副市長

ガリーナ・メンゼレス

お集まりの皆様方、広島に参りまして、二日間になりますけれども、この2日間を通じまして原爆による破壊についていろいろと考えさせられました。

守るべきすべを持たない広島、長崎の人たちの苦悩を目の当たりにしました。

ソ連の市民も日本の原爆投下による苦しみを見てまいりました。そして、大変残念なことだと思います。

1986年の4月以降、チェルノブイリのあの原発事故があったわけでありまして、キエフの市民そして、ウクライナ、その他のキエフの近くに住む人たちが、例えば白ロシアの人たちもそうではありますが、広島、長崎の方々が、ますます私たちに近くなりました。喜びも悲しみも共に分かち合うような、その関係を持つようになったと思います。同じ悲しみを私たちは持つようになりました。第二次世界大戦ではキエフの半分は破壊されました。

1986年、私たちは原子力による悲劇というものを初

めて経験しました。

放射線による障害、子供たちを何とか守らなければならない。そして、また特別の道具などを使って、放射性物質を例えば地中に埋めなければならない、というような、いろいろなことを経験しました。こういった問題が今でも生じております。

執行委員会、それから科学者、医者たちは、いろいろな研究をまだ続けております。

いろいろ困難なことはありましたけれども、キエフはそれを通じて姉妹都市の方々から友愛の手をいただきました。

キエフの市の執行委員会の方には、毎年、毎年、何十通もの手紙をアメリカの町からいただいたり、あるいは、西ドイツ、イタリア、日本の方々からも激励の手紙をいただいています。

日本では、京都と姉妹都市関係を結んでいます。

チェルノブイリ原発事故の1週間後、私のオフィスのドアが開きまして、女性が入ってきました。

京都の女性でありまして彼女は泣いておりました。手に日本の新聞を持っていました。そしてキエフが完全に破壊されたのではないかということで大変心配していたのです。

また、お電話もいただきました。

そして、「非常に難しい状況であるけれども、私たちは生きていますよ。」という話を電話でしました。

彼女は、いずれにせよそういった話を聞いてご主人を日本に残し、とにかくキエフに行ってみようということに来て下さったのです。そして、彼女は涙ながらにやってまいりまして、鳥はまださえずっているかどうかと、そんなことも心配して下さいました。

私たちの町では、エネルギー生産が活発に行われています。

近代的な町であり、そしてとても美しい町ですが、しかしながら死んだ町となってしまいました。

もう何も残っていません。誰も住んでいません。そして30kmの範囲の所は立ち入り禁止区域となりました。もう生命のあるものは、そこからすべてなくなったと言ってもいいと思います。

今、このようなことを申し上げております理由といえますのは、つまり我々全員が一つの事実を認識しなければいけないと思うからであります。

つまり、人類破壊のためには核兵器すら必要ないということでもあります。

原子力施設が破壊されるということによって人類を破壊するということが可能だということでもあります。原子力発電所を全部撤廃しよう、やめよう、ということを行っているではありません。人間が生存するた

めにはエネルギーは必要であります。そして科学者が原子力発電所の新しい設計を考えております。新しい設計を検討しております。現在はコンクリートで包囲されておりますけれど、まだ完全に廃止されたわけではありません。

そして、ソ連の最高議会の決定としてアメリカに対しましてソ連政府の新しいイニシアチブについて連絡をしております。

その提案の中には、核実験のモラトリアムが提案されておりますし、核兵器の全廃に関する提案というものも入っております。

この機会をおかりしまして、すべての都市に対しまして、連帯に対し御礼を申し上げたいと思います。

物質的そして精神的な援助を事故以降、提案してくれましたことに御礼申し上げます。

そして、是非ソ連の平和のためのイニシアチブが持続できるように御援助、御協力をいただきたいと思っております。

すべての紛争というのは、外交手段を持ってのみ解決できるということを言いたいと思います。我々は民間外交ということ非常に支持しております。我々は姉妹都市そして民間外交の代表でございます。

ありがとうございました。

#### コーディネーター（永井道雄）

それでは、ハーグのハーベルマンズ市長。

#### ハーグ(オランダ)市長

アド・ハーベルマンズ

議長ありがとうございます。

お集まりの皆様方、ハーグはオランダの国家機関があるところであり、人口45万人、そして海岸沿いにありまして、ベアトリクス女王もここに住んでおります。

私たちの町は国際的な都市であり、ハーグに住んでいる人たちには外国人の方もたくさんいます。

私たちの町は、いろいろな文化の非常にカラフルな町であります。

ピース・パレスと呼ばれている所があります。ハーグには国連の国際司法裁判所もあります。国際司法裁判所は、国際法秩序を維持するのに、重要な役割を果たしております。ピース・パレスでは世界の代表が集まって国際法、平和問題などについても討議しております。

例えば、イラン、アメリカの仲裁もここで行われ、また環境保護の会議も行われました。

昨年は、非同盟諸国の会議も開かれています。

世界が兵器を持たなくて済むようにということで、

いろいろな活動が行われておりますが、少し具体的にどんな事が行われているかを申し上げたいと思います。

私たちはニカラグアのファイガルバということと非常に密接な関係を持っております。インフレを整備する、水道、公衆衛生などのプロジェクトを手伝っております。

ファイガルバの人たちとコンタクトを行うことにより理解が深まっています。ハーグの市民、特に子供たちは開発途上国のことを随分勉強できるようになりました。また、ハーグ市のボランティアの人たちは、ファイガルバで学校を作ろうとファイガルバに行ったりもしています。現在では、ワルシャワとの話合いが進んでいます。ポーランドの首都でありますけれども、ワルシャワと姉妹都市関係を結べないかということで私は、この東欧のワルシャワとの交渉を行っております。

やはり越えられないと言われている壁を乗り越えていくことが大事だと思います。

ハーグはカナダのオタワ市とは特別な関係を何年も持っています。

こういった関係を見てみますと南北関係、東西関係といろいろな関係を結んでおります。

オタワ、ファイガルバ、ワルシャワ、ハーグということで、小さなネットワークでございますけれども連帯が生まれています。

また、反アパルトヘイト政策をハーグの町は採っています。

そして、いろいろなハーグのグループの人たちとコンタクトを行い、また反アパルトヘイト、平和安全保障、環境問題などを扱っているところとも、コンタクトが取れるようにということで国際連帯のための作業グループを町では持っています。

私たちが、いろいろ扱わなければならない問題は余りにも膨大であり、協力をしていかなければならないと思っています。

市でいろんな専門知識を蓄積していくということが開発途上国では大事だと思います。

オランダの市町村協会、それからアイユラというその市町村の国際組織がありますが、第三世界の町の援助プロジェクトとして、いろいろなイニシアチブを採っています。

アイユラでは第三世界の公務員のトレーニングを行っています。

つまり民主的な行政の仕方というようなことについて研修をするわけでありまして。

これらのタイプの開発協力は都市間の連帯を強くするものであり、非常に効率的なものであると思っております。

また、アイユラでは市職員のノウハウ、技術なども

研修しようということをやっています。ノルウェーのオスロ市と一緒に住宅プロジェクトにもかかわっています。国連が、今年うまくいけば地方自治体宣言を受け入れてくれることになり、それが実現すればアイユラのプロジェクトに国連のお金が出ることになります。

核軍拡それから通常兵器の問題がありますが、これをなくすためには繁栄をお互いを分かち合っていく、エネルギー資源も南北で分かち合っていくことが大事であります。

また、人権を守ること、国際的なコンタクトを取り、そして町、市長村間のネットワークを結んでいくことが大事でしょう。

また、エコロジーのバランスをもう一度回復する必要があります。

8月6日は、ハーグの活動家の女性たち、平和のための女性というグループでここに参加している人たちもいますけど、ハーグの市役所の前にはいません。そして、広島で起きたことをもう一度思い直しています。長崎、広島の被爆者の方々と連帯の意味でこの女性たちは軍核競争の終わりを要求しております。

それから、また、インドネシアにおける戦争犠牲者にもめい福をささげることになっております。

5月4日は収容所で死亡した人たちに祈りをささげることになっており、ちょうど、今朝やったようなことを行うことになっております。1981年にこういった女性のグループの人たちが8月6日に初めてこういったイベントを組織しました。ピース・パレスに集まりまして集会を行ったわけでありまして、例えば木を植えるというようなことをやるわけです。

数か月前に私もピース・パレスでノルウェーの首相と一緒に植樹をいたしました。ノルウェー首相のブルトランド女史は、国連の環境委員会の委員長もしており、私たちの共通の将来のためには環境を守るというのは非常に重要であると思います。

では、まとめに入りたいと思いますけれども国の政府というものは非常に抽象的なレベルで話し合いを行います。

しかしながら、市町村というのは、必要不可欠な人と人とのコンタクトを生み出していきます。このようなコンタクトにより、市町村のきずなが深まっていき、国のきずなも深まっていくと思います。

ただ、私たちが、いくら努力しても、もしも私たちがそれと同時に相互理解を自分の地域社会の中で生むことができなければ、成果は出てこないでしょう。

ハーグには、いろいろな宗教、いろいろな肌の色の人たちが住んでいますが、差別をなくそうということで私たちは闘っています。

また、私たちの町の中での環境社会ということにも関心をもっており、公害をなくすために、例えば公共の輸送機関を使うことを呼び掛けたりというようなことを行っています。こうして、平和なコミュニティが生まれていくと思います。

これが、昨日、アルジャー先生がおっしゃったグローバルに考え、ローカルに行動するということだと思います。平和な世界は、平和な町から始まる。それが私たちの仕事であります。

この会議を通じて市民が、平和を求めているということは、明らかだと思います。

この機会をお借りしまして、広島、長崎の方々にお礼を申し上げたいと思います。そして、私たちはこれからも平和のための政策を続けていきたいと思っています。ありがとうございました。

#### コーディネーター（永井道雄）

それでは先に行く前に合意して頂きたいのですが、あと5人話しますが、5人の1人ずつが5分話すと30分位になります。したがって5分以上話さない、必ず5分でやめると、そういう約束をしていただきたいと思っています。

それでは東京の大田区の区長さん、どうぞ。

#### 大田区長 西野善雄

御紹介いただきました、大田区長の西野でございます。

長崎、広島には何回となく訪れておりますが、今回ほど感銘を受けたことはございません。それは世界の諸都市から平和連帯という形でみなさんがお集まりになり、志を同じくしているということでございます。

私どもの大田区は、東京の南部にございます。

羽田国際空港を含む町であると申し上げれば一番御理解がいただけると思います。55平方キロメートル、66万人の都市でございます。

私たちの町は、商工業の町でございましたので、前回の戦争の際には、その60%を焦土といたし23万人の方が焼け出され、8万戸の家がなくなりました。戦争が終わってから44年経過をいたしまして、戦争が終わってから生まれた人が、既に60%、60才以上の方が15%、戦争はともすれば記憶の中から風化される傾向にあります。そういう中で大田区は1984年、平和都市宣言を行いました。

それ以降、毎年いろいろな行事を行って区民とともに平和であることの幸せを感じ合っております。

あるときはシンボルマークを区民から募り、あるいは今年の場合ですと標語を募りました。

三千点の応募がありました。いろいろなセレモニーを通じて私たちは区民とともに平和のありがたさというものを訴えております。

ここ3年ばかりジャズフェスティバルと花火の夕べをやっていますが、多くの区民の参加がございまして、その中でいろいろな戦争の話、平和の豊かさの話が語られています。そういう中に私も飛び込んで皆さんとともに戦争、8月15日の思い出をかわし合っているわけでございます。

今、平和を求める区民の気持ち、区民同士の連帯の和を一層作り出すことが最も必要ではないかと考えております。

それは、平穏な市民生活は平和が保障されてこそ達成されるからと信じるからです。

明日に向かって私たちは子供や孫へのプレゼントは平和に勝るものはないと思います。

世界の諸都市がお互いの市民が武器を持ち合って戦わない誓いをする事。

これが平和を世界に築く第一歩となるのではないのか。このように思います。

今後とも大田区長として、66万の区民の皆様とともに私は世界諸都市の市長さんと志を同じくしながら絶え間ぬ努力をすることをお誓いいたします。

ありがとうございました。

#### コーディネーター（永井道雄）

クネイトラ市ですが、アサド・アル・ハムイ市長。

#### クネイトラ(シリア)市長

アブドゥール・モネイム・アサド・アル・ハムイ

お集まりの皆様方、私はクネイトラを代表してまいりました。クネイトラは1973年、戦争のときにイスラエル軍の侵略によって完全に破壊されました。私はこの市を代表いたしまして、また、シリアアラブ共和国アサド大統領とシリア国民からの祝辞のごあいさつを申し上げます。

私がこの会議に出席するのは、今回で2回目です。荒木武広島市長には戦争で破壊された犠牲都市の間に友好関係を結ぶために、並々ならぬ御尽力をいただき心より感謝しております。こうした相互関係はよりよい生活と未来を築くために国家間の友好的なきずなを一層強化するに違いありません。

この会議が世界平和、正義に基づく公正な平和をもたらすのに役立つことを願っております。家屋や病院や幼稚園の破壊が、この世界で再現されないことを願ってやみません。会議の御成功をお祈り申し上げます。ありがとうございました。

#### コーディネーター（永井道雄）

次はロッテルダムのヘンク・ファン・デア・ポルスさん。

#### ロッテルダム(オランダ)市前助役

ヘンク・ファン・デア・ポルス

議長そして皆様、私はロッテルダムの前助役であります。けれど現在はロッテルダム市の平和委員会の委員長を務めております。このアブストラクト集の46ページを見ていただきますとだいたい私のスピーチの趣旨が書いてあると思いますが、主な活動について述べたいと思います。

私ども様々な国の多くの都市と同じ問題に直面しております。

つまり、国家政府としては、国際的な平和、軍縮問題、国際関係というのは国家政府のみの権限であるというふうを考えているということでもあります。

ロッテルダム市及びオランダの各都市といたしましては、地方自治体が市民に対し、平和軍縮においても指導的な役割を果たすという責任を負っているというふう考えております。私どもは非核都市宣言をしております。これは、非核兵器ではなく、非原子力、原子力も撤廃するということを宣言しているわけでありまして。

さらに平和軍縮関係の多くの活動も行っています。こういった活動のためには、財源が必要であります。

ということでかなりの地方自治体の予算というものを平和事業に向けております。また、NGO非政府機関も多くありまして、こういったグループに対しましても地方自治体から財政援助をしております。

小学校などにおきましても戦争の恐ろしさについて教育がなされております。教科書あるいはスライドなどを通じて平和教育を行っております。第一次世界大戦以降は東西両陣営、そして南北双方の20以上の都市、そして米ソ、西ドイツ、東ドイツ、アジア、アフリカそして南米の諸都市と非常に友好的な関係を持っております。

ロッテルダム市、そして市民は戦争の意味そして悲惨さということをよく知っております。1940年の5月でありますけれども、ロッテルダム市の中心部がナチスによって壊滅されました。50周年として平和会議をそして平和デモというのを各姉妹都市と共催するということになっております。

広島市、長崎市双方が私どもの御招待をお受けいただきまして、1990年5月にロッテルダム市に来ていただけるといって非常に喜んでおります。

国際会議というのは重要であり、友好であります。

しかしながら地方自治体の代表におきましては、この平和というのは市民の心の中になければいけないということを常に念頭に置くということが最も重要な責務だと思えます。

コーディネーター（永井道雄）

その次にテヘランのタバ・タバ市長。

テヘラン(イラン)市長

ビード・モルテザ・タバ・タバ

慈悲深きアラーの名に誓い、荒木市長、優秀なる皆様。

まず、広島市長殿ならびにこの歴史的場所において、今回の会議の開催を実現された関係者の皆様に感謝いたします。また、美しい街を訪れる機会を与え、40年前の体験を教えて下さった広島市民の皆様には感謝いたします。

皆様、私はテヘラン市から参りました。テヘランの勇ましい市民は平和を愛し、正義を求めるイラン西・北部の同胞と同じく、8年にわたる母国防衛の間に、敵軍の侵略と攻撃による殺りくと破壊を目の当たりにしました。

市民はまた、化学兵器や、長・短距離ミサイルそして種々の爆弾、大量破壊を行う兵器を使用するという犯罪行為がもたらした想像を絶する苦難と逆境にも耐えました。

私は何万人もの同胞の大虐殺そして50以上の都市と何千もの村落の破壊を目撃してきた市民の市長です。

議長殿そして皆様、私はテヘラン市民の中に人間の尊厳と価値への信念、寛容の精神と我が宗教の原理と価値を守り、尊ぶ精神がなければ、我々の多くの兵士は「目には目を」の理念で報復を行い、他国が化学兵器を使用することを容認していたことであろう、ということをごここで率直に申し上げます。

敵軍はあらゆる国際規範、協定、決議に反する不法行為に訴えました。また、恥ずべきかな、市民そしてさらには彼らの同胞にまでも有毒マスタードガスや神経ガスを使用しました。もし我々が戦争という同一手段をとることを認めていたなら、今日の会議を取り巻く状況はいったいどういったものとなっていたでしょうか。

議長殿そして市長殿、今回の会議は化学兵器と核兵器の廃絶に向けた方策を打ち出し、世界平和推進のための対策を討議し、強化するという目的で開催されています。広島市長殿はここに臨席する我々の誰よりも深く核兵器のつらい記憶を留めておられます。しかし、私は化学兵器と有毒ガスがどれほど痛ましく、致命的

効果をもたらすかということをご皆様の誰よりも間近に存じていることは確かです。

1945年8月6日、広島市民の皆様は超大国による核兵器の投下を経験されました。各国のメディアがいっせいに侵略者である敵軍が化学兵器を使用し、イランをはじめとする各国の何万人もの老若男女や兵士を大虐殺したとの残忍な戦闘的行為についてのニュースを次々と流していた時、我々市民が受けたのは平和と安全保障を唱え、人権尊重をうたう国際機関からの冷やかな傍観的態度でしかありませんでした。

そして、この非人道的犯罪の被害者の叫び声が地球上から消えてしまう時、完全なる沈黙状態が「平和と人権の提唱者」と問題に背を向けた世界中の国際機関の良心が何であったのかが明らかになり、つまりはこの非人道的犯罪の共犯者に他ならないことを暗示することになるのです。

皆様、リビアの化学兵器工場の建設にドイツ連邦共和国が荷担していた事実が表面化した時、その真のほども定かでないのに、アメリカ合衆国からは批判が起こり、多くのニュースが流れ、ドイツに非難が浴びせられたことを我々は記憶しています。

もし、メディア界や世界のリーダー、国際機関が本当に化学兵器製造の可能性に憂慮しているのであれば、なぜ彼らは何万もの無実の市民が種々の化学兵器に倒れている事実と直面してなお、無関心でいられるのかという疑問を我が同胞が投げかけるのはよくないことなんでしょうか。イランから国連や安全保障理事会に提出された数々の申し立てや抗議は、確固たる証拠に基づき、また、国連オブザーバーからの報告も度々あったにもかかわらず、なぜアメリカ合衆国により拒否されたのでしょうか。いつもアメリカや国連はそういった兵器の使用を非難しているというのに。

安全保障理事会やその他のメンバーも沈黙をくずさないというのは痛たまれません。この無関心のリーダーたちを見て我々はこういった機関のあり方や平和と安全の維持に対する熱意を疑問視することはしないのでしょうか。

もちろん、我々は最終的にそうすることになるでしょう。国際機関内に横行する差別や安全保障理事会が持つ拒否権によりこういった機関に対する我々の信頼感が揺らぎつつあるのではないのでしょうか。実施手段の有効性については確かに、そうなのです。

我々は地球レベルで、あるいは地域レベルで決議や議定書を、公約を作成し、会議やセミナーを充分開いてきたではありませんか。もちろん、答えはイエスです。

国際社会、世界のリーダー、担当機関は数々の化学



兵器さらには核兵器により無実の市民が殺され、血を流している事実、そういった兵器の使用により生ずる長期にわたる致命的な問題を耳にはしていないでしょうか。

もし超大国と言われる国々が自身の利益や領土拡張というゴールだけでなく、人類全体の利益に目を向け始めれば、もし人権尊重が人種、肌の色、宗教の別なく、洋の東西を問わず、弱者も強者もすべての人類を対象としたものであれば、もし我々が平和、自由、安全保障をはじめとする世界的に通用する目的、つまり全人類に共通の定義を見出すことができれば、もし生きる権利、人間の尊厳に適う環境の中で生きることの権利がすべての人々に与えられるならば、あるいはより正確に言うのであれば、もし自分が望むものを他人のためにも望み、自分にとって良くないと思うことは他人にとっても良くないのであれば、この会議をはじめとする同種の会議の結果は世界にとって有益なものとなるでしょう。

抑圧と差別を強いられてきた我が国民は他のどの国民よりも平和、安全保障、正義への望みを強く持っています。我々は他のどの国よりも、国際平和、安全保障、正義の維持と推進に貢献する機関の設立を願っています。

我々は自由を愛する人々と共にいます。我々は核兵器と化学兵器の完全廃絶そして特に軍縮全般を求めるものです。

様々な場で我々は信仰にのっとり全力を尽くしてこういった努力を支持する準備のできていることを何度も発表してきています。

今回の8月会議の関係者の皆様に感謝するとともに、この会議により、ご臨席の皆様のご共通の目的が達成され、20世紀後半に人類が直面するあらゆる困難の克服への前奏曲となることを希望します。

御清聴ありがとうございました。

コーディネーター（永井道雄）

ではオーストラリア、ウォーロンゴング市のウィリアム・モーブレイ助役をお願いいたします。

ウォーロンゴング(オーストラリア)市助役  
ウィリアム・モーブレイ

ありがとうございます。

ごく手短かにこの重要な会議で発言をさせていただきたいと思います。

この機会に対して御礼を申し上げます。私、ウォーロンゴング市の助役でございます。ウォーロンゴング市から皆様方にごあいさつを申し上げます。

この都市といいますのはシドニーの南側にありますオーストラリアの東海岸の都市でありまして、人口が約15万人であります。

ウォーロンゴングの人口、市民を見ても非常に多国籍でありまして世界各地からの人たちが住んでいるわけです。

70か国以上ということでありまして。昨日、私、ペルーの代表の方にお会いしましたが、ペルーからの方も多くウォーロンゴングに住んでいらっしゃいます。

加えてイタリア、英国、ギリシャ、ユーゴスラビア、スペイン、フランス、ベトナム、スリランカ、インド、パキスタン、チリ、カナダ、米国、エジプト、レバノン、南アフリカ、そしてジンバブエ等々からの移民の方々が住んでいらっしゃいます。

ということで私どもの都市は寛容、理解、平和の都市でありますし、非核地帯の一部でもありますし、オーストラリア非核地帯事務局にも属しております。

私どもといたしましては、全世界のすべての者にとって平和というものは、我々の責任であるというふうに強く信じております。

平和というのは、一つの目標でありまして、これを達成するためには、コミットメントが必要でありますし、重要な問題に対しましては常に努力をして解決をしていくということが重要であります。

そして、ウォーロンゴング市といたしましては川崎市と姉妹都市になっておりますし、広島の日をも記念しますし、そして国連の様々の活動に対しても支持をしております。こういった様々な平和のための努力をしております。

そして世界各国の他の都市と手をたずさえて世界平和のために貢献をしていきたいと思っております。貧困、不平等、死社会、不正義、環境問題というようなものは地球規模で解決しなければなりませんけれども、核のホロコーストというのが究極的な悪であるということが言えると思っております。

コーディネーター（永井道雄）

15名の発言者が報告を終了されました。ここからは、ディスカッションになるわけですが、だいたい時間どおりに進んでいると思っております。

この後で昼食となるわけですが、その前に1、2の御質問ならお受けできると思っております。どうぞ……

ユージーン(アメリカ)市  
バーバラ・ケラー

どうも発言の機会をありがとうございました。若干、非核地帯についてふれたいと思っております。葉山市長とフ

アン・デア・ポルスさん両方がふれられましたが、この点について発表していただいております。ありがとうございました。

都市において平和の雰囲気作り、環境整備というのは重要でありますけれども、それに加えて核、軍核を終結させるような具体的な処置を講じることが必要だと思います。核兵器全廃ということのためにローカルなレベルで非核都市あるいは非核地帯の宣言をしていただきたいと思うわけであります。

皆様方の都市がまだ非核都市ではないということであれば、そのように是非早急にしていただきたいと思っております。

広島、長崎市の市長との連帯を表明する上でも非核都市宣言をしていただきたいと思っております。核、軍拡競争をやめさせる、そして各領土におきまして核兵器を全廃させる、核兵器メーカーから購入することをボイコットする。

そして皆様方の都市が核兵器産業に投資をしないように、このような具体的な様々な行動をとることができると思っております。

それからまた姉妹都市に対しましても非核地帯運動に是非参加してもらうように要請をしていただきたいと思っております。全世界のまず各地域のレベルで非核宣言をしていただきまして非核世界を築きたいと思っております。

名前はバーバラ・ケラーと申します。オレゴンのユージーンから参りました。ありがとうございます。

コーディネーター (永井道雄)

ほかにいらっしゃいますでしょうか。

ジャージーシティ(アメリカ)

ジェイミー・ヴァズケス

私はジェイミー・ヴァズケスと申しましてアメリカのニュージャージー、ジャージーシティ101番目の非核地帯からまいりました。それからまた非核地帯を求める市町村の団体を代表してもまいりました。このセッションでは、核軍縮それからまた地球の平和のために何ができるかということを考えていかなければなりません。

平和教育、姉妹都市関係を結ぶ、サンクスチュアリプログラムを作るなどいろいろ大事な事があると思っております。人と人をつなぐ運動というのが国際理解を深めるために必要であり、これを拡大していく必要があると思っております。残念ながら85年の第1回会議には来ることではできませんでしたが、今年で3年連続、広島に私は来ております。

私たちは、4年に1回のこの会議を待つわけにはい

かないと思っております。

第3回、第4回の非核市町村地帯の国際会議の決議を持ってきました。

この決議では生存のための地球サミットSOSを開こうということをアピールしています。市町村のみならず、環境団体それから飢餓と闘っている団体、科学兵器を削減するための運動をしている団体などと呼ばれるというものです。

私としては、この生存のためのSOSという会議に御支援をお願いしたいと思います。そしてこの生存のための地球会議が1991年に広島で開かれるようになったならばと願っております。このような会議を開こうとして努力をしてもなかなかうまくいかない、長続きしない、それからまた行動をとろうとしても会議が先になりますとなかなかうまくいかないことがあると思っております。したがって次の会議まで4年間待つかわりに、1991年、広島でいろんな関連の団体を集めてSOSの会議ができないだろうか。世界の平和というのは核兵器をなくすのみならず飢餓をなくすこと、それからまた世界の安定を脅やかすような因子をなくすことにあると思っております。

ですから是非この会議でこのSOS生存のための会議を支援していただければと考えております。

コーディネーター (永井道雄)

かなりの方が発言を求めておられるようです。女性の方、どちらからいらっしゃいましたか？レディーファーストでまいりましょう。

ランカスター(アメリカ)

マーリン・S・アーノルド

マーリン・アーノルド、ペンシルバニアのランカスターからまいりました。アメリカ人です。

私は、テヘランの方に質問があります。タバ・タビ市市長だと思いましたがこれも質問です。何か私の市、あるいは他の都市に対してどんなステップをとればアメリカとイランの関係を改善できるか提案をしていただけないかと思っております。もう少しイランにおけるアメリカの受けとめられ方をよくするためにも努力が必要だと思います。

これは通訳の人がいないとテヘランの市長さんに伝わらないと思うのですが、いかがでしょうか。

コーディネーター (永井道雄)

御存じだと思いますが、テヘラン市長がお話したときに通訳がないという問題がありました。この中にどなたかボランティアで今、ペンシルバニアの女性が

おっしゃられたことをアラビア語に直してくださる方はいらっしゃいませんでしょうか。いらっしゃらないようですね。是非、努力は休憩中などにお続けになって答が得られればと思います。

#### ロサンゼルス(アメリカ)

##### ジョン・ティー・ウィリアムズ

私はジョン・ティー・ウィリアムズと申します。ロサンゼルスから参りました。カリフォルニアのロサンゼルスです。

私は親愛なる友人、ジャージーシティのヴァズケスさんがおっしゃられたことを支持したいと思います。

今、生存のためのサミットを開こうという話ができました。そして、それを広島で開催したいという意向がありました。私は、各代表者のお話を熱心に聴かせていただきました。

それからまた基調講演も聴かせていただきました。基調講演を聴いておりましたが、みなさんが人類の直面している脅威について話しておられました。

そしてこれを今世紀中に解決しなければということでありました。深刻な問題が現在あります。そしてこの問題に我々は目を向けていかなければなりません。

これらの問題は、私たち市長が真剣に受け止めなければならず、帰国してから取り組まなければならない問題であり、真剣な討議に付すべきだと思います。

今回、来日いたしましてから、いろいろな話が出ましたけれども、その中でも今までよりももっともっとスピードアップして仕事をしていかなければならない。

従って、こういった大きな問題があるときにはできるだけ歩幅を広くし、そして急いで進んでいくことが要求されるようになるのではないのでしょうか。

そういうことで私としては、このような生存のためのグローバルサミットを広島で開くということを支援したいと思います。これは今から2年後に開催される予定であるSOSグローバルサミットです。

##### コーディネーター(永井道雄)

一人のボランティアの方がいらっしゃいますけれども英語からアラビア語に翻訳していただけるということですので、フィラデルフィアの方でしたか?もう一度質問していただけるのでしょうか。そうしましたら通訳をいたします。

#### ランカスター(アメリカ)

##### マーリン・S・アーノルド

マーリン・アーノルド、アメリカのペンシルバニア、ランカスターからまいりました。

タバ・タビー市長に質問があります。

テヘランの市長に私が聞いたかったのは、私の市やアメリカのその他の市がアメリカとイランとの関係を改善するために具体的にできることは何かないか提案をいただければと思いました。

#### テヘラン タバ・タビー市長

特にアメリカ人に対して敵意を持っている、反感を持っているというわけではありません。アメリカ政府に対して私たちは問題を感じています。

もしも米国政府が友情を見せてくださるのならば、アメリカが凍結をしている、例えば資産を解除してくれたりすれば、また関係を改善することができるのではないかと。

そしてアメリカの市民の人たちとも他の市民と仲良くするように、仲良くできるのではないかと思います。

#### コーディネーター(永井道雄)

随分発言の機会を求めよう方がいらっしゃいます。ただ時計を見てみますともう終わりの時間がきてしまいました。スケジュールが時間切れになってきましたので、事務局の方からお昼とその後の予定について説明をうけます。ちょっとお待ちください。

絶対しゃべりたいということですか?じゃあ、あなただけ、あなただけ短くお話するということがあったら結構です。

私が発言するのではなくてニュージーランドの方に発言をしていただきたいと思います。

草の根運動の代表でいらっしゃいます。ニュージーランドの労働者の代表ということでもあります。最も重要なテーマつまり、ここからのフォローアップはどうなるのかと。ただ単に言葉だけではなくて実際の行動をどう起こすかということについての発言をしていただきたいと思います。

#### ニュージーランド リーナ・スキンケル

リーナ・スキンケルと申します。私はマウリーの者であります。ニュージーランドの先住民です。

御承知かと思いますが、ニュージーランドは非核宣言をしています。

これを行うためには、かなりの困難がありました。ニュージーランドの国民の願いとして非核地帯を達成することができたわけであります。私、ACTUオーストラリア総評議会の代表としてまいりました。

53万人の組合員がおります。そして私がニュージーランドを離れた時に、200万ドルものフリゲートを購入しようというふうにおーストラリアの政府は考

えておりました。もちろん我々、国民としては反対なわけであります。

地球規模のSOSを支持したいと思います。このようなサミットに対して支援をお願いしたいと思います。

どうもありがとうございました。

# 全体会議Ⅱ（分科会Ⅱ）

81

～核軍縮と地球的平和達成に都市は何をなすべきか～

## 都市報告

分科会Ⅱ 8月6日（午前9時30分～11時30分）

広島国際会議場 ダリア

司会 広島市市長室平和記念館長 脇坂 清

コーディネーター 元広島大学学長 飯島 宗一

### 各都市の報告

- (1) アルバニー(アメリカ)市  
ジョセフィーヌ・デイビス ..... 83
- (2) ボローニャ(イタリア)市  
ダンテ・クリッツィ ..... 84
- (3) フォルリ(イタリア)市長  
バンダ・バルナッチ ..... 85
- (4) グラスゴー(イギリス)市長  
スーザン・ベアード ..... 86
- (5) アーバイン(アメリカ)市長  
ラリー・A・アグラン ..... 87
- (6) カブール(アフガニスタン)市長  
モハマド・ハキム ..... 88
- (7) マラコフ(フランス)市助役  
ミシェル・シボ ..... 88
- (8) モントリオール(カナダ)市助役  
ジョン・ガーディナー ..... 89
- (9) 東京都中野区長  
神山好市 ..... 90
- (10) パルマ(イタリア)市助役  
エルビオ・ウバルディ ..... 91
- (11) テラモ(イタリア)市  
リノ・シルビノ ..... 91
- (12) ヴェルダン(フランス)市  
ジャック・バラ＝デュボン ..... 92
- (13) ハイファ(イスラエル)市長  
アリー・シャロモ・グレル ..... 94



司会（脇坂広島市市長室平和記念館長）

「核軍縮と地球的平和達成に都市は何をなすべきか」をテーマに全体会議を分科会形式で始めたいと存じます。申し遅れましたが、私は世界平和連帯都市市長会議事務局次長の脇坂でございます。よろしくお願いいたします。コーディネーターは元広島大学学長の飯島宗一先生をお願いいたしております。それでは飯島先生よろしくお願いいたします。

コーディネーター（飯島宗一）

この分科会のコーディネーターを務めさせていただきます飯島でございます。よろしくお願いいたします。早速会議に入りたいと思いますが、これから各都市が平和推進に取り組んでいらっしゃる現状、今後の方針について御発言をいただくわけではありますが、時間が残念ながら大変に限られておりますので、あらかじめ御発表いただく都市として12都市を指名させていただきます。その12の都市及びその代表者としてアルバニー市のジョセフィーヌ・ディビスさん、ボローニャ市のダンテ・クリッツィ氏、フォルリ市のバンダ・バルナッチ市長、グラスゴー市のスーザン・ベアード市長、アーバイン市のラリー・A・アグラン市長、カブール市のモハマド・ハキム市長、マラコフ市のミシェル・シボ助役、モンリオール市のジョン・ガーディナー助役、中野区の神山好市区長、パルマ市のエルビオ・ウバルディ助役、テラモ市のリノ・シルビノさん、ヴェルダン市のジャック・バラ＝デュボンさん。以上の12都市の方々でございます。それでは今申し上げた順序で順次御発言をいただきたいと思いますが、それぞれの御発言は、およそ5分程度でお願いいたしたいと思っております。なお12の都市の御発言が終わりました後、フロアーから御質問、御意見等を承ります。フロアーで御発言のときは、挙手をしていただいて、そこへハンドマイクを持って係員が伺いますから、そのマイクを用いて御発言をいただきたいと思っております。その際、都市の名前と御発言をなさる方の御名前をおっしゃっていただきたいと思っております。また、もし既に御発表になった12の都市の方々に対する質問等がある、それに対するお答えをなさる場合にも、発表者席におられる方々にマイクを持って伺いますのでそれを使ってお答えをいただきたいと思っております。限られた時間の中でなるべく多くの方々の御意見をいただきたいと思っておりますので、御発言の時間については、なるべく簡潔に、重要な点を取りまとめて御発言いただければ大変ありがたいと思っております。それではまずアルバニー市のディビスさんから御発言をお願いいたします。御発言

はどうぞこの壇上のマイクを使ってお願いいたします。

アルバニー（アメリカ）市

アルバニー・ウーマン・オブ・ザ・イヤー

ジョセフィーヌ・ディビス

脇坂様、そしてコーディネーターの方、さらに来賓の皆様、御参会の皆様、おはようございます。私はアメリカのジョージア州アルバニーを代表いたしますジョセフィーヌ・ディビスでございます。

ラリー・ベース市長は現在再選のためのキャンペーンを行っており今回出席することができませんでした。市長に代わり、また10万人以上の市民を代表いたしまして出席できましたことは光栄と存じております。今回のテーマであります「核軍縮と地球的平和達成に都市は何をなすべきか」ということについて話を進めたいと思っております。

アルバニーのこれに対する答えは、それについて世界的に考えなければならないと同時に地域的にも考えなければならないということです。昨日の基調講演でも申されたことですが、私も市民としての行動を行っていかなければならないと考えております。

そしてそこで平和が達成できれば、それがまた広がっていくと考えているわけです。

マンハッタン計画の科学者は、「我々の計画は十分に成功した。」と言っておりますが、私たちは昨日その計画から生まれた赤ん坊が大変な奇形児であったことを目の当たりにいたしました。これが広島に原爆が落とされた結果であります。そして3日後に同じことが長崎にも起こりました。人生を変え、運命を変える事態が起こったのであります。基調講演者がおっしゃったことですが、超大国は囚人のようなジレンマを経験することを強いられています。しかし、市民といたしましては時にこういったことに対立しなければなりません。

基調講演の中で一つのチャレンジを起さなければならぬこともありました。我々市民が力を手にしているのです。我々は地球的に広く平和を考え、イニシアティブを採らなければなりません。それと同時に地域的なことを考え、人類に影響のある行動を起こしていかなければなりません。これが我々の採らなければならないアプローチであります。

ジョージア州のアルバニーは、サンベルト地域の南にあり、経済的には農業地域であったものが、産業地域に変遷してきており、最近ではハイテク産業も開発されております。経済的に発展しているわけですが反面失業率が増大し、過去6%だったものが今は14%にもなっております。さらに犯罪率、ドラッグ汚染ある

いは高校のドロップアウトも増えています。警察は懸命な努力をしておりますけれども。ルーサー・キングはアルバニーのろう獄から手紙を書いています。その当時アルバニーでは白人と黒人の協調を確立することができませんでした。交渉を主張した人たちは成功を収めることができなかったわけでありました。その後ゆっくりと市議会も動きました。我々の地域社会は民族的な人種差別があったため、なかなか動くことができませんでした。しかし、現在では前市長の貢献によりリーダーシップが改善されました。

そして、教育が地域の平和に大きく貢献しました。そこで何点か挙げていきたいと思えます。まず第1点は、アルバニー市としてのリーダーシップを形成したということです。約30名から35名のリーダーを決めます。そして毎年人を替えてリーダーを決め、コミュニティの中でどういう活動をするかという点に焦点を当てます。それぞれ役割を決め問題の解決に努めます。

地域社会では幅広い人材を開発しております。例えば、訓練問題であるとかそういうことも開発しているわけでありました。その効果として地域社会で、例えば、意思決定など行えるようになりました。40年間毎年、女性が一人任命されています。その地域社会に貢献した人が選ばれます。また、40年間白人のみが選任されていましたが、初めて黒人も選任されました。それで非常に微妙な会議になったわけです。市議会がその後、意思決定の中にも、そういった人を含めるようになったのであります。市民についても隣人に対する責任をより強化し、文化的また人種を合わせた総括的なものをもたらしています。

それから地域の教育制度について言えば、例えば、その他の業界、産業界も含め教育を考えています。つまり、すべての子供、すべての市民、ジョージア州アルバニー市に住むすべての人々を含む教育制度を確立してきました。

最初、教会では白人だけを対象に教育を行っておりましたが、現在ではすべての市民を含めております。

最後であります、経済開発委員会というものを作りました。これが市民に対し1つのメディアを作り出すことになりました。そのほかの地域に対し、経済開発、経済活動に参加できるようなそういう委員会を作ったわけです。

そして現在、アルバニー市では平和に対しての活動が盛んに行われるようになってきております。それにより地域社会の態度あるいは行動が変わってきております。現在アルバニーでは強力な平和へのイニシアティブが採られ、世界のその他の国家にも参加させようという動きをしております。

アルバニーの女性委員会は西アフリカの女性協会とお互いに協力し合っております。これらの経験を皆様に御紹介したわけですが、その中で最も大きな貢献というのは、地球的平和を求め、平和とは家庭から始まり、そこから広がって行くものであるということをお願いしたいと思います。

そしてマンハッタンコードが言っているように「赤ちゃんは小屋で生まれる。」ということでありました。赤ちゃんは満足な形で生まれなければなりません。我々は、過去敵に会いました。しかし今、我々はここにいます。我々市民が人生を変えることができるわけでありました。核兵器の廃絶、そして平和を求め、その鍵は連帯にあります。連帯というのは、幅広い地球的な目とそして人間性を求めていかなければなりません。それが鍵であると思えます。平和というのはそれぞれ個人個人から始まるというのが鍵であると思えます。ありがとうございました。

コーディネーター（飯島宗一）

どうもありがとうございました。では、続いてボローニャ市のダンテ・クリッツィさんをお願いいたします。

ボローニャ(イタリア)市  
ダンテ・クリッツィ

私はクリッツィと申します。イタリアの姉妹都市の代表でもあり、世界都市協会の副会長でもあります。ヨーロッパの代表であるボローニャ市長が現在ナチとファシズムが50年前にボローニャで行った攻撃の記念行事に参加しておりますので、私が市長の代わりに参りました。私どもは、自由な自治体の代表であります。ヨーロッパの文化の中心となっております、ヒューマニズム、科学を私の都市から広めようと運動をしております。そしてこの運動が始まって、900年祭を迎えております。

アレクサンダー・ドゥブチェック、ネルソン・マンデラなどが平和のための世界的なセンターを作るという運動を始めました。ボローニャ市は全世界の都市とのきずなを密接にしようとしております。私どもは都市に向けて運動しなければいけません。

さらに政府にもアプローチすることが必要です。世界の人間としての視点が必要です。第1回の会議が4年前に開かれました。市長会議のことです。それ以来、私どもの会議が採択した文書をより具体的な運動にしようとしています。1985年に私どもはパンフレットを1,000部作りしました。都市連帯による世界平和に向けての運動を強力に進めております。ハノーバーにおき



まして、そのための会合も招集いたしました。平和を実現するためには、どういう条件が必要なのでしょう。つまり、そのためには人間が実際に人間らしい生活をしなければいけません。つまり平和ということは、ファッションではありません。平和は人間の歴史が本当に人間らしい歴史になるための条件です。一つの地球家族になることが必要だと思います。広島そして長崎に落とされた原爆がホロコースト、そして大量虐殺を行いました。それ以来の44年間、私どもは人間の命を抹殺しようとする運動を見てきたのであります。

INF条約締結にもかかわらず、また米ソ関係改善にもかかわらず、また冷戦の状態ではないにもかかわらず、この経験を忘れてはいけません。

人類はとてつもないお金を核兵器を買うため使っているのであります。飢餓で何百万人もの人たちが苦しんでおります。常温での核融合という話もされております。

しかし科学者たちは350億ドルものお金を核、化学・生物兵器の増強のために使っているのであります。これらの科学者たちは人々を助けて環境を守る仕事をしなければなりません。健康を守る仕事をすべきです。汚染を防止し、この病態を断ち切らなければならないのです。

平和を求める運動の中で、真実を語らなければいけません。真実を語る事が私どもの責任であり、そのために対話、寛容、理解そして理性の力が必要です。その基礎となるべきものは、恐怖をなくすということであり、恐れてはいけません。忍耐をもって前進しなければなりません。民主主義は普遍的価値として国際関係において使われなければいけません。武器を離れ、法律、秩序、立法へと向かわなければいけません。

そして人類家族の相互依存を認識すべきです。世界は人間が支配するべきです。派閥でなく、相互理解をする人間が世界を統治するべきです。

二体制の衝突を通じては何ごとも解決をみられないであります。

私どもの関係の基礎になるものは、最も強力な技術を持っている者であってははいけません。我々は国民を教育し、人々の相互理解を促進すべきだと思います。若年層が平和に対しての感覚をもつようにすべきです。このような平和教育が学校において必要だと思います。また、どういうふうにして平和が危うくされるのかの情報の提供も必要です。子供達に対して戦争を防止するための必要条件を教えるべきです。学校は最も重要な場所であり、我々の将来の世代を教育する非常に重要な場所です。

平和は歴史を持たなければいけません。単に経済的な事実だけをベースにやるべきではありません。

自分とは異なる人々に対する理解力、寛容性、異なる宗教、異なる考え方、文化への寛容性を教育すべきであり、それを通じて若年層が協力をする精神を高めるべきであり、そういう教育を子供にすべきであります。

我々の科学は人類に貢献をする科学でなければなりません。

平和の言葉が必要です。ジェスチャー、シンボル、メッセージなどを評価し直すための平和言語が必要だと思います。すべての人類の統一に向けてそのような努力がなされなければならないと思います。

我々の運動はイデオロギー、文化あるいは宗教の境界線、あるいは国境があってははいけません。ナショナリズム、偏見を克服し、超越し連帯すべきです。

世界の人々はみんな平和を欲しがっています。東西の架橋を築くべきです。すべての障壁を撤廃すべきです。そして南北、東西の間の平和を作るべきです。すべての人々のための統一性、幸福を我々は欲しがっているのです。

議長、御参会の皆様、以上、平和都市ボローニャからのメッセージであります。特に日本の友人の皆様にお伝えしたいメッセージであります。

日本の皆様が大変に温かく、友情を持って受け入れてくださいましたことを心より感謝いたします。

コーディネーター（飯島宗一）

ありがとうございました。次はフォルリ市のジョルジオ・ザンボーニ市長にお願いいたします。

フォルリ(イタリア)市長

バンダ・バルナッチ

会長そして御参会の皆様、私はフォルリの市長で、バンダと申します。

フォルリは中間産業、工業、農業が盛んな地域でございます。また銀も産出しております。

それから自由のために闘っております。これには男女共に参加しております。すべての市民が宗教的、精神的自由を求めております。

皆様方にお話し申し上げることを光榮に存じます。

45年前、長崎、広島では非常に恐ろしい破壊が、初めての原爆の結果としてもたらされました。一方フォルリは最近自由になりましたが、これは自由のための対決の結果であります。広島、長崎は、荒廃の後すべての人の協力及び努力の結果再建されました。

過去45年間どれだけの戦争が起こり、現在でもどれ

だけの人が戦いを続けているのでしょうか。

しかし、世界では新風が吹き始めています。多くの市長が集まり平和を求めています。平和の風が吹き出したわけです。

ヨーロッパの超大国、そしてアジアの国々など世界各地でこのような新しい兆候が見られており、われわれはその兆候を進展させていかなければなりません。

フォルリは常に平和の都市として宣言して参ったわけであり、市民の連帯を作りあげ、そして世界に平和をもたらそうとしているのであります。

フォルリでは平和のために闘い、非核宣言をしています。また民主主義な同意に基づき、どのような核兵器についても生産や実験の停止を求め、また環境や社会に危険をもたらすものを禁止する働き掛けを行っています。市民もこれに参加し、そして環境保護のため活動し、そのほか各国で起こっている問題についても解決を模索しています。

若い人たちには平和に関する文書を書き、詩を書きあるいは絵を描くことを奨励しています。平和を求める意思を表わすために奨励しているのです。学校では暴力に対する抵抗を示すため、それに対する意思を教育し、日常の中でその意識を作り出しています。

フォルリでは文化交流をほかの市、ポーランド、ドイツ、フランスの都市と行っております。将来的には、我々の関心を第三世界の現実に向けるため、そのような国々との交流を求めていきたいと考えております。

また環境保護に予算を割くこと、また社会及び市民へのサービスに予算を割いております。さらに、高齢者に対しても予算を割いております。

フォルリからここに御参会の皆様に申し上げたいことは、皆様方と連帯していきたいと考えていることでございます。

平和を求めての連帯であります。つまり軍縮を実現し、核の危険性を削減したいと考えております。それと同時に環境も保護したい。これは世界のすべての人類を守ることであります。これらの目的のため、平和において協力していきたいと考えております。

つまり新しい形態の協力であります。そのため我々は国々をそのような協力ができるようにさせていかなければなりません。また、飢餓を撲滅し、差別を廃止していかなければなりません。

同時に我々の考え方や力はそれぞれ違うと思いますが、平和のための方向性は同じだと思います。

最後にある女性が死を前にして書いた詩を御紹介し私の発表を締めくくりたいと思います。この女性は戦争に対して反対し、またナチスに対して反対しながらこのような文章を書きました。「もし我々が、子供を

含む全人類と手と手をつなぎ合わせる事ができ、そして更に前進することが出来れば、どの国々とも、東も西も電氣的なつながりでつなぎ合わせる事ができるだろう。」という言葉であります。どうもありがとうございました。

コーディネーター（飯島宗一）

グラスゴーのスーザン・ベアードさんいらっしゃいますか。

グラスゴー(イギリス)市長  
スーザン・ベアード

議長、お集まりの皆様方、スーザン・ベアードと申します。グラスゴー市の市長でございます。各都市の平和活動のお話を聴き心強くなりました。

ここで私も、グラスゴー市の代表としてどのような平和促進運動をしているのか、報告させて下さい。私ども平和政策を促進してまいりましたが、これはグラスゴー市内だけの活動ではありません。私どもは英国国内さらに国際諸機関と一緒に運動してまいりまして、その中で市の政策を促進してまいりました。核脅威のない世界樹立のための運動を国内及び国際的にやってまいりました。

グラスゴーは1981年非核決議を最初に採択いたしました。その目的はグラスゴー市を非核地帯化することでありました。この決議は、イギリス政府に、核兵器をグラスゴー市の管轄内では造らせず、持ち込ませないということでありました。

1983年市議会に非核問題に関する小委員会が設立され、それ以後市は平和政策促進のためいくつかの活動を推進してまいりました。

その中には展示会が入っております。またローカルな平和運動グループへの支援も行っております。

1986年には太平洋諸島の国より婦人平和運動家をイギリスへのツアーに招き、1985年には広島・長崎の被爆40周年の式典を行いました。

また、グラスゴー市は非核政策を推進するに当たりまして、国内の各機関と密接に連携しております。1986年にグラスゴーは非核地帯スコットランド運営委員会の委員になりました。また私どもは全英国をカバーしております全国非核地帯運営委員会のメンバーでもあります。

1986年には我が市はその運動の中に、原子力の問題を含めまして、イギリス政府に請願を行いました。すなわち原発の新設停止、原発建設計画の停止、既存原発の段階的撤廃、原発に代わる新エネルギー、つまり風力、波力、太陽エネルギーの利用を英国政府に要求

しました。

今後グラスゴー市は、非核政策をローカルなレベルでも、全国さらに国際的分野でも強力に促進していくつもりです。

1990年11月、この年はグラスゴーがヨーロッパの文化都市として祝福される年でもあります。グラスゴー市地域議会とストラッツェライド地域市議会が、第5回非核地帯地方自治体国際会議を主催しますので、どうぞいらして下さい。

コーディネーター（飯島宗一）

ありがとうございます。では続いてアーバイン市のラリー・A・アグラン市長にお願いいたします。

アーバイン(アメリカ)市長

ラリー・A・アグラン

ありがとうございます。組織委員会、運営委員会また代表の皆様、私はラリー・A・アグランと申します。カリフォルニア州アーバインの市長であります。

アーバインは新しい、計画された都市であります。美しい都市です。

しかし、残念ながらアーバイン市は軍備競争に大きな貢献をしている町なのです。我が町は今でも武器を造っております。これは我々ローカルなものが選んだわけではありません。なぜかわしい国の政策の結果なのであり、我々はそれを克服しようと努力しているところでもあります。

私は、この5年間に3度広島を訪問いたしております。何千というすばらしい言葉を耳にいたしました。平和について、核軍縮について、平和促進について多くの言葉を聞いてまいりました。ただ残念なのは具体的な行為を指さすことができないことでもあります。平和を促進する具体的なものが見えないのです。そこで私はこの会議に出席いたしました。

私自身の努力とさらに皆様との連帯を強めるため、米国のブッシュ大統領あての書簡を用意してまいりました。これからそれを読みますので、皆様に署名していただきたいと思っております。では読ませていただきます。

「ブッシュ大統領、4年前のこの日に23ヶ国、100都市の市長が広島に集まり第1回世界平和連帯都市市長会議が開催されました。米ソのリーダーに、それぞれイニシアティブを行使し、核兵器を削減し、核兵器のテストや改善をストップするようお願いしました。

包括的核実験禁止条約が最も重要であります。核兵器の基礎をなくし、新しい核兵器システムの配置を不可能にするため、そういう条約が必要であります。耐震検証また現場でのインスペクションの技術を実行し

なければいけません。そして包括的な核兵器禁止条約を侵害することがあってはなりません。

我々にはそのために必要な政治的意思が必要であります。しかし、25年間政治的意思が欠如していました。昨年は部分的核実験禁止条約の25周年でした。これで米ソは地上における核実験を停止しました。両政府は書面によりそれを約束しました。これが最初のステップであり、これを基にあらゆる核兵器の実験を止める包括的な条約へと進み、これにより1968年の核拡散防止条約の実行を促進しようとしていました。この約束を今こそ実行しなければなりません。

我々米ソ国民あるいは世界の国民は核兵器の脅威の下では生存できません。たとえミサイルあるいは爆弾が落ちないとしても、経済的、社会的なフォールアウトが我々の都市を破壊するでありましょう。

ブッシュ大統領、広島を訪問して下さい。広島でゴルバチョフ書記長と会って、この資源の無駄を止めるための文書に署名して下さい。文明の破壊を止めるという文書に署名して下さい。」

市長の皆様、市長の代理の皆様、各都市の代表として、この嘆願書に署名していただけないでしょうか。ブラグマンさんからこの文書を配布していただきます。

少なくとも一つの具体的な目に見える行動をしたいと思うのです。

最後にもう一つ提案があります。それは、言葉でもって書かれた手紙であります。私どもは行為、行動を取る必要があると思っております。

この市長会議、また事務局の皆様是非正式な招待状を、ブッシュ及びゴルバチョフに送り、1990年の8月に広島に来てもらって、条約に署名してもらい、それにより核戦争の脅威から人類を解放してもらいたいと思っております。それができれば、本当の仕事を始めることができます。つまり生存についてのグローバルなサミットを開くことができるでしょう。

市議会議長、地方政府の関係者、市長が一緒になってサミットを開き、地球の生存のための討議をします。オゾン層の破壊の問題を解決する。環境汚染の問題を解決する。さらに地球の温暖化の問題を解決する努力を具体的に始めるべきだと思います。

ありがとうございました。

コーディネーター（飯島宗一）

どうもありがとうございました。後ほど、今のアグラン市長さんのお手紙は配布されると思いますが、もしそれに御賛成の方はどうぞ御協力を願って、アーバイン市の行動を皆で応援いたしたいと、こういう感じを今持ちました。それでは続いて、カブル市のモハ

マド・ハキムさん、お願いいたします。

カブール(アフガニスタン)市長

モハマド・ハキム

議長、市長の方々、御参会の皆様、私はカブールからまいりましたハキムでございます。この会議に参加できることを大変光栄と考えております。この会議には、世界の地域社会のリーダーの方々がお集まりになっています。

これには重要な意味があると思います。すなわち平和を促進し、世界の相互理解を深め、各国の協力を推進することです。

市長として意見を交換し、市民、地域の問題—すなわち我々の市の行政が直面しているような問題について、その対策あるいは手段を求めて行く非常にユニークな場と考えております。

まず最初に、私及び代表使節団を御招待いただいたことに、お礼を申し上げ、それと同時に、私はこの会議が成功の内に終わるよう最大限の協力を行うことを申し上げたいと思います。

私はカブールを代表して来ておりますが、カブールはアフガニスタン共和国の首都でございます。今血の決戦の最中にある都市でございます。カブールでは大きな戦闘は行われておりませんが、しかしロケットの乱発であるとかそのほかの砲弾により大きな影響を受けております。

同時に反政府グループによる経済封鎖でも大きな影響を受けております。カブールが直面した問題は空前で大きなものでした。

過去20年以上の中で最も寒い冬の最中にカブールに通じるハイウェイが封鎖され、食糧そして燃料の供給がストップしました。

ヨーロッパが戦火の最中であつた時と、アフリカの食糧危機を合わせたような非常に深刻な事態に直面したわけでありまして。

そして常に大きな影響を受けるのは、弱い層であります。しかし、幸運なことに、最悪の事態は抜け出しました。しかし正常とは言い難いものであります。

そのほかの問題として、例えば、人口問題、衛生問題、水道設備、電気設備や都市交通の問題が、戦争のため大きな影響を受けています。人口に関しては、アンバランスな増加を生じております。50万以下だった人口が、ここ10年の内に250万人に膨れ上がったのです。つまり異常な事態が発生しているわけです。市民は住宅問題で苦しんでおります。都市行政により可能な対策はごく限られております。市民のニーズにこたえることが、非常に難しいわけです。

我々は、このような問題に関してのアピールをいたしまして、いくつかの国の都市から援助を受けております。我々の負担を少しでも担っていただいております。

カブールの状況は、そのほかの国から切り離して改善を図ることは不可能であると思います。つまり国全体の平和なくして、我がカブールの都市問題の十分な解決はありえないのであります。

そして政策の調停を宣言する。これはアフガニスタン政府が宣言したものでありましたが、これによって大きな進歩がございました。

そして国民は最悪な戦争に関し、政府との交渉を行い、国家統一を行うということになったわけです。そして都市としましては、民主的条件を最大限に利用し、その政策に取り組んでおります。

カブール市の各地域に、区議会委員会を、カブール市政の下に確立しました。市議会のメンバーも選出され、30年の中で初めて、市議会が設立されました。

また、政府から市に援助金が出されておりますが、援助はありますけれども、市の活動に関しては、市に任されています。

カブールは現在、主要な世界の都市との関係、協力を拡大していこうという仕事に取り組んでいます。

これに関し、この機会を利用させていただき、市長の皆様方、御参会の方々に、御協力をお願いするアピールに、おこたえいただき、より近い関係及び御協力を賜りたいと考えます。

ここに御参会の都市の中には、御援助をいただいているところがございます、それによりカブール市の問題をよりよく解決することができております。

例えば、使節団を送っていただき、実際の状況を見ていただきたいと思います。

御清聴ありがとうございました。

コーディネーター(飯島宗一)

どうもありがとうございました。次はマラコフ市のミシェル・シボ助役をお願いいたします。

マラコフ(フランス)市助役

ミシェル・シボ

御列席の皆様、私はシボと申しまして、マラコフ市の助役を務めております。

マラコフ市はパリ市に隣接している町でありまして、人口は3万3000人です。私はこのマラコフに、広島・長崎研究所を造りました。したがって私としては是非広島に来て、広島の平和アピールに加わりたかったわけでありまして。私自身、日本人の妻と

結婚しております。

昨日及び今日、多くの方が発言されました。私どもの今回の会議の趣旨は、多くの発言の中で十分に強調されていると思います。

都市は具体的政策を採り、そして毎日の生活を通じて、平和実現のための国際的関係を強化しなければなりません。平和実現のためには、都市間の交流を高めることが当然必要であります。都市中での博愛の精神を、もちろん高めることが必要であります。

御存じのように今年フランス革命200周年の年ありますので、この博愛の精神というものが、特に強く私どもの心に訴えるのであります。

マラコフ市は平和がそれぞれの国の憲法の中で人権の一つとして明記されることを希望するものであります。平和がなければ、人間のほかの自由というものは存在しないと同等であると考えます。

都市は平和のために重要な役割を果たすべきであります。そのために必要なのは、情報と教育であります。

非核都市宣言は、平和に関する情報を広める目的に、当然、貢献するでしょう。マラコフは小さい市でありますので、非核都市宣言を行っておりません。イギリスは核保有国であります。既に非核都市宣言を行った市が多く存在します。フランスも核保有国ですが、非核都市宣言をした市はまだ存在しません。このようにイギリスと比較しても非核宣言都市という面ではフランスは遅れています。

もう一ついかに情報を上手に利用するかという点に関し、今年のフランスのカンヌの映画祭のことを話したいと思います。

今年のカンヌのフェスティバルでは日本の監督の「黒い雨」という映画が紹介されました。原爆資料館に行かれた方は、「黒い雨」がどのような意味をもっているか、よくお分かりだと思います。

今村監督は1983年に映画「楢山節考」でカンヌの大賞を受賞しております。この度のやはり今村監督の「黒い雨」がもっと多くの都市において紹介されれば、広島の実現をもっと多くの国の人々に知ってもらうことができると思います。広島は日本の市というより世界の市として、多くの貢献をなすことができます。

広島及び長崎のことをより深く紹介することによって、原爆に関する情報を広く伝えることができます。マラコフ市の場合も積極的に、広島あるいは長崎に関する資料を集めております。

このようにマラコフ市は、原爆あるいは核の問題について特に強い関心を持っているわけですが、いま一つ私どもは姉妹都市関係を深めることによって、平和に関する運動を世界的な規模に広めていきたいと

思います。例えば、コルシコと私どもは姉妹都市関係を結んでおりますが、コルシコも今回世界会議に代表を送られているということで私も嬉しく思いました。

世界平和に貢献するため、私はここで一つ提案をしたいと思います。

都市がいろいろ平和のためイニシアティブを採って努力していますが、それぞれのイニシアティブを国境を越えて広めることはなかなか難しい。

しかし、このような世界会議を通じて、各平和都市はどのようなイニシアティブを採っているか、平和のためにどのような予算を組んで、どのような計画を実行しているかを紹介できます。

各都市の努力をその都市のレベルに留めるのではなく、それぞれの努力を集め、より強い力を結集し、平和への前進を目指すべきであります。

マラコフ市は、このような会議が度々開かれ、その努力が実りあるものになることを希望いたします。

ありがとうございました。

コーディネーター（飯島宗一）

ありがとうございました。では次はモントリオール市のジョン・ガーディナーさんをお願いします。

モントリオール(カナダ)市助役

ジョン・ガーディナー

議長、お集まりの皆様方、私はジョン・ガーディナーと申します。助役をしております。また、モントリオール市執行委員会委員であります。

市長ジョン・ドーレ及びモントリオール市議会議員に代わり、広島市の荒木市長及び広島市役所の皆様に、大変すばらしくまた温かい歓迎をしていただいたこと、及びこの第2回世界平和連帯都市市長会議が立派に運営、実行されていることに、心より感謝いたします。

私どもの町は今から3年後に350周年を迎えるわけですが、これまで直接の戦場になったことは一度もありません。しかし、私どもは戦争の不幸を経験された方、特に被爆44年目の広島市民の皆様の体験に、心より同情をいたしている次第であります。

モントリオールは、平和を促進し、核軍縮の努力をしておりますが、原爆犠牲者にお悔やみを送り、決してこの過ちを犯さないという希望を実行したいと思えます。

1986年12月モントリオール市は市議会の満場一致の議決により、非核地帯宣言を行い、世界の何千もの地域社会とともに、平和核軍縮の努力をする仲間に入りました。

市としては外交政策を立てることはできませんが、

その意思をこのジェスチャーで示しました。これは市民の日常生活に最も密接している市行政機関としてやるべきことだと思ったからであります。それ以来2つの政策を実行しております。つまり世論啓発と市政の2本柱であります。

第1は市民の意識を高めること。つまりモンリオール市が非核地帯であることの意識を高める教育をし、世界を恐るべき核戦争から守る重要性を啓発しています。

1月以来、私どもは市の主要な道路沿いに、非核地帯のポスター及び世界平和のシンボルを掲示しました。

また、市は平和促進の活動を行っているグループを援助しております。1988年10月の平和行進の際、あるローカルグループが組織し、モンリオール地域の小学生から戦争ごっこのおもちゃを全部集めました。これは、モンリオール平和公園に、将来完成される彫刻の中に入れられます。

2つ目の政策として規則を制定しております。すなわち市は市中における核兵器及びその部品の設計、製造又は貯蔵、輸送を禁止し、抑制し、制限する規則を設けました。ケベック州議会の討議を経て、6月21日にモンリオール市憲法が改正されまして、これらの規則を市が採択する権利を獲得いたしました。

ケベック州の市としては初めてのことであり、モンリオール市が、その最初の例となったことを誇りにしております。

現在さらに、規則の拡大を検討中でありますが、今後さらに政策に力を入れる必要があります。

対象企業の業種転換を促進する政策が必要であります。同時に安定した雇用を作り出すことも我々の政策です。社会的に責任ある投資を企業に要請しております。

最後に、平和目標を実現するため、我々は市民委員会を作り、この委員会が、市に、非核政策に関するアドバイスを提供しています。

私どもは他の同じ志を持ったカナダの市との間で平和ネットワーク運動を行っています。

このように我々は平和運動、非核軍縮運動を進めています。

私がこの会議に出席いたしましたのは、もっと多くのことを市として実行したいからです。この会議から大きな勇気と多くのインスピレーションを得て持ち帰ります。

荒木市長ありがとうございます。組織委員会の皆様、すばらしい仕事に感謝します。

御清聴ありがとうございました。

コーディネーター（飯島宗一）

では続いて、中野区の神山好市区長にお願いいたします。

東京都中野区長 神山好市

皆さん、お早うございます。私は、東京中野区長の神山でございます。中野区における平和への取組について御報告をさせていただきたいと思っております。

第2回世界平和連帯都市市長会議の御盛会を心からお喜び申し上げるとともに、会議の開催に御尽力された広島・長崎両市及び世界平和実現のため努力を傾けられておられる参加各都市の皆様には深く敬意を表したいと思います。

私たちの中野区では、7年前の1982年8月、核兵器の廃絶と恒久平和を願う区民の共通の意思として、憲法擁護・非核都市の宣言を行いました。

この宣言は、国連軍縮特別総会に向けて世界の各地で盛んに展開されていた核兵器廃絶の草の根運動を背景に中野区民約1万2000人から請願が出され、これを中野区議会が採択したことにより生まれたものです。

以来中野区ではこの宣言が区民の主導で実を結んだことを誇りとして、宣言に込められた、平和への願いを日常的に確認し合いながら、それを内外に広める努力を積み重ねてまいりました。

区内にあっては宣言文のパネルを各公共施設に掲示をし、その趣旨の周知を図るとともに、平和記念碑、平和資料展示室の設置、原爆写真展や、平和フォーラムの実施など、平和を考える様々な企画を設定し、区民とともに宣言の意義を考えてまいりました。

また対外的には、東京都内の非核宣言都市との連絡会の開催を始め、海を越えたイギリスの大ロンドン市、ドイツ民主共和国のドレスデン、マクデブルグ両市、ニュージーランドのウエリントン市の非核、平和の共同宣言や声明、北京西城区との友好協力関係が非核自治体、国際会議への出席などを通じて、中野区民の平和を願う心を広く内外に訴えてまいりました。

ところで世界に目を転じると、一昨年の米ソ間による中距離核戦力、INF全廃条約の発効に続き、今年は戦略兵器削減交渉の再開の動きが伝えられるなど、その潮流は軍拡から軍縮へ、対決から対話へと流れを変えようとしています。しかしやむことのない核実験の強行や、各地での武力紛争の報道など、世界は依然として予断を許さない状況にあります。

さらに地球規模の環境破壊、飢餓、貧困、人権侵害等といった平和を脅かす多くの困難な問題も抱えています。

こうした状況にあって、私は今こそ世界の都市と市

民は連帯し、交流を通じて平和を求める世界世論を喚起すべきときに来ていると思います。

戦争などによって最も被害を被るのは都市であり、そこに住む市民であることを思うとき、都市と都市が連帯して、平和のとりでを築くとともに、都市と都市が連帯して、平和な社会を築くために努力しなければなりません。

国際政治という厚い壁の前に一人一人の願いは無力であるように見えても、市民の意思を体した都市の行動は必ずや世界の潮流を変える原動力になると確信し、私は今後も内外の都市との交流を続け、恒久平和を希求する中野区民の心からの願いが大きな世論に高まるよう、できる限り努力を払ってまいりたいと思います。

最後にこの会議の実り多いことを願って、簡単でございますが、中野からの報告とさせていただきます。

ありがとうございました。

コーディネーター（飯島宗一）

どうもありがとうございました。

次は、パルマ市のエルビオ・ウバルディ助役さんをお願いいたします。

パルマ(イタリア)市助役  
エルビオ・ウバルディ

パルマ市ですが、平和と協力を実行してまいりました。しかし、戦時中は多くの命が失われました。第二次世界大戦中も多くの命を失ってしまいました。

現在のパルマは大変に繁栄している町であります。社会保障も充実しています。そして、パルマ市は三つの要因を通して発展を続けております。これらは重要な三つの要因です。第一は、長期間平和が存在しているということ。長い間、戦争はありません。第二は、社会正義、そして民主主義が私の地域社会の中に浸透していること。第三は、経済・文化のアイデンティティと特徴というものを強化しているということです。

現在は、核兵器の脅威だけではなく、バクテリア、生物・化学兵器も人類に脅威を投げかけています。また、人種差別政策が行われております。人々の間の、国民の間の対立闘争が行われております。

平和を実現しなければなりません。人々、一人一人の生活の状態、そして各市、各地域社会、各国の生活水準の改善、それらの相互共存、平和共存が必要です。

したがって、私どもは、平和に向けての若年層を始めとする教育を行わなければいけません。平和は、諸国民間に永久的に存在しなければいけない条件です。

不正義、暴力、理解不足の原因をなくさなければいけないと思います。平和の理解を通して、平和を擁護

しようという強い意思を、人々の間に育てる必要があると思います。我々の組織化が必要です。諸国民の間だけではなく、各都市の間で、人々の間での連帯を築き、強化をし、経済・文化的な違いを乗り越えて、運動を繰り広げていく必要があると思います。各地域社会の個性の中で、その具体的な現状の中で平和運動を行い、すべての人々に理解され、浸透するような運動をする必要があると思います。

私たちは、人種主義者、人種差別主義者であっては いけません。最もすぐれた要素を利用しなければいけません。そして、国際的なプロジェクト、つまり平和のプロジェクトを進めるべきだと思います。

パルマ市は、この意味で大きな伝統を持っておりま す。特に、市の農業の部分は重要な産業でありまして、何百もの活動をやっております。協力センター、リサーチセンターをやっております。

パルマ市議会は、現在、国際農業、普及事業の組織を設け、その運動をしております。市の行政担当官、また、大学研究センター、民間の企業などが一体となり、すべての国に、特に発展途上国に対して、知識、ノウハウを、特に農業システムについての知識、ノウハウを提供しているところでもあります。発展途上国への農業発展促進の努力もしているわけであります。また、重要なデータベースを農業問題につき、食糧問題につき作りました。

解決すべき問題が山積しております。地球は一つの地域社会にならなければいけません。その将来を真剣に考えなければいけません。環境を守らなければいけません。これは全員にとっての問題です。飢餓の問題、そして、人口増加の問題、これらはすべて全員にとって共通な問題であり、その克服が可能であることを希望しています。

勇気とある程度のユートピアが必要でありましょう。これらの問題の克服にあたって、勇気を持つべきです。エネルギーを人種主義、不要な戦いに費やすべきではないと思います。

ありがとうございました。

コーディネーター（飯島宗一）

リノ・シルビノさん、お願いいたします。

テラモ(イタリア)市  
リノ・シルビノ

議長、そして御参会の皆様、私の名前は、リノ・シルビノと申します。テラモからまいりました。私の同僚であるガッティとともに、この第2回世界平和連帯都市市長会議に出席することができ、また、テラモを

代表してお話を申し上げることができ、光栄に思っております。

多くの障害があるということを見てきておりますけれども、ユートピアというのは今や我々の空想の世界ではなくて、同じような目的を持ち、そしてお互いに愛し合い、それと同時に、現状を見つめることが必要だと思えます。

つまり、エゴ、そして暴力があるわけでありまして。そして、我々は、人々が協力しなければならないことを理解するという、連帯の必要性を理解しなければならないということを考えていただきたいと思えます。これが、我々の会議の一つのメッセージだと思えます。

そこで、私どもは、お互いに地球を守ることが必要であるということを確認し、常に協力をする必要があるということを確認し、そして、イデオロギーだけでは生存できないということを理解しなければならないと思えます。皆様との協力が必要であります。そして我々すべてが協力して、この共通したゴールを目標とし、そのことを達成しなければならないわけでありまして。

歴史を顧み、そこから抽象的なものとしてではなくて、現実的な確固としたものを求めていかなければなりません。そして、この共通したゴールに協力して到達していきたいと考えております。そこで、私が今申し上げたことは、ここに出席して確信したことでもありますし、また同じようなゴールに向かうことができる人だということを非常に幸運なことだと考えております。

我々の市民は、また世界の人類は、ただ単に生存するだけではなくて、個々が生存するだけではなくて、お互いに助け合わなければなりません。我々よりも貧しい人々たちに対して手を貸さなければならない。それに協力をしていかなければならない。というのは、無駄なこの軍事競争を止めなければならないということが言えると思えます。

ですから、皆様方に対して、広島・長崎が決して二度と起こってはならないようにということを申し上げたいと思えます。これは、過去の戦争の大きな犠牲であったわけですが、それに対して、決して二度と起こしてはいけないと考えるわけでありまして。そして、平和を求めたいと思えます。

非核のメッセージをテラモ市から申し上げたいと思えます。アドリア海に面している地域でありますけれども、そこからのメッセージを受け取って下さい。最後にもう一度、この会議を開催していただいたことにお礼を申し上げ、また、出席できることを光栄に思い

ます。

文化の違う人々、習慣・伝統の違う人々、歴史の違う人々がここで一堂に会し、そして平和を共同して求めていくのであります。過去の失敗を繰り返してはいけません。絶対、起こしてはいけないのであります。

また、平和というものの価値を、既に皆さんは理解していらっしゃると思えます。核の全廃、そして、何千万何百万人の犠牲者を出してはならないのです。お互いに話し合い、協力をし合わなければならないのです。そこで平和を確立し、若い世代のために平和を確立し、また世界平和とともに——毎年、私どもは7月10日にハンドボールの大会を開いているわけですが——これと同時に、お互いに平和を求めていかなければならないと考えているわけでありまして。

お互いに協力をし、話し合いをし、偏見をなくし、人種差別をなくし、そして、我々が敵対していたことを忘れてはならない。また、若い世代に対して、世界平和をもたらさなければならないわけでありまして。お互いに会すことにより、頻繁に会い、人々と話し合いをしていかなければならないわけでありまして。共通したゴールに向って、お互い人々が集まって話し合う必要があるわけでありまして。そして、若年層が、この我々が採っているイニシアチブにも参加してほしいと考えております。平和を求め、そして、この第2回世界平和連帯都市市長会議のアピールとともに進んで行っていただきたいと思えます。

ありがとうございました。

コーディネーター（飯島宗一）

ヴェルダン市のジャック・バラ＝デュボンさんにお願いいたします。

ヴェルダン(フランス)市  
ピースメッセンジャー都市会議議長  
ジャック・バラ＝デュボン

皆さん、こんにちは。

ちょうど4年前、私どもは広島と長崎市の招待を受けまして、原爆40周年記念の式典に出席することができました。4年前も核戦争をなくす、核実験をなくす、そして、平和を実現する、ということで私どもはいろいろな話し合いをいたしました。

核を廃止するというところで、いろいろな努力はしておりますが、フランスは核保有国であります。非常に残念であります。フランスは核保有国であり、そして核実験を行っております。私は、フランス大統領に直訴して、ぜひこの核を廃絶するように要請して、これからも努力をするつもりであります。



私は、本日、ピースメッセンジャー都市会議の議長としてお話し申し上げております。このピースメッセンジャー都市会議というのはどのような団体なのでしょう。一言説明させていただきます。

1986年は国際連合の国際平和の年でありました。この年、国連は世界の62の都市に対して平和のメッセンジャーとしての表彰を行いました。これは、この62の都市が特に平和のために多くの貢献をしたということを表彰したものであります。

今日、この国際会議に出席している方々、キエフ、ボルゴグラード等々、今回この会議に出席している都市の多くが、この62の表彰を受けた中に含まれております。デリー、バンクーバー、サンフランシスコ等々、多くの都市がこの表彰を受けたわけであります。すなわち、平和のメッセンジャー都市としての資格を得たわけであります。

そこで、私は一つの考えを抱いたわけなんです。お互いにどのようなことを平和のためにしているのか、一堂に会して、会議を開いたらどうであろうかと思ったのです。そこで、私は国連の事務総長のデクエヤル氏に手紙を書きまして、ヴェルダンに来ていただけないだろうか、すなわち、62の平和メッセンジャー都市の会議に出席していただけないか、と要請したわけなんです。

ヴェルダンという都市は、第一次大戦を通じて60万人のドイツ人、フランス人あるいはその他の国籍の人が生命を失ったわけであります。ですから、ヴェルダンがこのような会議を開くには正に適切な都市であったわけなんです。

そこで、早速、デクエヤル事務総長は私に返事を書いてくれました。是非、この会議に出席したいというお答えでありました。ところが、皆さんは、62の都市は世界のそれぞれのところに分散しているので、絶対に一堂に会することはできないであろう、と。ところが、実際は一堂に会することができたのです。62の都市の中には、市長自身が出席された方もあったし、そして、フランス駐在のその国の大使が出席した国もありました。

デクエヤル事務総長には絶対御出席いただきたいということで、場合によっては、特別機を用意して迎えるに行こう、という話さえあったわけであります。

ヴェルダンというのは小さな町であります。国際的な都市として、この1988年の9月7日、8日というのは多くの人たちが集まり、そして、テレビでも報道されましたし、大きなイベントとして実現いたしました。

私は、また医者でもあります。医者もこの核戦争反

対のために団体を作っております。このように医者もが団体を作って、核戦争に反対するという動きはたくさんあります。私自身医者としてそのような運動を展開し、1985年にはノーベル賞をいただきました。

私どもは政府に対して戦争を絶対に引き起こさないように強く、強く、申し出るべきであります。昨年9月、ヴェルダンで国際会議を開きました。この小さな町が急に国際的な会議の場となったわけです。中国の大使、アメリカの大使も出席されました。そして、ラウンド・テーブルの周りに、中国・アメリカ・ソ連という三つの国の大使が隣合って座るということもできたわけです。

現在、デタントのことが言われております。確かにデタントは実現しつつあります。デタントというのはしばしば上から下へと流れるわけでありますが、しかし、ヴェルダンの場合のように、デタントが下から実現する場合もあるんです。

しかし、多くの国が核保有国になろうとして、多くの軍事費を費やし、あるいは既に保有国となっている国はより多くの核を持つと、いろいろなお金を費やしているわけであります。核保有国というのは、核に代わる兵器がないということで、したがって、核を持っているしかないのだ、という理論を展開いたします。ですから、核に代わる武器がないのであれば、すべての武器を放棄すればよいわけなんです。

核実験をソ連はシベリアで行い、そしてアメリカはネバダ砂漠で行っている。このように核保有国の多くが相変わらず核実験を行って、更に、核の保有数を増やそうとしております。

世界というのは丸いものであり、そして、24時間かけて一回転するわけでありますが、このように丸い地球においては、チェルノブイリのようなところで核の事故が起きれば、それは丸い地球を伝わって私の町ヴェルダンにまで、その放射性物質が降ってくるわけなんです。このように地球の非常に遠い所で行われているから自分には関係がないということは絶対に言えないのです。

グルジア、ビルツ、フィレンシエ、マドリード、ハーマンリフ、ヴェルダンといった都市が一堂に会しまして、ワルシャワで9月1日から3日まで国際会議が開かれます。これは、ポーランドをドイツ軍が予告なしに侵略したその日でありまして、国際会議が開かれるわけでありますが、その際に是非62の平和都市、ピースメッセンジャー都市の代表にも出席していただきたいと思っております。

日本の都市の方にも是非今年の9月にはワルシャワで会議に参加していただき、再び、この平和の問題に

ついで協議をしていただきたいと思ひます。まだ招待状が行っていない都市の代表の方々には、私がヴェルダンに戻りましたら必要な手続をしたいと思ひます。

昨日、そして今日といろいろな意見を聴きました。このようなことから、皆さんは全員ピースメッセンジャーであるといえると思ひます。したがって、62の都市だけではなく、皆さん全員ピースメッセンジャーとして、十分に資格をお持ちであります。ですからこのワルシャワでの会議にも多くの方が出席をし、62都市以上の代表が平和について会議をし、そしてお互いの友好を高め、平和の協議をしたいと思ひます。

平和の話は度々出てきます。しかし、停戦協定はありますが、平和条約というのはまだできておりません。第二次大戦のあと停戦協定はできました。しかし、停戦協定は平和条約ではありません。平和の話はしますが、相変わらず世界のどこかで紛争が続いております。だからこそ停戦協定を平和条約にする必要があるわけなんです。あと6年いたしますと、第二次大戦終了50周年を迎えることとなります。そのときには是非この停戦協定を平和条約として、平和の実現のための大きな一歩を築きたいと思ひます。

若い人たちがピース、ピース、平和、平和と言っております。私たちは、勝った者も、負けた者もこの戦争のお互いの敵対関係というものを忘れ、そして、平和条約というものを実現するために努力を集中していただきたいと思ひます。第二次大戦終了50周年を祝って、是非停戦協定を平和条約に変えていただきたいと思ひます。

勝利者も、そして敗北者も完全にもう戦争は終わったのだ。戦争の原因というのは、経済的な原因、あるいは領土的な原因、いろいろな原因があります。しかし、核を使って隣国を破壊するというような馬鹿げた行為は完全に放棄すべきです。そのような核戦争を行えば地球は死んでしまいます。皆さんも十分に御存じでしょう。核戦争があればこれは地球の終わりを意味するということを。自分の国の国民だけが生き延びるのではなく、自国の人たちも核戦争の犠牲者になります。

ですから、五大大陸の人たちは、もし核戦争をやるということであるならば、地球以外の惑星を探しに行かなくてはなりません。まず、地球の住民を他の惑星に移して、そして核戦争をすればよろしいでしょう。そうすれば地球が破壊され、そして人類はほかの惑星に住むこととなります。しかし、そのようなことは当然不可能なことです。私どもは、太陽系の中の一つの惑星として、永久にこの地球を残さなくてはなりません。そのためにも核戦争を絶対に起こすことはできま

せん。

広島・長崎の方々のおかげで、私どもは2回、この広島に来ることができました。あと4年後、あるいは5年後ですか、先ほど申し上げた停戦協定を平和条約にする場所を選ばなくてはならないと思ひます。

この平和条約の調印の場を、アジアでは広島とし、そしてヨーロッパに関してはヴェルダンを選ぶ。ヴェルダンというのは、10世紀からカールス大帝がアヘン条約を締結いたしましたし、このように非常に歴史的に有名な地であります。したがって、ヨーロッパではヴェルダンが平和条約の調印の場として選ばれ、そして、アジアについては広島を選びたいと思ひます。

ありがとうございました。

コーディネーター（飯島宗一）

ありがとうございました。

以上で、12の予定された発言の都市は終わりましたが、イスラエルのハイファの市長さんである、グレルさんから御発言の御希望があります。

どうぞお願いいたします。

ハイファ(イスラエル)市長  
アリー・シャロモ・グレル

議長、来賓、参加者の皆様、友人の皆様、少し発言させていただきたいと思ひます。今日のテーマに関して発言させていただきたいと思ひます。

「核軍縮と地球的平和達成に都市は何をなすべきか」というテーマですが、都市は地方政府であります。それに対して、中央政府が存在しております。

私の名前、グレルと申します。ハイファの市長です。イスラエルの3大都市の一つであります。私、こういうことを申し上げたいと思ひます。私どもの都市は「平和のため、何をしているのか。」についてです。御存じだと思いますが、中東では、イスラエルですが、まだ平和が訪れていません。過去の2世代にわたって、イスラエルは平和を共有していません。

ハイファは、私がこの11年間市長を務めている都市ですが、ユダヤ人とアラブ人、キリスト教、回教徒と一緒に住んでいます。バハイ教のセンターがあります。つまり、5か国の国民の人々が住んでおり、宗教は数種ある町です。

この混合都市、ミックスした都市におきまして、私どもは平和の状態の中で住んでいます。これは町の生活すべての中で、経済的にも社会・文化的にも平和状態の中に住むことができています。コミュニティーセンターも混合して、ミックスさせています。中東、そしてその戦争状態にもかかわらず、私どもの町では一

回の暴力行為も行われておりません。テロ行為も行われておりません。この2年間、ほかの中東地域では多くのテロ行為があったにもかかわらず、町の中では一件もありませんでした。なぜならば、お互いに話をし合っているからなのです。

市の議会でも、そして社会的にも話し合っています。一たび話し合えば、合意をしようと努力をし、相互理解をしようとする努力が始まるのです。

私たちは、過激派の人々が行動を起こし、それに対するの反対行動が起こることを許してはいけません。このような種類の行動を未然に防がなければいけないと思います。私たちはこのような生活をする事ができました。

そこで、提案させていただきたいと思います。

多くの都市と、これまで13の都市と姉妹都市関係を結びました。都市の市民、そして市民を代表する市議会が日常の生活を通して、ほかの都市の市民と親しく交流をすることができれば、お互いに同情心を持ち、理解をすることができるのであります。皆同じ生活をしている人間である、同じ同胞である、という意識を持つことができます。このことが重要だと思うのです。特に、我々都市ができることです。

政府の関係は良いかもしれませんが、しかし、それは波があります。政治、利害による波があります。経済的な影響による波が政府間の関係にあります。しかし、市民を、国民を直接代表する市は平衡点なのです。政府の波を保管することができます。国民・市民の支持を取り付け、そうすれば、平和をもたらす、均衡をもたらす力となりうるのです。このような都市間の連携、姉妹都市の関係を強化すべきです。政府に任せておくことはできないと思います。

様々な宣言がこれまでいろんな所で採択されてまいりました。しかし、ここで必要なことは新しい平和の事実を築く、平和を具現化する、ということだと思います。

ありがとうございました。

#### コーディネーター（飯島宗一）

どうもありがとうございました。

この分科会に与えられた時間がほとんどなくなってしまいましたが、もう一人、イタリアのパンク・エリーさんから御発言の希望があります。

どうぞ、御発言下さい。

#### イタリア パンク・エリ

私はイタリアの議会を代表しておりますけれども、だからといって、出席しているわけではございません。

今回は、議員であります。私は、非常に組織運営がよく行われていることを申し上げたいと思ったわけがあります。

広島市長の努力によりまして、非常に素晴らしい会議だと思っております。平和に関して、一言コメントを述べさせていただきたいと思っております。平和組織といえますものがイタリアにございまして、私はそこを代表してお話を申し上げたいと思っております。

私どもは広島の平和資料館を見ました。そして、3mの記念碑——3m×3mのブロンズの碑であります——を見ました。非常に美の調和された記念碑だと考えております。そして、これは国連でも展示されましたし、レニングラードでも展示されました。また、主要都市世界各国を回りまして、平和のメッセージを届けていると考えております。美術、芸術がこの平和運動に参加しているわけでありまして。絵画であるとか、あるいは彫刻がこの運動にも参加しているわけでありまして。平和は戦争がなくなるだけではなく、偏見がなくなり、飢餓・貧困がなくなることであります。この分野においても、我々も貢献することができると考えております。つまり、平和を世界に広げることが、そして偏見をなくすことができると思っております。まだまだ問題が残っていると思っております。

今朝は、非常に素晴らしい画期的な時間を過ごすことができました。今世紀の中でも、一つの歴史に残るものだと思います。恐ろしい原爆が広島に投下され、そして、世界に大きな影響を与えたわけでありまして。つまり、原爆の時代の始まりであったわけでありまして。この平和会議での平和を求める声が世界各地で聞かれ、世界各地の人々に届くことを希望いたします。

ありがとうございました。

#### コーディネーター（飯島宗一）

ほとんどもう時間がなくなりました。フロアから実はたくさんの御発言・御意見をいただきたいと思っておりましたが、残念ながら、この会議はこれで閉じさせていただきます。

お話をいただいた14名の方々は、それぞれ大変中身のある、また我々にとって非常に参考になるいくつかのインフォメーションをいただけたと、私は思います。どうぞまた、この会議の期間中、いろんな機会に相互に御接触を願って、そしてお互いの情報交換を深めていただく、ということは大変有意義であると思っております。

質疑・応答の時間を取れなかったことはコーディネーターの勝手であり、おわびを申し上げます。また、いろんな機会に今の御発言の方々と討論を深めて

いただきたいというお願いを申し上げまして、この会を終わりたいと思います。

御発言の方々どうもありがとうございました。お礼を申し上げます。

司会(脇坂広島市市長室平和記念館長)

昨日に引き続きまして、皆様方、大変お疲れさまでした。

報告をいただきました各都市の皆様、コーディネーターの飯島先生、本当にありがとうございました。

報告をいただいた各都市の皆様とコーディネーターの飯島先生に、今一度、拍手をお願いしたいと思います。

# パネルディスカッション

97

## ～信頼醸成への道程～

8月6日（午後1時～2時50分）

広島国際会議場 フェニックスホール

司会 NHKアナウンサー 阿部陽子

コーディネーター NHK特別主幹 磯村尚徳

### パネリスト

コモ(イタリア)市長

アンジェロ・メダ

デリー(インド)市長

シリ・マヒンダー・シン・サーテイ

ハノーバー(ドイツ連邦共和国)市長

ヘルベルト・シュマルステイーク

サクラメント(アメリカ)市長

アン・ルーディン

ボルゴグラード(ソ連)市長

ユーリー・スタロバトフ

大阪大学教授

馬場伸也

東京大学教授

鴨武彦



(司会)

お待たせいたしました。

ただ今から第2回世界平和連帯都市市長会議の2日目の午後のメイン企画であります、パネルディスカッションを始めさせていただきます。

それではパネラーの入場です。

皆様拍手でお迎え下さい。(拍手)

ありがとうございます。ディスカッションが始まります前に、放送の御案内をいたします。NHKではこのパネルディスカッションの模様を総合テレビと衛星放送第2テレビで午後1時5分から生放送させていただきます。また今週の土曜日の8月12日、教育テレビ夜9時からの番組テレビ・シンポジウムで、この模様を紹介させていただきます。是非御覧下さい。

同時通訳のレシーバーの使い方について、ここで御案内したいと思います。お手元のレシーバーでは、6か国語が聞こえるようになっていきます。1から6チャンネルの日本語、英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、イタリア語のお好きなチャンネルに合わせてお聞き下さい。

磯村さんよろしくお願ひいたします。

コーディネーター(磯村尚徳)

皆さん今年も8月6日原爆の日を迎えました。私たち日本人が毎年、この平和への思いをいたす貴重な1日であります。

ナチスドイツの軍隊がポーランドに侵略をして第二次世界大戦が始まって今年50年、半世紀がたっております。フランスのミッテラン大統領の表現を借りますと、「世界は半世紀を経て初めて分裂と対決から協調の時代に入る。その入口に立っているように思う。」というような大変に希望が持て、やっと長いトンネルの先から明かりが見えているような時期に到来しております。

そうした東西協調の新しい風を受けて、広島市の荒木市長の提唱により、第2回世界平和連帯都市市長会議が昨日と今日の2日間、この広島で開かれております。

NHKでは、この会議に出席された何人かの市長さんをこちらにお招きして、これからおよそ2時間にわたり、核軍縮の問題、あるいは核にかかわらない世界の平和の問題の様々な点について、市長の皆さんのきわめて具体的な行政の経験、その他を踏まえながらお話を伺ってまいりたいと思います。

御出席の方々を、御紹介いたします。

まず、私の横におられるのが風光明媚なアルプスを望む、イタリアのコモ市のアンジェロ・メダ市長です。

その隣は、インドのデリー市のシリ・マヒンダー・

シン・サーティ市長です。8期連続市長を務めておられ、インドでは初めての労働階級出身の市長だと伺っております。

その隣が、ドイツ連邦共和国のハノーバー市長のヘルベルト・シュマルスティークさんです。御承知のように、ハノーバー市は西ドイツの平和運動のかなり中心的な存在で、また広島市と姉妹都市の関係にありますことは御存じのとおりです。

そして、その隣がアメリカのカリフォルニア州サクラメント市のアン・ルーディン市長です。ルーディンさんは1971年から12年間にわたりサクラメントの市議会議員を勤められた後、1979年に副市長、1983年から市長を務めておられます。

続いて、その隣が、お年を召した方には旧スターリングラードと言った方が分かりがよいと思います。広島が核の洗礼を受けた町であるとすれば、通常兵器で、戦争中1942年のスターリングラード攻防戦は最も多くの犠牲者を出した激戦地の町ですが、現在はボルゴグラードと市名が変わっております。ここも広島と姉妹都市の関係にあって、町に広島通りという通りができていような、深い付き合いのある所からおいでいただいた、ユーリー・スタロバトフ市長です。

こうした市長さんたちの具体的ないろいろな経験をこれから伺うわけですが、そうした具体例をもう少し抽象化して理論化していただくということで、今日は2人の学者の方においでをいただいております。国際社会学専攻で、大阪大学法学部の教授をしておられるとともに、日本平和学会の会長をしておられる馬場伸也教授です。

そして、大変異色の御経歴ではありますが、私学の早稲田大学からこの程東京大学の教授に就任され、国際政治学の大家である鴨武彦教授です。

以上御紹介いたしましたようなメンバーの方々でこれからパネルディスカッションを進めてまいりたいと思います。

市長の皆様方にお願ひしますのは、通訳の関係もありますので、できるだけゆっくりとしかもコンパクトに短く御意見を承りたいということです。

さて、市長さん方は昨日は原爆資料館を見学されたり、今朝は式典に参列されたりと、お忙しい日程をこなしておられるわけですが、まずテレビを御覧の皆様になじんでいただくという意味合いにおいて、一言ずつ広島の印象を伺ってゆきたいと思いますが、まずコモ市の市長のメダ市長にお伺ひします。広島は初めてでございますか。

コモ(イタリア)市長

アンジェロ・メダ

初めてです、そして非常に良い印象を受けました。広島市についてとても良い印象を持ちました。広島市の市民の皆様は、原爆の廃墟の中で短期間の内に、新しい都市をしかも美しい都市を造られました。よく組織された豊かな都市へと生まれ変えさせることに成功されたと思います。

コーディネーター(磯村尚徳)

サーティさん初めてでしょうか。

デリー(インド)市長

シリ・マヒンダー・シン・サーティ

初めてです。このすばらしい、美しい広島市を訪問するのは初めてです。私は平和を愛する市民に会いました。人類初めての核の大量虐殺の犠牲になったとは信じられません。広島市民の皆様は、人類初めての原爆の犠牲となりました。ところが、現在世界の大国はもっと大きな原爆を持っているのです。広島市民の皆さんは命を犠牲としささげました。世界に知らせたのです。大量殺りくの力を知らせ、そして原爆に隠された大量の破壊力を知らせ、世界の世論を目覚めさせたと思います。広島市民の皆さんは、自分の命をささげ、この恐しさを伝える大きな役割をされたことに、心から頭を下げ敬意を表したいと思います。広島現在の市民の皆さん、また犠牲になられた方に、心から謹んで私の気持ちを表わしたいと思います。デリーを代表してです。

コーディネーター(磯村尚徳)

シュマルスティークさんは何度も広島においでになっていると思いますので、広島のお印象というよりは、今日の討論に参加されてどんな所に最も印象を強く持たれましたか。

ハノーバー(ドイツ連邦共和国)市長

シュマルスティーク

確かに私は初めて来たわけではありません。今回で4回目になります。そして、今日の午前中ディスカッションはそんなになかったんですが、様々の都市でどういうアクティビティが平和のためになされているか、それを今日勉強させていただきました。平和というものは人類にとって最も古いユートピアであるということ、我々は思い起こしたいと思います。そして戦争というものは、逆にそれに対して人類が生み出した最も古い悪の一つであります。そのことを考えると、

個々の都市というのは、この戦争が最悪の人類の発明品であり、平和がユートピアでしかなかった事実を変えなければならないと思います。そのために各都市の市民が連帯して、平和のために努力する、単に平和、平和というだけでなく、実際に自分たちの意見を表明することが重要だと思います。私どもは6年前に広島と姉妹都市の関係を結びましたときに、私はこう言いました。つまりハノーバーの町は広島に西ヨーロッパにおける出張所になりたいと私は申し上げたわけがあります。そしてその間に、6年間に広島の出張所がドイツにたくさんできました。私どもの呼び掛けで、現在ドイツにこの世界平和連帯都市市長会議に入っている町が93もあります。そして数年前以来、東ベルリンもこの会議に入ってくれましたし、西ベルリンも入りました。正に1939年のことを先ほどの磯村さんが言われましたが、第二次世界大戦の開始ですが、その開始したドイツの国家として、私どもは世界の平和に非常な責任を負っております。つまり第二次世界大戦のようなことは、ドイツの名前によって起きたこの犯罪的な戦争も、そしてあのポーランド侵略、1939年9月1日のそうしたことがもう2度と起こらないようなことを私どもドイツでは感じております。そしてこの戦争は、広島と長崎の原爆で終わったわけであり、そのために二度とこういうことが起きないように私は頑張りたいと思います。

コーディネーター(磯村尚徳)

それでは、次にサクラメント市のルーディン市長さんですが、広島はおそらく初めてだと思いますが、その御印象などを伺いたいと思います。

サクラメント(アメリカ)市長

アン・ルーディン

3回目です。1985年に第1回目の市長会議に参加いたしました。平和公園には3回参りました。その度に強い感銘を受けております。物語、歴史の語りに感動しています。悲しい所です。しかし、希望はあります。広島市の市民、長崎の市民の皆さんは、各市長のリーダーシップの下に、これを前向きな強い運動へとなさいました。私たちを教育して下さいました。そして、すべての世界に教えて下さいました。何が起こったのか、戦争が勃発したとき、非合理に侵略されたとき、我々は残念に思ったのです。この理性を無視した行為が行われたことは残念です。この教育を、できる限り広く地球に広めて行かねばなりません。広島を訪れた方は必ず強い感銘を受け、決意を新たに、皆さんの平和運動の努力を支援しようとする決意を新たに



ことでしょう。人類の利益になることです。

コーディネーター（磯村尚徳）

そして、隣におられるのがボルゴグラード市のスタロバトフ市長さんです。御承知のように、ソビエトでは、ペレストロイカ、グラスノスチ、いま大変化のただ中にあります。その大変化の中から来られて、広島御印象など伺いたいと思います。どうぞ。

ボルゴグラード(ソ連)市長  
ユーリー・スタロバトフ

もう20年以上も姉妹都市関係を持っておりますが、初めて広島を訪問いたしました。いつも広島を訪問したいと思っておりました夢がかなったわけです。

ボルゴグラード市、そして広島市は同じ信念を持っております。広島は1個の原爆によって壊されました。ボルゴグラードは何千もの通常兵器によって破壊された町です。多くのところは廃墟となりました。この40年間の時間を通し、両都市が灰じんの中から再建をし、100万人位の人口を私の町は持つようになりました。荒木市長も言われたように、私どもの討議において、あなたの町を壊した原爆と、私の都市を壊した通常兵器の間には破壊という結果の前には違いはないのです。両方の人家が壊されました。そして私ども両都市の間で、あらゆる兵器を廃絶する努力をしようと、この地上から悪い兵器をなくそうと決意を共にし合ったのです。

これが、今日採択する広島アピールにおいて確認されるでしょう。

40年がたちました。私は東京と広島市しか日本では訪問したことがありません。広島は大変美しい、すばらしい所です。その組織も、町も、道路も、交通の流れもすばらしく、特に市民の皆さんはすばらしい方だと思います。戦争の恐怖を体験した方々は人間的な理解があり、人類を代表している皆さんです。人間性を感じるのです。平和のために闘うという理念を実現している皆さんに会えてうれしく思います。この過ちを繰り返してはいけません。

コーディネーター（磯村尚徳）

ちょっと伺っておまして、私はかつてフルシチョフさんが演説をされている時の風ぼうに似ていると感じたのですが、そんなことを言われたことがありますか。

ボルゴグラード(ソ連)市長  
ユーリー・スタロバトフ

いや、初めて今、磯村さんにそう言われました。フルシチョフはたくさんのいいアイデアを持っていた人だったと思います。でも、お世辞にもすばらしいことを言っていたいてありがとうございます。

コーディネーター（磯村尚徳）

今度は、アカデミックな先生方に印象を伺うと言っても場違いですから、まず馬場先生に、この討論又はこの連帯都市市長会議は、どういうふうに御専門の立場から御覧になっておられるか伺っておきたいと思えます。

大阪大学教授 馬場伸也

この核問題、通常兵器も大事ですが、積極的な平和という意味で、飢餓や貧困、環境保全、人権問題、そういったものも総括して全部みんなで考えてみないといけないと思っております。常日ごろから、私は国益というものに拘泥するなど、ナショナル・インタレストより人類益、ヒューマン・インタレストの促進を図っていかねばならないと言っております。私が言うまでもなく皆さん御承知のように、核のホロコースト（大虐殺）は昨年から今日にかけてずっと言われていることですが、そのほかに人口爆発、飢餓や貧困や食糧問題、地球生態系の破壊等々の問題が山積みされております。それらの問題のどれ一つとってみても、国家単位で打開できるものではありません。むしろ国益の追求とか、国権の伸張とかのような排他的な発想に抵抗、もしくは対抗し初めて問題の解決の糸口が見つかるのです。そうした意味で、我々は、これから主権国家と国益を超克する、トランセンドする、より普遍的で高次元の価値を考えなければいけない。これを人類益と言い、具体的には、1番目に核兵器を含むすべての軍備と戦争からの解放、永久平和の確立。2番目が飢餓や貧困からの解放、言い換えますと、全人類の経済的福祉の確立。第3番目が、環境破壊からの解放。これはつまり自然と人間の調和の確立であります。なにかんずく、人間性の解放、すなわち各個人一人一人の人格の尊厳の確立であります。

こうしたものは、本質的に国権の伸張とか国益の追求といったことを考えていないところの行為体、すなわちNGOとか地方自治体といったような国家以外の行為体、非国家行為体が推進していくべきものであると思います。そういった意味で、地方自治体は草の根レベルから、これから全世界の人たちと手を合わせて人類益を推進して行くように皆で努力していかない

といけないのではないかと感じております。

コーディネーター（磯村尚徳）

ありがとうございました。人類益というような言葉が出ました。また後で討論の際にいろいろと話をしたと思います。続いて最後に鴨先生にお伺いします。鴨教授はこの世界平和連帯都市市長会議で基調演説をされましたし、そこで何を一番おっしゃりたかったか、今後の会議にどういう期待を持っておられるか、一つお願いします。

東京大学教授 鴨 武彦

どうもありがとうございます。基調講演をさせていただくというような光栄を担いまして二つほど感じました。一つは27か国から119都市の市長さんがみえて、いかに平和というものを、都市から、市民の立場から、これを願い、これを作って行こうとされているか、非常な熱意に大変感銘を受けております。ある市長さんは国の力を考える場合も、それは他国に対する強制力とか支配する力ではなくて援助する力である、そして新しい平和を創って行く力である。これは大変積極的な御意見であると思います。

それから二つ目に感じていますのは、基調講演でも申し上げようと思ったのですが、平和は私たちの身近な所からということ。実は国際社会、国際的な大きな流れが、対話、緊張緩和という、またマクロのレベルでも変化している、また身近なレベルの平和というような行動が、大きな世界の変化とお互いに交錯して関連を持つようになってきているのではないかという感じを申し上げたかったわけでありまして。参加してそういう感じを一層強くしております。

そして広島はやはりいつ来ても身の引き締まる思いです。

コーディネーター（磯村尚徳）

ありがとうございました。以上冒頭に、テレビを御覧の皆さんのために御出席の皆さんに一言ずつ発言をお願いしたわけです。

さて、いよいよ本論に入ってまいりたいと思います。まず第一には、今の鴨教授のお話にもありました、御出席の皆さんが今の世界の潮流のようなことをどういうふうに理解しておられるか。この大きなマクロの構造、例えば米ソの対決を中心とする冷たい戦争の構造というもの、それが今崩れつつあるのか、依然として今油断のならない状況で続いているのかといったことに焦点を当ててみたいと思います。

変化ということになりますと、何といたってもゴルバ

チョフ率いるソ連の変化というものが今世界に衝撃を与えております。私はちょうど2年前に、世界ジャーナリスト会議を、原爆の日になんでこの広島で討論を行いました。その際に、ソビエト共産党機関新聞プラウダのアファナシェフ編集長がおいでになり、対話への建設的な御意見を言われたのですが、やはりまだ2年前には、プラウダの編集長の立場は、核の抑止力に基づいて社会主義陣営を守るためにソビエトの核武装は必要であるという基本的立場があったように思います。

それから2年、INF中距離核戦力全廃条約が既に発効を見ております。ソビエト軍は、今年の初めアフガニスタンから撤兵をいたしましたし、そして今はカンボジア撤兵問題が世界で話し合われるというように、大きく潮流が変わってきています。

ヨーロッパでは、特にドイツ連邦共和国ではゴルビーマニア、ゴルバチョフさんに熱狂的な、ゴルバチョフ狂いというような大ブームを引き起こしていて、アメリカやイギリスはゴルバチョフさんの平和攻勢に押し流されないかと非常に心配な位の人気です。このようなことを申し上げてまず、ソ連の新しい思考、ニューシンキングというものを市長さんのレベルでどういうふうを受け止めておられるか、ボルゴグラードのスタロバトフ市長にまず口火を切っていただきたいと思います。

ボルゴグラード(ソ連)市長

ユーリー・スタロバトフ

私が思いますには、いろいろのウォームアップをして、それからまた冷却期間が入っている、そんなサイクルを続けているように思います。ただ、信頼の環境は整ってきたのではないのでしょうか。そしてこれは、ゴルバチョフ書記長が行った平和イニシアティブのおかげであると思います。

私たちの国のゴルバチョフ書記長が核実験停止の提案をいたしました。それからまた、私たちの国の国会もテレビで放映されるようになり、そこでもいろいろな提案が行われています。国会議員がアメリカの議員に対して、核実験を一時停止しようというモラトリアムの提案を行っています。

このような相互の信頼を打ち立てて行くということ、私は今日の午前中のセッションでも申し上げました。そしていくつかのイニシアティブが出てきていることを私は大変誇りに思っています。例えば、私の来ました市、ボルゴグラードは、コベントリー又は広島などいろいろな関係を持つように努めてきており、それを大変誇りに思っております。

それから、ソ連で初めてミサイルを撤廃するために壊したというのは、私たちの住んでいる所から100km位の地域であります。

こういったことが今起きている、アメリカの人もいま地道に努力を続けていると言っておりましたけれども、これからこのプロセスがさらに加速して行くとは思っています。

コーディネーター（磯村尚徳）

今一つ伺いたいのですが、私は、この間ヨーロッパに取材に参りまして、ゴルバチョフ書記長のドイツ連邦共和国訪問、フランス訪問をつぶさに取材いたしました。そこでしばしば書記長が言われたことは、ヨーロッパ共通の家ということで、ウラル山脈から大西洋に至るヨーロッパ共通の家を、鉄のカーテンとか冷たい戦争の時代のようなことを考えないで、ヨーロッパの一つとして協調しましょうと盛んに言われたのです。私たちアジアに住む人間から言いますと、これは日本政府の言い分ですが、ソ連の極東戦力はいささかも削減されていないというようなことがあって、ヨーロッパ共通の家を、フランスのシニカルな新聞記者は、ヨーロッパ共通の家の家賃を払うのはドイツ連邦共和国で、台所にいるのはフランスで、ソビエトの党の指導者が応接間でウッカを飲むのではないかとっておるのです。このヨーロッパ共通の家は全世界共通の家という発想には結び付かないものか、その所を市長さんに伺いたいと思います。

ボルゴグラード(ソ連)市長  
ユーリー・スタロバトフ

それは可能であると思います。ただ、今言われておられた、私たちはヨーロッパから軍を撤退しようということで努力をしております。ニューステレビを見ても、私たちの軍は削減されているのは事実であります。学生も勉強が終わるまでは徴兵されないで済むようなシステムになってきています。ヨーロッパはこれから統一して行こう、そして大西洋から太平洋まで共通の家を作ろうということは可能であり、共通の家を作れるとは思っています。フルシチョフ首相とではなく、私はゴルバチョフと私を比較していただいてもいいのではないのでしょうか。

コーディネーター（磯村尚徳）

お隣になる、サクラメントからの市長さんに伺いたいのですが、サクラメントはカリフォルニア州の州都で太平洋に面している州ですね。太平洋も含めた共通の家ということで、ソビエト側のいわば新しい思考が

披ろうされたわけですが、太平洋の向こう側から見て、ソ連の現在のニューシンキングとか、ペレストロイカとかをどのように評価しておられますか。

サクラメント(アメリカ)市長  
アン・ルーディン

私がこの場でソ連がどういう状況であるかということ进行分析するのは僭越であると思いますが、しかしながらペレストロイカにはとても良い意図が表明されており、超大国を越えてこういったことが世界に広まって行くことが望ましいと思います。

それから、今カリフォルニア州が太平洋に面しているとおっしゃいましたけれども、私たちはこれを大変意識しています。私たちは、環太平洋の州であり、アジア諸国、中国、日本それからまた南太平洋の国々ともきずなを深くしたいと思っております。というのも、これらの国々と私たちは多くの貿易を行っており、それからまた日本の対米投資は多く、特にカリフォルニアでも投資は非常に大きくなっています。例えば、不動産投資、それからまた、いろいろなビジネスがカリフォルニアにも進出してきています。

私たちの経済もこういった日本の投資で活気付けられており、私たちの経済を支持するため、いろいろな事を日本が行って下さっています。経済的な関係というのは非常に重要であり、これを長期にわたって促進していきたいと私は考えています。

コーディネーター（磯村尚徳）

最近、いろいろな世論調査の結果が発表されており、アメリカの市民の多くが、今やソビエトの軍事的な脅威よりも日本などの経済的な脅威の方がアメリカの安全にとっては非常に大事なことだ、というようなことをいろいろ世論調査が言っております。60%を超えるアメリカ人が、むしろ日本の経済的脅威の方に国の安全が脅かされているという感じを持っていると言うのですが、ルーディンさん、個人の経験でも結構ですけども、その世論調査に市長さんが個人的にもどういうふうに同意されますか。

サクラメント(アメリカ)市長  
アン・ルーディン

日本からの経済影響力が強くて、アメリカ人がパニックになっているということは、必ずしもそうではないのではないかと思います。

カナダを見てみますと、アメリカが非常に大きな投資をしていますし、それからオランダもいろいろと投資をしています。こういった投資が起こったときにも

パニックが生じなかったと思いますから、それほど心配する必要はないのではないかと。これは相互的に利益となっていくものだと思います。

ただカリフォルニア州としても、競争力を十分に蓄え、そして世界でも自分たちの立場をうまく維持できるようにすれば経済的な脅威を恐れる必要はないのではないかと、カリフォルニア州では、日本は第1位ではなく第3位の投資国にすぎません。

#### コーディネーター（磯村尚徳）

アメリカ国民の相当数の人が、もはやソ連の軍事的脅威というものをそれほど恐れるべきものではないと、思っていることになるのでしょうか。

#### サクラメント(アメリカ)市長

アン・ルーディン

はい、多分それで正しいと思います。そのとおりだと思います。非常に多くの脅威が作られました。それは、それほど現実的に作り出されたものではなかったと思います。外部の脅威は人工的に作り出されて、アメリカ国内の軍事政策を支持させるようにし、そしてアメリカによる軍備増強、軍事費の投資を支持させるようにさせたと思います。

国防総省とかその他政府が、軍備に対しての投資を促進するように、軍備ハードウェアを作り出す投資をするように、人工的に作り上げられたものと思います。

連邦政府の方が我々に脅威を感じさせたがっているのです。そして、ステルス爆撃機1機が作られました。そしてそれによって、こういう様な脅威ということで、何十億ドルもステルス爆撃機に使う投資を正当化する手段として使っているのです。

こういうことは、私は必要ないと思います。ソ連の方もその防衛を強化し、その武器システムを強化し、アメリカに対抗しようとする。常に継続的なパターンがお互いに出し抜こうとするパターンが続いています。これは不要であり、必要ないことだと思います。

#### コーディネーター（磯村尚徳）

シュマルスティーク市長に伺います。ヨーロッパから御覧になって、特にドイツ連邦共和国では、イギリスやフランスが心配するくらい今や顔が東に向いてしまっていて、NATO、北大西洋条約機構から離れて行くのではないかと心配する人すらおりますけれども、ヨーロッパを中心とする世界情勢を市長さん、どうふうにお考えでしょう。

#### ハノーバー(ドイツ連邦共和国)市長

ヘルベルト・シュマルスティーク

もちろん、ヨーロッパ、特にドイツ連邦共和国ではそうした動きがあります。また、ドイツ民主共和国においては軍縮の関心が高まっております。例えば核兵器がもしも使用されるようなことがあるとすれば、その舞台となるのは中央ヨーロッパであり、その舞台となるのはドイツであるわけです。

その意味で、ドイツ連邦共和国におきましても依然として核軍備が存在しているわけであります。その量としては、広島の際の約800倍という規模であります。その原因はなぜかと申しますと、現在の二つの大国が多くの軍備を持っているからであります。

もしも、我々がヨーロッパ共通の家を作るとするならば、そしてそれを越えて、ヨーロッパだけでなく世界共通の家というものを作るとするならば、そこからヨーロッパだけでなく、その他の国々、小さな国々と一緒に、例えば中国やインドその他の国々と一緒に平和への道を歩むことができるのではないかと思います。

ですから、私たちにとりましてドイツ連邦共和国内の政治から始めて、単にブロック内の政治を超えたもう少し広いレベルでの軍縮政治を行っていく可能性があるのではないのでしょうか。

例えば、フランス、イギリスなどはそうしたドイツの道に関しまして、ドイツが過去に犯してきたことから考えまして、私たちの取っている道を多少疑問視するところがありますけれども、私は先ほど申しましたように、確かに西ドイツにゴルビーファン（ゴルバチョフファン）がたくさんいるわけです。

ゴルバチョフはドイツ連邦共和国にも非常に大きな影響を与えました。

彼は非常に立派な世界政治を行っております。我々は、彼が与えてくれたチャンスを使っていかなければなりません。

我々は、ただ単に核軍備だけではなくもう少し大きな問題、例えば、環境問題でありますとか、例えば南北問題、そうした重要な問題をも一緒に考えていかなければなりません。

どのような国も、現在では世界におきましては毎日のようにたくさんの悲劇を味わっているわけです。

何万人の子供が世界では毎日死んでおります。それゆえに、その不幸をなくしていくためにそれぞれの個々の都市から平和運動、そして環境運動、そして南北運動にかかわる活気的な運動を始めていかなければならないと思います。

ですから、軍備にお金をかけるということは全く無

意味なわけです。

もしも、このお金を他のもっと重要な課題にかけるとするならば、そしてそれをもう少し国際的な規模で行うとするならば、平和が訪れる日も近いのではないかと私は思います。

#### コーディネーター（磯村尚徳）

かつて、80年代初頭にドイツ連邦共和国で反核の運動が盛り上がりました時の有名なスローガンは、「死ぬくらいなら赤がまし。」というものだったのですね。つまりソ連が導入した中距離核兵器に対して西側が導入しようとしているこの核兵器、そういうものを持ち込んで核の抑止力を付けようという西側の論理に対して、反核運動は死ぬくらいなら赤がましだという言い方をしていたのですけれど、この間私がドイツにまいりまして、緑の党の幹部の方の何人かにお会いしました。

その中には、例えば1968年5月革命の際、フランスの全学連の指導者でありました、いわゆる毛沢東主義者と言われたコンバンディドという人がフランクフルトの市の助役に収まっておりまして、彼は今や赤より緑の時代だと、つまりイデオロギーに凝り固まらないで、むしろ環境問題だとか、そういうことに力を入れるのだというようなことを言っていたのです。その二つのスローガンについてのシュマルスティークさんの個人的な見解で結構でございますが、御意見を伺いたいと思います。市長さんは社会民主党でいらっしゃいますから、赤と緑の連合ということをお考えかもしれませんけれどもいかがでしょう。

#### ハノーバー（ドイツ連邦共和国）市長

ヘルベルト・シュマルスティーク

そうですね。今、戦争で死ぬというのは実に無駄なことだろうと私は思います。緑であろうが赤であろうが黒であろうが、とにかく戦争では死にたくないわけです。私は重要な問題は色の問題ではなくて、平和の問題だと思えます。平和と核軍縮の問題だと思えます。

現在の核兵器のポテンシャルを廃止すること、そして軍備を少しでも減らすことが重要であります。その意味では色の違いは余り重要ではありません。キリスト教民主同盟の側であろうが自由民主党を支持しようがあるいは社会民主党を支持しようがそれは何の関係もないことであって、全員が一緒になってこの兵器のポテンシャルをやめなければなりません。その点で今、色の強調をするのはやめたいと思います。

#### コーディネーター（磯村尚徳）

同じヨーロッパから来られたイタリアのコモの市長に伺いたいと思いますけれども、今のハノーバーの市長のおっしゃったことに共鳴なさいますか。

また、コモの市長さんは非常にこの世界平和連帯都市市長会議についても積極的ないろんな活動をしていらっしゃると思いますが、それについて一言御感想をお願いいたします。

#### コモ（イタリア）市長

アンジェロ・メダ

ハノーバー市長はまだヨーロッパの役割を十分に強調していらっしゃると思います。

ヨーロッパの役割は、平和を希求する役割は、基本的な大きなものがあります。この数年間ヨーロッパは人類の間の兄弟のきずなの政策を採ってまいりました。ヨーロッパ諸国間のものから始めました。

1992年ヨーロッパ統合の日には重要な日となるでしょう。その時は、あらゆるヨーロッパ諸国が統合されるでしょう。経済的にも、そして貿易・通商の意味でも、また規制の面でも、そして各ヨーロッパ都市諸国間の関係でも統合が見られるでしょう。

過去におきましては、ソ連に対して、そして米国に対してヨーロッパはバランスの役割を取り、そして両陣営の対立を、冷戦の時代を克服しようとしてまいりました。第二次世界大戦直後からそのバランスを取る役割をしてまいり、それによって大きな成果を出しました。

とりわけイタリアは、常にこの平和のアクション、平和の行為を、ヨーロッパ諸国、地中海諸国の間で促進してまいりました。中東に対してもアラブ諸国に対しても平和の行動を促進してまいりました。

世界平和をこのようなイニシアティブ、すなわち、あらゆる諸国が行うイニシアティブによって強化させなければなりません。これは、建設的に行われる必要があると思います。ただ単に一般的なスピーチによってすぐに忘れられる言葉によってでは不十分です。

この行動は、ヨーロッパそして特にイタリアによるアクションであり、これが続き、広がり、結果を出すべきだと思います。このデリケートな時にあって、つまり米・ソがより近寄ろうとしている時に成果を出すべきであり、東西ヨーロッパの壁が弱くなろうとしている時に成果を出すべきだと思います。

#### コーディネーター（磯村尚徳）

たとえばイタリアではユーロコミニズムといった新しい考えがあります。それは新しいタイプのコミニズ

ムへのアプローチであります。そういう国から御覧になって、今、東ヨーロッパで起きている変化というのが東ヨーロッパの平和について重要性があるというようにお考えでしょうか。

コモ(イタリア)市長  
アンジェロ・メダ

数年間のイタリアの政治勢力を見てみますと、共産党が非常に強くなっております。ヨーロッパでは最も強力な共産党を持っていると思います。しかしながら、イタリアの国民としては、共産党と協力をいたしまして、そして、西側、東側両方の諸国と協力路線というものを貫いております。ソ連で現在起きていることは非常に前向きなことだと思います。

私、最近、ソ連にまいりました。モスクワ、ボルゴグラードにもまいりました。そしてソ連で現在起きていることは、非常に大きな変化であるということを確認いたしました。

外交関係だけではなく、国内においても大きな変化が起きていると思われました。

民主的な表現というものが数年前においては抑えられていたかもしれませんが、現在は完全に確立されております。

民主主義、自由が確立されており、そして世界各国との接触というものも促進されております。これが新しいゴルバチョフの政策といえるでしょう。

コーディネーター(磯村尚徳)

もう一人、今度は全く米・ソの対決の図式とかヨーロッパとかいう地域ではなくて、既に冷たい戦争のころから非同盟の政策を採ってきたインド、第三世界の大国ですけれども、そのインドから御覧になった世界の現在の構図というのはどういうふうになっているか、これを一つサーティ市長に伺いたいと思います。

デリー(インド)市長

シリ・マヒンダー・シン・サーティ

ありがとうございます。

非同盟ということに加えて、戦争と平和というものを述べたいと思います。この戦争と平和というのは、ただ単に大国、あるいはヨーロッパのみにかかわるものではありません。

核兵器の開発というようなことを考えますと、こういうものが使用された場合には世界中、存続できる国というのはほとんどないということが言えると思います。そういった核攻撃というものを我々は防止しようとしているわけでありまして、そういった核戦争が起き

た場合には誰も生存できないでしょう。

ソ連でチェルノブイリ原子力発電所の事故がありました。それによって、全世界に対して大きな影響があったわけでありまして。

そういうことからアジア諸国、アラブ諸国、ラテンアメリカ諸国の市長の方々にも申し上げたいと思います。またヨーロッパ諸国、そして世界の大国あるいは超大国といったような所は西欧、東欧にあると十分認識しておりますけれども、私はこの都市の市民の方々、そして世界の方々に申し上げたいと思います。3,000年ほど前からインドというのは一貫した路線をとってきたわけでありまして。

つまり、力、暴力によってほかの国が領土を拡大しようとしていた際に、インドは常に平和を求めてまいりました。と言いますのも、それがインドの哲学に一致していたわけでありまして、つまり人々が生存するためには平和と調和が必要である、対立によっては生存できないという考え方でありまして。

ネール元首相がこの非同盟ということを打ち出されたわけでありまして、第二次大戦後、冷戦というものが始まったわけでありまして、そして双方が同盟を結ぶというふうになりました。これは米・ソ双方がそういう努力をしたわけでありまして、そういうことで、二つのブロックに全世界が分断されるという脅威があったわけでありまして、そして第三次世界大戦の危険性もあったわけでありまして。

非常に危険な状況でありました。というところから、ネール元首相とナセル、そしてチト元大統領が新しく独立した国々に関しては組織化をして非同盟諸国とするべきだという決定をしたわけでありまして。と言いますのも全世界がその時点において、完全に二つのブロックに分断されていたということであれば、第三次世界大戦あるいは核戦争も起きるという可能性も非常に大きかったわけでありまして。つまり非同盟諸国の運動ということのおかげで、第三次世界大戦あるいは核戦争というものが防止できたのだというふうに思います。ですから戦争と平和というのはヨーロッパ、アジア、アラブだけの関心事ではなくて、全世界の関心事があるということに改めて強調したいと思います。

核の脅威というのは非常に深刻であります。ですから、私どもは非核の世界を求めて全力を傾注しなければなりません。しかし、同時に通常兵器に関しましても大きな憂慮をもたなければならぬわけでありまして。第二次世界大戦までに43もの戦争があって、1千万人の人が犠牲になったということもありますし、毎日現在におきましても5万人が餓死しているわけでありまして。こういうことは潜在的に大きな危険をはらんでい

ということがいえると思います。

ゴルバチョフ書記長とレーガン前大統領、米ソ双方の国民の方々に対しまして、緊張緩和への努力に対し御礼を申し上げたいと思います。

新しい形の信頼が生まれてきつつあると思います。非同盟運動としても、過去におきましては、これは不正直な運動であるというふうに見られた時期がありましたけれども、現在ではそのようには見られておりません。

十分、尊重されているわけであります。ですから、ソ連の平和に対する努力、そして信頼醸成に対する努力に対して敬意を表したいと思います。

そして、共通の家ということで、私は台所とかそういうところにいるのではなくて、非同盟諸国としてもリビングルームに是非お客様として入れていただきたいと思います。

#### コーディネーター（磯村尚徳）

今、全体的なこの世界の潮流みたいなものについて話を進めてまいりまして、大体今までの皆様のお話で、少なくともヨーロッパについては、ソ連の非常に大きな変化というものを中心にして一種の新しい信頼関係が醸し出されつつあることの一端が皆さんもおわかりいただいたと思います。そこで鴨教授に伺いますが、こうした80年代後半に入ってから、特に、INF協定の締結とか、その発効以後において舞台は今のところヨーロッパですけれども、こういう国際関係の潮流の大きな変化についてどういうふうにお考えになっているか、ちょっとこの議論をまとめの意味でお願いしたいと思います。

#### 東京大学教授 鴨 武彦

ありがとうございます。

1980年代の初めのころはこういう見方が対立し合っていました。

つまりアメリカとソ連の緊張あるいは、その対決の構造というものは多少緩和をしてもまた緊張が戻ってくるものである。

1979年のソビエトのアフガニスタン侵攻の後、新しい冷戦というのが米ソ関係で始まりました。

ですから緊張が高まると多少緩和する。また、緩和が進むと緊張が戻る。これを、1970年代のころ「幻想のデタント」と呼んでいたのです。「デタント・ウィズ・イリュージョン」です。

ところがこういう見方が実は大きく国際政治の流れを見てみますとどうも違ってきている。「デタント・ウィズアウト・イリュージョン」「幻想なきデタント」

というのですね。つまり緊張から緩和、また緊張という揺り戻しのサイクルではなくて、新しい性格の変化が米ソ関係に起ころうとしているのではないかということです。このことを、いろいろ今のヨーロッパの立場から、アメリカの立場から、ソ連の立場から、市長のみなさんがおっしゃったと思うんですね。つまりそれは一過性のものでなくて、その新しい共通のまた共存のルールを拡大していくということ。このことは国際的な安全保障の体制を作っていくことだろうと思います。

米ソの政治指導者が先ほどもおっしゃいましたように1985年が分水嶺になりますかね。

1985年の11月ですか、ジュネーブの6年半ぶりの米ソ首脳、レーガン前大統領とゴルバチョフ書記長（当時）との会談でこれが新しくスタートするという状況を示してきているわけです。私は、それは「核の不戦の誓い」ということで非常に象徴的に表わされてきたと思います。こういう緊張から緩和、また緊張というサイクルではなくて、新しく対話や交渉によって国際的な安全保障作りを試みてみよう、模索してみようというその段階に入ってきているのではないのでしょうか、ということなんですね。

それは二つくらいさらに視点を申し上げたいのですが、やはりこの現実を変えたいという、よりよき現実、よりよき安全保障に変えたいという意味が、やはり政治指導者のレベルでもそれから市民のレベルでも働いているということなのです。自然発生的に変わっていることではない。いかに努力して、ジュネーブでも包括的軍縮交渉を進めてきているかということです。

先ほどお話に出ましたINF、中距離核戦力の交渉も1985年のゴルバチョフとそれからレーガン両首脳がいた時にはまだ具体化していませんでした。その中距離核兵器の定義をめぐっても合意を見るのは難しかったわけです。

短距離のINFをどうやって、これも解体の対象にするか、これも合意を見るのは難しかったのです。

しかし、徐々にそういう合意を見てきたわけですね。私は、そこにはその現実を変えた方がよしいという意思が働いていたのだと思います。それは、やはり私は現実主義というものに立脚した考え方だと思います。

もう一つ付け加えますと、先ほどソビエトをどう見るか、この1980年代で安全保障の分野からいきますと、いかにソビエトに対する見方が変わってきているかですね。世界の各国で、いろいろな都市でソビエト観が変わってきているということです。

それは、ソビエトの中からペレストロイカを始め自分たちが内発的な変化をしようという動きがやはりあ

るのでしょうね。

ゴルバチョフ書記長も、昨年クラスノヤルスクの演説を9月に行いましたし、また12月には国連で一方的に軍備削減の演説をしました。もちろんこれは、アメリカにおいてもそれを評価して交渉を進めていくことだと思えます。

ただ一つ申し上げたいのは、こういう現実主義で、そして変えたいというのは、お互いにまだ弱みがあってなかなかその中でせい弱性を克服するのは難しいわけです。

ですから、世界全体の流れをどうやってアジア太平洋にも、あるいは中東にも、「冷戦の構造」というものをもっと相互依存に立脚した共通の安全保障、ヨーロッパ共通の家だけではなくもっと地域、地域で、あるいは国連の力を借りて、そういう流れを作っていくか、これが今問われていると思います。

現実的に言えば、ヨーロッパの方が「冷戦の構造」がより速くより着実に変わってきているという感じがします。

その点は、アジア太平洋において米ソ関係の安全保障の体制が変わりつつありますけれども、あるいは変わる方向にあります、どこまで具体化するかが問われていると思います。

コーディネーター（磯村尚徳）

ありがとうございます。

馬場先生、今の鴨教授がおっしゃったことに、後でまたいろいろ環境問題、その他御意見を伺いますけれども、何か付け加えることはございますでしょうか。

大阪大学教授 馬場伸也

米ソ間のデタントが進行していつているということは大変喜ばしいことではありますが、我々は余りにも米ソ、米ソと言って超大国主義に陥っていないでしょうか。

現在、我々がここでやろうとしていることは、草の根レベルから平和を全世界に構築していこうということですが、国家間の関係におきまして、草の根レベルというのは途上国の問題であります。

それで途上国の平和を考えなければいけない。その場合に、途上国の平和というのは、まず第一に生存できることでもあります。今私がこうして話している間にも、枯れ木のようにやせ細ったお母さんが乳幼児を抱えて幼児と共に倒れていつている現状があります。

それから年に1,800万～2,000万人の人が餓死しております。

この一方で東京では1日に100万人分の残飯が出る

ということでもあります。

こういう現況をどういふふうにとらえるか。あまりにも米ソ、米ソと言って、米ソのことばかり考えすぎているのではないか。

それから世界の所得の半分を一割の世界の市民が占め、後の半分は9割の世界の市民が占めている状況、それから軍事支出は一兆ドルにも達するにもかかわらず、ODA政府開発援助はそれの30分の1にも足りないという状況、そうしたものをどういふふうと考えていくか。我々は余りにも、磯村さんには失礼ですが、マスコミに乗りすぎて、ヨーロッパの家と言えばヨーロッパの家、デタントといえばというように、目移りして、もっともっと根本的なところで重要なところを見逃しているのではないか。実はこの会議もそのために開かれているのではないか、というふうには私に思えます。

コーディネーター（磯村尚徳）

おしかりを受けましたけれども、先ほども申し上げたように、先生に後でゆっくりそうした問題を掘り下げてもらいますが、取りあえず今日は原爆の日でございますから、やはりこの核を持っている大国の動向を取り上げてみたいと思います。まずこの第一段階で核保有大国の対決が、今INF協定などを契機に次第にこの軍縮の方向に向かっているという一つの潮流を読み取ったわけでありまして、先生の御指摘の問題は、またサーティさんの御意見なども伺いまして発展させていきたいと思えます。

これまでのところ、先ほどのボルゴグラードの市長がおっしゃったように、ボルゴグラード市のすぐ近く、100km位の近さのところではINFという実際にあった核兵器を廃棄する作業が行われている。あるいはまた、ソビエトの参謀総長がアメリカの会議へ行って証言している。あるいはまた、逆にアメリカの軍人も、どんどんソ連を訪れている。

そしてソ連国内では先ほど市長がおっしゃったように、民主化の過程がどんどん進んでおりまして、3月26日のこの選挙も大変なものでした。ついにはKGBの長官が国会でつるし上げられるというふうにはソ連も大きく変わりつつあるということですから。まずこの変化がヨーロッパに表われているということです。

それでは次いで第2の問題に移りたいと思えます。

それは冒頭でも申し上げましたように、一応核軍縮への枠組みとかの機運はできてきているけれども、しかし、まだまだ本格的な核の廃絶というものには道が遠い。

皮肉な見方をすればアメリカとソビエトは、経済的



な苦しさ、その他からオーバーキルといわれているように核兵器の持ち過ぎを少し在庫を整理して、そしてソ連の言い方によれば合理的にして十分な程度の核軍備にしようということ、非常に皮肉に言えばむしろより効率的に核兵器というものを温存するというような方向にしている兆しもあります。また、米ソは戦略核兵器の削減、50%削減についてはゴルバチョフ提案の線に沿って話を詰めていく段階にありますけれども、例えば東西両ドイツに貯蔵されている短距離核の問題ではNATOの会議で暗礁に乗り上げるといったような様々な問題があります。

核が見えなくなっている分だけまだ核廃絶への道は遠いというふうにも言えると思うのですが、この核の全廃に至る道のりについて、今度は短く一言ずつ御感想を承りたいと思います。そしてその後で、馬場先生がさっきから指摘されているその核を除く討議に移りたいと思います。

いわゆるこの核が見えにくくなっているのではないかという問題点について、一つ鴨先生いかがでしょう、口火をきっていただけますでしょうか。

#### 東京大学教授 鴨 武彦

見えにくくなり、難しくなっていることは確かなのですが、私はINFの全廃条約というのはやはり重要な意味を持っていると思います。

なぜかという、これは基調報告でも申し上げたのですが、軍縮というのは、ディスアーマメントです。

その核兵器のシステムの数%、正確に言えば4~5%ですけれども、それを半分ではなくて全部解体する、こういう考え方はよほど米ソで検証の方法とかそういうものに合意を見ませんとできないことであり、今まではタブーだったのです。ですから、核軍縮というものに一つの実験というか、風穴を開けたのですね。そこは確かです。これを過小評価してはならないと私は思います。ただ、今おっしゃったことで大事だと思えますのは、核軍縮や軍備管理の入口に立ったことは確かなのです。

次に、米ソだけではなくヨーロッパの当事国は皆入っていますし、それから世界の国々も皆入ってくるわけですが、今度は戦略核兵器と言われる長い射程を持つ核兵器、例えば大陸間弾道ミサイルとか潜水艦に搭載しているSLBMとか、あるいはその核弾道を搭載する巡航ミサイルとか、核爆撃とかそういう戦略爆撃を含めていったいどうやって全廃していくのかということです。これは非常に難しいのです。

今、言われているところでは50%の削減なのです。ということは全部ではないのです。ですから残すもの

と残さないものをどうやって識別するかという難しさがあります。

検証の方法をどうやって合意を見るか、それからこれも意外と指摘されないときがあるのですけれども、アメリカとソビエトの核戦力が全部同じような構成比ではないのです。例えばソビエトの全核兵器の58%が大陸間弾道ミサイルに搭載されております。アメリカの場合は20%切っております。バランスがとれていない。そういう面もありますし、いったいどうやって、そこを進めていくかという構成比の違いがあります。

そしてもう一つは、日本から見ると非常に重要なものでありますが、ヨーロッパの地上のミサイルが解体されるのは結構なのですが、海の海洋発射の核兵器、これにつきまして、また米ソでは、この海軍力をどうコントロールしていくか、ここに難しさがあるわけです。

ですから、後戻りはできない状況になっていますけれども、米ソで利害関係の国々は多くなっているわけです。ヨーロッパでもイギリスとフランスの核兵器が削減の対象になります。

ですから、そういうところからしますと、その当事国や関係市民がいっぱい入ってきて問題が難しくなっている、そういうところで今おっしゃった難しさがあると思うのです。しかし、じゃあこれは難しいからやめたというわけにはいきません。というのは、ヨーロッパにおいても、軍縮なり、反核なり、それぞれ自分たちの身近な安全保障をいかに守るかという、本当にそこに強い願いがありますから、それに支えられている以上は、私は難しくても進んでいこうという見方をとっています。

#### コーディネーター (磯村尚徳)

ありがとうございました。

ハノーバーのシュマルスティーク市長に伺いたいと思いますけれども、例えば東西両ドイツの展開している米ソの短距離核。この問題について、今度もコール首相がNATOの会議でも言ったことなのですから、西ドイツの世論というものは、非常に反対が強い。それはもし短距離核が使われれば、自分たちの領土の上でさく裂して犠牲になるのはドイツ民族だと、こういう点があるのでしょうか。

まず、短距離核の問題についてご意見を伺います。

#### ハノーバー(ドイツ連邦共和国)市長

ヘルベルト・シュマルスティーク

もしも、中距離核が全廃されることがあるとするならば、短距離核の問題はまた別の次元で扱わなければ

ならないわけですが、短距離核もおっしゃったように使用されればドイツがやられるのは当たり前です。

今まで撤廃されてきたものは50%だということはすでお話がありましたけれども、もしも核軍備の約50%が削減されるとするならば現在のその保有国である2大国はその残りの50%でも世界を18回も破壊する戦力をもっているわけです。それはソ連側からでも、アメリカ側からでも、どちらから始まっても広島よりも大きな破壊が起こるわけです。

ですから我々は一切の核兵器を廃止するべきだと、この広島で確認しなければならないと思います。しかもこれは20世紀の終わりまでという、そうした長い期間ではなくて、今すぐにも破棄しなければと私は考えております。ヨーロッパは大きな鉄弾と戦っております。

相互の軍備のコントロールというものが重要な問題ではなくて、その核軍備の撤廃というものが相互の信頼に基づいて廃棄される、その上でまたコントロールが必要になってくるわけです。

もしも各政府が核軍備撤廃の方向を採らないとするならば、我々各都市が重要な役割を担うわけです。なぜならば、それぞれの都市に住んでいる我々こそが核軍備の問題に一番深刻に立ち向かっているわけです。どの町からも、どの都市からも我々は今、政府に対して核軍備撤廃に対して働き掛けていかなければなりません。

我々が連帯を組み、ほかの平和運動とともに闘っていくことによりまして、議会にいる議員たちに対して我々の方から働きかけなければならないと思います。

議会にいる人たちに対して、核軍備撤廃の方向へと一歩進めるように働き掛けていかなければならないと思います。

我々が問題にしたいのは、核軍備の問題だけでなく軍備にかけられるすべてのお金についてであります。ですから核軍備だけではなくて、軍備全部を廃棄しなければならないわけです。その今まで軍備にかけてきたお金をもっと重要な課題に使わなければならないと思います。私たちが持っている財産というものは、それをほかの発展途上国に譲ることもできるでしょう。そして、そのことによって平和が証明されると思います。

#### コーディネーター（磯村尚徳）

核の問題については、この短距離核とか、あるいは鴨教授が指摘されましたような水中発射核ミサイルというようなやや技術的な問題もあります。ただ核の問

題がより複雑化して、核軍縮への道というものが必ずしもまだ入口にしかないのだという認識を確認することによって、次の課題、つまり馬場教授が言っているように核以外の平和の問題、その問題に移ってまいりたいと思います。

まず、デリーのサーティ市長に一つ口火を切ってもらいたいと思いますが、今この第三世界を中心とする平和運動の一番の主眼をどこに置くべきかと市長はお考えでしょうか。

#### デリー(インド)市長

シリ・マヒンダー・シン・サーティ

ありがとうございます。

先ほどのパネリストの方からも指摘がありましたが、経済的不均衡によって、世界戦争が起こされたのであります。

核保有国は、これからも核を保有し続けるであります。しかし、原則的には対立する可能性は残っていますが、それらを全廃するという合意は可能だと思えます。

世界は経済秩序が不均衡であります。第三世界の諸国は経済的に遅れており、その国民に最低限の生活水準を与えようと必死の努力をしております。

これらの国は、圧力の下にあります。通常兵器の問題を克服しなければいけません。

インドでは、私どもはいずれの国をも侵略しない、いずれの国からも侵略されたくないという政策を持っております。我々の必要とする資金を、生活の改善のために向けるべきです。

福祉のために向けるべきです。軍備を買うために使うではありません。

私たちは、独立と主権に対しての脅威を認識しなければいけません。そこに脅威が存在していることに気付かなければいけません。

この状況の克服が必要なのです。非核世界を樹立すると同時に、市民がよりよい質の生活を持てる世界を実現すべきだと思います。文化、文明を何千年も前に共有したと同じように豊かな文化、文明を持つべきです。ある国が世界のすべてを支配するようになるとは、非人道的な状態となるのです。そういう考え方、アプローチが人間の心のどこかにある限り、暴力をこの地球から全滅させることはできないのです。

第二次世界大戦後、小さな戦争が23回も行われております。通常兵器による脅威は実在しているのです。通常兵器による対立が核戦争にエスカレートする可能性があるのです。

この原因は経済的不均衡であります。経済的にやむ

を得ぬ事情があるからであります。また、政治的な違いもあります。

ここで対話を始めるべきです。核軍縮、そして核なき世界を主張すると同時に、サイド・バイ・サイドで第三世界の人々と、つまり途上国の人々の間に対立がないようにしなければいけません。

その戦いの根を断ち切らなければいけません。世界の大国から武器が供給されているという状況をなくさなければいけないと思います。この不要な戦争をこれからも続けていこうとするのでしょうか。

広島への攻撃、長崎への原爆を忘れてはいけません。最初は通常兵器で始まった闘争が広島、長崎への原爆へとエスカレートしてしまった事実を忘れてはいけません。国がフラストレーションを起し、そして戦争を始めてしまう。どんどん大きな武器を使うようになってしまうのです。そして核の対立へと突き進んでいくのであります。

二つの危険があります。一つは核兵器による危険です。これについて取り組み、世界世論を喚起するべきです。これにより積極的な結果が達成できるでしょう。

二つ目に重要なことは、経済的な不均衡、飢餓、貧困です。世界の半分以上が貧困に苦しんでいます。飢餓で死ぬ人がいる。その人に対して、核の問題という前に飢餓の問題をなくすべきです。核で何回も、何回も殺されるよりは、飢餓で1回の死を選ぶという人もいるかも知りません。ところが、現在の世界の半数の人が家なき人であります。より人間らしい生活を人類に与えるべきです。そのための計画を始めるべきです。

私の意見では、信頼を醸成すべきです。すべての国々が参加しなければいけません。今世紀の終わりに、50%の予算、防衛予算を削減するべきです。我々の予算の70%位を軍事費に使うという状態は許されないのです。半減させなければいけません。

こうして、不信が現われました。その結果、世界の多くの所に、危険の問題が出てきております。この根源は経済の貧困であると思います。それを解決するためには、防衛費、軍事費をより重要な用途に向けるべきです。これを全世界としてやるべきだと思います。

コーディネーター（磯村尚徳）

申し訳ございませんが、大体一人3分というのが6分となっておりますので、もう結論に入っていただけますか。

デリー(インド)市長

シリ・マヒンダー・シン・サーティ

すみません、デリケートな問題ですので少し時間をかけたいと思った次第です。でもここで終わります。すみません。

コーディネーター（磯村尚徳）

重要な問題が、いくつか指摘されております。大きな核戦争、人類の生存にかかわるようなものを防ぐことも必要だけれども、小さな戦争も忘れてはいけないということ。それは、いわゆる通常兵器による戦争の惨禍という問題です。そして、そういう戦争を放置しておけば、それが核戦争へとエスカレートして行く危険があるということ。さらには、経済的な不均衡というのが世界的な不安定要因の一番大きなものであって、これを放置してはいけないというような点を、このパネリストの中で唯一の途上国の代表であるサーティさんからご説明があったわけです。

これについて、馬場教授にもうちょっと補足をしていただきたいと思います。恐れ入りますが、時間がだんだん迫ってまいりましたので、できるだけ手短かにお願いいたします。

大阪大学教授 馬場伸也

話をもとに戻して悪いんですが、デタントが米ソで起こった、デタントの第一歩というのは、全欧州安全保障会議、ヘルシンキ宣言なんです。その全欧州の33か国とアメリカとカナダが加わって35か国の間で信頼醸成措置というのができ、それを検証して行くヘルシンキ・プロセスというものが作られた。それによって米ソのデタントというものは始まったのであります。そういうふうな信頼醸成措置が、あるいはヘルシンキ・プロセスというようなものが、ヨーロッパの家だけでなくてほかの地域にもどういうふうにして作っていくことができるかということを考えてみるべきであろうというふうに思います。

コーディネーター（磯村尚徳）

ありがとうございます。その点に関して、さきほどから御発言をいただいておりますけれども、サクラメントのルーディン市長に伺いたいと思うのです。

今、核の問題を兵器の問題から切り離して、例えば原子力の平和利用という問題を考えた場合に、例えば6月6日にサクラメントで住民投票があって、サクラメントに近いランチョセコという原子力発電所の建設について、即時閉鎖すべしということで住民の方が勝利しました。

ここで市長に伺いたいのは、カリフォルニアはなるほど水の利もあるし、いろいろなエネルギー源を持っておりますから原発に頼らなくても済みますけれども、途上国がどんどんと発展していく場合に、例えば皆、木を切り倒して燃やすというようなことをすれば、それは砂漠化、温暖化に結び付きますし、石炭、石油が有限であるというようなこともあって、途上国の開発をどんどん進めるがために、どのエネルギー源に頼るべきかが今問題です。そういう問題にまで一つ踏み込んでいただいて、なぜそういう住民の運動があったか、そしてまた、それは単にカリフォルニア州住民のエゴではなくて、例えば途上国のエネルギー源をどういうふうにお考えなのか、という2点を伺いたいと思います。

サクラメント(アメリカ)市長  
アン・ルーディン

私が本当に自信を持ってお答えできることだけについて述べたいと思います。つまり、途上国のエネルギー開発に関してであります。

この原子力発電所ではありますが、これは閉鎖されたわけでありまして、時々稼働していたわけでありまして、延べ25年位稼働しておりました。そして、その稼働率も悪かったし、補修費等も非常に多額にかかっていたわけでありまして、ですから、経済的にも効率性がなかった、効率的に運転されていなかったというわけでありまして、最近2年間閉鎖されていたのであります、その間4億ドルほど投資いたしまして再度補修しようとしたのでありますけれどもうまくいきませんでした。サクラメント市民は、非常に重大な憂慮をもって、このような形でお金を無駄にすべきではないというふうに強く感じたわけでありまして、非経済的な、非効率的な原子力発電所を稼働するために、お金を無駄にするべきではないというふうに感じました。

過去におきましては、原子力というのは安価なエネルギーと考えられていたわけでありまして、非常に低い稼働率ということになりましたので、コストの高いエネルギー源になってしまったわけでありまして、

私の個人的な考えでは、核兵器と原子力発電は別であるということでありまして、しかしながら、原子力発電にかかわる危険性もあるということでありまして、原子力発電所がうまく稼働しない場合には危険性があるということ、経済性の問題もあるということでありまして、

それからまた、廃棄物の問題もあります。環境問題も生じるわけでありまして、特に北カリフォルニアにおきましてはほかのエネルギー源があります。水資源が

ありますし、水力発電所も多くあるわけでありまして、北西部におきましては十分あります。それから太陽エネルギーの可能性もあります。ランチョセコ原子力発電所を運転していた電気事業者が、ほかのエネルギー源によって実際に発電していたわけでありまして、

ということで、住民が嘆願状を書きまして署名しました。そして、住民投票にかけたわけでありまして、そしてこれに対し、原子力発電所に関しては不信感があるということが表明されまして、現在ではこの発電所は閉鎖されております。ほかのエネルギー源から十分効率的にエネルギーを得ることができるからであります。

途上国におきましては、一つの可能性として、固体廃棄物をエネルギー源として考えるべきではないでしょうか。固体廃棄物というのはすべての国にあるわけでありまして、これを利用してほかに環境問題が生じないということであれば、これは有効な形だと思っております。固体廃棄物を処理することができますし、またエネルギー源にもなるということで一石二鳥になると思う訳です。十分豊富な量の廃棄物があります。それをただ単に処理するとなりますと、非常にコストがかかります。埋立て、埋設をする際でも十分な土地も必要になって来るわけでありまして、

原子力発電に関しましては、非常に複雑な問題だと思っております。アメリカにおきまして、稼働した後で閉鎖されたという例では、サクラメントが初めてであったと思っております。

将来何をするかということに関して、つまり、我々自身がいかに発電することができるか、最も効率的に、経済的に代替エネルギーを開発することができるかということに関して、答えがあればよろしいのですけれども、まだ答えはございません。

コーディネーター(磯村尚徳)

スタロバトフ市長にお伺いしたいと思います。チェルノブイリ原発事故というものは、世が正に運命共同体であって、放射能汚染というものは国境を越えて、体制の違いを越えて広がって行くものだということを世界に印象付けました。

この社会主義国における環境問題なんです、社会主義国においてはつい最近まで、社会主義の体制の中では、あれは資本主義の環境汚染というのが悪であって、社会主義にはそんな汚染は起きないんだという建前を長い間探っていらっやいました。

環境問題を口にするのは、ポーランドの場合には刑務所に行くことを覚悟しなければならないというようない時期もあったわけですが、最近ソ連は急激にこ

のグラスノスチで環境問題の関心が高まっているように思いますが、ソ連における環境問題への基本的な態度というものを一言伺いたいと思います。もはやタブーではないですね。

ボルゴグラード(ソ連)市長  
ユーリー・スタロバトフ

いまいただいた御質問についてですけれども、私の町でも環境というのが大きな問題になってきております。そして私の市議会でもエコロジーの問題を扱うようになっておりまして、いろいろな化学工場、それからまたそのほかの工場があり、環境問題というのは切実な問題になりつつあります。

こういった問題も、民主的な問題として扱われていかなければならない、そして決定を行っていかねばならないと思います。

例えば、エコロジー関係のクラブ、団体というのが各市に登場するようになってきました。そして、こうした生態学を見る人たちが、ボルガ河がきれいか、大気はどうかというようなことを見ています。ですから、社会主義国であれ資本主義国であれ同じ問題であり、そこで分けて考えることはできないと思います。いろいろな会議を通じて、この問題というのは、軍縮に次ぐ大きな問題だとしてとらえられるようになってきています。

それから、軍縮の話はずっとしてまいりましたが、軍縮をこれから達成していかなければならない、それには行動を取っていかねばなりません。今までは、ソ連はいろいろな対立を持っており、そしていわば閉鎖された回路の中でアプローチをしていたわけですけれども、今度はそれが開かれたサイクルになってきましたので、いろいろな対応が採れるようになると思います。

ボルゴグラード市でも、いろいろな人たちと協力をし、そしてまた信頼のドアがいまは開放されています。例えば軍事的に見ても、アメリカの艦船が来たりまた逆があったりというようなことで、こういった信頼の高まりが見られているように思います。この軍縮の流れを止めてはならないと私は思います。

コーディネーター (磯村尚徳)

それを例に取りますと、これはやはり南北の利害というものが非常に対立している一つの分野だと思います。

ちょうどパリで7月14日を中心に開かれました先進国サミットの際に、フランス政府はまた南の途上国の代表も招きました。ここで、例えば環境問題に対する

南と北のアプローチの違いというもののがはっきり浮き彫りになったわけです。

既に経済的成長を達成した北の国では、この環境問題というものをできるだけ厳密に適応していこうと思いますし、南の経済的開発途上の国は、この北側の、そういういわば自分達は既に功成名遂げたので、自分たちにだけ環境問題を押し付けて、発展を阻害するようなことは、開発を阻むようなことは非常に身勝手であるという強い主張が見られたわけです。

しかし例えば隣の中国が、今、日本のエネルギー消費量、確か石炭に換算しますと年に一人当たり4トンです。もし隣の中国が、あるいはサーティさんのおられるインドが日本並みのエネルギーを消費いたしますと、日本列島はほとんど酸性雨の完全な被害下に入ってしまうわけです。中国やインドの発展ということは、近隣する諸国の環境対策がもし適正に行われなければ、ほかの国にも非常に影響を及ぼすということで、非常に相い矛盾する要素を含んでいるように思います。

いわゆる北側の身勝手とおっしゃるかもしれませんが、サーティさんにライト・オブ・リプライで、南の主張というものを、環境問題との関連で一言だけ伺いたいと思います。一言だけ、時間をできるだけ短くお願いいたします。

デリー(インド)市長

シリ・マヒンダー・シン・サーティ

公害の問題に対する意識というのは非常に高まってきていると思います。汚染の問題の関心が高まってきていると思います。ただ、世界全体にいろいろな問題が生じてきている。核のホロコーストがありますけれども、それに加えて私たちの地球の存続が危まっている、その一つの理由として、環境の汚染の問題があると思います。

私たちは資源の危機にひんしておりますけれども、どのような資源があるにせよ、一番重要な優先順位というのは、遅くならないうちに、環境が破壊されないように措置を講じていくことであると思います。いろいろな経済的資源がある、それをきちんとモニターしながら、環境が破壊されないように、遅すぎないように措置を講ずるべきであると思います。私たちも色々な努力をしています。開発途上国その他も同じ様な努力をしています。

私はインド人です。インドのお話しかできませんけれども、例えば大気ですとか、また水が汚染されすぎないように、私たちの人類の存続が難しくならないように、健康に影響が及ばないようにということで注意を払っています。ですからまず最初にこの

環境をきちんと守っていき、森林を守っていくということを第1番目の優先順位にしていかなければならないと思います。

今あるものを大事にして行くこと、そしてそれと同時に、さらに植林を行って行くことが大事であると思います。このような対応をとるようになって改善が見られるようになりました。

それからまた2番目に、私たちは水が汚染されないようにということで、大変注意を払っています。ただ、私たちの怠慢、不履行により河川の水が汚染されないようにということで注意を払っています。町からいろいろな排水が出てくるとは思いますけれども、きちんと処理し、汚染されないように下水処理場をきちんと作るというようなことをし、河川の水が汚れないようにし、また飲料水の問題もないようにしております。

農業用水も非常に重要であると思います。水の中には、鉄分ですとかいろいろな成分が含まれておりますので、やはり穀物等にとっても農業用水は非常に重要であり、用水が汚染されないように気を付けていかねばなりません。

開発途上国としては、やはり環境問題を真剣に考えに行かねばならない。世界を二つに分けることはできません。1か所が汚れたならば、例えば日本も汚れます。インド、中国にも、もしも問題が生じたら、皆さん方は逃れることはできません。ですから、これは地球的な問題として、地球的な観点から取り扱っていかねばならないと思います。

きちんとした資源を使うのであれば、その資源をきちんと管理しながら守っていかねばならないと思います。例えば、軍事費の中の50%は生活水準を高めるために使っていくようにする。環境を守るために使っていくようにしなければなりません。

そして核のホロコーストが生じないようにしなければなりません。ただ、環境問題も深刻になっていることは事実だと思います。

#### コーディネーター（磯村尚徳）

今、これまでの皆さん方の御意見でお分かりのように、この世界平和連帯都市市長会議というものの、その都市の役割というものが国の役割とどういうふう違うのか。あるいは草の根の民間の交流というものとどう違ったように位置付けられるのかということ、平和という問題は、単に反核の問題だけではなくて、小さな戦争の終結、あるいは環境問題、人権の問題、さらには飢餓と貧困といったようなものにまで幅広く及ぶものであるということが、これまでの皆さんのお話でお分かりいただけたと思うので、これからはこの結論

に入ってもらいたいと思います。

けれども、それではそうした平和問題に取り組む各都市の役割というものが、どういうふうにあるべきなのかということ、結論的に、恐れ入りますが、もう10何分しか残っておりませんので、まずコモのメダ市長から1分半か2分位で御意見を伺わせていただきたいと思います。

#### コモ(イタリア)市長

アンジェロ・メダ

イタリアの多くの都市は平和のための運動をしてまいりました。

今必要なことは、平和の理念を広める、すべての国に広めるということだと思います。この浸透が必要です。

この会議には1985年よりも大勢の参加者がいらっしゃいます。今後この市長会議に参加する都市数を増大させる必要があると思います。平和の精神がすべての発表において強調されました。各国内、各地域社会において政府に対して直接的な行動を起こすべきです。この市長会議で討論したイニシアティブが全国に浸透し、成果を出すことが必要だと思います。そう希望しております。

市民、都市は政府の活動の中心地です。人類の最大の中心が市民です。革命が始まったのも、世界の大きな変革が行われたのも都市が舞台でした。世界世論を喚起し、核のホロコーストの廃絶に向けて、都市が働き掛けるべきです。

戦争、平和の問題、環境破壊の問題について、都市が連帯し、決定的な役割を果たすことができると思います。

都市も、政府におきましても、このような努力を促進する必要があると思います。そして、福祉、安全保障も、都市、政府にとって重要なことです。この責任を果たすべきだと思います。都市は勇気を持つべきであり、通常兵器も核兵器も都市の中で造らせないということを決めることができれば、中央政府に多くの圧力をかけることができ、大きな変化を起こすことができると思います。

時間はありません。今こそその時だと思います。世界の中で積極的な動きが見えております。都市が連帯し、この責任を果たすべきであり、それは人類の生存、市民の生存、よりよい生活をするために大切だと思います。都市がその役割を果たします。この市長会議は、そういう方向に向けて重要なチャンネルだったと思います。

コーディネーター（磯村尚徳）

シュマルスティーク市長に伺います。ドイツ連邦共和国では、確かフルト市が、市の決議した核廃絶の要求に対して、この州の政府が、それは市などがやる権限を超えているものだというので、今裁判で係争中だと伺っておりますけれども、市が果たすべき役割と国の役割との違いといったようなことについて、特に市長のお考えを伺いたいと思います。

ハノーバー（ドイツ連邦共和国）市長  
ヘルベルト・シュマルスティーク

今のお話ですが、これはドイツの一部で確かにこういう動きがございます。つまり、州政府が、また現在では中央政府ですら、その軍事費の縮小とかあるいは防衛とか平和問題とかいうのは自治体の問題ではないと主張する向きがございます。

こうした考えに対して、私たちはドイツの都市連盟として非常に反対しております。つまり、平和の問題、軍縮の問題、これは実際には都市の市民の問題であります。もし何か事が起これば、都市が打撃を受けるのであります。したがって、都市に住んでいる人々、そこで仕事をし、余暇を過ごしている人々が、もし戦争が起これば一番打撃を受けるわけですから、そしてもちろん、フルトの町だけでなく多くのほかの町がフルトと連帯して、この州政府との裁判に勝とうと努力しております。特に、州政府の考え方は市民のやる気を阻害するものであって、私は反対せざるをえません。

この軍備の問題は、毎日の人々の生活に直接かかわる問題であります。したがって、自治体というものは当然それに対応する権利を持っております。つまり自治体は国家というもののベースであるわけであり、国家という何か抽象的な存在があるのではなくて、実際、個々の自治体が国家を構成しているわけであり、

したがって、私は都市の運動なしには未来というものは無いと思います。そして、この軍備縮小がますます進んで行くならば、私たちの都市も将来繁栄するでありましょう。こう確信しております。

コーディネーター（磯村尚徳）

いわゆる都市の役割というものについて、どうお考えでしょうか。

サクラメント（アメリカ）市長  
アン・ルーディン

誰が誰の責任か、そして誰の管轄かという論議をや

めるべきです。私たちは、道義的な責任を持っています。この問題解決の法律的な責任でなくても、道義的な責任を持っています。影響力を行使できます。国策に影響力を与えることができます。グラスノスチ、草の根からやるべきであります。

ここで私どもは国の優先順位を変え、平和に向ける努力をしなければいけません。また、今日提起されたほかの問題についても、研究開発のために武器の研究開発に使われているお金も転向し、そしてよりよい方向に向け、私どもの技術の問題、例えば固体廃棄物管理の問題、より良い公共輸送の問題、人々の交通手段の問題の解決に向けるべきだと思います。

また、医療保険に使うべきです。国民の健康、そして病気をなくすために使うべきです。その力を都市は持っています。

それが優先順位を変えることです。資金、そして我々の知識も、MXミサイル、ステルス爆撃機に使うべきでなく、それらを人類の利益になることに使うべきで、そうしたらよりよい世界ができるでしょう。その力を持っています。

コーディネーター（磯村尚徳）

このフルシチョフさんに似て、またゴルバチョフさんにも似ておられる、スタロバトフさんに、いわゆる社会主義体制の中でもどのように考えられるでしょうか。

ボルゴグラード（ソ連）市長  
ユーリー・スタロバトフ

昨日、今日、多くの方が繰り返しおっしゃいました。政治はグローバルな、世界的な政治になるべきです。しかし行動が地域で始まるべきだと思います。

都市は多くの可能性を持っていると思います。この市長会議で荒木市長がおっしゃいました。また、国連軍縮特別総会でも荒木市長、本島市長が演説されました。そこで各国元首がスピーチを聞いたのです。それから軍縮の機運が高まったと思います。

都市の行動は世界を助けます。都市は状況改善のために、努力するのです。力を持っています。

コーディネーター（磯村尚徳）

まず、馬場先生から、今日のこの都市の役割を中心にして締めを一つお願いします。

大阪大学教授 馬場伸也

非常に有意義なディスカッションでそれをまとめるということは難しいのですが、私は、国家というのは

軍事費を持ってありますが、地方主義を推進していくことによって平和主義が推進されるというように思っております。すなわち、地方は反国家主義的であります。そして戦争を起こすのは、大抵の場合中央集権的な国家であります。

ですから、地方主義を推進していくことによって、逆に国家中心指向を排し、そして平和主義を推進して行くことができる。一つの提案として行いたいのは、国家が軍事費を持ってありますから、地方は、自治体は平和費というものを作っていき、そしてそれによって、反戦、それから、軍縮の運動から、環境保全、それから人権の問題、開発の問題なんかの人々を参加させていく。1960年から一番大きな歴史の変化というのは、民衆の意識覚せいであると思います。

私はこれを信じたい。そして、世界の民衆がもっともっと意識覚せいして、こういうふうな会議を世界中に広げていくことによって、民衆から歴史を動かしていこうではありませんか。

#### コーディネーター（磯村尚徳）

馬場先生、いわゆる日本はホモジニアスな民族と言われますけれども、むしろいろんな市がいろんな平和への運動に取り組んでいくということは、日本が何も1国家、1民族という主義ではなくて、いろんなバラエティを作っていきという意味で、非常に、ネットワークを広げるのにいいことではないでしょうか。

#### 大阪大学教授 馬場伸也

私は、そう思います。実は私はカナダで8年間教えていたんですが、カナダは非常に州の自治が進んでいる所であり、憲法でも州と連邦政府とが同じ権限を持つというふうに定められております。そういうふうな多元的な国家を見ますと、日本はまだまだ地方自治体の度合が少ない。ですから、切磋琢磨して各地方自治体が平和に向かって行くことによって、そして切磋琢磨しながらネットワークを広げていくことによって、日本全体に平和の大きな草の根のどよめきを広げて行けるのだと思います。

#### コーディネーター（磯村尚徳）

最後になりましたが、鴨教授に伺います。いわゆる、信頼を醸し出してゆくということ、この国際的な意味で、そこの中において果たせる都市の役割というものを、最後に一つお願いしたいと思っております。

#### 東京大学教授 鴨 武彦

やはり、都市の役割は非常に大きいものだと思います。

す。昨日も基調講演で、アメリカから来られたアルジャー教授がおっしゃってましたし、また今、馬場教授がおっしゃいましたんですが、平和というのは、それぞれそこに生きている人々、市民、民衆のためである。したがって、その人たちがより良き平和、安全保障を望めば現実は変えられるわけです。

そこで、都市の間のネットワークというものは、国際世論にいかんを広げていくかということです。

私はこの討論、及びこの世界平和連帯都市市長会議に参加させていただきまして、例えば、非核自治体の宣言が世界に4,000も越えておる。つまりローカルな地域で、地方でもって核についてもこれでは困るんだと、いかにして核ではない平和というものを求めるか、それが連帯をしていきますと大変大きな国際世論につながっていくんだと思うんです。

そういうことによって、軍縮交渉も大事ですけども、政府間の役割も重要ですが、そこに私は重要な役割があると思うんです。しかも、安全保障という性格が変わってきました。軍事的な安全保障だけでなく、先ほど言われた環境もあります。人権もあります。そういう意味で、セキュリティの意味も基本的に変ってきている。都市の間では戦争はしません。ですから、都市の間ではいかに安全を考えるか。そして人々の交流と理解を深めるか。私はその意味がますます大きくなっていると思います。

#### コーディネーター（磯村尚徳）

考えてみれば、古代ギリシャの平和都市がオリンピックにも結びついているわけですから、そうした都市の役割が、大いにこれから見直されなければならないということだろうと思います。

今日は、この原爆の日に当たりまして、長時間にわたって、市長の皆さん、そして二人の先生方に御見解を承りました。

私がそれに付け加えて蛇足を申し上げることはありませんけれども、荒木市長が発表されたこの平和宣言の中でも、今や東西の冷たい戦争が、その構造が崩壊する兆しが見える。今年こそ平和運動にとって絶好の機会なんだという言葉があります。まさにその言葉をもって、2時間近くにわたりましたこのシンポジウムを終わらせていただきたいと思っております。

今日はどうも皆さんありがとうございました。

#### （司会）

どうもありがとうございました。これでパネルディスカッションを終わらせていただきます。

この会議の様子は、今週の土曜日、12日の夜9時か



ら教育テレビで、テレビシンポジウムという番組で放送させていただきます。

第2回世界平和連帯都市市長会議も終わりに近づきました。このあと、午後4時からヒマワリで全体会議が開かれて広島アピールが採択される予定です。

また、このフェニックスの会場では、午後6時半から、広島交響楽団による恒例の平和コンサートが行われます。こちらの方もどうぞお楽しみ下さい。

どうも皆様、ありがとうございました。



# 全体会議Ⅲ(広島アピール発表)

119

8月6日(午後4時～4時30分)

広島国際会議場 ヒマワリ

司会 広島市国際交流協会 中原 薫

コーディネーター 国際文化会館理事長 永井道雄  
国連大学学長特別顧問

## 1. 広島アピールの発表

世界平和連帯都市市長会議会長

広島市長 荒木 武……………121

## 2. 広島セッション閉会あいさつ

世界平和連帯都市市長会議会長

広島市長 荒木 武……………122



司会 (中原 薫)

会場の皆様、大変長い間お待たせいたしました。

ただ今より、第2回世界平和連帯都市市長会議、全体会議Ⅲ「広島アピール」の発表を始めさせていただきますと存じます。

発表は、後ほど本会議の議長でございます荒木武広島市長より行いますが、その前に、昨日、本日と2回の起草委員会で討議されました経過報告を、コーディネーターでいらっしゃいます永井道雄先生にお願いいたします。

先生、お願いいたします。

コーディネーター (永井道雄)

それでは、最後に合意するまでどういう経過であったかということを中心に申し上げます。

本来ならば、この五つの言葉でもって発表をすべきであるわけです。五つの言葉というのは、日本語とそれから英語とロシア語とイタリア語とドイツ語です。フランス語を含めると六つの言葉になりますね。今から申し上げますが、残念ながら今発表できませんのは日本語と英語のテキストを発表することができるだけです。

先ほどから会議を開きましたが、実は、翻訳関係の人たちは夕べほとんど寝ないで仕事をしたわけですが

れども、その結果、二つの言葉、日本語と英語、これのテキストについて準備ができて、そして先ほどから皆で話し合いました結果、承認することができるものが出来上がりました。

そうすると、あとロシア語、ドイツ語、イタリア語、今フランス語という声が上がりましたが、これをどうするかという問題が残るわけです。これにつきましては、ハノーバーの市長さんから、いろいろな国の人が来ていて、ネイティブ・スピーカーが今まで出たものを、つまり、日本語と英語で書かれたものを直して作り上げる。それは、今のこのセッションでなく、これが終わった後でやるというのがいいのではないかと――。実際はそれ以外に方法がありませんから、私たちは皆それに賛成いたしました。したがって、残念ですが、現在は二つの言葉のまとめだけ皆様にお伝えをすることになりました。

先ほど進行係の人から言葉がありましたように、この会の議長は荒木広島市長でいらっしゃるわけです。荒木市長に、この日本語でできあがりしました「広島アピール」、これを発表していただくことになります。

では、どうぞよろしくお願いいたします。

広島市長 荒木 武

(広島アピール発表)

## 広島アピール

第2回世界平和連帯都市市長会議に参集した我々世界27か国119都市の代表は、1989年8月4日から6日まで、世界最初の被爆地広島において、「核兵器廃絶を目指して―核時代における都市の役割」を基調テーマに、様々な角度から討議し、活発な意見交換を行った。

同時に、44年前の広島原爆被爆の実相を見聞し、今、再び核戦争が勃発すれば、全人類の破滅と、この美しい地球が壊滅することを予見した。

また、平和記念公園で執り行われた平和記念式典に参列し、共に原爆死没者の冥福を祈るとともに、1939年9月のポーランド侵攻に始まる第二次世界大戦で失われた多くの戦争犠牲者を悼み、世界恒久平和の実現を強く祈念した。

顧みれば、1985年8月、我々一同が広島に集い、核兵器のない平和な世界の創造に向けて、共通の決意を確認して以来、4年が経過した。

この間、多くの都市が新たに連帯に賛同し、国際世論の形成に大きな貢献をした。歴史的に評価すべき、米ソ中距離核戦力全廃条約の締結、第3回国連軍縮特別総会の開催、米ソ包括的軍縮交渉など、国際世論の高まりを背景に、世界平和の実現に向けて、勇気づけられる進展が図られた。我々は、この成果を決して逆戻りさせてはならない。

しかしながら、度重なる核実験の強行や、生物・化学兵器の拡散にみられるように、軍備体系の近代化が急速に進み、軍事支出は異常に膨大化する一方、飢餓、貧困、人権抑圧、更には地球規模での環境破壊等の諸問題は、未解決のまま次の世紀に先送りされようとしている。

思想、信条、体制の違いにもかかわらず、ここ広島に集まった我々世界平和連帯都市市長会議は、我々の住む地球と人類が直面している現実を認識し、世界の恒久平和達成のために次のことを訴える。

1. 世界の人々、なかんずく各国の指導者は、広島・長崎の被爆地を訪れ、被爆の実相を知る努力をすること。
2. 世界の都市は、次代を担う青少年の平和教育と市民の平和意識の高揚に積極的に取り組むこと。
3. 核保有国を含むすべての国は、核実験を即時全面的に禁止すること。
4. 米国及びソ連は、本年6月19日からジュネーブで再開された包括的軍縮交渉の成功に向けて、理性をもって取り組み、戦略核兵器の半減を直ちに達成し、少なくとも今世紀中には核兵器の全廃を実現すること。
5. 世界各国は、生物・化学兵器の廃止と通常兵器及び兵力の削減、更には全面完全軍縮の実現に努力すること。
6. 世界各国は、飢餓、貧困、人権抑圧、環境破壊等の諸問題の解決のため、国連を中心に協調して取り組むこと。
7. 平和こそが政治の最高の目標であり、民主主義を確立し、武力による紛争を直ちに停止すること。

1989年8月6日

世界平和連帯都市市長会議

## 司会（中原 薫）

ただ今、荒木市長より発表がございました「広島アピール」に御賛同いただきました。もう一度、盛大な拍手をお願い申し上げます。

ありがとうございました。

以上をもちまして、広島での会議のすべてを滞りなく終了することができました。

皆様、ありがとうございました。

## コーディネーター（永井道雄）

荒木市長から発言があります。

## 広島市長 荒木 武

第2回世界平和連帯都市市長会議の広島セッションは、先ほどの「広島アピール」の発表をもちまして、3日間の日程を無事終了することができました。

本年は広島市制100周年。広島城築城400年。そして、広島平和記念都市建設法公布40年の意義深い年にふさわしく、世界27か国119都市の参加を得まして、極めて有意義な会議を持つことができ、心からうれしく思います。

これも、海外・国内の各地から遠路御参加いただきました各都市の代表、国連、我が国政府、並びに各国関係機関の御理解、各報道機関や地元受入団体、関係機関、ボランティアで働いて下さった市民の皆さん方の、幅広い協力の賜物であります。ここに世界平和連帯都市市長会議を代表しまして、深く感謝の意を表します。

また、第1回の会議と同様、今回も成功の内に広島セッションを終えることができましたのも、被爆以来、

一貫して核兵器廃絶を訴え続けてきた広島市民の願いと、世界中の平和と核廃絶を支持する人々の願いが、一致したからにはかなりません。

会議では、各参加都市から、平和の取組を始め、現代の世界が直面する諸問題について、貴重な御報告と御意見を賜りました。その中で、いずれの都市におきましても、行政や市民が活動を展開し、努力していることを互いに認識することができました。

私は、この認識を基に、都市と都市が一層緊密に連帯し、平和への活動が展開するならば、必ずや歴史の流れは核軍縮へ、東西緊張緩和へと変わり、ひいては世界恒久平和を実現することができるものと確信を深めました。

特に印象に残った点は「4年に1度の総会以外に、各地域ごとに市長会議を開催し、地域的な都市連帯を強化すべきである。」といった提案や、「第3回世界平和連帯都市市長会議の開催を期待する。」といった声も聞かれるなど、世界平和連帯都市市長会議の発展を望む声が多かったことであり、使命の重大さに身の引き締まる思いがいたしました。

世界平和連帯都市市長会議としては、現在進められている米ソの包括的軍縮交渉の成り行きや、国際的な諸問題に対し、重大な関心を持って見守っていくとともに、更に幅広い交流を続け、相互に「友好と連帯」のきずなを深めながら、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けて、国際世論を形成していくことに寄与してまいりたいと思います。

# 開 会 式

123

8月8日（午前9時17分～午前9時30分）

ホテルニュー長崎 鳳凰閣

司 会 長崎平和推進協会  
松尾 蘭子

## 1. 開会あいさつ ..... 125

世界平和連帯都市市長会議副会長

長 崎 市 長 本 島 等

## 2. 来賓祝辞

長崎県知事 高田 勇 ..... 125

長崎市議会議長 佐藤 了 ..... 126





司会 (松尾蘭子)

皆様、おはようございます。

私は、本日と明日の2日間にわたって開かれる、この長崎会議の進行を務めさせていただきます、長崎平和推進協会の松尾蘭子でございます。どうぞ、よろしくお願いいたします。

皆様には、朝早くからお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。長崎市は、ことし市制100周年を迎えており、この時期に皆様をお迎えすることは、この上ない喜びでございます。心から歓迎申し上げます。

それでは、ただいまから長崎会議に移らせていただきます。

最初に、長崎市長 本島 等がごあいさつを申し上げます。

## 開会あいさつ

世界平和連帯都市市長会議副会長  
長崎市長 本島 等

ようこそ長崎へいらっしゃいました。

長崎に来るお客さんは、長崎が東京から遠いということで、長崎に来ることをしばしば省略されることがあります。しかし、皆様方は、広島から新幹線に乗り、また博多で乗り換えて長崎まで来てくださいました。しかも、長崎までの汽車は単線で時間もかかります。しかし、長崎はこの400年間、日本の経済文化をリードしてきた町でありました。1571年にポルトガルの宣教師によって日本で最初に開かれた港町でありました。同じ年に同じ国の人によって開かれた町が、ブラジルのサントス市であります。

長崎は、その当時、日本でたった1カ所だけヨーロッパの雰囲気を持った町でした。1582年、この町から12～3歳の4人の少年が日本で初めて正式な使節としてヨーロッパに派遣されました。日本の長崎の港を出発した少年使節は、マカオ、マラッカ、ゴア、ケープタウンを経てリスボンに着き、そこからマドリッドを通過してローマに到着しました。8年5カ月を費やして長崎に帰ってきました。帰ってきたときには、キリシタン弾圧が始まっており、知られているだけでも600人もの人が長崎で殺されました。長崎は、日本が外国との交易を禁止していた、いわゆる鎖国時代の約220年間、日本でたった一つヨーロッパと中国に開かれた町として栄えました。その後、日本が開国した後は、

日本の夜明けをつくり出した町であります。

1945年に世界で2番目の原爆がこの町に落とされました。私たち長崎市民は、核兵器が人類を絶滅させる兵器であることを知りました。そのとき以来、私たちは核兵器の廃絶こそが、長崎の使命であるとして世界に平和を訴え続けています。

しかし、核兵器開発競争の終わりがきたように思います。軍拡に行き詰まったことと、人間は信頼しなければどうしようもないということを知ったことが最大の原因でしょう。

私たちと私たちの子孫は、他の国の武力によって滅ぼされてはならないということ、私たち一人ひとりの市民は、国の指導者と同じくらい平和についても、軍縮についても、世界情勢についても詳しいということ、草の根運動の市民だけが本当の世界の未来が見えるということ、私たちが確信と信念を持って説く平和こそが本物の平和であるということ、一つの国は、元来武器を持つことを望み、都市は武器を持たないことを望むということ、そして、都市が連帯することは、武器を持たない者の連帯であり、それこそが本物の平和を招くということをご一緒に確認し、誓い合いたいと思います。

どうも、ありがとうございました。

司会

次に、来賓を代表して長崎県知事 高田 勇様からご祝辞を賜りたいと存じます。

## 来賓祝辞

長崎県知事 高田 勇

おはようございます。

本日、ここに「第2回世界平和連帯都市市長会議」が、世界32カ国、238名の皆様のご参加を得て、盛大に開催されるに当たりまして、一言ごあいさつを申し上げます。

世界中からお集まりの皆様、皆様ご承知のとおり、長崎市は広島市とともに人類史上最初の、一瞬にして7万数千人の生命が奪われる惨禍を受けた被爆都市であります。私たちは、身をもって体験した原爆の惨害を、その地球上で2度と繰り返してはならないと決意しておる都市であります。

今日、世界は新デタントの言葉で呼称されておりますように、1987年12月8日には、米ソ間において中距

離核戦力全廃条約が調印されることとなり、それに基づき相互の査察も開始されるなど、世界の現状は緊張緩和への一縷の明るい希望が見出せるようになりましたが、その一方において、この悲痛な体験や核兵器廃絶の数限りない叫びにもかかわらず、今日なお地球上のすべてを破壊して余りある核兵器の貯蔵とその配備がなされております。これが政治的現実でもあります。ゆえに、これからの戦争は、核兵器による戦争の可能性をいまだ十分に秘めておりますし、そうなれば、まず都市が破壊され、ひいては人類の存亡にかかわる事態になることは言をまちません。

今日、核兵器の廃絶と軍縮は、世界共通のしかも緊急の課題であります。このような意味におきまして、人種、宗教、政治、イデオロギーにとらわれず、全世界の諸都市の皆様が連帯して交流し合い、核軍縮と貧困の克服、環境の保護など世界平和の実現に取り組まれますことは、限りなく価値のあることであり、深く敬意を表するものであります。

皆様方のこの会議が、必ずや実り多い成果を上げられることを強く期待申し上げる次第であります。

終わりに、本会議に参加されました各都市のご発展と皆様方の今後ますますのご活躍をお祈り申し上げまして、ごあいさついたします。

ありがとうございました。

#### 司会

どうもありがとうございました。

次に、長崎市議会議長 佐藤 了様からごあいさつをいただきます。

## 来賓祝辞

### 長崎市議会議長 佐藤 了

「第2回世界平和連帯都市市長会議」の長崎会議開催に当たり、ご出席の皆様方にごあいさつ申し上げる機会を得ましたことを大変光栄に存じます。

酷暑の中、広島に引き続き長崎においていただきました皆様に対し、長崎市議会を代表いたしまして心から連帯と歓迎の意を表します。

とりわけ、第1回の会議を上回る代表の皆様をお迎えできましたことは、この会議の運動が進展していることを示すあかしであり、核兵器の廃絶と世界の恒久平和を訴え続けてきた長崎市の市民として大変心強く、喜びにたえない次第であります。

米ソ両国のINF全廃条約調印以後、国際政治の流れは「対決から対話へ」と大きく変わってきているように見えますが、一方では、核兵器の高性能化、海の核軍拡、宇宙の軍事化が進められており、核戦争の危機は依然として続いております。

また、化学兵器や生物兵器の開発など各国の軍備競争もとどまるところを知らず、局地的な紛争は後を絶たない状況にあります。しかも、こうした軍事紛争によって罪のない人々が平和な生活を破壊され、難民としてあるいは飢餓の中で悲惨な生活を強いられています。

さらに、大気や海洋の汚染、森林の伐採による緑の激減などによって生態系の崩壊が促され、生命の基盤そのものが脅かされていることも、人類の未来にとって一刻もゆるがせにできない重大な問題となってきています。

このような状況を直視するとき、今、生きている私どもの責任は極めて重大であります。思想、信条、体制の違いを越えて参集された皆様方の英知を結集し、人類の未来への展望を切り開いていただくことを心から願いたします。

そして、私は、住民の安全と幸せだけを願って努力している都市の代表の集いであるこの会議こそが、当面している難問解決の方向を指し示すことができると確信をいたします。

終わりにになりましたが、この会議を準備された関係者の皆様に対し、心から敬意と感謝の意を表し、あわせてご出席いただきました皆様方のご健勝と各都市のますますのご繁栄を祈念いたしまして、私のごあいさついたします。

#### 司会

ありがとうございました。

ここで長崎県選出国會議員並びに国内の各市長さんからご祝電をいただいておりますので、ご報告申し上げます。

# パネルディスカッション

127

## ～今、地球の平和を考える～

8月8日（午前9時32分～午前11時35分）

ホテルニュー長崎 鳳凰閣

長崎平和推進協会  
司 会 松尾蘭子

コーディネーター 元広島大学学長 飯島宗一

### 1. 基調講演

明治学院大学教授 坂本義和

### 2. パネルディスカッション

#### パネリスト

ベルリン(ドイツ民主共和国)市長

エアハルト・クラック

モンロビア(リベリア)市長

L. クウィア・ジョンソン

パークレー(アメリカ)市長

ロニー・ハンコック

藤沢市長

葉山峻

長崎大学学長

土山秀夫

### 3. パネルディスカッションに対する質疑応答

ゲッチンゲン市(アルトウール・レヴィ市長)

ボローニャ市(ダンテ・クリッツィ氏)

ランカスター市(ジョン・C. リオンズ市議会議員)

アーバイン市(ジェブ・ブラグマン環境政策部長)

ブライトン市(ブライアン・R. フィッチ市長)

マラコフ市(ミホ・シボ助役夫人)

キャンベルタウン市(ジム・A. クレマー市長)

オースティン市(ジョージ・ハンフリー市議会議員)

ハーグ市(アド・ハーベルマンズ市長)

バンクーバー市(リン・ラザフォード氏)

ロッテルダム市(ヘンク・ファン・デア・ポルス前助役)



司会（松尾蘭子）

おまたせいたしました。

ただいまから、パネルディスカッション、「今、地球の平和を考える」をテーマに始めさせていただきますと思います。

このパネルディスカッションのコーディネーターを飯島宗一先生をお願いいたしております。

飯島先生につきましては、さきの広島会議で基調報告をしていただきました際、既にご紹介申し上げましたが、改めて紹介させていただきます。飯島先生は、広島大学・名古屋大学の学長、国立大学協会理事などを歴任され、現在は日本医学会幹事などの要職を務めておられます。医学者としての立場から「核放射線と原爆病」など数多くの本を著しておられます。

それでは、飯島先生、よろしく願いいたします。

コーディネーター（飯島宗一）

それでは、ただいまから「今、地球の平和を考える」というテーマで、長崎会議のパネルディスカッションを始めたいと思います。

我々の広島会議では、まず「核兵器廃絶を目指して一核時代における都市の役割」という基調講演をオハイオ大学のチャドウィック・F・アルジャー教授、それから東京大学の鴨 武彦教授のお2人から伺いました。その後、「核戦争は何をもたらしたか」という課題で、広島及び長崎から被爆の実情あるいは被爆者の健康状態等についてのご報告がありました。

そして、さらに各国の間における、あるいは世界的な平和達成のための「信頼醸成への道程」という課題で、サーティ・デリー市長、あるいはシュマルステイク・ハノーバー市長、あるいはルーディン・サクラメント市長、あるいはスタロバトフ・ボルゴグラード市長、さらに馬場教授、鴨教授がパネリストとなられましてパネルディスカッションが行われました。

このほか、2つの分科会がもたれて「核廃絶に向けての各都市の取り組み」、また「現代における地球規模での問題点」という事柄が広島の会議で掘り下げられて、大変有益であったと思われまます。

それらの広島会議の成果を受けて、この長崎のセッションでは、核廃絶はもちろん非常に重要な中心的問題でありますけれども、さらに、それを巡る、その背景にある、あるいはその結果として招来されるであろう平和について、お互いによく考え、そしてその地球規模での平和の中で、我々各都市は「何を具体的に実践し、展開していくべきか」という課題について、これから2日間お互いに勉強し合うというのが、長崎セッションでの主な課題であると思われまます。

広島会議は、大変荘重な男性合唱をもって幕を開けましたけれども、長崎の会議は、ただいまごろになったように、小さな可愛い子供たちの歌声で幕を開けました。私は、この2つのコントラストは、広島における我々の会議、長崎における我々の会議の目標とあり方を大変有意義に表現しているように思いました。私たちの都市は、老若男女、たくさんの人々がいかに平和にそれぞれの生活を全うするかという基本的な場でありまます。その立場を踏まえてこれから一緒に「今、地球の平和を考える」という課題に取り組んでみたいと思います。

このパネルディスカッションでは、まず坂本義和先生に基調講演をしていただきます。坂本先生については、今、改めて私が紹介するまでもなく、我が日本における最も優れた国際政治学の専門家であられまして、長く東京大学の教授をお務めになり、現在は明治学院大学の教授をお務めでいらっしゃいます。中立日本の防衛構想で、理想主義的な国際政治学を提唱され、かつて国際平和研究学会の事務局長として4年間ご活躍になり、世界の平和研究の組織化に貢献をされ、さらに世界秩序モデルプロジェクトの有力なメンバーとして核兵器の廃絶、世界の非軍事化のための条件などをご研究になっていらっしゃいます。このたび、この坂本先生から基調講演を伺うということは、このパネルディスカッションにとって大変ありがたく、かつ、有益なことであると思っております。

坂本先生の基調講演を受けまして、今日はエアハルト・クラック氏（東ベルリン市長）、L・クウィア・ジョンソン氏（モンロビア市長）、ロニー・ハンコック氏（パークレー市長）、それから葉山 峻氏（藤沢市長）、土山秀夫氏（長崎大学学長）の5人のパネリストをお迎えして、基調講演の後、坂本先生の基調講演を主題としてこの「今、地球の平和を考える」という課題について、それぞれご意見を述べていただき、時間があればフロアからもご意見を頂戴いたしたいと、こう思っております。

それでは、坂本先生、どうぞよろしく願いいたします。

## 基調講演

明治学院大学教授 坂本 義和

お集まりの皆様方、友人の皆様方、第2回世界平和連帯都市市長会議で基調講演ができることを大変光栄

に思っております。

本島市長にお招きを受けまして、本会議に参加することができ、大変嬉しく思っております。本島市長に対しましては、執拗にいろいろなやがらせや脅迫がなされておりますけれども、市長はその見解を勇気を持って主張をし続けておられます。昭和天皇をはじめとする日本人の戦争責任について確固たる態度をとられている本島市長に敬意を表するものであります。

1945年のヒロシマ・ナガサキから我々日本人は、少なくとも2つの点で人類の歴史は新段階に入ったことを知った。

ヒロシマ・ナガサキの筆舌に尽くしがたい現実を正確に伝えることは難しく、その体験を広範に伝達可能なコトバに翻訳することは大変なことだった。しかし、1945年のヒロシマ・ナガサキの歴史的意味の重さを直視した我々は、人類が2つの大きな変化の過程にあることを確信したのだ。その変化とは今日の言葉に置きかえれば次のようになるであろう。

第1に、我々は1945年を境に戦争の性質が一変したことを痛感した。国際政治のゲームの従来ルールは、「生存しなければ敵をたおせ」であった。これを可能にするには戦争が極めて重要なものだった。今日、核時代にあっては、ゲームのルール（行動の規範）は「自分が生存しなければ敵を生存させろ」である。自国の生存の手段としての核戦争は自滅行為である。核戦争に勝者はない。核時代において平和以外に選択はないのだ。

もちろん、1945年から今日までの40年間に200余りの非核戦争が起こったことを我々は忘れてはならない。化学兵器を含む非核兵器によるこれらの戦争は、それ自体問題とされねばならない。ただ一つ明らかなことは、核時代以前には局地戦争から大規模戦争への拡大は本質的には程度の問題であったのであるが、核時代にあっては、局地的戦争は人類滅亡へと発展する危険性を考慮して対処する必要がある、以前の戦争とは質的な違いがあるということだ。この点で、ヒロシマ・ナガサキ以降は、局地戦争の性質さえも変わってしまった。

第2に、我々は1945年を機に国家主権の性質が大きな変化を受ける時期が到来したことを知った。ヒロシマ・ナガサキの歴史的意味は、我々に核戦争と核兵器は、いかなる国も一国ではコントロールできないということを示した点にある。旧来の主権とは、国家が「国益」と定義するものを追求し守るために、戦争に訴える権利を意味したが、今日ではいかなる国家も核戦争をする権利を持たないことは明白である。したがって、国家主権の性質が大きく変わっているのだ。し

かし、日本国民にとって主権国家の変質は法的、政治的だけでなく、精神的な心の問題である。

この会議に参加されている海外からの皆さんは、資料館を訪れたり、フィルムをごらんになったり、広島に被爆者たちの話を聞かれた。長崎でも同様の機会があるであろう。資料館の展示物や、被爆者やフィルムなどのメッセージの中には反米感情がないことに気づかれたと思う。実際、1950年以来日本で盛り上がった反核、反核実験、反核戦略運動において、反米主義が重きをなすことはなかった。その理由の1つには、ヒロシマ・ナガサキの被爆は日本の侵略戦争の一つの結果であり、日本人は被爆者であると同時に、特に他のアジア諸国に対しては加害者であったということを我々が自覚していることである。しかし、我々の反応は単に過去をいかに考えるかだけでなく、未来をどう見るかということから生まれた。ヒロシマ・ナガサキの体験を認識するようになった日本国民は、核兵器と核戦争は人類全体の未来にかかわり、特定の国家や国民の間の敵意をはるかに越えた問題だと強く感じている。核兵器は、当初から我々にとっては国家主権をはるかに超越した世界的、地球的な問題なのだ。

したがって、1945年、ヒロシマ・ナガサキは、戦争と国家主権の概念に根本的な変更を求めるような技術体系の出現を予告した。また、ヒロシマ・ナガサキの声は、核兵器全廃と国家の主権行使の手段としての戦争の放棄を強く呼びかけ、現代の軍事技術のチャレンジに対する積極的かつ現実的応答であったことは間違いない。しかし、このヒロシマ・ナガサキの声が国際的に重要視されるには数十年もの年月が必要だった。なぜか。それは主要大国が変わりつつある核時代の現実に対して歪められた反応を示し、誤った受け取り方をしたことが大きい。その歪んだ反応は、次の2つの形をとった。

その1つは、一般的に戦争を行ったり、勝利を収めるという考えは捨てるべきだという現実に対し、主要大国は核抑止戦略という形で対応した。抑止は、理論的には実際に戦争を行うことを意図するものではなく、敵の攻撃からの防護を目的とするのだが、抑止戦略の欠点は、実際にはそれが常に攻撃能力と結びつけられて考えられることだ。攻撃能力と結びついた抑止が攻撃戦略として相手方に映じることは当然であり、国際関係の不安定化につながることは否めない。自国の中で核兵器を使用することは意味をなさないのだから、それは本質的に攻撃用として外国に向けられる。したがって、核兵器のない世界の恒久平和を実現するには、抑止戦略及び核兵器を廃絶する必要があることは明らかである。

2つ目は、国家主権の空洞化が進行している現実に対し、主要大国は従来の主権国家を莫大な核兵器を保有する「超大国」（通常の大国以上の大国）にそれぞれ率いられる東西の2つのブロックに組み込むという形をとった。これは核時代の緊張の中であって、何とか自分たちのために主権を確立しようとする超大国による力の乱用であり、世界を2つの陣営に分ける政治の2極化状態を招いた。この2つはそれぞれ超大国が頂点に立ち、同盟国に対して不公正な序列に位置づけていることを特徴とする。しかし、超大国のこの行為は国際的な不安定を生み失敗に終わらざるを得ない。不安定であるのは、2つの超大国間に制限のない軍備競争を生み、ブロック同盟国の軍国化をもたらしたからだ。そして失敗に終わるといえるのは、軍備競争、特に核軍備競争により2つの超大国が互いの攻撃に対してますます弱体化し、ブロック内の不公正な序列が超大国とその同盟国との関係をさらに緊張化、弱体化させたという理由からだ。

以上のことから、核兵器のない世界の安定平和の実現のためには、2つの超大国の超主権と他の国々の主権が空洞化している現実を直視し、国連などの国際組織の強化のために積極的なたゆまない努力が必要であるのは明確だ。

核兵器強化に反対する市民運動の圧力の結果として、また、冷戦はいたずらに犠牲が多く、失敗に終わったと認めた結果、2つの超大国のリーダーたちが軍縮交渉に真剣に乗り出し、さきに述べたような方向に進み始めたことは大変喜ばしいことだ。今のところ軍縮の話し合いはヨーロッパ地域に焦点が置かれ、太平洋などの海洋軍備競争については、手付かずのままだが、私は冷戦終結への道を開いた両国の決断に対し拍手を送りたい。

核時代の挑戦に対する根底に流れる、これらの積極的な反応は、人類が共通の弱さと共通の願いを持ち「人類はひとつ」であるという意識の高まりを示すが、これはまさにヒロシマ・ナガサキの生の声である。「人類はひとつ」であるというヒロシマ・ナガサキの意識は高邁な思想の産物ではなく、この2都市を崩壊させた原爆の火の中から生まれたものだ。

では、この「人類はひとつ」という意識は、今と未来に生きる我々にとってどういう意味があるのか。3つの点を挙げてみたい。

第1に、「人類はひとつ」という意識が強まった結果、その半面で我々は南北格差と地域間の貧富の差を今までになく意識するようになった。反核兵器を唱える人々の間で広がった「人類はひとつ」という意識は、飢え、貧困、不均衡、差別、抑圧の問題にもすべて緊

張の課題として取り組むのでなければ本物であるとは言えない。

核兵器は、その軍事上の危険性だけでなく、核兵器のシステムが科学とテクノロジーを最も歪曲した形で使用し、資本を最も歪曲した形で配分し、人的・物質的資源を最も歪曲して消費するという事実があるから否定されなければならないのだ。世界経済の歪んだ不公正な発展をなくすためには、富める者による非人道的な過剰消費の構造を改めることが不可欠である。したがって、核軍縮が軍事的過剰消費と歪んだ発展の構造の取り崩しへの最初のステップなのである。

第2に、「人類はひとつ」という意識は、地球の生態学的な危機と結びついていることは言うまでもない。私は、この問題については、ここでは詳しく述べない。それは私が、その意義を過小評価しているからではなく、逆にこの問題が皆さんになじみ深いものだからだ。ここでは、次の点を強調したい。

現在、特に北半球の住民の環境問題に関する関心事、例えばオゾン層の破壊、温室効果、海洋汚染問題などは、自己の利益を守るという観点から取り組むことができる。これらの問題は、全人類に影響を及ぼすので、みなに関心を持つようになる。しかし、主に第三世界の住人である世界人口の底辺10%の飢餓線上の人々の問題になると、北側の人間は、それが直接自分たちの利害にかかわることではないので、飢えている人々には無関心でいられる。何も言えずに無力に死んでいく人々の飢餓問題は、自己の利益を守るという観点からは解決され得ない。北側の大半の人間は、環境危機に示すほどの関心をこの問題には寄せていない。それは彼らが特別利己的で非人道的であるからではなく、第三世界の学者らも指摘しているのだが、底辺10%の人々は世界の資本主義経済の枠組みの中では構造上存在しなくてもいいという世界に我々がいるからであり、この場合利己心に訴えても何の解決にもならない。したがって、南北格差と不公正な発展の問題の解決は、恐らく環境問題を解決よりも困難と言える。

だからこそ「人類はひとつ」という意識を深めることが、公正で持続的な発展のため、地球上の非人道的不公正の廃絶に不可欠なのである。

第3に、我々の住む世界を特徴づける巨大な個々人の利己心だけでなく、さらに国益という枠組みによってもなくすことは不可能だ。ここに国家主権のもう一つの問題が存在する。国家というシステムは、世界的な問題に適切に取り組むことはできない。正に、主権国家システムには限界があるからこそ、都市や国際組織などの非国家集団が果たす役割が重要なのである。

世界中の地方自治体が地元の問題だけでなく平和、

非軍事化、公正で持続的な開発、人権、民主化、環境との調和などの地球規模の問題にも対処してきたし、また、そうすることができる。これは改めて言うまでもない。皆さんは、既にこのことをご承知であり、ここに出席されているということがその最善の証拠である。都市は、地球的規模の問題に対処するために、国家の枠を超えたネットワークの発達に利用できる資源や人材や情報を有している。ここでは、私は次のことを付け加えておきたいと思う。

都市が、それぞれの地域において経済とコミュニケーションの中心であるということは、それが力と富と情報の中心であることを意味する。すなわち、農村部はそうではないということなのである。我々は今、平和連帯都市の代表者による世界会議で集まっているわけだが、残念ながら、農村部間にはこうした会議がほとんど見られない。世界の人口の55%以上が、また、第三世界人口の大部分が農村部で生活しているという状況を顧みれば、この点を見過ごすことはできない。

都市は、流動性、自由、自治、国境を超えた連帯などを生み出す場を提供するが、同時に、都市の内部の他の都市部との関係において、疎外や差別、また格差という問題を抱えている。

今日、全世界で高まっている「人類はひとつ」という意識は、国境を超えた我々の連帯のネットワークが都市だけでなく、全世界の都市と農村を結ぶものになってこそ、豊かな実りを結ぶものになるのだ。

最後に、原爆に遭い8年後に亡くなった有名な詩人、峠三吉の詩を引用して終わりたいと思う。

ちちをかえせ  
ははをかえせ  
としよりをかえせ  
こどもをかえせ

わたしをかえせ  
わたしにつながる  
にんげんをかえせ  
にんげんのにんげんのよのあるかぎり  
くずれぬへいわを  
へいわをかえせ

彼は、「にほんをかえせ」とは言わなかった。「にほんていこくをかえせ」とも言わなかった。「にほんこくみんをかえせ」とも言わなかった。彼は、「にんげんをかえせ」と言ったのだ。

私は、この思想に基づいて、この平和連帯都市会議において創造的な対話が行われると信じている。

ご清聴ありがとうございました。



コーディネーター（飯島宗一）

坂本先生、どうもありがとうございます。

大変、示唆に富んだすぐれた基調講演をしてくださいましたことを感謝いたします。

これに続いてパネルディスカッションに入りたいと思いますので、次の方々はどうぞ壇上の席にお着きをお願いしたいと思います。

東ベルリン市長のエアハルト・クラックさん、モンロピア市長のL・クウィア・ジョンソンさん、パークレー市長のロニー・ハンコックさん、藤沢市長の葉山さん、長崎大学長の土山さん、どうぞお願いいたします。

〔各氏登壇〕

コーディネーター（飯島宗一）

それでは、パネルディスカッションに入りたいと思いますが、まずクラックさん、ジョンソンさん、ハンコックさん、葉山さん、土山さんという順序で、それぞれお1人ずつからお話を頂戴いたします。そしてその後、このパネリストの間でいろいろご質問、ご議論等があればそれを行っていただき、また、坂本先生の基調講演に関連したいろいろのご質問、ご発言があらうかと思えますし、また、坂本先生からもこの5人のパネリストのご発言に対してコメントないしはご批判を頂戴いたしたいと思います。

このパネルディスカッションに与えられている時間は11時25分までであります。以上のパネルディスカッションが一通りパネラーの間で終わります。なお時間があればフロアから基調講演、またそれぞれのパネリストの論旨に関連のあるご質問あるいはご意見等を承りたいと思います。

限られた時間でありますので、なるべく皆様のご協力をいただいて、簡潔にそれぞれとお考えを述べていただいて、「今、地球の平和を考える」という主題に共同作業で迫ってまいりたいと思いますので、ぜひご協力をお願いいたします。

それでは、まず東ベルリン市長のエアハルト・クラックさんをお願いいたします。

ベルリン（ドイツ民主共和国）市長  
エアハルト・クラック

私は、ドイツ民主共和国からまいりましたクラックと申します。

私の基本的な考え方を申し上げます前に、坂本先生がおっしゃいました基調講演についての印象でございますけれども、核戦争が始まれば勝者も敗者もないということについて、私は非常に感心いたしました。世

界の中でどのような哲学がよりよいものであるかという事は、だれも言うことができないわけです。もしも、核戦争があれば青い空もどんな都市もすべてが破壊され何もなくなってしまうわけですから。第一次世界大戦そのものも非常に大きな悲惨をもたらしました。そして第二次世界大戦では、第一次世界大戦よりもより多くの破壊をもたらしました。長崎と広島にはアメリカの戦闘機によって原爆が落とされました。もしも第三次世界大戦が起こるとすれば、もっと大きな破壊が起こるのは必至でございましょう。そのときに一番直面させられるのは都市に住んでいる人々であるわけです。もしもヨーロッパにこうした核戦争が起こったならばということを考えますと、我々の住んでおります中央ヨーロッパが核戦争の真ん中になるわけであり、私のおります東ドイツは、まさにその渦中になることとなります。

少し私の国のこととお話ししましょう。最近、370の学校が集まりましてウンターデンリンデンという大きな中央の目抜き通りでデモを行いましたし、町の全教会が鐘を鳴らしまして1939年9月1日の第二次世界大戦突入を悼んで祈念の儀式を行ないました。

我々市長といたしまして、私は次のように考えております。我々の理性をもって考えれば、核爆弾というものが我々の生活を左右することにはならないと思えます。それゆえに、議会も市長も核戦争の防止のためにそれぞれの責任を負っているものと私は考えております。その仕事のために44の姉妹都市を私どもは持っております。そしてマグデブルグやドレスデン、それ以外のドイツの町々も今、現在ベルリンに集まって、この数日長崎とそして広島原爆の様態を思い起こしております。そうしたことが2度と起きないようにという思いで集まっております。東ドイツの町々は、そのために平和運動に参加しております。

私どもの町の一番大きな機関である市議会は、声明で「このドイツの地から2度と戦争は起こさない。ドイツの地から今後生ずるものは平和だけである」という誓いを立てております。私どもは、そのために市民を教育し、市民の心をとらえる運動を行っていくつもりであります。また、東ベルリン市議会では、東西両大国の間の新しい条約を非常に歓迎しております。それだけではなくて、ドイツ民主共和国の政府そのものが、この東西間の調停に立とうとしている、その仕事を私どもも大きく支持しております。

既に、数年前に1回、私どもはこの都市連帯市長会議に集まったわけですが、その後、数年間で事態は随分変わりました。中距離核弾頭が両国において廃絶されようとしております。この悪魔の兵器は、少

なくともドイツの地では数が減りました。そして1989年には多くのソ連軍が東ドイツから撤退いたしました。2戦車大隊、そして8個大隊の師団が撤退いたしました。空軍旅団も撤退いたしましたし、3教育部隊、砲兵大隊も3つ撤退しております。つまり、我々の政府そしてソ連も一緒になって非常に多くの兵員数を減らすことを計画しております。東ドイツで1万人の兵力を削減し戦車3個師団を削減いたしました。それから、1空軍編隊も撤退し60機の飛行機をさらに鉄屑にいたしました。さらに1990年以降は、国防費を10%削減する予定でございます。

さらに、ニューミッツという場所にありますロケット、ミサイル師団を全部解体するつもりであります。さらに、1989年7月以降、そのロケット師団のあったところで東ドイツの市民は、現在休暇を過ごせるようになっております。私ども東ドイツは、実は両陣営の間の境界点に立っているわけですが、その境界点に立っているという私どもの地位が逆に両超大国の間の対話を促す、そういう運命を私どもに与えてくれていると思います。

皆さんはベルリンをご存じだと思います。ベルリンはまたきれいな町になりました。私ども平和のための行動によってさらにベルリンが美しくなるように努力し、数年後に非核宣言をした都市の会議を東ベルリンで開催したいと思っております。私たち市民の考えでは、この抑止戦力に頼る者の考え方というものは、もう限界にきていて、坂本先生がおっしゃられましたように克服しなければならないというふうを考えております。1987年、ベルリンの750年祭のときに、168の世界中の市長の方々にベルリンに来ていただき会議を開きました。そのときの何人かの市長の方々に日本で再会いたしました。

また、環境問題あるいは病気克服の問題、そういうものに近代テクノロジーを投入すること、そして市民の生活を向上させること、そういうさまざまなプロジェクトは、平和があって、そして軍備が縮小され初めて可能になることであります。

広島と長崎は、私どもにとって平和の行動のための大きな警鐘であります。私たちの子供たちにこの地球を渡すための警鐘であります。広島と長崎は、私どもにとって単にひどいことがあったというメモリアル、日本の歴史のメモリアルだけではございません。そうではなくて、人類の将来のための警鐘であります。その意味で、私どもに非常な苦しみに耐えてきた長崎の市民の方々に對して、そしてすべての日本人の方々に、私どもはこれからヨーロッパだけではなくて、世界そのものが共通の家になるように闘うことを誓いたいと

思います。

これが私ども東ドイツの国家の政策でございます。その点では、東ドイツの政府と私の市・ベルリンとの間に矛盾はございません。そして、私どもベルリン市といたしましては、政府の人たちに今後もこの平和のために闘うように、絶えず要請していく所存でございます。

ありがとうございました。

コーディネーター（飯島宗一）

どうもありがとうございました。

では、続いてモンロビア市長のL. クウィア・ジョンソンさんをお願いいたします。

モンロビア(リベリア)市長

L. クウィア・ジョンソン

私は、アフリカの西海岸にある210万の人口を持つリベリアのモンロビア市長を務めております。なお、私はこういった市長会議の副会長を務めておりますが、本部はワシントン市にあります。

今、坂本先生のお話を伺いました。そのお話は非常に包括的な考え方を提示してくださったと思います。広島・長崎市民の方々が大変な悲劇に遭い、それからのような考え方が台頭してきたかということがよくわかりました。長崎であれ、広島であれ、これだけの悲惨な状況が原爆によって生じたということを踏まえ、すべての世界の国々は同じような悲劇に直面する可能性を持っているという認識を私たちは新たにするとともに、私たちは地球的な平和を達成するためにどのようなアプローチをしなければならないか、これが本会議の開かれた目的であると考えています。

平和を達成するということは、いくつかの切り口があるのではないかと思います。私たちの国、リベリア、そしてモンロビア市は小さな国であり、都市であります。しかしながら、我々なりの立場、考え方でアプローチをしていき、それが発展していった国際的、地球的なレベルで実施できるようになればいいと思います。平和というのは、草の根から始めなければならないと私は信じています。それが勢いとなって初めて地球的レベルになるのではないのでしょうか。ですから、市民のコミュニケーションを図っていくことが大事であると思います。

リベリアでは、市長会議の理事会というのが組織されています。この市長会議理事会というのは、私たちが中央政府に対して要求していく、いわば団体交渉の組織のようなものだと思ってください。モンロビアというのは、リベリアの首都ですから、私はいわばス

スポークスマンの役割を政府のためにしているわけです。私は、モンロビアのたまたま市長であり、そこがリベリアの首都であるということで、リベリアのほかの市長の考え方はどうであるかということの代弁をしているわけです。市にはさまざまな市民、農民の人たち、労働者の人たちが住んでいます。その人たちの意見を代弁していくべきです。私たちは、国会の場では直接的な決定はできませんけれども、しかしながら、市長が集まることによって、そして組織をつくっていくことによって、いわば地域レベルでの団体交渉を行う発言権を持つようになったと思うのです。

例えば閣僚の会議が開かれるとき、ときどき私はそれにも参加させてもらい、政府レベルでどのようなことが行われているかということも理解しています。中央政府の見解がいかなるものであるかということも、そういった会議を通じて私はほかの市長に伝えていきます。そして、市民あるいは国にとって危険なものがないかどうか、そういうものがあつた場合には、政府に市長会議を通していろいろな申し入れをしていくのです。市長がこういったグループをつくる、そして市長間のコミュニケーションを図る、それをスポークスマンが代弁する。それが出発点ではないかと思ひます。

このような形で、世界の市長の人たちが姉妹都市関係などを通じて、さらに交流を深めていく。開発途上国の市民、市長も一緒になって連帯をして、そして意見の交流を行っていく。それが平和への勢いとなっていくのではないのでしょうか。

国際レベルで今度は見てみますと、リベリアのモンロビア市長は、市長会議の第1回の副会長も務めました。この市長会議の目的は平和達成を推進することにあります。それから、市長・市民レベルでの連帯、協力、文化交流を促進する役割を果たしています。5つのT、観光、貿易、技術、技術移転、そして姉妹都市関係、これは英語で言いますイニシャルがTで5Tになるわけですが、こういった交流を深めていると私は思ひます。

世界の市長が一緒になり、このような健全なしっかりとした組織で活動するようになれば、これが私たちのインターアクションの出発点になり、また、対話の出発点になるのではないかと。それが私たちの意見、見解がより高いレベル、例えば国連機関などでも発表されるようになるきっかけになるのではないかと思ひます。

また、あとで機会があると思ひますので、とりあえず今は、ここで話を終わらせていただきたいと思ひます。

ありがとうございました。

コーディネーター（飯島宗一）

どうもありがとうございました。

次に、バークレー市長のロニー・ハンコックさんをお願いいたします。

バークレー(アメリカ)市長

ロニー・ハンコック

議長、そして世界各国の代表の皆様、私はロニー・ハンコックと申しまして、カリフォルニア州のバークレー市長であります。

バークレー市は、人口10万人強でありましてサンフランシスコ湾奥にあります。ここには偉大な大学がありますし、政治的にも活発な都市であります。平和運動ですとか、その他多くの草の根運動というものをご過去20年間活発に実施しております。

私は、坂本教授のおっしゃったことを強く支持したいと思ひます。そして、我々の都市での個人的な経験についてちょっと披露したいと思ひます。

さまざまなアイデアを具体的な行動に移して実施をすること、それが市民の生活に直接影響を及ぼすということでもあります。4つの主な分野における我々の望み、そして決意というものを実現してまいりました。これは後世に平和な世界を残すというためでもあります。ジョセフィン・デービスさんが昨日おっしゃいましたように、平和というのは「家庭から始まる。そして教育から始まる」ということでもあります。公立学校制度を通して平和教育を行っております。ご存じのとおり、歴史の評価というのは、戦争というものを通じて教育をするわけでもありますけれども、我々は考え方を変えまして、歴史の学習において平和というものを強調して教育しております。4年前であります、カリフォルニアの大学が平和に関する学部というものを発足させておりますので、さらに平和に関する理解が深まることを期待しております。

それからまた、紛争解決についても教えようとしております。平和というのは、戦争のない状態という消極的な意味ではなくて、非暴力的に紛争を解決する手段というふうに解釈しているからであります。平和プログラムということで、ティーンエイジャーに対しましても、平和的な紛争解決、手段などについて教室においても、放課後でも教えております。

それからまた、ボランティアを養成してござりまして紛争の解決に努めております。私もこういう人たちの意見を聞くことができますけれども、このように平和裏に紛争を解決するというような技術を身に付けることを、とても楽しんでいるわけであります。ですから、ローカルな形で各現場において、その平和をまず達成

するということが、まず重要だと思います。

次に、平和に関する思考を深めるという目的で一連の文化的な活動を行っております。ここ4年前からパークレー平和賞というものを設けております。これは地場産業がスポンサーをし、世界平和の促進に貢献した人に対して与えるものでありまして、全市民が対象になっております。これは市民全体が受賞者を推薦するというようにしております。

それから、公園には平和の記念碑があります。これはいろいろな絵が書いてあるタイルで壁をつくっているものであります。パークレーだけでなく世界各地の人たちが平和のイメージを書いているわけです。地域の人だけではなくて各国の観光客もこの平和の壁を見にくるわけです。それに各個人が平和に貢献し平和のために平和を美化するということができるということでありまして、私は今回の来日によりまして、16枚のタイルを持って帰ります。そのうちの4枚は姉妹都市の堺市、そして残りの12枚は広島市で絵が書かれたタイルでありまして、被爆者の方々にいただいたものであります。9月に式典を開きまして、そしてこの壁画に加えさせていただきたいと思っております。これは全世界的に平和を築く上にも貢献すると思っております。

それからまた、積極的に姉妹都市関係を結んでおりまして、その一番古い姉妹都市関係を結んだのは堺市であります。パークレー市民は、人権、社会主義のために直接行動をとりたいという考えを持っております。ニカラグアのレオンも姉妹都市ですけれども、そちらの方にも100ポンドほどの医療福祉材を送っておりますし、それからまた、オカシ・南アフリカでありますけれども、ここは黒人のタウンシップですが、その人々への救援もしております。プレトリアの政府がこういった黒人に対し強制退去をさせようとしているんですけれども、それを阻止しております。それから、エルサルバドルでサンアントニオ・ランチョスという市長が、軍によって逮捕されましたけれども、私はエルサルバドルの領事館に行くとともに、在エルサルバドルのアメリカ大使館にも電話を入れ、「エルサルバドルの市長に対して何かひどいことが起きたら必ずアメリカで報道する」ということを言いましたところ、この市長は2時間後に解放されました。

非常に微妙なバランスというものは、何によって崩れるかということとはわからないということで、非常に危機的な状況にあるということも言えると思っております。我々としては、姉妹都市に対しまして、こういった危険な時期におきましては、耳になり口にならなければならないと思っております。

それからまた、先ほどのモンロビア市長がおっしゃ

いましたことにも全面的に賛成でありまして、各国においても、そして国際的にも市長の会議と申しますか、市長を集めた場というものをつくらなければいけないと思っております。

それから、もう一つ非常に重要な新しいステップがあります。それは平和の活動と経済というものを一体化するという考え方であります。つまり、我々が非常に重要だと思っているものに対して予算を投じるということであります。1980年代の初頭でありますけれども、南アの政府に反対をしているからでありますから南アから投資物を撤回いたしました。ほかにもそういうことをしているアメリカの都市がいくつかあります。戦争からの投資を撤退し、積極的に我々の納税者から得た税金、血税というものは、平和のために使わなければいけないということでもあります。

1986年の平和非核地帯宣言でありますけれども、パークレー市といたしましては、社会的な責任をもって投資をし、そして購入をし、調達をするということでもあります。都市の予算は、核兵器あるいはその部品を製造するような産業に対しては使わないということでもあります。さまざまな兵器関係の物資、あるいは核兵器を製造している企業からは物資を調達しないというようなことも決定しております。これに関しましては州の規定がありまして、市議会としては必要な物資に関しまして、調達ができ得るサプライヤーがない場合には投票に付さなければいけないということになっておりますけれども、この免税条項を行使しなければならなかったことはありません。一時モトローラーから調達をしなければならぬということになりました。モトローラーというのは、親会社が核兵器の部品を製造しているわけであります。しかし、最終的には、我々の条例にも合致したような代替的な企業を見つけてラジオを購入することができました。同等な製品を同等な価格で購入する、そして我々の条例に合うようなところから調達するという考え方であります。

今回の会議というのは、前進に向けての第一歩であるということとは言えると思っておりますし、恒久平和のために各国の市長の方々とぜひ協力をしたいというふうに考えております。

コーディネーター（飯島宗一）

どうもありがとうございました。

それでは、続いて藤沢市長の葉山さんからお願いいたします。

## 藤沢市長 葉山 峻

藤沢市は、東京から南西50キロ、ちょうど今は海水泳のシーズンで、ヨットやサーフィンあるいは海水泳でにぎわっている人口35万ほどの町であります。私は18年間、その市長を務めております。非核宣言をした町の一つでもあります。

先ほど、坂本教授から「世界はひとつ」という、そしてグローバルな意味におきましても、世界の都市、そして農村を含めての非常に包括的なお話がありました。また、広島の人・峠三吉の詩によって終わる非常に感動的なお話を伺って、私も本当に改めて平和あるいは人類、人権という問題について考えさせられ、教えられたところが多かったわけでありまして。

この第2回世界平和都市連帯市長会議には、第1回から私も参加させていただいておりますけれども、今回その輪も非常に広がり、その内容も非常に素晴らしいものになってきたわけでありまして、荒木広島市長、本島長崎市長を初めこれを準備された関係者の方々のご努力に心から感謝したいと思います。

先ほど、坂本先生が「世界はひとつ」というお話をされました。人類は一つである、そして地球は一つであるという意識がどうしてでき上がってきたかということを考えてみるならば、1つは、広島・長崎に最初に核爆弾が落ち、そして、これからの未来において核戦争による消滅のイメージの共有があると思います。もう1つは、フロンガス、海洋汚染等いろいろな意味での生態系の破壊による人間の破局のイメージの共有があるというふうに思いますし、このことは確かに経済発展とか、あるいは核兵器の開発というのは人間がつくり出したものでありますけれども、また、それによって人間が阻害され、拘束をされます。そういう意味で外から与えられた条件の帰結として、いや応なしに「人類はひとつ」だというふうに考えざるを得なくなったと、そういう側面があることは、ご承知のとおりであります。

それに対して、私たち都市・自治体に携わる者は、それと違っているわけでありまして、地域社会で対等な人権を認め合って、ともに生きようというときに、いや応なしに破局の恐怖を共有しているからではない。そうではなくて、坂本先生も言われているように、お互いに人間として人間らしく生きようという、極めて主体的な選択として平等の人権を認め合うという場が地域社会であり、自治体のレベルなのであります。

そういう意味で、我々自身が主体的に自分をかえることによって、新しい共存のあり方をつくり出していくということ、それが普遍的な人権に基づいた地球社会、地域社会とを形成していくプロセスにほかならな

いものだと思います。

そういう私たちは、今ローカルであり、しかもグローバルな時代、人類のつながる時代に生きていますし、そういう中で特に最近においては、いわゆる1980年にマンチェスターの非核宣言に始まりました非核自治体宣言運動、そういう中で生まれてきた新しい運動であるというふうに思います。今、世界で4,300を超える都市が非核自治体の宣言をしています。この日本におきましても、約1,400になろうとしている非核自治体運動の広がりがあります。これがヨーロッパの市民と自治体の努力の中で、国際世論となって、ご承知のようにINFの全廃条約という史上初めて核軍拡から核軍縮へと転換させる大きな原動力になったことは、ご承知のとおりであります。

しかし、私も広島の会議でも申し上げましたとおり、陸のINFは全廃されたわけでありまして、いまだ核兵器の全廃は実現されておられませんし、そしてまた、特に海の非核化と申しますか、海上発射核、水中発射核を含めて海の核は縮小されるどころか野放しにされています。そしてこれがむしろ拡大されていく方向にあります。これは地中海といわず、アジア・太平洋といわず、ますます拡大されています。これについてのテーブルに着くことさえもないというのが現状であります。これがさまざまな形でこの太平洋においても、深刻な問題を投げ掛けていることは事実であります。私たちは今、この海の非核化の問題が非常に重要なところに差し掛かっているということを感じざるを得ません。

特に、最近発表されました中で、いわゆる沖縄の沖永良部島沖におきまして1メガトンの水爆搭載機が太平洋の4,800メートルの奥深く沈みました。そのままその艦船が横須賀港に入港したという衝撃的な事実が報道されました。日本国民に大変深刻な不安を呼び起こしていることは、ご承知のとおりであります。アメリカの市民団体の調査によりますと、世界の太平洋、大西洋を含めまして9つの原子炉が沈み、また、48の水爆が今海底に沈んでおるという報告、少なくともそういう事実があるということが発表されておりますけれども、私たちは、この海の非核化を要求し、また、同時に太平洋の非核地帯の創設に向けて、それぞれの自治体の手を取り合って、この実現のための努力をしていかなければならないだろうと、そのように思っております。

同時に、私たちは「核をつくらず、持たず、持ち込ませず」という、この非核三原則が文字どおり、それが行われるように、この非核三原則の法制化を日本政府に迫り、また、アジア・太平洋の非核化に向かって

イニシアチブを取るように市民とともに要求をしていきたいと、そのように思うところであります。

同時に、先ほどからいろいろお話がそれぞれの市長さん方からありましたけれども、やはり自治体こそが平和を必要とし、核のない世界を市民とともに求める一番の基礎のものであるというふうに常々感じております。そういう中での重要なことの一つは、姉妹都市関係の中で核をなくす努力をお互いにしていくということが必要であると思いますし、そのための国際交流を進めていかなければならないと思います。

私の町について申しますと、アメリカのフロリダ州のマイアミビーチ、あるいはカナダのウインザー、あるいは中国の雲南省の昆明市、あるいはソビエトのヤルタ市と姉妹都市、あるいはツインシティー（双子都市）、あるいは友好都市等の関係の交流を毎年続けておりまして、そういう中で非核平和のための両市民、両都市間の共同の努力をさらに進めていこうということの努力を重ねているわけでありまして、これを世界中の諸都市の中で、それぞれの姉妹都市の関係の中で、さらに拡大し活発にしていくことが非核平和のための大きな貢献になるだろうと、そのように思います。

それから、もう一つは平和教育の重要性、これは広島アピールの第2の章の中でも触れられております。ユネスコ憲章に「戦争は、人の心の中に生まれるのであるから、人の心の中に平和の砦を打ち立てなければならぬ」ということがあります、まさしくそのとおりであると思います。そういう点では、神奈川県で今年出版されたのでありますけれども、神奈川県の県高教職員組合が平和ブック「高校生のための平和のあり方」という平和読本をつくりました。この本は、高校生の目の高さから核や戦争の問題だけでなく、環境や人権、それから教育や女性など現代に問われるテーマを広く取り上げて、高校生向きにつくり上げた大変いい本であると、私も最近感動したわけでありす。

この2月にアメリカのオレゴン州のユージンで非核自治体平和会議が開かれました。今までの第1回のマンチェスター、そして第2回のスペインのバルドバ、第3回のベルジド、そして今回初めてヨーロッパ以外のアメリカのしかも太平洋岸で開かれ、その中で特に、自治体による第三世界の人々への援助、そしてこの環境の問題とが討論の日程に上ってきたことで、単に戦争やテロのような直接的暴力のない状態としてのネガティブピース（消極的平和）と申しますか、そういうことを求めるのではなくて、構造的な暴力とか、すなわち差別とか、抑圧とか、貧困とか、環境破壊などのない状態、そういうポジティブピース（積極的平和）

を実現していこうという、新しい平和運動の思考力がようやく国際的なこの非核自治体運動にのぼってきたということ、私は強い共感をもって感じたところであります。

そういう意味で、この非核とか、非暴力とか、経済的安定とか、環境とか、開発など広い意味での平和を達成するためには、さまざまなレベルでの多様な市民グループや個人の支持と参加が不可欠であります。その意味では、市民に近い自治体市長の果たす役割は非常に大きいと思います。今、必要なのは国境を越えた市民、都市・自治体の一体的協力による下からの地球的な人権の確立が急務であります。

そういう中で、今回の世界平和連帯都市市長会議が本当に実り多い成果を収められることを私も希望しておりますし、皆様方とさらに手をつなぎ合って、世界の平和とこの人類の平和のために共同の努力をしていきたいと思っております。「考えは世界的に、行動は地方から」という言葉がありますが、草の根の市民とともに非核平和のために共同の努力をしてまいりましょう。

以上で私のスピーチを終わらせていただきます。ありがとうございました。

コーディネーター（飯島宗一）

ありがとうございました。

最後になりますが、長崎大学学長の土山さんをお願いいたします。

長崎大学学長 土山秀夫

ただいまご紹介いただきました土山でございます。

被爆地に存在する大学の学長として、この発言の機会を与えられましたことを大変ありがたく思っております。

世界の平和を考えると、私たちは何が真の平和を目指す道であり、何が見せかけの平和への道であるかを、まず明らかにする必要があると思っております。

前者、つまり真の平和を目指す道の中で、核実験の全面禁止と核兵器の廃絶とが何にも増してまず求められることについては、だれしも異存のないところでありましょう。核兵器のもたらす惨害こそは、地球そのものの破滅を意味する最大の悪であるからにはほかなりません。しかし、残念ながら人間の相互不信は、一挙にそこにたどりつき得ないのが現実であり、過渡的な措置も認めざるを得ないのが今日の姿であります。米ソ両国のINF全廃条約の調印、そして現在行われつつある戦略核兵器を含む包括的軍縮交渉もその一環とみなされています。もちろん、核兵器にとどまらず生

物兵器や化学兵器の廃絶、通常兵器の削減、そして殊に発展途上国における貧困や飢餓の問題解決に取り組むことも、地球の平和達成に不可欠なことは言うまでもありません。

これに対して、後者、つまり見せかけの平和への道とは何でしょうか。それは幾たびも指摘されておりますように核抑止力に頼る平和の保持という、似て非なる考え方であります。この論拠に立つからこそ、今なお地球上の諸々で相次ぐ核実験が繰り返されているばかりでなく、核兵器の保有国はむしろ増加しつつあり、地球の平和を脅かす潜在的危機は少しも弱まってはいないと思われまます。

そこで、私たちがこうした見せかけの平和論を捨てて、真の平和への道だけを取り上げようとするならば、次に私たちが一体何をなすべきでありましょう。その際、この会議に集まられた人々は、各国家の代表者でもなければ、個人の資格でもない、つまり、それぞれの都市に住む住民の代表であることに改めて思いをいたすことが必要だと考えます。ここは国家や個人の利害を超えた、英知によって結ばれた代表的な人々の集まりであるはずだと思います。

私たちは、まずやがて21世紀を迎えようとする現代の情報化社会の特質を活用して、国の内外を問わず、都市相互の平和達成に役立つ正確な情報網を確立させる必要があります。そして、間接的な報道に頼るのでなく、直接的な都市相互の情報によって、平和を阻害する要因、例えばそれが戦略兵器に関すること、環境汚染に関すること、あるいは飢餓の発生に関することであれ、それをいち早くキャッチし、助言をし合い、みずからの都市政策に生かし、場合によっては連帯し合った都市群が、言動によってともに各国政府に働きかけることを繰り返す行いすべきではないでしょうか。

私たちは、スウェーデンのシセラ・ボク女史の著書「平和戦略」の中に一つのあり方を学ぶことができます。彼女はこう述べています。「非暴力が暴力を制するには、少数の堅忍不拔の信念を持つ者だけでは不十分であり、情報の公開や広い信頼の醸成、大胆な考え方の拡大など一連のシステムによる暴力への包囲網が形成されなくてはならない」と。私たちは、第1回の世界平和連帯都市市長会議が、各都市市長の初の顔合わせと、今後の連帯を誓い合う大きい成果を上げたことを知っています。そしてその基盤に立った今回の会議は、平和達成のために今や各都市がどう行動したらよいかを話し合い、決定することに何よりの意義が求められているのではないのでしょうか。

この会議を単なるセレモニーに終わらせるのではなく、地球の次の世代に引き継ぐ各都市の責任と使命に

おいて。

ありがとうございました。

コーディネーター（飯島宗一）

どうもありがとうございました。

それぞれの市長さんから、大変具体的で、かつ有益なさまざまなご体験あるいは考え方等をお示しいただきまして、大変ありがたかったと思っております。

これからの時間をなるべく多くの方のご発言に割きたいと思えます。まずフロアの方からご質問あるいはご発言のご希望があれば、それをお願いしたいと思えます。

申し上げましたように、なるべく手短かに、簡潔に要点をお話になっていただきたいと思えます。

ゲッチンゲン市(アルトゥール・レヴィ市長)

基本的なパネルの問題についてであります。その前に、坂本教授の素晴らしい講演、そしてまた、パネリストの皆様方のご発言について感動いたしました。

平和教育の問題に特に触れたいと思えますけれども、すべての過去の歴史の戦争を見てみますと、同じ宗教あるいは政治的な信念を持った人々がお互いに戦ってきております。ナショナリズムというのは、一貫して国際連帯よりも強かったわけであります。そして感情の方が論理的な信念よりも強かったわけであります。

ですから、平和教育を成功裏に行っていくためには、精神的あるいは心理学的な研究も必要になるわけであります。合理的な思考というようなものが、感情の訴えよりも、より有効であるというようなことも考えなければなりません。そして、平和教育におきましては、感情とそして合理的な思考というようなものを合致させなければいけません。

こういった議題についても、このパネルで討議をしていただきたいと思えます。

ボローニャ市(ダンテ・クリッツィ氏)

提案したいと思えます。私の名前はダンテ・クリッツィと申しまして、ボローニャ市から来ました。私はハンコック・パークレー市長のスピーチに大変感動いたしました。これまで長い間行ってきたことですが、アメリカで、平和のための都市の役割を話し合う世界会議を開催したらどうでしょうか。多くの市長が、特にヨーロッパから出席しますよ。ですから、ハンコックさん、どうぞアメリカでの開催を提案してください。アメリカは偉大な国ですから、同胞として私たちは参加したいと思えます。ハンコックさんにお会いして、これまで経験されたことをお聞きしたいと思いま

す。ハンコックさん、ありがとうございます。

ランカスター市（ジョン・C．リヨンズ市議会議員）

事務局に伺いたいと思いますが、次のようなことを検討していただくことはできないのでしょうか。

つまり、定期的にニュースレターをこの会議に出席した国に送っていただくということです。このことにより、我々各都市の代表は、ほかの出席国に対しまして、さまざまなイニシアチブであるとか、具体的な行動、考え方について情報を交換し合うということができそうです。それは平和ということに関連してであります。それによって、さらに絆、連帯を深めることが可能になってきます。もちろん、必要であれば講読費を払う用意はあります。非常に貴重な資料になると思います。

ですから、事務局は四半期ごとでもいいわけですが、そういった定期的な何らかの印刷物、ニュースレター、そして意見を交換する手段というものを確立していただきましたら非常に喜ばしく思います。

それから、坂本先生に対しまして、先ほどのスピーチは非常に素晴らしかったというふうに賛意を表したいと思います。平和に関する国際的な視野でのお話を、ありがとうございます。

コーディネーター（飯島宗一）

今のニュースレターあるいはニューズペーパーのお話は、夕べの懇親会のときにも長崎市長の方からそういうお話もあったように思いますけれども、具体的にどう進めるかということは、そういうご希望を受けて、広島・長崎の事務局の方でまずご検討を願って、そして皆さんにご相談をするというようにいたしたいと思いますので、ご了解ください。

アーバイン市（ジェブ・ブラグマン環境政策部長）

土山先生のおっしゃいましたことの精神に基づきまして、この第2回会議におきましては、具体的にこの地球規模の問題に対して対処する上で何ができるかということをお話しすべきだと思います。

明日の午前中でありまして、具体的な都市の協力、特に地球環境問題に関して討議をするのに関心のある方は、朝食会を設けたらどうかというふうに思います。朝食のときに話し合っていたらどうかと思います。これは地球規模の環境問題、例えばオゾン層の破壊、成層圏の破壊であるとか、フロンガス等に関しまして、この組織化については、明日の朝、討議をしていただきたいと思います。

コーディネーター（飯島宗一）

これもまた検討させていただきます。あるいは全員が集まってそこでお話ができなくても、皆さん個々に朝食なり夕食なりの食事の時間を今のご提案のようにお互いの有効なコミュニケーションに、まさに草の根的に自発的に使っていただくということは大変結構なことだと思いますし、そのご提案は事務局の方でなお検討させていただきます。

ブライトン市（ブライアン・R．フィッチ市長）

私は、先ほどハンコック・パークレー市長のコメントに感動いたしました。非常に実践的なものであったと思います。都市が具体的な方法で問題に取り組んでいらっしゃる、非常に前向きにやられていることに感心いたしました。ただ、イギリスでは、いわゆる自由のための戦争を戦った後で、地方自治体が現在置かれている状況は、45年前から全く好転していません。私たちには積極的な支出をすることが許されていません。サッチャー政権によって制定された新しい法律では、物質の調達をする場合、売手をこちらで選べないので、南アフリカからの輸入停止ができませんし、したがって人権が尊重されないのです。平和のための支出や援助のための自主的な拠出が新しいイギリスの法制によってカットされているわけでありまして。

この会議は、非常に役立つものであります。私の町よりも、ほかの国の方が多く自由を持っているようでありまして。このような自由の行動がほかのところにおいて多いということを知ることができました。私のところでは狭まれております。

マラコフ市（ミホ・シボ助役夫人）

私は、フランス・マラコフ市の助役をしております夫に同行してまいりました。国籍は日本人です。

パークレー市長さんの、とても具体的なお話に大変感銘いたしました。7年前になりますけれども、市とは別にフランスの方たちに被爆の実相を伝えるために「広島・長崎研究所」というのをつくりまして、フランス人に原爆の事実を伝える活動をしております。フランスでは「原爆を投下したために第二次大戦は終わったから、原爆投下は有効であった」というのが常識となっております。そのため子供たちが原爆ごっこをするのを私は実際この目で見て大変ショックを受けました。

そして、この7年間、まず大人から原爆の実相を伝えていこうということを始めましたところ、平和教育の観念が大分発達してまいりまして、ここ数年間、毎年フランスでは平和教育の会議が開かれております。



そして特に、早期に子供に平和教育をするということに重点を置きかえましたが、実際に始めてみますと、小学校の子供たちに見せる核兵器の教材が全然ないのです。しかも現在、フランスでは、テレビに日本のアニメが進出しておりまして大変暴力シーンが横行しております。そのためフランスの子供たちの考え方に「爆弾の下にいたやつが悪いからだ、だから殺されたんだ」というような大変困った考え方が浸透しております。確かに日本の暴力的なシーンのアニメを見てみると、ヒーローは必ず武力とか腕力で悪者を退治しているわけなんです。

そこで、私たちはこれから小学校の子供たちにも見せられる、暴力シーンがなくても核兵器の恐ろしさを伝えることができる平和のアニメをつくろうと考えまして、日本の友人たちとこの運動を始めました。2年以内になるべく完成して世界中の子供に見せられることができたらと思います。

皆様も、どうぞご協力をお願いいたします。

#### キャンベルタウン市（ジム・A・クレマー市長）

坂本先生、大変に示唆をお与えくださる基調講演をありがとうございました。

土山教授のご提案がありました、つまり情報網をつくるという提案がありました。そして、現代の通信網、情報網を使おうということです。ぜひやるべきだと思います。各国の市長がここに集まっています。長崎におきまして何らかの情報ネットワークをつくり始める、少なくともファクスの番号だけでも記録することなしに終わるのは残念だと思います。各都市に帰りまして、このネットワークを拡大し、ほかの都市市長も含めることが今後可能ですから、ぜひ積極的に実現してほしいと思います。

もう一つ、ほかの市長さんが提案を申しあげましたけれども、再度申し上げたいと思いますが、移動展示会をやるべきだと思います。米国のクリーブランド市代表から、広島での展示会をクリーブランド市において開催したという話がありました。これは広島からの展示物を借りて行い大成功を収めたという話がありました。ぜひこれを拡大してやるべきだと思います。移動し、巡回する展示会であります。広島からの、長崎からの展示物も示す、またほかの地域、ほかの戦争経験の展示物も示すべきだと思います。広島・長崎の経験は、今後とも常に反戦運動の中心となると思います。特に、核戦争に対する反対であります。それ以外の都市からの経験をあらわした物も展示することができると思います。

以上、2つ提案させていただきたいと思います。

広島・長崎は、悲惨な経験をされたところであります。それだけではなく、財政的な貢献もしていらっしゃるわけでありますので、ここで資金面でも国際的に都市間で連帯し共同して資金を出し合うということも必要だと思います。

「考えは世界的に、行動は地方から」、そして「発言は各地域」で行わなければいけません。葉山市長は、非核太平洋地帯化のお話をおっしゃいました。オーストラリア、カナダ、日本、米国、ニュージーランド、特にニュージーランドのロンギ首相がお辞めになるということを知って大変に悲しく思いました。これは挫折だと思えます。また、他の太平洋諸国もぜひ太平洋の非核化宣言をするべきだと思います。世界の3分の1がこの太平洋にいます。その非核化宣言。そしてこれをインド洋非核化、大西洋非核化と広げ、全世界の非核化に広げなければなりません。重要なことだと思います。

#### オースティン市（ジョージ・ハンフリー市議会議員）

テキサス大学があるのがテキサス州オースティン市でありまして、州部になっております。

まず、最初に広島・長崎市長にお礼を申し上げたいと思います。大変すばらしいホストでおられ、心より感謝の意を表したいと思います。

私は、市議会議員でありますので、いろいろ難しい問題を扱っていかねばなりません。まず最初に明確な、そしてオープンなコミュニケーションを行っていかねばならない。その点を強調したいと思います。こういった会議は、今年世界で開かれる会議の中でも最も重要な会議ではないかと私は位置づけています。したがって、私としては「人類の生存のためのグローバルサミット」という運動に積極的に参加しようということで話を進めていきたいと思っています。

核軍縮を行っていく、それからまた、社会的正義、環境の問題を扱っていかねばなりません。私たちは、もう時間が残されていない。行動にすぐ移していきたいと思っています。

#### ハーグ市（アド・ハーベルマンズ市長）

ピースパレス（平和の宮殿）があるのがハーグ市であります。そしてピースパレスでは、国際法そしてまた平和の話し合いがいろいろと行われています。

提案がございます。私は、広島でも申し上げましたけれども、これから先、核兵器のみならず兵器をなくしていかなければならない。そして、そのためには今ある繁栄を南北両方の国々で分かち合っていかなければなりません。そして、人権擁護も平和のためには重

要でありましょう。また、生態系のバランスをとっていくことも大事です。市町村の立場はどうでしょうか。政府の立場とそれから市町村の立場を比べてみますと、核軍縮とか、世界の平和については、今まで発言権がなかったわけでありまして。

しかしながら、パークレー市長さんのお話を聞いてみますと、パークレー市では、この分野で「自分の町でこんなことをしている」との発言がありました。つまり自分たちに何ができるかということが、よくわかる例でありました。私たちとしては、これからも南北間の都市の連帯を促進していかなければなりません。

ただ、ファンド（資金）が十分でないという問題もありましょう。私たちには市町村の連合体があります。各国の市町村団体の国際的な連合組織があります。数カ月前にソ連の市町村団体が、この国際的な市町村団体のメンバーとなりました。本当の意味でも国際的な組織となりました。国連のような組織になってきたわけでありまして。

「A E R A」というのが、その国際組織の名前ですが、私はその執行委員会のメンバーであります。市町村団体が、これから先、協力をしていき、そしてこの会議で出されましたアピールを国連にも受け入れてもらえるようにしていかなければなりません。既に「A E R A」というこの国際組織は、その宣言を国連に受け入れてもらえるように要請をしております、もしもそれが可能になれば、国連のファンドがこの団体に回されることになり、こういった平和の活動のために使えるようになると思います。

#### バンクーバー市（リン・ラザフォード氏）

私は、「広島ライブ」の代表としてやってまいりました。「広島ライブ」というのは、何かというと、これはネットワークでありまして、1週間だけのものなんです。今、土山教授の方からネットワークをつくるのが大事だというお話が出てきました。こういったネットワークをつくっていくための基礎は、もう既に存在しております。このネットワークというのは、いろいろなコンピューターシステムを使っており、世界中をつなげているわけです。「広島ライブ」という形で今ネットワークをつくっています。こんは市長間の個人的なコミュニケーションにも使えますし、それからまた、会議のために使うこともできると思います。それからまた、公共のいろいろな会議、パブリックな会議にもこのネットワークに加盟すれば使えるようになります。ですから、もしも皆さんがすぐにネットワークを使いたいということであれば、インフラがあるということをお知らせしたいと思います。関心のあ

る方は、ぜひ私の方に連絡してください。

こういう機械をご存じでしょうか。普通のワープロなんです。これを使ってモデムに接続をするわけです。そうすれば毎日でもいろいろな会話ができるということをおし上げておきたいと思っております。

#### ロッテルダム市（ヘンク・ファン・デア・ボルス前助役）

1つだけ質問があります。

坂本教授のスピーチを非常に感心いたしました。このスピーチを配布していただけませんか。

それから、第2番目の点ですけれども、先ほど言及されました問題、つまり国連の役割の強化ということでもありますけれども、ティンベエグ教授というノーベル賞受賞者がいらっしゃいます。それからまた、ブルントラント・ノルウェー大統領がおっしゃっていますが、そういった方々も国連の役割の強化ということで、いろいろご意見でありますけれども、この件につきまして坂本教授にお伺いしたいと思います。

#### 基調講演者（坂本義和教授）

国連のシステムをどのように強化するかという点ですけれども、これについて短い時間で述べることは難しいと思います。

ですから、私がここで強調したいのは、日本の役割に関してです。つまり、日本はもっと積極的な貢献をして国連を強化すべきだと思います。アメリカは、財政的にも心理的にも国連から身をききつつあります。それは残念なことですが、最終的にはアメリカが決めることです。そして、日本はその肩代わりをしていくべきです。国連予算の25%がもし必要だということであれば日本が払う用意があるという姿勢を示すべきです。それは軍事費の負担をするよりもはるかに賢明だと思います。日本は非常に高価な、高度の軍事機器をアメリカから買っているわけですが、かわりに国連に対して財政援助ができると思います。

国連の強化などというのは、何か旧式な議論だと考える人もいるかもしれませんが、国連を再活性化する時機が訪れたと思います。と言いますのは、平和維持活動というものを考えましても、ソ連がもし積極的に協力することになれば、これまでとは全く違った形になると思うからです。この場合は、国連の平和維持軍はかなりの重みを持つ可能性があるわけです。例えば中東などでもそうなるでしょう。ですから、ソ連が参加すれば平和維持活動も全く変わったものになります。そして、ソ連が参加するとアメリカがこれを無視することは非常に困難になると思います。

これは国連憲章の当初の規定に戻るわけです。国連

の軍事参謀委員会というものが必要であるということが憲章に書かれておりますが、これはもはや夢ではなく、米ソ接近の一つの証しになり得ると思うわけです。特に、ゴルバチョフ書記長は国連強化に非常な関心を持っています。政治的なイニシアチブはソ連から、そして経済的・財政的なイニシアチブは日本がとる時期がきています。

それから、第三世界の諸君も、こうした国連強化によって得るところが大きいと思います。

#### コーディネーター（飯島宗一）

まだ手を挙げていらっしゃる方が10人ぐらい数えればいるわけですが、残念ながらことセッションに与えられている時間が経過をいたしました。コーディネーターとしては、大変申しわけなく思うんですが、これで終わらせていただいて、また午後2つの分科会に別れて討論の機会がありますから、一方は坂本先生もう一方は土山先生のコーディネーターで分科会が開かれますから、その場でまた具体的ないろんなご提案についてご発言をいただきたいと思います。

今日は、パネリストとして出てくださいました各市長さんから大変有益なお話を承ることができ、また、坂本先生から大衆示唆に富んだ、また将来に向かって希望を持った展望を与えられるお話を頂戴いたしまして、このパネルディスカッションが充実したものになったことを、坂本教授に再度、私からもお礼を申し上げます。

皆さん、どうもありがとうございました。

#### 司会

飯島先生、坂本先生、パネリストの皆様、それから会場でご発言いただきました皆様、本当にありがとうございました。

それではここでコーヒープレイクとさせていただきます。あと15分後に、この会場で「原爆の長崎」を上映いたします。この映画は、被爆後の長崎の町の実相をとらえます貴重な記録フィルムを織り込んだものでございます。「長崎を最後の被爆地にしなければならない」と、平和を希望する長崎市民の気持ちをお汲み取りいただきたいと思いますので、ぜひご覧くださいますようお願いいたします。



# 被爆者との懇談

145

8月8日（午後3時32分～午後3時51分）

ホテルニュー長崎 鳳凰閣

司 会

長崎大学医学部助教授 朝 長 万佐男

## 1. 被爆者の報告

片 岡 ツ ヨ	147
吉 田 勝 二	148
江 頭 チヨ子	150

## 2. 被爆者との質疑応答

アンジェロ・メダ市長(コモ市)	151
ジョン・C. リオンズ市長(ランカスター市)	152
ミホ・シボ助役夫人(マラコフ市)	153



## 事務局

それでは、次に「被爆者との懇談」に移りたいと思います。

司会進行を長崎大学医学部助教授の朝長万佐男先生にお願いいたしております。

朝長万佐男先生は、現在、長崎大学医学部の助教授であり、医学部附属原爆後障害医療研究施設で原爆後障害の研究に携わっております。また、今年の秋、長崎で開催される「核戦争防止国際医師会議（IPPNW）」の長崎会議事務局長も務められていらっしゃいます。

それでは朝長先生、よろしく願いいたします。

## 司会（朝長万佐男）

それでは「被爆者との懇談」を始めさせていただきます。

私は、ただいまご紹介いただきました長崎大学医学部原研内科の朝長でございます。これからの進行役を務めさせていただきますので、よろしく願い申し上げます。

それでは、本日の登壇者の方々をまず紹介させていただきます。

本日は、3人の被爆者の方、向かって左より片岡ツヨさん、吉田勝二さん、江頭チヨ子さんであります。これらの方々から被爆の現体験をお話ししていただくことになっております。このご3方につきましては、改めてのちほどご紹介させていただきます。

私のお隣におられます2人の医師の方は、まず聖フランシスコ病院顧問医師の秋月辰一郎先生であります。みずからも被爆されまして多数の被爆者の治療に携わってこられました。現在は、被爆者として平和運動の中心者のお一人として活躍をなさっております。

次に、市丸道人教授をご紹介します。市丸先生は、長崎大学の医学部医学生当時に被爆されまして、その後は原爆の後障害の研究一筋にこれまでやってきておられます。

それから、この会場には、いわゆる「語り部」としての活躍を行っておられます長崎平和推進協会の継承部会の皆さんにも多数ご出席いただいておりますことをご紹介します。

では、早速、体験の話に移りたいと思います。

まず、片岡ツヨさんに初めにお願いいたしますが、片岡ツヨさんは24歳のときに爆心地から1.4キロメートルの三菱兵器製作所で被爆されまして、全身に火傷を負われました。現在は、病弱なお体にもかかわらず、長崎を訪問します修学旅行生に長崎の悲劇を語り続けておられます。

それでは、片岡さん、よろしく願いいたします。

## 片岡ツヨ氏

原爆投下の時、私は一緒に働いていた仲間と三菱兵器工場の軒下で休憩していました。爆音のような音を聞いた瞬間、私は頬をものすごい力で叩かれ、目から火花が出たような感覚を味わうとともに気を失ってしまいました。気がついた時には、私の周りにはだれもいません。建物はめちゃくちゃに倒れてコンクリートの壁の下敷になった女の人が助けを求めています。私は、自分自身が立ち上がるのが精いっぱい、とてもその人を助け出す気力はなく、ただフラフラとその場を逃れました。そして浦上川の岸にたどりつきました。

私は、そこで世にも恐ろしい光景を見たのです。水を求めて集まったのでしょうか。おびたしい人々が横たわり、うずくまったりして、足の踏み場もない状態でした。全く男女の見分けがつきません。川の中では、流れる血を洗っている人、水の中に顔を突っ込んだまま息絶えている人がたくさんいて、まさに地獄絵図さながらの光景でした。とても語り尽くせるものではありません。

恐怖に震え、家にいる母の安否を気づかひながら周囲を見回しました。すると、見渡す限り家も木も倒れてしまって、天も地も暗くなっていました。私は、これでこの世が終わるのではないかと考えて神に救いを求めました。ふと、私が大変焦げ臭いのに気がついたのです。「へんだなあ」と思って、自分を見回しました。すると両肩から指先まで焼け、両足も焼けていました。

私は、ふらつく体に鞭打って我が家へ急ぎました。川を渡らねばなりません。川には、亡くなった人が積み重なっていて、私は、その上を踏み越えてやっとのことで渡りました。我が家へたどり着いた時、幸いにも母は無事でお互いの再会を喜んだ間もなく、私の目が全く見えなくなり、そこにうずくまってしまうました。爆音の恐怖にも、飛び散ってくる火の粉にも逃げ回ることができないで震え、そして火傷の痛みにも耐えることができないで地面をころげ回りました。母は、69歳で腰も曲がっていましたが、私の手を引いて竹林の方へ連れて行ってくれました。土の上に寝たまま4日間を過ごしました。傷ついた人もたくさんいたようで、子供も大人も水を求めながら亡くなりました。私も大変水を求め母を困らせたようです。原爆の翌日から私は真っ黒い血を吐くようになり、吐血が1週間ぐらい続きました。左の耳が大変痛み、それから以後、左の耳は難聴です。

竹林から4日目に、近所に住んでいた方に助けられ、聖フランシスコ病院へ運んでいただきました。コンクリートの床の上に寝たまましばらくを過ごしました。負傷者が多くて多分、薬もなかったのでしょう。目の見えない私は、治療の面は全くわかりません。そのころ黒い雨が降り続いて雨漏りと振り込みで私はずぶ濡れになり、困ってしまいました。この病院は、何とか建物の外形だけはとどめているものの、窓も全部吹き飛び、中はめちゃくちゃに破壊されていました。次から次へと亡くなっていく人の声を聞くたびに、次は自分の番のようで、神に救いを求めながら死への準備もいたしました。高熱のために食欲も全くなり、もうろうとした日もありました。お茶と重湯が私の命の綱でした。

9月20日ごろ、不安な暗黒から光線がほんやり見えるようになりました。この上もない母の喜びは、私に生きる希望を与えてくれました。目が開いて初めて見た光景は、地下のコンクリートに敷かれた古ぼけた1枚の畳が母と私の寝ぐらでした。ライ病患者のような両手の傷を見て悩みと吐息に包まれたので、立つことから練習を重ねて、ふらふらと病院の庭に出ました。病院は高台にありまして、浦上一帯の廃墟を一望したのです。そこで20分ぐらい独りたたずみ慟哭しました。こうして生かされても住む家もありません。すべてをなくしてしまってどうして生きていけばいいのか心が締めつけられました。東洋一の大きさを誇っていた浦上教会までが廃墟と化し、私はこれが神の摂理だろうかと疑いました。

数日後、知人のおばさんと出会うと、私の顔を見るなり「そんな顔になってどうしよう」と、あーんあーんと泣かれたのです。確かに私も顔の傷は少しはあるとは思っていたのですが、まだ鏡がなくて顔は見えていませんでした。それから、自分の顔は相当に傷があると考えようになりました。一時も頭から離れません。数日後、病院の片隅で鏡の破片を見つけたのです。全身は震えました。やっと鏡を手にして顔を見た瞬間、絶望のどん底に突き落とされました。ショックの余り鏡をポーンと地面へ投げ付けました。この化け物のような顔が私なのか。どうしてこの顔を社会にさらして生きていけばいいのか。このような考えと、いっそのこと原爆で死んでいたらよかったのにと、幾度涙して叫んだかわかりません。当時、私は24歳でした。人生の中で最も若さを誇り、夢も希望もありました。その幸せを原爆はもぎ取ってしまったのです。狂いそうな苦しみの中にも、踏みとどまらせ、私に生きる勇気を与えてくださったのは、神のおぼしめしとっております。

21年5月ごろ、やっと病院の地下を出ることができまして、あばら家に住むことができました。それから、また苦闘の連続でした。私は肺の疾患で働けませんでした。年老いた母は、野良仕事に出て、わずかの賃金で私を養い牛計を立ててくれました。私もやっと26年8月、長崎大学病院の雑役婦の職を得て働く身となりました。バス代を節約して歩くと遠い道のりで、月給2,800円の薄給の身でその日の暮らしがやっとなりました。歩くとき遠い道のりで猛烈に疲れます。すっかり弱くなって私の1日の作業は重い十字架でした。その上に右手の親指と人指し指はケロイドのため関節は全く曲がらず、作業の面に大変な支障がありました。病気でたびたびの欠勤をし、上司や同僚の皆さんに迷惑をかけては、心身の苦しみで私の上に原爆がなかったらと嘆き、健康で働く仲間がうらやましい限りでした。

29年には胸部疾患の再発で療養を8カ月、31年には胆のう炎にかかり、働きながら薬を飲み続けました。35年に顔と手のケロイドの手術を2回にわたっていただいた結果、大分よくなりましたが、今も親指は全くまがらず、人指し指も支障があります。31年ごろから胆のう炎で薬を飲み続けても年々悪い方へと進みました。44年、悪化して入院となりました。退院後も相当の治療代をかけても全治ができないで、現在も通院し、薬は飲み続けております。今、家計は豊かではありませんが、日常生活については、今のところ不自由することもなく過ごさせていただいております。

私は、子供もない兄弟もない独り暮らしで老後のことが案じられております。本当に原爆の苦しみはどここの国の人であれ味わってほしくないのです。そのために世界平和の実現へ向けて、また原爆で亡くなった肉親13人のためにも微力ではありますが、私はでき得る限り頑張りたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

司会（朝長万佐男）

片岡さん、ありがとうございました。

それでは、次に吉田勝二さんをお願いいたします。

吉田さんは、13歳の県立長崎工業学校在学中に、爆心地から約800メートルのところで被爆され、顔面、両手、両足に熱傷を負われました。現在も形成外科の治療を受けながら子供たちにあの日の長崎を語り、平和を訴えておられます。

それでは、吉田さん、お願いいたします。

吉田勝二氏

長崎は情緒豊かな町でございます。ところが、一発



のプルトニウム原子爆弾で一瞬のうちに7万3,000余名の人が尊い命を奪われ、そして廃墟となり、そして私の人生を変えてしまった44年前の生き地獄を忘れることができません。

当時、私は県立工業学校の造船科の2年生でございました。その日は登校日でございました。空襲警報がなり、通称「商業の堤」というところに避難をいたしておりました。そして警報が解除になりました。友達7名と「そろそろ学校に戻ろうや」と言いながら戻りかけました。何さま8月9日のあの暑い最中でございます。ちょうど学校と避難場所の中間と思います。その左手に小さな土手がございまして、つるべ井戸がございまして。「暑かね、水を飲もうか」と言いながら、かけ登り、そして手をかざしてふっと右の上空を見ました。「オーイ、落下傘の飛びよいよ」、友達は上がってきました。その時です。ドカーンとやられ、そして道路を越えたたんぼの中に飛ばされてしまいました。一瞬の出来事で私たちは全く痛さを感じませんでした。ただ、飛ばされる時はスルメを焼かれるような感じで体が丸くなるのを数秒間だと思いましたが、意識しました。落ちたところがたんぼの中でございます。そして気がついたときは、両手、両足の皮が剥け、指の先でだらりと黒く焦げて下がり、そしてたんぼの泥がついておりました。そして、同僚7名、みんな立ち上がりました。そして「おい、これは火傷、火傷。火傷はね、もうアンモニアをつければような」と、お互いが励まし合いながら避難をしておりました土手にまた戻りました。そして堤の水で肉についたたんぼのどべを落とし、そして焼け残った草の葉を肉の上に乗せてしばらくの間、隠れておりました。

ところが、野良仕事に行ってきた人々が、全身赤むけになった人がどんどん泣き叫びながら下ってくるわけでございます。それを思いますと、私たちは急に恐怖に取りつかれて、土手の上から街の方を振り返ってみました。今まであった家は一軒もなく廃墟と化してしまっております。そして体はチカチカと痛みをおぼえ始めました。友人同士がお互いに顔を見ながら「なんだ、顔がものすごい変わってきとっぞ」と、そしてお互いが自分の顔を知るよしはありません。そして割れた鏡で自分の顔を見て非常に驚きました。

そして、恐ろしさはさらに募ってきました。泣き叫ぶ者、親を探す子供、手はただれ、顔は血だらけ、男か女か見分けはつきません。もう全裸に近い人々が続々と山の上から下ってきた。

私たち同僚7名も初めのうちは元気がありました。「西山を越えて帰ろうや」と話し合っておりましたけれども、体にだるさをおぼえ、顔が自分でわかるよう

な早さで腫れてきました。けがをしていない人々は山を越え、三重、式見の方へどんどん逃げていきます。瀕死の人々が哀れな悲しい叫び声で「水を飲ませてくれ、水を」と叫んでおります。自分が逃げることで精いっぱいの人々が、どうして水を汲んでくれるでしょうか。一瞬のうちにたくさんの方がやられました。逃げるので精いっぱいでございます。もう助ける余裕はないわけでございます。目は少し見えても、体が思うように動かず、どうすることもできません。近くの小川は、水を飲む人で埋まりました。そして水を飲みながら、そのままの姿で息を引き取っていました。あとから来た人は、その息を引き取った上を乗り越えてまた水を飲み、そのまま亡くなっていきます。そのときは何の恐ろしさも感じない当時でございました。

そして、長い夜が明け、諫早方面から治療班がきました。戸板に乗せられて治療を受けました。家に帰るまでは絶対死んではいかぬと心に思いました。治療を受けているときも爆音がすると、みんなは防空壕に退避をいたします。戸板に乗せられている間は、全く生き地獄そのものでございました。人々も防空壕で恐怖におののいていると思いました。動くことすらできない私は、真夏の太陽に照らされ、焼き鉄板に乗せられたような熱さで、このまま永久に死んでいくのだらうかと思うような苦しさでございました。

数日、母が話してくれました。幾百とも知れない状態の人々がうめき、また亡き叫び、母の名、家族の名を苦しい中から叫んでいました。お前を探すにも、どれが本当の我が子かと一瞬たじろぎました。私の名前を何回も呼んだそうです。呼びますと周囲の人はみんな返事するそうでございます。どれが我が子かわかりません。母は1人ひとり我が子を探すために枕元に行って私の名前を呼んだと聞きます。行きますと人違いでした。声を頼りに半信半疑で私を家へ連れて帰ったと聞かされました。それから、新興善小学校にしばらくの間、入院いたしまして、大村の海軍病院に移されました。そこで植皮の手術をしたわけでございます。おかげ様で左半分は4カ月ほどでよくなりまして、現在はほとんど左の方はわからないような自然の状態の皮膚になっております。医者が言いました。「吉田君、手術をするよ」、私は全然わかりません。「先生、どこをするんですか」と言いました。「君はね、右が非常にひどいから右を手術しないと皮膚ガンになる恐れがある」と言われました。そして左半分よくなった左の股から皮を取りまして右の顔に植皮をしました。手術は1回では成功いたしませんでした。3回目で初めて皮が右の頬につき、植皮の手術は成功したわけでございます。そうして1年余りの病院生活を過ごして自宅

に帰ってきました。熱傷を受けた私は、屋外に出ることが一番苦痛でございました。ちょうど14歳になっております。人々の視線を一身に集めます。ジロジロと見つめられます。背中に視線を感じます。一発の原子爆弾のために一瞬にして変わり果てた人相、私たちはいかに戦争を恨んだことでしょうか。顔一面に熱傷を負った人々は、男女を問わず一番悩んだことと思います。ある人は話しております。「一発の原子爆弾で私の青春は終わった」と。それから戦争、すなわち原子爆弾を恨んで、毎日が苦しい日々でございました。

また、ある時、若いお母さんが子供を抱いてきます。子供は私の顔を見て突然泣き出しました。私は、もう悲しくて言葉で言いあらわすことのできないような衝撃を受けました。「なぜ、顔をやられたんだらうか。せめて衣服で隠れてくれるところであつたら、まだよかったのにな」と天をそしてまた戦争を恨みました。しかし、朝な夕な植皮をした顔は皮下組織が壊れ、汗腺がございません。外に出て太陽に照らされますと黒くすぐ焼けます。左は普通の皮膚に戻っておりますけれども、右はすぐ黒く焦げて、右と左の顔はアンバランスになります。病院の先生に聞きました。「これは1年や2年で治るものではないの。根気、根気やからね。今からクリームを塗って毎朝マッサージをなささい」と医者から言われました。少しでも見やすくなるようにと心がけ、44年たった現在でもクリームを塗りマッサージを続けております。しかし、「本当に生きていてよかった」と言える真の平和が一日も早く訪れるように祈りながら、そして1人でも多くの人々に戦争の恐ろしさ、原子爆弾の悲惨さ、そして平和の尊さを語り続け、2度と被爆者をつくってはならないと思っております。

核兵器のない、真の平和が一日も早く訪れることを祈念いたし、そうして最後にご来席の皆様のご健康とご多幸、そしてご繁栄をお祈りいたしたいと思っております。

本日は、どうもありがとうございました。

#### 司会（朝長万佐男）

吉田さん、ありがとうございました。

それでは、最後に江頭チヨ子さんをご紹介します。

江頭さんは、35歳の時、爆心地からわずか500メートルの城山国民学校で被爆され、ご家族7名を亡くされました。地球上のすべての人々に2度とこの悲劇を繰り返させてはならないという熱い思いをもって今日来ていただきました。

江頭さん、よろしくお願ひいたします。

#### 江頭チヨ子氏

本日は、この市長会議で原爆被爆者の一人として被爆体験をお話しする機会を与えていただき、誠にありがとうございました。厚くお礼申し上げます。

今から44年前、私が35歳の時でした。母と夫、息子1人に4人の娘と新築の家に家族8名、戦時中の生活の中にも幸せな生活を営んでいました。私は、爆心地から約500メートル離れた丘の上に立つ鉄筋コンクリート3階建ての城山小学校に勤務しておりました。夏休み中で学童の姿のない8月9日も、職員28名に学徒動員中の女子高校生120余名、毎日出勤して作業を続けていました。

私は、この朝、防空壕に送り届けた末娘が、壕の中で泣きだしたと言って母が抱いてきた娘を急いで背負って学校へ来たのでした。校庭の作業中、11時ごろでしたか、娘が眠りましたので1階の保健室のベッドの上に寝かせようと思って背負い紐に手をかけた時でした。大音響が校舎を突き抜け、私の頭上で大型爆弾が炸裂したかのごとく、強烈な熱と全身を引き裂かれるような痛みの中で無意識のうちに娘の上に覆いかぶさってしまいました。気がついた時には、地上のあらゆる物が黄塵となり、不気味な音を立てて巻き昇ってました。津波が押し寄せるような地鳴りとともに黄塵は紅蓮の焰と変わり、炎々と燃え上がり、炎は浦上一帯を見渡す限り覆ってました。

髪の毛は焼け、針金のように逆立ち、泥人形のように泣くことさえできなくなった娘をしっかりと抱きしめたまま、私は気を失ったのでした。どれほど時間が過ぎましたか。私たちを探し求めてきた夫に救出されたのでした。熱射と爆風によるガラスの破片で体中ハリネズミのようになってうつぶせになったまま、途切れ途切れの意識の中で娘とともに苦しみ続けました。

校舎は外壁と柱を残したまま、天井も床も壁も剥ぎ取られ、校庭の大木も一枚の葉を残さず吹き飛ばされ、校長室からはい出して出られる荒川先生の姿を見ても救いを求める声が出ないのです。みずからの傷の痛みも苦しみも、無神経、無感覚、魂の抜けた体になっていたのです。

その朝、絵本と人形を抱えて元気な姿で防空壕へと家を出たかわいい娘3人と祖母は、「今のうちに昼ご飯を食べてきなさい」と警防団の人に声をかけられて、家路に向かって行く途中で爆死した人が多かったのですが、祖母と3人の娘は重なるようにして家の玄関口で真っ白い灰となっていました。

長男は中学2年生、学徒動員服に身をかため家を出たのですが、全身火傷で治療もできず、薬もなく、

一滴の水も喉を通すことができないまま苦しみのうちに死にました。夫も直爆の身でありながら無傷で助かったと言って、私と娘を学校から助け出し、母と娘3人の亡き骸の始末をし、さらに長男をみずから手で火葬しました。父親が我が子を…。私は胸が裂ける思いでした。何もできない我が身が悲しくて一緒に焼いてもらいたいと声を出して泣き叫びました。

夫も職場が爆心地から約1キロのところにある三菱製鋼所でありましたから、いろいろと疲れが重なり、間もなく体に斑点、脱毛、高熱、出血と症状が出てコップの水に頬ずりをしながら病名不明のまま亡き子らの後を追いました。逃げることのできない一発の原爆は、犬も猫も馬も牛も飛んでいた鳥も、地の中の虫、木の葉一枚残さず引き裂き焼き尽くしたのです。

「広島に新型爆弾投下、被害甚大なり」と、わずか2行の記事を見たのみで、長崎の私たちには何も知らされていなかったのです。原子雲の下、真っ赤なるつぼの中から肉体がぼろぼろに引き裂かれても、心臓が動いている間、水を求めて川の中へ、火の気のない山手へとアリの行列のごとく逃げました。しかし、数十メートルの地点で次々に息が切れ、声もなく倒れていくのです。私は、生きながらの地獄でこの世の終わりだと思いました。

こうして長崎市民7万余の尊い命が犠牲になったのです。この地球上に住む世界中の民族が、自分の命が大切であるように、相手の命も尊重して、お互い助け合い、安心して生活のできる市政をと、本日のご出席の皆様にもお願い申し上げ、このような戦争の無残な惨状を語るのは長崎が最後であることを祈りまして、いつの日か、この会議がハッピーな会議となりますことを念願して、私の話を終わります。

最後にもう一言。先ほどから坂本先生の基調講演ほか各国代表の平和に取り組まれたお話を聞いて、私は、「原爆のモルモットではなかった。被爆体験者として平和のための尊い犠牲者であった」ことを、今日本日この会場に出まして新しく認識させていただきました。本当にありがとうございます。

ご清聴誠にありがとうございます。

#### 司会（朝長万佐男）

江頭さん、ありがとうございます。

ご3人の被爆者の方々、ありがとうございます。

それでは、今3人の被爆者の方々の原体験をお聞きしましたけれども、もうしばらく時間がございますので、これよりご出席の皆様との懇談を持ちたいと思います。

ご出席の皆様から、被爆者でもあり医学者でもある、

お2人のアドバイザーの先生にご質問などございましたら、お受けしたいと思います。

それから、発言の際は、皆様の都市の名前、それからご氏名をお述べください。

#### アンジェロ・メダ市長（コモ市）

非常に感動いたしました。ショックを受けました。ただいまの生き証人の方々のお話を伺いましてショックを受けました。そして、伺いたいと思うんですけども、日本の社会あるいは政府が被爆者の方々とのような関係をもっていらっしゃるかお聞きしたいと思います。

つまり、社会復帰ができるように、あるいは就職ができるようにということで、被爆者の方々にとどのよう政府ないしは日本社会が援助されたんでしょうか。あるいはどのような困難があったんでしょうか。

私は、日本の社会発展、あるいは社会の慣習、文化などに関する本を最近読みました。一部の人の言うことによりまして被爆者の方々に対しまして、「日本社会は余り友好的ではなかった。そしてむしろ差別があった」というような記述がありました。それは本当だったんでしょうか、伺いたいと思います。

#### 司会（朝長万佐男）

それでは、ただいまのご質問に秋月先生からお答えいただきますでしょうか。

#### 秋月辰一郎聖フランシスコ病院顧問医師

今のご質問ですが、日本政府は講和条約ができたのが6年後でありますから、約10年間はほとんど被爆者に対しては、あるいは生き残った被爆者に対しては何もできませんでした。10年たちまして原爆医療法ができ、2キロ以内の被爆者に医療費を支給することができるようになりました。戦後から講和条約の間まで、食べること、住むことで国家全体が一生懸命で被爆者は遺棄された、捨てられたような感じを持っています。

それから、日本政府が被爆者を差別したということですが、これは先ほども言いましたように、ケロイドの人を見ると子供が逃げて行くとか、泣くとか、ああいう病気は怖いということで結婚とか、あるいは一緒にいることを拒否したような人もいます。それに対しまして、だんだんそういう差別意識はなくなったと思いますけれども、やはり何といたしても、日本は経済復興のみ走りまして社会福祉という精神は、厚生省が言っていますけれども、遅れていると思います。

司会（朝長万佐男）

それでは、医学的な方面から市丸先生、何かコメントがございますでしょうか。

市丸道人長崎大学教授

先ほどのご質問は、社会的な問題の要素がかなり含まれていて非常に難しい問題だと思います。医学的という司会者の言葉ですけれども、差別の問題を取り上げてみますと、長崎・広島はまだしも、全日本に散らばった被爆者の方々に対して、いわゆる社会的な差別といいますか、普通の人たちがどうも差別的な見方でもって被爆者を、口には出さないけれども、処遇するということが起こっております。現に、北海道の被爆者から被爆者の子供であるために結婚はできないとか、いろいろ問題が起こっておりますし、そういうお手紙をいただいたというようなことがございます。

ですから、被爆者と申しまして、全部が医学的な障害があるとは限りません。むしろ現在においては、それほど心配ないと、例えば遺伝的にと、そういうことがありますので、正しい後障害、後まで残っている障害をどうか理解していただきまして、理由のない差別をしないようなことを私は念願しております。そういうふうにも指導しております。

司会（朝長万佐男）

ほかにご質問がございますでしょうか。

ジョン・C. リヨズ市長（ランカスター市）

この2つの都市の破壊のお話に関しまして非常に感動いたしました。

いかにして、この廃墟から立ち上がられたのか、どのようにクリーンアップされたのか。

最初の建物を復興されたのは、いつであるのか。

それから、広島・長崎において、現在でも放射線のモニタリングをしていらっしゃるのか、伺いたいと思います。

司会（朝長万佐男）

3点ほどご質問がございましたけれども、秋月先生、市丸先生、どういふふうにクリーンアップ、廃墟に化した跡を復興にもっていかれたかというご質問ですけれども。

秋月辰一郎聖フランシスコ病院顧問医師

本当に最初は、全くそのまま、特に長崎は先ほど写真でもごらんになったように、中央に山がありまして、被爆地の方は2キロ四方全くほうきで掃いたように何

もなくなりました。そのままです。そしてクリーンアップと言いますが、建物はみな自分でバラック、被爆者も同じですけれども、バラックを建てて、あるいは穴を掘って生活をただけでございます。何らそこに政府の保障はありません。

ただ、私の考えでは、日本という国は、非常に雨の多い国で、私自身コンクリートの中におりまして、非常にフォールアウト（放射性降下物）が洗い流されたような感じはしましても、そのまま75年人が住めないと言いながらも全部被爆者は住んだわけでございます。そして、食べ物とか、あるいは建物の建築は5、6年過ぎましたころにだんだん行われてきました。しかし全くバラックです。

それから、先ほどの質問に言い忘れましたけれども、戦後、アメリカ軍の進駐軍のプレスコード（報道管制）がありまして、原爆の災害とか、後障害に関して検閲以外は全然発表することができないという状態でした。

司会（朝長万佐男）

3番目のご質問の放射線のモニタリングは、その後どうなっているかということですが。市丸先生、コメントはありますか。

市丸道人長崎大学教授

広島・長崎の原爆で、どの程度の放射能を地上で受けたのかという問題は、非常に大きな問題でございまして、戦後特に、アメリカのネバダの実験場におきまして、長崎原爆と同じものを使って、どれくらいの被爆線量が当時長崎・広島であったかという線量の推定をなされたわけです。それがT65同日と申しまして、今まで我々は原爆被爆者の研究にそれを利用させていただいたわけです。

ところが、その当時のネバダ実験のときの気象状況と、日本における広島・長崎の気象状況などを勘案いたしまして、それに間違いがあるということでもって見直しが行われました。それで新しい線量が決定されたのがD S 86と、1986年に決められた線量でございまして。この線量によって新しく原爆被害の状況を見直されておりますけれども、まだいくつかの問題が残っているわけですね。必ずしもD S 86が正しいのかという面からみますと、多少問題も残っているわけで、そういう点もあわせて我々は見直しをやっております。

それから、最近ではいわゆる黒い雨の地域の見直しなど、つまりあの当時、原爆の後に黒い雨が降った地域がまだあるのではないかと、その辺の被爆状況などはどうだろうかというふうな問題も残っておりまして、

それはまだ詳しい検査はできておりませんが、そういった意味で、残っているストロンチウム、あるいはセシウム、そういった原爆による放射線の中から非常に命の長いものがありますので、それを見直して、当時の本当の線量はどうかであったかということも行われようとしている現状でございます。

#### 司会（朝長万佐男）

被爆直後から10年くらいは、日本は戦争に負けた国でありまして、国家的な援助というのはほとんどなしに、この都市に住む住民自身の手で復興がなし遂げられたということをお二人の先生方のコメントでご理解いただけたかと思えます。

ほかに、あと1分ほどございますので、もう1方もどうしてもという方がおられましたら、どうぞ。最後の質問にさせていただきます。

#### ミホ・シボ助役夫人（マラコフ市）

2つほど質問があります。

1つは、日本の社会では大変デリケートなことでお答えにくいと思うんですけれども、今、被爆2世とか3世がおります。聞きましたところでは、原爆病院には被爆3世もかなりふえているということですが、私も実際、被爆2世を持つ母親の方と文通しておりまして、「実はこのことは非常に日本でも喋りにくいので、あなたのようにフランスにいる遠い人にだけ真実を話すことができる」と言って大変ショックなお手紙をいただきました。それで私が知りたいのは、例えば被爆2世、3世の問題を医学的にちゃんと統計をとって研究するべきか。それが世間の差別を受けたり、その子に精神的なショックを与えないためにそっとしておくべきか。私は、今その2つの間に挟まれてどういうふうにしていいかわかりません。それでお医者様として、どのようにお考えなのか、意見を聞きたいと思えます。

もう1つは、今や世界中に被爆者がおります。原発はもとより核実験のために被爆した方も随分おります。例えばアメリカでも兵士を核実験の場に送ったためにおよそ25万人の兵隊が被爆していると聞きますし、またポリネシアでもフランスの核実験によって被爆者がおりますが、事実をフランス人の私たち自身ができることができません。また、広島では朝鮮から来ていらっしゃる韓国の被爆者に会いましたけれども、お金のある方は日本に来て治療ができるけれども、お金のない方はそのまま韓国で苦しんでいるとのこと。例えばそういう世界中の被爆者に対して国際的に援助を差し延べる方法はないのでしょうか。

#### 司会（朝長万佐男）

お2つの質問がありましたけれども、市丸先生、いかがでしょうか。

#### 市丸道人長崎大学教授

大変難しい問題で、いわゆる2世、3世について研究を進めるべきか、あるいはそっとしておくべきかという問題だと思います。

遺伝的問題が絡んでくるわけで、当然放射線を受けると細胞の染色体に異常がおこりますので、理論的には動物実験でもそうですけれども、2世、3世の遺伝的影響はあらわれるはずなんです。ところが、それも原爆後障害の非常に大事なテーマとして研究は進められておりますけれども、現在までに2世、3世の子供さんたちに目立った遺伝的障害が出ていないんですね。これは非常に細かいところまでやっているかという問題はありますけれども、いずれにしても、普通の人間の目で見ただけの場合に、異常が非常に多いということとはとらえられてはおりません。ですから、それほど心配することはないんですけれども、ただ医学的には進めるべきだと思います。これは非常に体を構成する構成成分などからも、そういった目からも見て異常があるのか、ないのかということは調べるべきだと思います。したがって、それには2世3世の方のご協力を仰がないといけませんので、政府の方もこれについて金を出して、一部ではやっておりますけれども、それをさらに広めていく必要があるだろうと思います。

#### 司会（朝長万佐男）

秋月先生、原爆医療行政の問題点がご指摘あったわけですが、いかがでしょうか。

#### 秋月辰一郎聖フランシスコ病院顧問医師

まず最初のアメリカの核兵器製造における被爆者、あるいは兵隊さんの被爆者が存在しているということですが、それは米国政府の責任だと思います。ぜひ検査して救済してもらいたい。

また、その後の核実験によるそれぞれの国あるいはフランス、英国も核実験をしています。オーストラリアとか南太平洋にも被爆者がおるわけですが、もちろんそれぞれの国が当然責任をもってすべきですが、実際核競争の時代におきましては、その災害を先んじて、ただ軍人とか政治家が核を開発したのでありまして、本当の害はいいも悪いも知らなかったのではないのでしょうか。そういうことで、そのために私たち被爆者は、核兵器の後遺症というのを今、言っているわけでございます。

それから、朝鮮の被爆者、韓国の被爆者の方は、今韓国内におられる方は大変苦しんでおられるそうですけれども、この人たちは戦争中に日本の侵略によって強制連行された方がほとんどでございます、広島・長崎で。だから、これは当然、日本政府の責任でもありますけれども、やはり先ほどご意見がありましたように、すべての核の被爆者あるいはそういう実験による被爆者には、国際間で何か協定をつくりまして、私は調査と救済をすべきだと思っております。もちろん、韓国の被爆者に対しては、日本政府は責任を負うべきだと思います。

#### 司会（朝長万佐男）

秋月先生、どうもありがとうございました。

それでは、時間もまいりましたが、まだまだご議論いただきたい点も残っておりますけれども、今日ご出席の皆様方にとりまして被爆の原体験を3名の方からお聞きになられたのは貴重なご経験になられるかと思えます。今後、インター・シティー・ソリダリティーによる世界平和に向かっての大きい流れというのが、きょうの懇談会を原点の一つとしましてつくられていくことを期待しまして、本日の懇談会をこれで終わらせていただきます。

どうもありがとうございました。

#### 事務局

ご来場の皆様、ステージ上の皆様、長い間お疲れ様でございました。

ステージ上の皆様は、ご自分の席にお戻りください。

これをもちまして「被爆者との懇談」を終了させていただきます。

～核軍縮と地球的平和達成に都市は何をなすべきか～

## 都市報告

分科会Ⅰ 8月8日（午後2時32分～午後5時2分）

ホテルニュー長崎 鳳凰閣

司 会 国際文化会館館長  
加藤 彰彦

コーディネーター 明治学院大学教授 坂本 義和

### 1. 各都市の報告

- (1) トロント(カナダ)助役  
ケイ・ガードナー ..... 157
- (2) オバーニュ(フランス)市長  
ジャン・タルディト ..... 158
- (3) カーン(フランス)助役  
モーリス・ミゲール ..... 159
- (4) ベルリン(ドイツ民主共和国)市長  
エアハルト・クラック ..... 159
- (5) マグデブルグ(ドイツ民主共和国)市長  
ヴェルナー・ヘルツィグ ..... 160
- (6) レムゴー(ドイツ連邦共和国)助役  
ハンス・ポール ..... 161
- (7) デリー(インド)市長  
シリ・マヒンダー・シン・サーティ ..... 162
- (8) ビルツ(ルクセンブルグ)市長  
アンドレ・ビベール ..... 164
- (9) ビラ・エル・サルバドール(ペルー)市長  
ミゲル・G. アズクータ ..... 165
- (10) ポルト(ポルトガル)市長  
フェルナンド・ソアレス・ガブラル・モンテイロ ..... 165
- (11) コベントリー(イギリス)市長  
デイビット・J. ケアンズ ..... 166
- (12) 枚方市(日本)市長  
北 牧 一 雄 ..... 168

### 2. 都市報告に対する質疑応答 ..... 168





司会（加藤国際文化会館館長）

皆様、長らくお待たせいたしました。

ただいまより「核軍縮と地球的平和達成に都市は何をなすべきか」をテーマに分科会を開催させていただきたいと思います。

私は、この長崎会議の事務局長を務めます加藤彰彦でございます。この会を進行を務めさせていただきます。

なお、この会の司会は、コーディネーターの坂本義和先生をお願いしております。

よろしく願いいたします。

コーディネーター（坂本義和）

加藤さんありがとうございます。

2つの分科会に分かれましたので、もう少し時間をかけて個々の点について詳しく討議ができればと期待をしております。

皆様方、フロアの方々も演説を聞くためにここにいらしゃったのではなく意見の交換、対話をするためにいらしゃったのではないかと思います。

そこで、それぞれの発言についてはなるべく5分以内にとどめていただきまして、ほかの方々にも十分な発言の時間を残していただきたいと思います。

長崎市の方から皆様方に発言の希望の用紙が送られ、12都市から回答がありました。そして、事前に回答を寄せてくださった方々が前列に座っていらしゃるわけです。しかし、この方々に長い時間話をしたいという特権が与えられているわけでもありませんし、ほかの方々が発言をする機会がないという意味でもありません。ですから、すべて公平、公正、民主的な方法で進めていきたいと思っております。ただし、私は時間厳守ということではちょっと独裁的になるかも知れません。

正確な翻訳のためにも、発言者の方々をお願いがござります。特に、英語以外の言語で話される方は少しゆっくりお話をいただきたいということでもあります。そうすることによりましてできる限り正しいメッセージを伝えたいというふうに思います。

私の発言は以上です。12名の発言者は、私たちがいただいたリストの順番で座っておられるはずで、ワイヤレスマイクがござりますので、話が終わりましたらそのマイクをお隣りに回すようにしてください。

それでは、トロント市のガードナー助役をお願いします。

トロント(カナダ)助役

ケイ・ガードナー

ありがとうございます。

議長、お集まりの皆様方、友人の方々、この素晴らしい会議に対しまして、トロント市長、トロント市議会、トロント市民よりごあいさつを申し上げたいと思います。

私たちは、市役所内の広場に「平和庭園」をつくりました。この「平和庭園」は、広島と長崎に強いつながりをもった象徴的なものです。「平和の火」というものがこの庭園にはありますが、これは広島の平和の火を灯させていただきました。それからまた、庭園には池がありますけれども、池の水は長崎の浦上川の水を入れさせていただいています。この庭園は、平和の象徴です。しかしながら、皆さんご存じのとおり、ただシンボルだけを設ければいいというものではないと思います。つまり、行動が大事なのです。

私たちの市議会は、最近の会議で、トロントに「平和委員会」をつくることを決定しました。トロント市議会議員がこの平和委員会に民間の人たちとともにメンバーとして参加することになっています。この委員会は軍拡をストップさせるために非常に活発に、そして貴重な役割を果たすものと思います。

私たちのトロントの町がなくなってしまうように、そして核による大量虐殺で人類が絶滅しないようにしなければなりません。自分たちの町に求めていることをほかの町でも実現するようにしていかなければなりません。軍拡は狂気だと思います。大量破壊兵器のために人類の富を浪費しながら、一方では、子供たちが飢え、家のない人たちがいる。これは何という狂気でしょう。それからまた、現代の核兵器の備蓄量は人類を何回も殺すことができます。これは何という狂気でありましょう。それからまた、核兵器は備蓄するためではなく使われるためにつくられている。それなのに備蓄に平和と安全保障を求めるといのは何という愚かなことでしょうか。軍備削減を行って初めて安全保障は確立されるものであり、大量破壊を行うような兵器はすべて廃絶しなければなりませんし、その製造も禁止しなければなりません。このような軍縮の措置を保障していくために国際的な協定を行い、現場での検証を行っていき、その他の協定が守られているかどうか遵守を確保するための措置を講じていかなければなりません。

議長、友人の皆様方、私たちの都市が世論を高めるために積極的な役割を果たしていかなければなりません。そして超大国に対して軍拡競争を終わらせるようにアピールをしていかなければなりません。軍拡競争をストップさせなければ核戦争の悲劇が生じてしまいます。広島・長崎に原爆が投下されて44年たちましたが、もう一回「ノーモアヒロシマ、ノーモアナガサキ」、そ

して戦争を終わらせるように呼びかけをしたいと思います。

ありがとうございました。

コーディネーター（坂本義和）

ありがとうございました。

非常に素晴らしい中身であり、また、時間も守っていただいてありがとうございました。

次の発言者をご紹介したいと思います。フランスのオーバーニュ市のタルディト市長です。

オーバーニュ(フランス)市長

ジャン・タルディト

議長、ご列席の皆様方、まず私は、この国際会議を主催していただいた方々に感謝したいと思います。私どもに対する多大なる歓迎、そして十分なる成果が生まれるようないろいろな会合の場をつくってくださいましたことを感謝いたします。

広島、長崎において、私はいろいろなことを見聞することができました。私は、プロバンス地方の出身ですが、フランスのプロバンス地方というのは多くのアーティストがインスピレーションを得て、数々の文化的な遺産をつくった地方であります。そして今日においても、このプロバンス地方は文化的な中心地であります。

私が代表してきているオーバーニュ市は、サントンの陶器で知られ、またマルセル・バグノルを輩出した情熱と平和の町であります。

オーバーニュ市は、4年前の広島・長崎原爆被爆40周年記念式典及び第1回世界平和連帯都市市長会議に、また、イタリアのコモ市で開催された第1回理事都市の会議にも出席いたしました。オーバーニュ市には数年前から「平和都市委員会」がつくられております。これは平和に関する教育を促進し、世界のあらゆる都市との友好交流を深め、平和に貢献している団体を支援しています。さらに平和に貢献する生徒間の文通交流を実施している学校を支援し、平和の分野で協力しています。1986年以降、私どもは平和週間というもの企画し、1987年には21カ国から50名以上の子供たちを集めて平和のための国際子供フェスティバルを開催しましたが、その期間に実施した国際子供の絵画展は好評を博しました。1990年9月には「オーバーニュの鳩」と呼ばれる平和のための国際クロスカントリーを計画しております。このクロスは、街の中を歩くことによって、鳩の形を築き上げるということを考えております。このように、たった4万3千人の街であります、平和に貢献しているのがこのオーバーニュ市であ

ります。

私どもは、広島でのアルジャー先生、そして今朝の坂本先生の基調講演をお聞きして、世界平和のために何が問題となっているのかを知ることができました。しかしそれだけでなく、この会議でもその方法が示されてきましたように世界平和のためにやらねばならないことがあります。

平和はもちろん国家によって、あるいは政府によってもたらされます。しかしそれは、私たち一人一人によってもたらされるものです。これは政府だけの仕事ではありません。個々人の仕事です。平和の種を各人の心の中で芽ばえさせ、林のように繁らせなければなりません。

教育を十分に施し、公共の意識を高めて、国家は共同社会の中で平和と連帯を達成する手助けをしなければなりません。広島・長崎のアピールが平和を達成する手助けとなることを望んでいます。

そして各都市には役割があります。各都市は数多くの町で形成されています。これらの町は私たちすべての者が平和に生きられるようにするため、軍需産業に使っている予算を平和のために使うよう、政府に圧力をかけなければなりません。私はこれが進むべき正しい道であると確信いたします。

フランスの政府も相変わらず南太平洋において核実験を行っております。また、軍備拡大のための政策も続けております。私はこういった政策をフランス議会で弾劾しております。私は、フランス政府がこのような軍拡のための努力を放棄するように、そして生存のために人類が直面している問題に対応する新しい政策をとるようにこれからも努力していきたいと思っております。

私はそうすることが正しいと確信し、政府や私の市で世界が直面している平和の問題の解決に取り組んでいきたいと思っております。そうしなければ私たちは滅亡するでしょう。私たちは、国家、都市間の壁を乗り越え、経済的ルールも含めた新しいルールをつくり、平和のため協力し、連帯していかなければなりません。今朝、坂本先生が言われたことはこういうことだったと思っております。地球の広がりや変化し、話し合いでわだかまりがなくなります。

20年以上前に「すべてが変わった。しかし理性だけは変わっていない。」と言われてきました。しかし私にとって理性とは変化し始めているように思います。市長の役割として何が起きているか市民に自覚していただき、共に平和に生きられるよう助け合うようにさせなければいけません。

ありがとうございました。

コーディネーター（坂本義和）

どうもありがとうございました。

では、もう一人フランスからの発言者がいらっしゃいます。カーン市のミゲール助役です。

カーン(フランス)助役

モーリス・ミゲール

私、ミゲールと申しましてカーン市の助役であります。人口は12万人でノルマンディーにある街が、このカーン市であります。

私もこの国際会議を準備くださった方々に感謝の意を表したいと思えます。私も簡単にお話したいと思えます。

カーンという街は、第2次大戦、これは世界史上まれに見る大きな戦争でありましたが、この第2次大戦中完全に破壊されました。ロッテルダム、コベントリー、ドレスデン、ハンブルグなどと同じようにたび重なる空襲によって私どもの街も破壊され、非常に多くの市民が亡くなりました。イギリス人は「ゴー・トゥー・コベントリー」という言葉を考えました。すなわちこの言葉の意味は、大爆撃によって街を破壊するという意味になったわけです。ドレスデンでは、2日間にわたるたび重なる爆撃によって30万人が命を失ったということですが、この数字を挙げる際は注意する必要があります。

また、最近の戦争でも例えば枯れ葉剤だとか、あるいはナバーム弾、あるいは化学兵器、生物兵器といった恐ろしい武器が使われて多くの人々が生命を失っております。しかし、恐ろしさがどんなものであっても、広島あるいは長崎が経験した恐ろしさを越えるものはないと思えます。

日本は2度にわたる原爆の被害を体験いたしました。一瞬に何万人の人が死ぬだけではなく、さらに何年もかかってこの苦しみが続くのが原爆の特徴です。現在、人類が持っている核兵器の数は地球を十分に破壊してもまだ余るぐらいの量であります。この地球上の人類が絶滅することがないようにしなければなりません。また、国の指導者が間違っただけで核のボタンをおしたら地球は完全に破壊され、永遠に滅亡するのだと心に刻まなければなりません。

カーンの市長、ジャンマリ・ジロー氏は、第1次世界大戦以来全体主義体制が台頭してきたことを示すために平和記念館を建設することを決意いたしました。この平和の記念館設立のために多くの人の協力をお願いし、スポーツ委員会などを設立したりいたしました。

1988年6月6日以来、この平和の記念館には、広島の放射線を浴びた石が展示されております。既に30万

人以上の人がこの記念館を訪問しております。日本の子供も2度ほど訪れております。この平和記念館は、戦争の恐ろしさと平和の大切さを、そして将来いかなる殺りくも犯してはならないことを私たちに教えてくれます。

この平和記念館は、特に若い人たちを対象に考えてつくられたものです。過去の誤ちを繰り返すことなく、人類のためにつくすことを若者に教えなければなりません。間もなくアメリカの学生がカーン市を訪れまして、平和記念館の資料センターで第2次大戦の発生の原因とその結果といったことについていろいろな研究をすることになっております。私たちは将来も他の学生たちにこの資料センターを開放していくつもりです。

19世紀にフランスの有名な詩人、ビクトル・ユーゴーが次のように言っております。「6千年来、人間は戦争をしてきた。それに対して神は星とか花をつくることばかりに専念していた。」この詩が間違っているということを証明するためにも、私どもは平和の星と平和の花を咲かせたいと思っております。

ご清聴ありがとうございました。

コーディネーター（坂本義和）

ミゲールさんどうもありがとうございました。

次はベルリンのクラック市長です。

ベルリン(ドイツ民主共和国)市長

エアハルト・クラック

私、今日午前中に既にお話をいたしましたので、今回は短くいたしたいと思えます。

坂本先生のお話を聞きまして私は考えたのですが、特に、米ソ両国によって締結されたINF条約をさらに推進して、平和達成に核兵器や軍備は不必要であることを確信していく必要があると思えます。私は、平和は強い意志により達成できるものと信じています。

2つ目に申し上げたいことは、戦略核兵器の半減、それから、核兵器の実験を停止するということが、これはどちらにとりましても大変なチャレンジであります。しかし、人類の利益のためにそれは達成されなければなりません。

さらに付け加えたいことですが、「恐怖の均衡」ということが何度も語られましたが、抑止論だけで戦争が防げたことは歴史上ございません。そのことを確認しておきたいと思えます。

今後のさまざまな協定や条約というもの、核兵器の数だけではなくして、実際に軍隊のさまざまな活動や規模、そういうことも含まれていなければならないと思えます。

そして、私どもといたしましては、市民の良心というものが絶えず起きていて、軍備増強が止まるように常に監視していくということが重要だと思えます。さらに、今まで出されたさまざまな思想を実現させるための活動を展開し、社会のさまざまな組織、例えば平和運動、そういうものに興味を持っている草の根の活動を糾合いたしまして、具体的な成果が上がるように努力していきたいと思えます。

今日の午前中申し上げたことですが、東ドイツの政府も軍備費の10%を削減することを決めております。これは計算しますと1万6千から1万7千戸の住宅が建つお金であります。

コーディネーター（坂本義和）

どうもありがとうございました。

次に、マグデブルグ市のヘルツィグ市長さんをお願いします。

マグデブルグ(ドイツ民主共和国)市長  
ヴェルナー・ヘルツィグ

私の市は第2次世界大戦の終わり、1945年の1月に爆弾によって破壊され、80%が完全に灰塵に帰した街であります。38分間で、それまで非常に栄えてきたきれいな街がほとんどそのアイデンティティを喪失するまでに破壊されてしまいました。市民たちはその後、額に汗を流して大変な廃墟を片づけて新しいマグデブルグの街を再建する努力を重ねてまいりました。皆様おわかりいただけるかと思いますが、どんな市民でも、自分が長い年月をかけて築き上げた自分の街が破壊されることを望むものはいないと思えます。

さらに、その再建の過程で街の破壊以上にひどい精神的破壊、つまりファシズムがもたらした精神的破壊をもう一度正すことは大変でございました。私どもドイツ民主共和国は、平和国家として生きており、平和と軍縮と緊張緩和のために働いております。また、我々の国の憲法では、ドイツの地から二度と戦争が起きないように個々の自治体も平和を守るために努力すべきことをうたっております。

この精神でもって、私は東ベルリンの市長及びドレスデンの市長とともに第1回世界平和連帯都市市長会議に参加させていただきました。第1回目も今回の第2回目もそうですが、私どもはなお心配することがたくさんございます。つまり核兵器、化学兵器、生物兵器、また通常の兵器もさらにたくさん増え、また近代化されて人類を脅かしているという事実非常に心配の念を抱いております。

したがって、一昨日採択されました広島アピー

ルに私は完全に賛成でございます。第1回世界平和連帯都市市長会議の際も、広島・長崎の当時のアピールを自分たちの民衆に伝えることを私の道徳的な義務と考えておりました。

マグデブルグの6万人以上の市民がマグデブルグの街で行われた広島・長崎の原爆展を見ており、いかに核兵器というものが恐ろしいかをよく知っております。明日になりますと、私の街のたくさんの市民が平和公園に集まりまして、長崎の被爆44周年記念式典を行うことになっております。第1回の会議のときにいただきました広島の石を私どもはその平和公園にモニュメントとして埋めております。社会的信条の違い、政治的体制、イデオロギーの違いを越えてこのアピールを守っていきたくと思えます。

私どもの市の議会も平和のために努力をしております。ヨーロッパ、アフリカ、アジアの16の町と私どもは姉妹都市の関係を結んでおります。そして東ドイツでは300以上の町がこうしたパートナーシップの関係をほかの国ともっております。これは民族の間の和解のための非常に重要な基盤だと思っております。私どもは平和のためのシンポジウムを重ねることによりまして、悪魔の核兵器をやめさせ、軍縮会議を行うことを絶えず言っております。

第2回目の会議の前に私たちは中野区を訪ねさせていただきましたが、この中野区でも1987年に非核地帯宣言が発布されまして、その点では私どもの町と共通であります。つまり、核兵器のない地域あるいは核兵器製造の仕事をしない地域という宣言をしております。現在、軍拡競争から対話へと世界が動き出しており、特にINF条約がそれを象徴しております。そして第2回目の会議でさまざまな都市や国で行われている平和のための活動を知ることができたことは、私にとって大変勇気を与えてくれる事柄でございます。

私の町におきましても、市民は毎日一生懸命勤勉に仕事をしております。人々が自分の家族や子孫たちが幸福で平和に生きることを願うのは当然でありましょう。特に、その気持ちを私たちは毎年1月16日、つまりマグデブルグ爆撃の日に記念式典を催して平和の気持ちをあらわしております。また、世界からたくさんの女性たちが女性会議にやっております。そのときにもこの気持ちを共通してあらわすことにしております。また、我々の国で開催されます世界平和記念日、この日にもさまざまな人々がこの平和に生きたいという気持ちをあらわしております。なお、私どもはIPPNWという反核団体に組織されておまして、芸術家や科学者も一緒になって平和のために声を上げております。また、平和の気持ちをあらわす子供たちの絵、

特にマゲデブルグの子供たちの書いた絵を私どもは広島に展示させていただきまし、現在は長崎に展示しているところであります。

坂本先生の今日のお話の中で、特に、国家間の敵対心をあおって、軍隊の力だけが平和を守るといふうに主唱する人々がまだいるということは、これは大変恐ろしいことだと思っております。

今年で第2次世界大戦開始50年目でございます。そしてこの機会に、私どもは、特に若い人々と対話を重ねていきたいと思っております。第2次世界大戦の理由とその結果、そしてそれが私たちに歴史的に何を教えてくれるか。そういうものについて若い人々と対話を重ねていきたいと思っております。そして私どもの結論は、当然のことながら戦争は絶対に避けなければならない。始まる前に戦争を避けなければならないということでございます。

したがいまして、やはり平和教育ということがその点で重要になるかと思っております。私どもの子供、また子供の子供、すべての後の世代が子供のときから平和の精神、そしてヒューマニズムの精神によって育つことが絶対必要だと考えております。私たちは反ファシズムを守り、第2次世界大戦で犯した過ちを繰り返してはいけません。他民族差別を許しません。とは言いましても、平和教育が成果を上げるためには、実際には世界の中の武器がなくならなければならないことも確かであります。そのために私どもは個々の都市において努力をしていきたいと思っております。核兵器の競争ではなくて平和の競争をしましょう。つまり、我々の生活には、平和が必要なのです。

ありがとうございました。

#### コーディネーター（坂本義和）

ヘルツィグ市長さんありがとうございました。

次は、レムゴー市のポール助役です。

#### レムゴー（ドイツ連邦共和国）助役

ハンス・ポール

議長、ご参加の皆様、私は、皆様に私の街・レムゴー市民のあいさつを送りたいと思っております。

レムゴー市は、ドイツ連邦共和国にございます。私どもは長崎の街と非常に深い結びつきを持っている感じがいたします。と申しますのは、今から約300年前、1690年に私どもの町のケンペルという人がオランダ東インド会社の乗組員として長崎の出島にやってきました、当時ヨーロッパには知られていなかった日本を研究しました。ヨーロッパで印刷されたケンペルの日本旅行記は、日本についての細かい情報を初めて書いた

本であり、つい最近までヨーロッパ人に日本という国のイメージをつくってくれた本でありました。

このような歴史的な関係もありまして、私ども1985年に長崎市、広島市のご案内もありましたので、第1回世界平和連帯都市市長会議に参加させていただきました。もちろん、これは歴史的なケンペルの探検を回想するためではなくして、都市の連帯を強めるためでありました。レムゴーの町が参加したのは、この会議から平和のための具体的な結論を持って帰るためでありました。もちろん、やれることは町という限られた生活の中ではありますけれども、その限られた幾つかの活動をご紹介したいと思います。

こうした仕事は限られているとは言え、やはり平和のために重要だと私は考えております。少しご紹介させていただきますけれども、長崎と平和のための共同の動きといたしまして挙げたいのは、この世界平和連帯都市市長会議の理事会が1987年5月にレムゴーで行われたことであります。レムゴーは4万人の小さな町であります。その小さな町で理事会が行われまして、人々に大きな印象を与えました。その理事会で我々が知り合いました広島市長さん、長崎市長さん、そしてボルゴグラード、東ベルリン、ハノーバーの市長、そしてコモの市長さん方が集まりまして、今後の国際的協力関係について、4万人の小さな町で議論をしたわけであります。そして、私どもは田舎の町の間ですけれども、世界の大きな町の代表者の方々が痛切な思いで平和について、そして地球上の人類の今後の生存について議論をしていることに深い感銘を受け、また市長さんたちの議論の内容にも賛成の意を皆さん表しておりました。私どもレムゴー市民、特に若い市民もこの会議の影響を受けまして国際的な協力をしたいという意思を持っております。

それから、フランスにバルフルールという姉妹都市がありますが、そのバルフルールの助けをかりまして、ドイツのレムゴーとバルフルールが西アフリカのサブールにあるブキナハードという町と姉妹都市の関係を結ばせていただきました。そしてドイツとフランスの若い人々が西アフリカの町を訪れましてかんがい施設を一緒につくるというふうなこともしております。この1、2週間の間ですが、私どもの町の50人の若者が西アフリカの町へ行きまして、農作の機械の使い方を教えております。こうした行動というのは、確かに小さな行動ではありますがけれども、やはり第3世界の食糧問題を少しでも向上させるために役立つことではないかと思っております。そして単に食糧の向上だけではなくして、3つの民族、ドイツ、フランス、そして西アフリカの国の人々との三角関係の協力だという

ふうにも言えると思います。

さらに、もう一つの例ですが、この平和連帯都市市長会議にとっても重要な例をご紹介しますと思います。これは何であるかと申しますと、広島・長崎で行われた第1回の会議に基づきまして、私どもは東ドイツ、西ドイツの市長の間の対話が始まりました。こうやって私どもは今座っているわけでありまして、この東西ドイツ間の市の次元での対話というものはこの数年間、東ドイツ、西ドイツの政府の間でもさらに深まってまいりました。その結果として、1988年に東ドイツにあるシュテンダールという町と私どもの町・レムゴーの町との間に姉妹都市関係が結ばれました。

こうした東西ドイツの姉妹都市関係といえますのは、特に東西ドイツの間にあるさまざまな緊張を取り除くのに非常に役立つと思います。両ドイツは国際政治上は別のブロックに属しておりますけれども、それを解消するのによかったと思います。両方の都市の代表団が会って話をすることによって、両国の人々も実際の生活では平和を望んでいるんだということを確認できたわけでありまして。

したがって、私どもも今後東西ドイツの橋渡しをしながら平和の実現のために努力をしたいと思っております。と申しますのは、こうした私どもの活動は一昨日の広島のアピールで書かれている第2項目、つまり「一歩一歩平和のために努力する」という、その気持ちを小さな次元であらわしていると思います。

ありがとうございました。

コーディネーター（坂本義和）

ありがとうございました。

次に、デリー市のサーティ市長にお願いします。

デリー(インド)市長

シリ・マヒンダー・シン・サーティ

ありがとうございます。

議長、お集まりの皆様方、友人の皆様方、まず最初に、長崎の本島市長、広島荒木市長に感謝の意を表したいと思います。それからまた、広島市民、長崎市民の方々に本会議を開催させていただいたことに感謝をしたいと思います。

私の前の発言者の方々が核戦争を予防するために、そして恒久的な平和を達成するためのいろいろな努力について話してくださいました。また坂本先生の今朝の基調講演には大変感銘を受けました。また、被爆者の方々のいろいろなお話を伺いまして胸を痛めました。広島でも被爆者のお話を伺い、それからまた、本日は長崎の被爆者の方々に話を伺いました。

核の大量虐殺が非常に大きな問題となっています。もしもこれを防がなければ、私が本日聞いたような被爆の惨状を聞き、また語るものがなくなってしまいます。第1次世界大戦の後、軍縮をしなければという声が上がってきました。そして恐怖のない世界をつくらうという努力がなされてきました。軍拡をストップさせようとしたわけですけれども、原爆がその後発見されて均衡の理論のもとに軍拡競争が進みました。新しい兵器が開発され、そしてそれに報復するような別の兵器がまた開発されてきたわけでありまして。今日、貯蔵されている核兵器の状況は、広島・長崎を灰にしたファットマンやリトルボーイなどと比べますと何百倍もの力となってしまっています。この会議ではこういった話が随分出ました。私の前にもいろいろな仲間が座っており、そして多くの経験を持っていらっしゃると思います。こういった問題についてより有効に対処できるのではないかと思いますので、私は、今この場では、例えばこんなことをしたらどうかというような助言をする立場にはないと思います。ただ、私たちの知恵を絞り合い、そしてそれによりこういった悲劇を予防するということができるようになるのではないかと思います。

私たちはこれから先、繁栄をしたいのか、それとも絶滅したいのか、それを決めなければならぬ分岐点にいます。私たちは祖先からこの地球を受け継いでいるというより、これを子孫から借りているのだということをお忘れはいけません。

人類は生れてからずっと平和への願望があります。私たちはこれから先、来世紀には世界がどうなるのかということを見ていかなければなりません。これからの社会を予測するならば、科学技術も進んでいき、人類にはまた新たな展望が開かれていくと思います。しかし、こういったことは私たちが核兵器の脅威をすべてなくすように努めた結果であります。平和には1つの道しかありません。人類がこれから先、共存の精神を持ち、そしてまた、平和の努力をすることにより、進歩、繁栄の道をたどることができると思います。

核軍縮は普遍的な平和の道であります。先生の基調講演の中にもありました貧困、それからまた飢餓に対してみんながともに一緒になって闘っていくことができれば新しい世界が生まれるでしょう。このまま軍拡を続けていけば我々には将来はないと思います。もし世界中が破壊され、大量殺りく兵器をもったものが優位にたつたとしても、死んだ人間を征服することはできないし、全人類が死んでしまえば誰が支配者となれるのでしょうか。本当の意味での戦勝国などがあるのでしょうか。

レーガン大統領とゴルバチョフ書記長の間でINF条約が調印され、世界が変わる兆しが見られます。私たちに残された時間というのは非常に限られています。今やらなければ決して軍縮は達成できないでしょう。

ドイツに非常に有名なポール・サガンという医者がいますけれども、「何百万年もの昔は火星に生命があった。しかしながら、その後は恐らく核戦争などが起きて火星にいた人類はいなくなってしまったのではないか」という仮説を出しました。火星には生命があるかどうかというような研究は今でも行われています。

1961年に非同盟諸国がベオグラードで会議を開きました。そしてネール首相がそのときにこんなことを言っています。「戦争は今ほど人類に脅威を与えていることはないだろう。そして超大国に対して対話をもって核兵器などが使われることがないように呼びかけよう」ということを言いました。私たちはこのような会議を開いて、そして都市間の連帯を深めようとしています。それからまた、都市がこの普遍的な平和、恒久的な平和を達成するためにどういう役割を果たし得るかという話し合いを私たちは開いています。私たちはこれからもたゆみない努力を払っていき世論を高めていかなければなりません。核軍拡競争で優位に立とうとするような無意味な闘争をやめさせなければなりません。5歳以下の子供たちが今、こうしている間にも何人も何人も飢餓で死んでいっています。一方で核兵器の生産、貯蔵に巨額のお金が使われています。これらの兵器の生産に使われているお金の半分で飢餓や貧困をこの地球からなくすることができます。

しかしながら、残念なことに、多くの政府は軍拡競争を続けており、それができないでいます。また、相互理解や善意が欠けているというようなことから資源が軍事支出に回されてしまっており、平和のため、あるいは生活水準を高めるためにはお金が使われていないのです。

第3世界の現在ある状況を見ていかなければなりません。例えば外国への服従あるいは外国の搾取を受けたような国がたくさんあります。こういった国々は経済的には全く自力ではなりたない状態になっています。その国の人々や政府が本当にその願いを持たば、ある資源を有効に用いて貧困や飢餓の問題を解決することができるようになるでしょう。しかしながら、こういった貧しい国々も少額ではなく多額の軍事支出を実は行っているのです。ですから優先順位をまずかえていかなければなりません。例えば南アジアを見てください。貧困ライン以下の生活をしている人たちがたくさんいます。無学、防ぎようのない病気、早死にはあたりまえのことなのです。私の意見を言わ

せていただければ、世界中の国の有効に使える資源を蓄えて人々に供給すればいいのではないのでしょうか。しかし恥ずかしいことに、私たちは豊かであるにもかかわらず人々を飢餓や病気で死なせているのです。

核の大量虐殺から人類を守ることは絶対必要ですが、人類の生存は、「核兵器は破壊をもたらすが、1粒の麦も生産できない」という厳しい現実に対応していくかにかかっているのです。

こういう支出は全くのむだにもかかわらず、核保有国は核兵器をたくさんつくって、その見返りに一体何を得るというのでしょうか。私たちは現在啓蒙の時代に生きています。それが運命なのです。私たち市の行政に携わるものとしては、中央政府に対してプレッシャーをかけ、そして優先順位をかえさせなければなりません。そして恒久平和が得られるように、そして繁栄が訪れるようにしていかなければなりません。核兵器の廃絶と貧困をなくすことはどちらも大切なのです。

戦争、核兵器、貧困と飢餓のない世界を達成するには、各国の異なる政治体制が障害となってはならないと思います。市政府は、核軍拡競争で信頼関係をなくしていますので、国家間の信頼、友好を促進させるようにしなければなりません。

ですから、私たちとしては、何かプログラムをこういった会議からつくっていかなければならないと思います。こういった会議が開かれたということは大変素晴らしいことであり、広島・長崎市長に感謝をしております。非常に歴史的にも重要な時期にこのような会議が開かれたということは素晴らしいと思います。これから先、何かいろいろなプログラムを展開していき、次の会議まで全く空いてしまわないようにしていかなければならないと思います。作業委員会のようなところがプログラムをつくって、そして次の会議までの間にそのプログラムの内容を実施するというのではどうでしょうか。

最後に私が言いたいことは、神はこの世界が核兵器で破壊されることを望んでいないということです。ですから、私たちはこの世界を愛し、そしてそれが維持できるようにしていかなければなりません。もしもこの核軍拡競争がこのまま続いていけば世界が絶滅してしまうときが訪れるかも知れません。これからも経済的、社会的、法律的、倫理的な原則を打ち立てていき、世界に対立がなくなるように、そして核の悲劇が起こらないようにしていかなければなりません。

以上で私の話は終わらせていただきます。ありがとうございました。

コーディネーター（坂本義和）

次の発言者をご紹介したいと思います。

ルクセンブルグのビルツ市からいらっしゃいました  
ビベール市長です。

ビルツ(ルクセンブルグ)市長

アンドレ・ビベール

私はビベールと申しまして、ルクセンブルグ議会の議員でありビルツ市の市長でもあります。平和都市連盟をも代表してあいさついたします。私はこの連盟の副会長をしていますが、会長のスペイン、マドリッド市長に頼まれ、この会議に参加できましたことを大変嬉しく思います。

この連盟は、戦災を受けた都市が集まり、1982年に設立されました。執行委員会は、ベルギーのバストーニュ、イギリスのコベントリー、イタリアのクネオ、ギリシャのカラブリタ、スペインのマドリッド、イタリアのマルザボット、ポーランドのワルシャワ、フランスのヴェルダン、ソ連のボルゴグラード、そしてルクセンブルグのビルツで作られています。オランダのアルンヘム、ユーゴスラビアのグラグイェバツの都市も後にこの委員会に入りました。

1987年、新しい条例が承認され、名称もワールドユニオン・オブ・シティーズ（世界都市連盟）と変わっております。会員も拡大されて、直接戦争の打撃を受けていないところもメンバーに入っております。この組織は直接的に平和のために協力して努力をし、地球上から戦争をなくしていこうというものであります。

この組織の目標は以下のようなものでありまして、まず第1番目としては、具体的に平和のための行動をすべてのレベルで実施する。そのためにはさまざまな手段を行使する。2番目としては、自由、民主主義そして人間の尊厳を守っていくこと。3番目としては、学校等の教育を通じまして情報交換、そしてさまざまな違いに対する尊重、そして協力などを促進していくということでありまして、4番目としては、国連憲章あるいは人権宣言などに含まれている諸規定を実施していくということでありまして、そして、いかなる国からも妨げられず同じような目的を持った組織、諸機関というものを団結させていこうということでありまして、5番目としては、すべてのメンバー都市に対しまして、それぞれの影響圏において世論の喚起を働きかけていく。特に軍縮、そして緊張緩和、民族自決権の尊重、さらに第3世界における飢餓の問題等を取り上げるといことでありまして、第6番目としては、すべての暴力、戦争の手段といったようなものを非難するということでありまして、交渉が唯一の問題解決の方法であり

ます。この世界的組織では、戦争の被害に加えまして、迫害を受けている都市、あるいは将来的に理解、調和そして協力において共存したいという信条をもっている都市をも組織していきたいというふうと考えております。

世界各国50以上の都市が賛同をしております。執行委員会としては、皆様方の都市にも加盟をしていただきたいと思っております。総会はワルシャワで9月1日・2日に開催されるわけでありましてけれども、もし協力をしていただければ非常に光栄でございます。マドリッドの市長の方に連絡をいただきたいと思っております。このような協力を通じまして、私どもの組織としては全人類の共通の目的である全世界の兄弟愛、そして人間愛というような目標を達成したいと思っております。

長崎・広島の方々にお礼を申し上げます。ご清聴ありがとうございました。

コーディネーター（坂本義和）

あと4名の方が発言を求めておられますけれども、ここで休憩に入ります。その前にご提案申し上げたいことがあります。

私たちは、最終的には具体的な問題について、都市がどのような措置を取れるかということについて、まとめていきたいと思っております。これまでの発言者の方々の話の中に出てきたことを要約してみますと、まず第1に、ここに集まっている市の全部が必ずしも非核宣言をしていないように思います。自分の市を非核化するには何ができるかということが第1点。

それから2番目として、市によっては軍事施設、軍事要員を非軍事的な目的に転換をしています。市は、こういったことに対して何ができるか。その点を見ていく必要があります。

それから3番目に、第三世界の人々との協力を促進するために市に何ができるかということ。発言された方の中に参考になる例がたくさんありましたが、この問題についても建設的に検討する必要があるのではないのでしょうか。

それから4番目に、エコロジーの問題があります。地球環境に与える破壊的な影響を防ぐために市に何ができるかということ。

そして最後に、これは提案と質問の両方が出たんですけれども、この会議の参加者が具体的に何ができるかという問題です。世界平和連帯都市市長会議の参加者として具体的に何ができるのでしょうか。例えばニュースレターを発行するという可能性について言及された方がいらっしゃいます。それからまた、この会議の枠組みの中で、さらに会議を開いていくという提案



も出ました。

ここに参加されておられる方々にこういった具体的な問題についていろいろなお意見をいただきたいと思っております。

=休憩 午後 3 時 36 分=



=再開 午後 3 時 51 分=

コーディネーター (坂本義和)

それでは、次の発言をお願いしたいと思います。  
ピラ・エル・サルバドール市のアズクータさん。

ピラ・エル・サルバドール(ペルー)市長  
ミゲル・G. アズクータ

長崎市長、第2回世界平和連帯都市市長会議にお集まりくださいました市長及び各代表の皆様、友人の皆様、私の国ペルー及び私の町ピラ・エル・サルバドールを代表してごあいさつを申し上げます。また、都市連帯ラテンアメリカ地区担当副会長としてラテンアメリカを代表してごあいさつ申し上げます。

私たちは今、広島での会議に出席し、そして長崎に来ています。私たちがここにいるのは、この2つの都市が破壊されたあの恐ろしい出来事を記念するためではなく、私たちの力を合わせて軍拡主義や人間の死、そして破壊を助長する核や科学の利用をやめさせるためです。私たちは軍備撤廃、核廃絶を支援し守るためにここにおります。この会議にご出席くださった方々を代表する国々の多くは、個人対個人、また国対国の戦争やエゴイズムを引き起こした結果、苦しんだことがある国々です。

皆様もご存じのように、ラテンアメリカでは市民に対して核兵器の使用による悲しい体験は幸いにも現在まで持たずに済んでいます。私たちは違う状況により、いろいろな政府による経済依存、対外債務、社会的な不公平や軍事費のせいで、毎年何百万という死者や病氣、障害を持った子供が生まれております。私たちにとっては、これはすべて私たちの国々に対して投げ入れられた新しい核兵器なのです。ですから、私たちは地理的、社会的な違いを越えて共通の目的を持っています。私たちの街同士の友好と協力の絆を生み出すことで平和の連帯を確立することができるのです。また、そうしなければならぬのです。

私たちはこの会議を通じて、こうした問題をどうすべきか多くの例をみてきました。私たちピラエルサルバドールではフランスのデュースーブレ、ドイツのチュービンゲンと親しく交流しています。ピラエルサル

バドールは18年の歴史しかなく、30万人の人口を有しています。町の住民の努力、組織力、参加意識そして自主行動により、平和メッセンジャー都市の称号もいただきました。この町は、ラテンアメリカ地区のほかの都市とともにラテンアメリカが非核地帯となるよう提案しています。

したがって、私は長崎アピールの最終決議においてこの提案を取り上げてくださいますようお願いいたします。

同時に代表者の皆様、坂本先生が発言されていましたが、広島でまとめられた宣言が第3世界の各都市でも活用されることができるよう、勇気を出してこれを拡張しようではありませんか。

ですから、私は第2点として、軍拡主義のほか、さきに申し上げましたような平和と発展に逆行するような要素、多くの人々に決定的な影響を及ぼす対外債務、経済依存や社会的な不公平といった要素も決議の中で審議していただくようお願い申し上げます。

広島と長崎でともに過ごしたこの経験をもとに情報交換と相互理解を推進し、発展と平和のための具体的な共通の活動に参加しつつ、先進諸国と第三世界の各都市の間の積極的な連帯と協力関係を強化するようにいたしましょう。私たちは、この約束と連帯の道を私たちの町から歩み続け、より公正な世界の建設を進めながら、そして皆様を初めとする多くの人々に出会い続けるでしょう。

通訳の方々、それから技術者の方々に心からお礼を申し上げます。スペイン語で今回スピーチできたことをお礼申し上げます。

コーディネーター (坂本義和)

アズクータさんどうもありがとうございました。  
それでは、次は、ポルト市のモンティオリ市長です。

ポルト(ポルトガル)市長

フェルナンド・ソアレス・ガブラル・モンティオリ

議長、ご列席の皆様、私はヨーロッパの西の端の存在します国からまいりました。そこで私は、ポルト市の住民を代表いたしまして、姉妹都市であります長崎の市民の方々にごあいさつしたいと思います。

1987年の6月、私はベルリンにおきまして、ベルリンができてから750周年を祝う盛大なお祭りに出席することができました。その際私は、都市連帯の重要性と広島・長崎からの呼びかけに市長の方々が賛同することを求めて開催する世界平和連帯都市市長会議に参加するよう発言いたしました。戦争の恐ろしさ、そしてその残酷さをもっと声を大きくして世界の人々に伝え

るべきであります。人類は平和の中に暮らすべきであり、戦争による破壊の脅威と不安の中で暮らすべきではありません。平和は都市の間の連帯を通じて確立されるべきであり、そしてこの平和を通じて民族間の連帯を高めるべきであります。

核兵器を全面的に廃絶する。これは私どもの究極的な目的として追求しなくてはなりません。不安が一切存在しない世界において、平和に暮らす権利をすべての民族が受けることができるようにしなくてはならないのです。私ども都市を代表するものは、友好関係を深め、そして都市間の連帯を高めることにより、平和に対する貢献をしたいと思っております。

私は、ポルトの町で生まれました。人口は160万人ほどであります。そしてポルトの住民は、自分の町を自分の祖国として愛し、そして住民の都市に対する愛情がこのポルトという町をポルトガルの首都にらしめたわけであります。自由と仕事を愛する都市としてポルトガルの人が存在しますが、しかし、この自由も国民、そして市民がともに享受できるものでなくてはなりません。本来、自由が享受されるべきであるのに、ヘーゲルの理論に忠実な人間の心の汚れが大量虐殺を生み出し、そしてこの自由を侵害してしまうわけであります。

ユネスコの憲章にも書かれております。戦争は人間の心の中に生まれるのであるから、まず人間の心の平和のとりでを築かなくてはならない。これはまさしく私どもが追求しなくてはならないことであります。心理的、政治学的あるいはイデオロギーの側面から、私どもは人間の心に平和のとりでを築きましょう。人類の社会というものが常に戦争の危機にさらされるということの一つの運命としてあきらめなくてはならないのか。決してそんなことはないと思えます。

確かに、人類は今まで戦争の危機にたびたびさらされてまいりました。しかし、自由が人間には与えられなくてはなりません。戦争には社会的な機能というものがあられるのかも知れませんが、しかし、戦争のかわりに教育を促進し、そしてより効果的な国際的機関を設立することによって、この戦争の危機を妨げ、そして社会的あるいは経済的な目標を定めることによって、戦争から人間を救い、そして自由を享受させるような体制を築き上げることができると思えます。しかし、そうすることは大変であるので、このためにも国家間の協力、都市間の連帯が非常に大切であり、そしてこの連帯こそ世界の平和に貢献するものであります。

世界人権宣言の中には次のように書かれております。「国家間の友好関係を伸ばす必要がある」私は、この国家間の友好関係を高めるために皆様にぜひアピール

をしたいと思えます。自由・正義と平和をもとに人間の尊厳というものを改めて認識し、世界の都市間の理解と友情を高めるようにいたしましょう。

ありがとうございました。

コーディネーター（坂本義和）

ありがとうございました。

それでは次に、コベントリー市のケアンズ市長にお願いしたいと思います。

コベントリー(イギリス)市長

ディビット・J. ケアンズ

坂本教授、お集まりの皆様方、私は英国のコベントリーの市長をしております。私たちの市は31万人の人口を擁しております、イングランドの中央にあります。このような重要な会議で発言ができて大変うれしく思います。このような会議は人類の将来にとって非常に重要であります、ほかの会議よりもますます重要であると信ずる理由があります。と言いますのも、今回は世界各国からさまざまな方がいらっしやって、本当の意味で国際的な会議であること。それからまた、広島及び長崎で会議が開けたということで、この会議は非常に密接に核の時代の幕開けを告げたあの苦しみとつながっているからです。広島及び長崎の皆様方には心よりおもてなしいただいたことに感謝をしたいと思えます。会議の参加者を代表してお礼を申し上げます。ホストの方々にお礼をするためには、やはり何といたってもこれから先、自分の市町村で平和のための活動をしていくことが大事であると思えます。平和共存をしていくということが国の政府の重要課題であるように、私達も努力していかなければなりません。

私は、イングランドのコベントリーの市長となりましたが、コベントリーは1940年、ナチの爆撃により歴史的な惨禍を受けたのであります。そしてその苦悩から、私たち市民は和解の精神を持ち、そして国家間の恒久的な平和を打ち立てていこうと努力をしてきました。その具体的な一つのステップとして、1944年に友情及び平和の絆を結ぼうということで、ソ連のボルゴグラードと姉妹都市になりました。初めて姉妹都市提携がなされたわけです。それ以来、コベントリーでは姉妹都市関係を世界の26都市と結ぶに至りました。最初は戦禍と関係のあった国々、例えば西ドイツのキール市、東ドイツのドレスデン市、オランダのアルンヘム、ユーゴスラビアのベルグラード、ポーランドのワルシャワなどが姉妹都市となりました。

コベントリーは平和共存に大きく貢献するよう国際

的理解を深めていかなければならないと考えています。しかしながら、中央政府は地方政府の役人に対して「核攻撃に遇ったときの防衛訓練計画、そして実際の訓練を行うように」と指示をしました。コベントリーの市議会では、これは全くばかげたことだということで反対をしています。

また、私たちは新しい国際関係部をつくらうとしております。このような部門をつくることにより、国際的な友情を高めていきたいと考えているのです。最近、新しくニカラグア、そしてインドの2つの都市と姉妹都市を結ぼうとしておりました、これから先も平和のメッセージを広めていきたいと考えています。市議会のみが平和を求めているわけではありません。例えばコベントリーの市民を見ても、団体活動を通じて、あるいは個人的な活動で平和を促進しています。コベントリーには自主的な組織がたくさんありまして、海外でも平和のメッセージを携えています。都市と都市の友情を高め、市民の絆を高めていく姉妹都市構想に加えて、コベントリーの国際理解のための委員会では平和、友情、善意を高める努力をしています。そしてこの委員会は広域にわたり、コミュニティー間のいろいろな交流活動も行っています。毎年、コベントリーの平和委員会ではピースフェスティバル（平和祭）を開いています。これはコベントリーの1940年11月の爆撃に遇った記念日と合うようにしています。昨年はツツ司教が来てくださり、平和、正義の重要性について話してくださいました。正義がなければ平和はないと思います。それからまた、若い青年たちは、やはりピースフェスティバルに参加していますが、それに加えて平和の倫理といったようなものを教育の中に正式に取り入れていく必要があると思います。

来年、コベントリーは、コベントリー市爆撃の50周年を迎えることになっていますが、第2次世界大戦で亡くなられた方々を悼む様々な行事が計画されています。世界各国の都市の人たちと確固たる平和への決意でもって市の歴史上の行事を実行したいと思います。

また、世界平和都市連盟の執行委員会の友人の人たちとも活動を計画しています。コベントリーはこの組織で最初に副会長を務めています。

また、私たちは国連のデクエアル事務総長に基調講演をしていただけないかということでお願いをしているところであり、ぜひデクエアル事務総長に受け入れていただきたいと思っています。

私たちは過去を振り返り、そして暗い日々の恐ろしいでき事を思い出したり、人々の苦悩を忘れないように注意を払いますが、それと同時に将来のことも考えていかなければならないと思います。恒久的な平和を

確立できるように、そのための努力をすることが大事です。

1985年にこの会議が開かれるようになってから私たちはこの誓約を守りながら、それからまた、荒木市長、本島市長が1988年の6月に第3回国連軍縮総会で行った話を肝に銘じております。この市長の演説を私は賞賛の気持ちを持って読ませていただきました。そして表明された内容を心から支持するものであります。それ以来、東西関係は歓迎すべき方向に変わりました。ソ連と米国の間では中距離核ミサイルの廃止を目的としたINF条約が結ばれました。しかしINF条約の調印というのは、あくまでも出発点と考えるべきでしょう。核兵器の廃絶の他にもやらねばならないことがたくさんあります。この核兵器の問題について扱うと同時に、化学兵器の拡散の問題についても、また通常兵器の問題についても考えていく必要があります。東西がこれからも対話を続けていき、そして今世界を脅かしている兵器が本当の意味で削減されていくような交渉がなされなければなりません。

平和というのは、国の政府の行動を伴うものであります。それからまた、国連を通じても活動を行っているだけでは十分ではないと思います。各都市の市長の人たちが、これからは市議会を通じて、また市民を通じて平和に向かって活動を続けていかなければなりません。具体的な方法で教育、ピースフェスティバル、人の交流その他いろいろな活動を通じてこの重要な問題について注意を喚起する必要があります。

またそれと同時に、国の政府に対してもそれぞれ圧力をかけていき、平和を求めていかなければなりません。また、市長が集まり、このような会議を通じて私たちの考えを表明していく必要があります。

私は、2つ手紙を持ってまいりました。この書簡はコベントリーの教会からが1通。それからもう1つは、核軍縮のためのナショナルキャンペーンのコベントリー支部からであり、この会議の会長にお渡ししたいと思っています。

荒木市長、そして本島市長、私の同僚であるこの会議の参加者に対しまして、コベントリーがこれから先もあらゆる手段を講じて平和のために影響力を広げていくことを誓いたいと思います。やれることはすべてやっていきたいと思っています。失敗することは許されなからです。

ありがとうございました。

コーディネーター（坂本義和）

ケアンズ市長さんありがとうございました。

次の発表者は、日本の代表で枚方市の北牧市長です。

#### 枚方市長 北牧一雄

私たちの町・枚方市は、大阪府の東北部にあって京都と大阪のほぼ中間に位置しています。人口は約39万人。大阪府下で5番目の都市であります。町の西の端を淀川が流れていて、江戸時代から中継の河港として、また宿場町として賑わったのが町の発展のもとでした。第2次世界大戦までは市内の2カ所に大きな陸軍工廠があって、日本の砲弾の半分以上を製造する軍需工場の町でありました。低い山の起伏が多く、淀川に近いため砲弾の製造、運搬に適した地の利に軍部が目をつけたと言われていました。

空襲による被害は少なかったものの、1939年3月1日、旧陸軍火薬庫の大爆発によって100人近い死者、600人を超える重軽傷を出し、900戸を超える家屋の全焼、被災世帯は実に4,400人余を数える大惨事を経験しました。こうしたことから戦後は町のあり方を反省し、火薬製造再開の運動があったのでありますが、この火薬製造再開に反対する住民運動によって、香里工廠の跡地は、1958年当時東洋一と言われた住宅団地に生まれ変わりました。以後、京都、大阪に近い枚方市は住宅を中心とする多機能の都市として発展してまいりましたが、一貫して平和施策を市の重要施策としてまいりました。

私は、そういう政治風土の中で1975年初めて市長に就任いたしました。市長になるまでずっと私は青年学校、小学校、中学校の教師をしていましたが、数え子が大勢戦死をし、私自身も今の中国の東北地方である満州、あるいは揚子江沿岸の中支、さらにフィリピン等を転戦し、戦争の悲惨さ、非人間性をいやというほど味わいました。私の青春はあの戦争によってつぶされたとさえ考えております。

ですから、私は市長に就任したときから平和行政を重視し、私の平和への思いを次の世代に伝えることを責務としてきたわけであります。本市は1982年大阪府下の自治体に先駆けて非核平和都市を宣言し各種の平和事業を行ってまいりました。主なものを2、3挙げますと平和の船を出したこと、平和の日を制定したこと、そのほか平和コンサートや講演会、映画会、展示会の開催などがあります。また昨年、核兵器の保有国に対して核兵器廃絶を訴える書簡を送るなど創意を凝らして平和事業を展開しております。

平和の船は、昨年全国の自治体では初めて600人という大勢の市民が大型客船に乗り、被爆地の広島・長崎を訪れたもので、引き続き今年も実施をいたしました。平和公園や原爆資料館を見学したり、さまざまな

催しを通して平和の大切さと戦争、原爆の悲惨さについて考えてまいりました。

次に、平和の日制定についてであります。先ほど申し上げました陸軍火薬庫の大爆発からちょうど50年を経過した今年の3月1日を期して、これから毎月3月1日を枚方市の平和の日と決めました。この平和の日制定は、戦後一貫して平和を希求し、平和の街づくりを進めてきた市民の平和への思いが結実したものであり、一つの帰結であると考えております。

記念の事業には多くの市民の参加があり、充実したものとなりました。今、日本の各地ではさまざまな平和を訴える事業が取り組まれています。私は、平和について考える機会が増えることは大変素晴らしいことで、こうした地道な自治体、市民の取り組みが全国を覆うことによって日本の平和が維持され、形骸化が心配される非核三原則も実のあるものになっていくと考えております。

私は、今後も核兵器の廃絶、地球的な平和の達成のために全力を尽くすとともに、平和の前提として日本国憲法の理念である一人ひとりの基本的人権を守り、人間を大切にする行政を市民とともに進めていこうと決意を新たにしております。

以上、簡単ですが、事例報告とさせていただきます。

#### コーディネーター（坂本義和）

どうもありがとうございました。

前の方に座っている方々の発言がすみましたので、今度は会場の皆様方からのご意見をいただきたいと思っております。

先ほど申し上げましたように、具体的、実際的な提案をしていただければと思います。それからまた、何かうまくいった成功例などがご自分の都市でありましたら紹介していただければと思います。お願いいたします。

#### ベルリン(ドイツ連邦共和国)州大蔵大臣

##### ノルベルト・マイスナー

私の名前はマイスナーと申しますが、ベルリンの市長の代理として来ております。

具体的な提案をいたしますが、この第2回目の会議の後、ここに集まっているすべての町が自分たちの国の政府に対して、つまり自分が属している国の国家の政府に対して手紙を書いて質問したらどうかと思いません。つまり、個々の政府が今まで核軍縮のために何をしたかを問い合わせたらどうでしょうか。果して、自分たちの政府が核軍縮のためにどれだけの努力をしているか。また、政府が軍備費の縮小にどの程度努力し

ているか。さらに、個々の政府が非核地域宣言のために、そして非核だけではなくして化学、生物兵器を持たない地域にするという宣言のためにどれだけの努力をしているかという質問のリストを政府に送りまして、そして政府から答えがきましたら、それを個々の市議会に提示して議論の対象にしたらどうかと思います。

さらに、政府に対して、質問の添え書きに「この手紙はそれぞれの国の政府に出している」ということを書き添えてみたいと思います。そして、その答えは「自分の国のすべての町の市議会及び市政府に回す」ということも付け加えて書いたらどうかと思います。

ありがとうございました。

コーディネーター（坂本義和）

ありがとうございました。

私たちのこの会議は、例えば全会一致の決定を正式に行ったり、あるいは会議体としての公式のステートメントを政府に対して出すという性格のものではありません。

しかしながら、今おっしゃられた提案に賛成の方は、ぜひこのようなプログラムに参加をして行動を起こしていただければと思います。ただ、この会議に対してそういう要請を出して、この参加者の名のもとにこういった行動をおこすということは適切ではないでしょう。私の理解する限り、この会議の性格はそういうものだと思います。しかし、非常に具体的なお提案をいただいたことをうれしく思います。

ユージーン市

私は、ジョン・ポールズと申しまして、オレゴンのユージーン市の議員です。そして、今年初めに開かれた非核自治体会議を初めて開いたアメリカの市であります。ユージーン市の市民10万人を代表してごあいさつを申し上げたいと思います。日本の掛川、ソ連のヤクーツク、ネパールのカトマンズとかそれから韓国の慶州と姉妹都市関係を結んでおります。このような会議、組織が非常にうまくいっているということを事務局に感謝申し上げます。それからまた、子供たちに平和な世界をもたらすため、非常にうまくいろいろなことを知り、また感じて、行動を起こすということがままとまっているという意味では私は大変いい会議だと思います。

科学の惨禍を被ってから、広島と長崎が平和文化都市に変わってきました。

人類と地球の平和のために都市や国家を科学の力で変えることが私たちの使命です。

坂本教授の方から先ほど5つの具体的な提案がござ

いました。例えば非核地帯を設けていく。軍事から民生への転換を行うこと。それから第3世界との協力を深めること。エコロジーの問題。そして教育の問題、特に若者の教育、科学の導入、社会奉仕。それに追加したいと思います。この中に含まれていることであり衆すけれども、それは忘れてはならないことを思い出すというようなことをこれからも行っていかなければならないということです。

私は爆撃されたとき3歳半でした。私の娘は今3歳半でありますけれども、私は自分の娘に対してこれから教えていかなければなりません。ただ、私の娘の娘には一体だれがどうやって戦争体験を伝えていくのでしょうか。そういったことを伝えるということもこの中に入れていかなければならないと思います。

コーディネーター（坂本義和）

ありがとうございました。

他にご意見はありますか。

ボローニャ市(イタリア)

ダンテ・クリッツィ

私は、イタリアの姉妹都市委員会の委員長を務めておりますダンテ・クリッツィと申しますが、1,500校以上に配られているテキストを読みしたいと思います。1989年にボローニャ市は3月21日に平和行事を全ての学校ですよう提案をしました。幼稚園から大学まで全ての学校において、学校が適したかたちで平和行事が行われています。そしてこの日を通じて平和の持っている意味、平和の価値についていろいろな討議をするわけであります。このような授業を通じて人権を守り、そして軍縮が実現でき、いろいろな対立も紛争も血を流すことなく解決の道を選ぶようにと考えているわけであります。

この観点から、今年、私たちは他都市に呼びかけて、ヨーロッパのイタリア以外の350の学校との間の姉妹校関係を実現いたしました。学校同士が姉妹校関係を結ぶということは、平和の教育のために非常に有効だと考えます。カーン市の助役は、教育の重要性、そしてそのために平和の記念館をカーン市がつくったということをお話されました。私はナチスの犠牲となった遺族の会長を務めていますが、ボローニャ市では215名の子供がナチスに殺害されました。市長はこの時代の残虐な行為を後世に伝えるため情報センターを設立いたしました。

そこで、フィレンチェの前市長の業績を私はここで讃えまして最後の結論にしたいわけですが、彼は生涯平和に貢献しました。この前市長はドレスデンを訪問

し、そしてまたベトナムにも行きました。そしてその後、この前市長は新しい市をつくらなくてはならないと強調いたしました。「国境をなくして、お互いに麦、ぶどうを育て、オリーブの木を育てなくてはならない」と。麦のかわりに米でもいいんです。ぶどうのかわりに桜でもいいんです。あるいはマンゴでもいいんです。このように国境を越えて子供たち、あるいは人間同士がお互いに植物を育て、木を育てるという精神を私どもは伸ばしたいと思えます。

広島・長崎の人々や市長に感謝いたします。私はピラ・エル・サルバドール市長のご意見に賛同いたします。

ありがとうございました。

#### バーナビー(カナダ)市議会議員

デレク・R. コリガン

デレク・R. コリガンと申します。カナダのブリティッシュコロンビアからまいりましたバーナビー市長の名代ということであります。カナダは仲裁者として平和の伝統を持っております。カナダというのは大きな国土を持っておりますけれども、人口は少ないわけでありまして、ユニークな状況にあります。天然資源にも恵まれております。そういったことから経済関係を見てみますと、パートナーとして大国との関係を持っております。しかしながら、人口が少ないということでもありますので、他国を支配したりとか、そういう必要はないわけでありまして、拡張主義は必要ないということでは平和を愛しております。そして、各国と協力をしていきたいと思えます。

バーナビー市でありますけれども、これはバンクーバー大都市圏の一部でありまして、港湾都市であります。太平洋への玄関口であります。そして多民族のコミュニティであります。多くの国の多くの人々がブリティッシュコロンビアに移住して、生計を立てています。つまり、移民の都市であります。日系人も中国、インド、イギリス、フランス、中東、南米、世界各地からの移民がいます。我々は多様性の中の協調ということに基づきまして、我々の都市は非常に特別な多民族という構造の中で文化を築いているわけでありまして、人々は協力、そして理解を深めることによりまして、違いを克服することができるわけでありまして、毎年バンクーバーの平和行進には5万人も集まり、私の地方では35都市が非核地帯宣言を宣言しています。このブリティッシュコロンビア州全体を非核地帯にしようという動議も提出されております。平和というのは各地域で始まり、そして各人の家庭で始まります。差別をなくすことによって始まります。学校においても差別

をなくす。そして市議会の決意も必要であります。各地域のリーダーから始まりまして全国にこういった気運が広がっていくと思えます。

広島・長崎市の方々、そして市民の方々にも今回のご招待、歓迎に対してお礼を申し上げたいと思えますし、ほかの市の代表の方にもいろいろ教訓を与えてくださいましてお礼を申し上げたいと思えます。

この会議の場におきまして、私どもバーナビー市といたしましても、連帯そして平和のために力を注いでいきたいと宣言したいと思えます。

#### ジュネーブ(スイス)市議会副議長

アンドレ・ヘディガー

私は、アンドレ・ヘディガーと申します。スイスのジュネーブで副議長をしています。

ジュネーブの町は皆様にもよく知られた町だと思えます。私は、今回の会議において、発言者として登録していないわけなんですけれども、それは多分スイスが中立国であるということと事務局の方からも私に発言の要請がなかったのだと思えます。私の国では様々な国際組織があり、会議が開かれています。もちろん、私は中立国としての立場を保つものであります。一応、この中立国としての意見を述べさせていただきます。

1291年以降、スイスでは戦争は一切ありませんでした。スイスの地域においても、そしてスイスが戦争に参加したこともありませんでした。スイス人というのは平和を愛し、独立を愛し、そして戦争反対のメンタリティーを強く持っている国民だと思えます。だからといって原爆に無関心だということではありません。私どものスイスという国は、人民投票によって原爆を放棄したという事実があります。すなわち、25年前国民投票がなされ、憲法において「スイスの軍隊は絶対に核兵器を持たない」という条項が設けられたわけでありまして。そして私どもは平和のためのいろいろな努力を重ねております。ジュネーブにおいて国際会議を主催し、この平和の問題についていろいろな角度から検討してまいりました。

数日前から皆様は平和の問題を検討し、そして多額の軍事費が費やされているということが指摘されました。国民がだれでも一つのアイデアを出せばそれを国民投票にかけることができるということをスイスの憲法で保障されているわけです。そこでスイスの10万人の人たちからスイスは軍隊を持たなくてもいいのではないかと提案が出されました。そして今年の秋、スイスは軍隊を完全に放棄していいのかどうかということ国民投票にかけることになりました。軍隊を持

つべきか、あるいは放棄すべきかということで国民投票がなされるわけでありませぬ。

スイスでは徴兵制度がありません。20歳の若者に4カ月の軍事訓練を課しています。その後毎月かある時期に4日間訓練を受けます。市民がボランティアとして軍隊の訓練を受けるわけです。すなわち、市民兵によって構成されているわけですが、軍隊を維持するということは、スイスの国家予算にとって多額のものとなっております。金額で申し上げますと40億スイスフランです。40億スイスフランというのは非常に多額であり、もし軍隊を完全に放棄すれば、この40億スイスフランが経費の軽減となるということで、このアイデア提案の提示となったわけです。

しかし、多分この国民投票によって、軍隊を放棄するというアイデアは受け入れられず軍隊は残ることになると思います。しかし、このようなアイデアが出るということは、これだけスイスが進歩的であるということ、すなわち軍隊などはなくてもいいという人が10万人もいるということでもあります。

スイスが、もし軍隊を持つことがなくなるのであれば、この軍事費がなくなることによって、その経費をどこかに使うかということでもあります。それは例えば失業をなくし、軍需工場をもっと平和的に利用できる産業に充てるとか、あるいはいろいろな軍事関係の施設というものをもっと平和的な利用にする。私個人としても、国民投票によって軍隊を放棄することが受け入れられることはないでしょうけれども、私としても軍隊は持たなくてもいいということで賛成投票をしたいと思っております。

いずれにしても、スイスはこれからも中立的な立場を保ちます。そして軍隊がなければよりこの中立的な立場を強化することができるでしょう。多くの平和問題あるいは多くの国際的な政治問題にスイスはこれからも関与していき、貧困あるいは飢餓、そして生態系の問題、第3世界に対する支援の問題にも、これから中立国として積極的に関与していくことができます。

スイスは核兵器に反対をしました。私たちは核兵器の脅威にさらされていますし、核兵器だけでなく「平和目的」のため、エネルギーを供給している原子力発電所にも不安を感じています。スイス人は核兵器も持たない、そして原子力発電所も持たないということで、今後20年間原発をスイスの国内につくることはできないのです。そして20年たったあと、現在既につくられてしまった3基の原発について、廃止することになっています。

私はこの点が生態学的に重要であると思います。私たちは、水力、太陽エネルギーといった安全なエネル

ギーの供給を考えるべきです。隣国のことも考えなければいけません。私たちは他国の原子力発電所の危険にさらされているからです。だからといって、ドイツやフランスなどを非難するつもりはありません。

1984年、ジュネーブでは、これ以上原子力発電所をもたないことを国民投票で決めました。広島ではキエフ市長がチェルノブイリで起こったことについて報告したことを聞きました。私は医者ですが、チェルノブイリと同じようなことがヨーロッパの原子力発電所でも起こりえると思います。他の医者たちも原子力発電所、原子力エネルギーの危険性について考慮すべきだと言っています。皆様方もチェルノブイリや他の場所でも何が起こったのかわっているはずですよ。

ですから、原爆の話はもちろんのこと、原発とも関連させて私どもは考えるべきだと思います。第3世界に対する援助もいろいろと話題になりました。平和のことを考えれば、当然第3世界の人たちを支援することは不可欠であります。

ジュネーブは、第3世界に対する援助を積極的に行っております。ジュネーブ市の予算の中には第3世界に対する援助というのが含まれております。ジュネーブ市の予算の1,000分の2ほどでありますけれども、これを第3世界のために毎年費やしているわけでありませぬ。主としてアフリカあるいは南米の諸国、そしてまたアジアの諸国に対して支援を行っております。豊かな国が苦しんでいる国に対して支援をするということが必要ですよ。

広島の平和アピールを私は読みまして考えたことなんですよけれども、核兵器の削減よりももっと強い要求を出すべきではないかと思ひます。核兵器の削減というのは国家間の問題でありまして、削減ではなくもっと強く完全なる廃絶を要求すべきではないでしょうか。削減といひますと、一体何%削減すればいいのかなどいろいろな割合の問題が出来ますから、私どもは都市として、広島として、長崎として、連帯都市として全面的な廃止を要求したとした方が私はこのアピールの内容がより強い性格を持つと思うのです。そして、非核宣言都市も必要でありますけれども、また、非武装都市宣言というものも必要ではないでしょうか。

ありがとうございました。

コーディネーター（坂本義和）

たいへん内容豊かな情報をいただいてありがとうございました。

ノインキルヘンブルイン(ドイツ連邦共和国)市長  
オスカー・ミカエル・ベーム

オスカー・ミカエル・ベームと申します。西ドイツのノインキルヘンブルインから来ております。

司会の方が個々の自治体ではどのような活動をしたらいいかということをお先ほどご質問されましたけれども、私といたしましては、まず非核地域宣言というのが重要だと思っております。しかし、それだけではもちろんだめでありまして、私どもの市もそれをしておりますけれども、その名のもとに広島に市長としてやってきてもまだ不十分であります。つまり、私どもの市でも実際に一般の市民は、現在長崎、広島で行われている会議の様態を詳しく知りません。私は招待を受けまして日本に来ることに決めましたときに試みたことは、できるだけ市の学校や幼稚園、そういうところでもこの会議の情報を伝えるということでありました。特に、広島の子羽鶴を私どもの幼稚園、小学校で折ってもらうように頼みまして、それを持ってくることを試みたわけでありまして。

さらに、8月7日から11日の間に広島・長崎をしのぶ会というものを私どもの市で催させております。パネルディスカッションなどが催され、大学の先生方も招待して小さな町でシンポジウムを催してもらいました。さらに、このシンポジウムにはドイツ国防省の代表者も招きまして、議論に参加してもらいました。そして、明日は人間の鎖の輪を私どもの市の学区から市の中心まで何キロメートルにもわたってつなぐことにしております。

こうしたさまざまな活動の最後に教会一致運動によるサービス、礼拝を催すことにいたしております。この数日間の催しによって、私どもの市でも広島・長崎をしのび、二度と核兵器が使用されないように祈っております。こうした活動をこの会議の間、ふるさとに残っている市民たちはこのような催しをこの数日間に行うように今後ともしたらいかかと思っております。

ありがとうございました。

藤沢市長 葉山 峻

坂本先生が先ほど5つの点を言われましたけれども、私は非核宣言をすることによって各都市が非核自治体になるということが非常に今の時点で大切だというふうに思います。

私たち藤沢市を初め今の日本の自治体は、単に宣言をするだけではなくして、宣言から条例へというふうに努力を傾けていこうと思っております。この点ではユージーン市を初め、アーバイン市とかアメリカの各市が非核条例を200以上の諸都市がやっておりますけ

れども、そういう経験に学びながら法律によって核を禁止していく。それを自治体がやっていく。こういうことのために今準備を進めつつあります。ただ、日本において困難性があるということをおし上げておきたいと思っております。

それともう一つ、皆さんのところにお配りをしましたように、どういう自治体で平和の活動、非核活動は可能であるかです。私は市の境に非核宣言の看板をかけたたり、モニュメントをつくったり、平和教育を行ったり、あるいはシンポジウムその他を毎年開くとか、あるいは第3世界との交流の中では藤沢市で第3世界を含めたホームレスの国際会議を開くとか、いろいろそういう形の中でやっておりますけれども、それためには予算がどうしても必要になります。したがって、日本の政府はG N P比1%を突破する軍備を増大させつつありますけれども、自治体は本質的に平和を欲するわけでありまして、我々自治体は平和の予算を確実に組んでいかなければいけないと、そういうふうに思っています。

そういう点から、藤沢市の場合は、私も申し上げましたとおり、日本の市長の任期は4年でございまして、今度の任期が終わりますと20年市長を務めていることになっていきますが、今度は市長が変わって好戦的な思想を持った市長が出てきたときに平和の予算が断ち切られるようなことがあってはならないというふうに考えております。そういう点も含めて、今年の3月の議会に平和基金条例というのを提案いたしました。5億円を基金として予算に組み、その利子をもって毎年の平和予算を組んでいきます。つまり、年4%の金利でありますと2,000万円は完全に平和予算に使うことができるわけでありまして、そういう平和基金条例の予算を提案しまして、議会で満場一致で決定されました。それによって、先ほど言ったような10項目、皆さんのお手元に配りましたような予算を組んだところであります。やはり積極的に自治体は平和の予算を組むべきです。私は自治体でこれは可能であるというふうに思っています。

最後に、国際連帯であります。私の藤沢市の北側には横須賀海軍のミッドウェーの航空基地があります。南には横須賀市という軍港がありまして、ミッドウェーを初めいろいろなトマホーク搭載の原子力船の入港可能な母港に横須賀がなっております。その横須賀と藤沢の間に富野市長の返子市というのがございます。そこに東京中心の首都圏で一番大きい緑の森があります。その緑を崩しているミッドウェー等の将校の1,000戸の米軍住宅をつくるということでありまして、返子の市民が「緑を守ろう」、「環境を守ろう」という



ことで1,000戸の米軍住宅の建設に反対するというところで、ここ数年頑張っております。

そういうことに対して、私たちは自治体相互で協力しあって日本政府のこういう政策に対して反対して地方自治を守り、平和と環境を守るために頑張っております。しかし、政府は今年の8月にも強行しようとしています。これに対して文化財保護等いろいろな方法を使って反対をしている最中であります。しかしこの闘いは、同時にオーストラリアとかニュージーランド、あるいはバンクーバーとかサンフランシスコ、ペルー、バルバラインソールまで含めて太平洋の非核化、海の非核化という連関の中で、海の非核化が実現し、その緊張が緩和すれば米軍住宅を緑の森を崩して1,000戸つくるという必要は全くなくなってくるわけでありまして、あと5年か6年してそういうことが実現すれば緑を崩さなくてもすむわけであります。そういう意味では、平和と環境という問題は非常に密接に結びついているんです。平和と環境を結びつけて私たちはそのために頑張っていきたい。そのために今年オレゴンのユージーンでの会議もそういう点では非常に大きな意義があったと思います。そして私たちは太平洋地域の非核化を目指して相互に協力していきたいと思います。

どうもありがとうございました。

コーディネーター（坂本義和）

ありがとうございました。

非常に活発に討論に参加していただきありがとうございました。先ほどの休憩前に要約じみたことを申し上げましたので、繰り返しいたしません。

最後に、いろいろいただきましたご意見に感謝をして締めくくらせていただきたいと思います。

私たちは拘束力を持つような文書を作成することには行っていないので、一応こういった形でディスカッションは終わらせていただきたいと思います。これから先も示唆に富んだ意見の交換をバー、レストランなど会議室外で行っていただければと思っております。

時間がきましたので、これで終了させていただきます。参加者にかわりまして、事務局、そして通訳の方々に感謝の意を表します。

司会（加藤国際文化会館館長）

長時間にわたりまして熱心なご討議を賜り、大変感謝しています。坂本先生、ご発言をいただきました都市の皆さんありがとうございました。

本日は、これで会議を終了させていただきます。お疲れさまでございました。



～核軍縮と地球的平和達成に都市は何をなすべきか～

## 都市報告

分科会Ⅱ 8月8日（午後2時32分～午後4時58分）

ホテルニュー長崎 鳳凰閣

司 会 国際文化会館次長  
松 永 正

コーディネーター 長崎大学学長 土 山 秀 夫

### 1. 各都市の報告

- (1) カンタベリー(オーストラリア)市長  
ジョン・F. グリー ..... 177
- (2) ソフィア(ブルガリア)市議会文化科学教育委員会委員長  
プラメン・D. ネシエフ ..... 178
- (3) ゲッチンゲン(ドイツ連邦共和国)市長  
アルトゥール・レヴィ ..... 179
- (4) アッシジ(イタリア)助役  
エマニュエル・ピアッティ ..... 179
- (5) コモ(イタリア)市  
アドリアーノ・サンピエトロ ..... 180
- (6) ラクィラ(イタリア)市長  
エンツォー・ロンバルディ ..... 181
- (7) モンロピア(リベリア)市長  
L. クウイア・ジョンソン ..... 182
- (8) ミデルブルフ(オランダ)市長  
クリス・G. J. ルッテン ..... 184
- (9) セントポール(アメリカ)市議会議員  
ロバート・C. ロング ..... 184
- (10) ビリニウス(ソビエト)市執行委員会書記  
ヴィクトラス・リンケビチェス ..... 186
- (11) ホーチミン(ベトナム)市長  
ダエン・ビイン・ゲップ ..... 187
- (12) 保谷市(日本)市長  
都 丸 哲 也 ..... 188
- (13) 高松市(日本)市長  
脇 信 男 ..... 189

### 2. 都市報告に対する質疑応答 ..... 189



司会（松永国際文化会館次長）

ただいまより「核軍縮と地球的平和達成に都市は何をなすべきか」をテーマに分科会Ⅱを開催いたします。

日程は、今から15時30分まで行いまして、その後コーヒブレイクを15分ほどとる予定でございます。それに引き続きまして、16時45分まで後半を行う予定でございます。

私は、本会議の司会を務めます国際文化会館次長の松永 正と申します。

本会議の進行に当たりましては、午前中にパネリストとして活躍していただきました長崎大学長の土山秀夫先生にコーディネーターをお願いしております。

それでは、土山先生、どうぞよろしく願いいたします。

コーディネーター（土山秀夫）

ただいまご紹介いただきました土山でございます。この会議のコーディネーターを務めさせていただきますので、皆さん、どうぞよろしくご協力をお願いいたします。

この分科会では、午前中の「今、地球の平和を考える」というパネルディスカッション、基調講演の後を受けまして、ここに左右にお並びの13の都市の代表の方々から午後のセッションとしていろいろご意見を公表いただきます。

大変、時間の制約がございまして申しわけございませんが、できればお1人大体5分前後ぐらいでご意見を述べていただけます。そして、一通り終わられましたから、このご発表方同士、あるいはフロアにいらっしゃる方々からのご発言をお受けしたいと思っております。なるべく多数の方のご意見をお聞かせいただければと考えますので、その点、よろしくご協力をお願いいたします。

この分科会Ⅱの会場でお受けいたしましたご意見は、私の方で集約いたしまして、明日の閉会式の前に発表されます長崎アピールの中に、できる限りその精神を込めさせていただくつもりであります。

それでは、早速発表に入らせていただきますが、その前にごく簡単に私の方からご紹介申し上げます。

まず、オーストラリアのカンタベリー市からお見えになりましたジョン・F. ゴリー市長さん。

その次が、ブルガリアのソフィア市からお見えになりましたブラメン・D. ネシエフ市議会文化科学教育委員会委員長さん。

次が、ドイツ連邦共和国のゲッチンゲン市からお見えになりましたアルトゥール・レヴィ市長さん。

続いて、イタリアのアッシジ市からお見えになりま

したエマニュエル・ピアッティ助役さん。

続いて、同じくイタリアのコモ市からお見えになりましたアドリアーノ・サンピエトロさん。

次も、イタリアのラクイラ市からお見えになりましたエンツォー・ロンバルディ市長さん。

次は、リベリアのモンロビア市からお見えになりましたL. クウィア・ジョンソン市長さん。

次は、オランダのミデルブルフ市からお見えになりましたクリス・G. J. ルッテン市長さん。

それから、アメリカのセントポール市からお見えになりましたロバート・C. ロング市議会議員さん。

次が、ソビエトのペリニウス市からお見えになりましたヴィクトラス・リンケビチェス市執行委員会書記さん。

それから、ベトナムのホーチミン市からお見えになりましたダエン・ビイン・ゲップ市長さん。

次に、日本の保谷市からお見えになりました都丸哲也市長さん。

次に、高松市からお見えになりました脇信男市長さん。

以上13名の方々でございます。

それでは、一番最初にオーストラリアのカンタベリー市からお見えのゴリー市長さんからお願いいたします。

カンタベリー(オーストラリア)市長

ジョン・F. ゴリー

この第2回世界平和連帯都市市長会議におきまして、カンタベリーを代表して皆様にごあいさつを申し上げますことは、大変光栄なことと存じます。

私は、シドニーの南西部にございます13万人の人口を擁するカンタベリー市を代表しております。このカンタベリー市というのは、1879年に市制がしかれたものでございます。市議会といたしましては、例えば道路の建設、公園の設備、それからごみの回収、それから保健サービスなどをやっております、非常に成長している市議会でございます。

最近のことでございますけれども、私の市では、多くの友好関係をほかの都市と結んでおり、現在では、シドニーに続きまして第2に豊かないろいろな人種を含んだ都市となっております。まだ言語の問題は全くございませんし、また、ほかの市と同じように非常に住みやすい都市とされております。そして、我々の市は他の国々とも強いつながりを持っており、平和運動の点では、特に我々市民は世界における恒久平和の必要性を非常に強く感じているものであります。

私は、住民と同じくオーストラリアといたしまして

の軍事対立などに対して反対をしてきております。ですから市議会の役割である世界平和の運動に対しても非常に支持をするものであります。実は、ケビン・モスという前市長が第1回目の世界平和連帯都市市長会議に出席いたしており、そのときの記録も残っております。なお、アルダーマン・ジュディ・マン氏からもよろしくとのことでございまして、今後第1回目よりもさらに大きな成果が収められますことを望んでおりますということでございます。

アルダーマン氏は、オーストラリア非核地帯会議の議長をしています。私共の議会はシドニーにその事務所を提供しており、本市としても1981年非核地帯を宣言しました。市長として、私もこの核の問題に非常に大きくかかわりました。核廃棄物がシドニーを通過して、いつどこに運ばれるかについて、私は政府高官から多くの情報を得ようと長期にわたり奮闘いたしました。ですから、事前に知らされずにそういった輸送が行われたときには、議会が強く反対をし、確かな情報をもとに核廃棄物の輸送を防ぐのに成功しました。

我々のスローガンというのは、「地球的に考えて、行動は地域社会に起こす」ということでありますけれども、最近、私どもの議会ではボブ・ホープ首相に対して、核搭載艦船、それから武装艦船がオーストラリア領海へ入ることを禁止するよう要請いたしました。他の市議会と同じように、私どもの議会では、道路、それから保健サービス、それから地域社会サービスの改善に努めておりますけれども、それと同時に、私どもは適切な自治体のサービスをするためにも国内外に平和について積極的に推進しなければならないと思います。

この会議が世界に向けて力強く一貫したメッセージを送らなければならないと私は確信します。この会議は地方自治体で平和のネットワークづくりを積極的に推進するうえで重要ではありますが、それ以上の貢献が望まれます。

私たち一人一人は第3回世界平和連帯都市市長会議にすべての自治体を参加させるために決意を新たに、今後の活動計画をつくらなければなりません。我々市長といたしまして、最も人気のある市長というのではなくて、もっと地域社会の中で我々の平和活動に重要性を置いて、それを認識してもらわなければならないと考えております。例えば世界的に環境問題というのが最近大きな問題となってきております。オーストラリアでも日々その環境問題が大きくなってきておりますけれども、これが世界の関心を引くことになりまして、手遅れになる前にこの問題に対しての行動を起こさなければなりません。そこで、過去100年間にわ

たって行われてきた戦争、また対立に対して、これを原動力として我々は一つの目的、この我々の目的に向かっていかなければならないと、こう考えております。

そして、カンタベリー市を代表いたしまして、この会議の成功、また、皆様方のご努力に対して感謝申し上げます。

コーディネーター（土山秀夫）

ありがとうございました。

それでは、引き続きましてブルガリアのソフィア市からお見えになりましたネシエフさん、お願いいたします。

ソフィア(ブルガリア)市議会文化科学教育委員会委員長  
ブラメン・D. ネシエフ

本島市長、ご出席の皆さん方、私はブルガリアの首都ソフィアの100万人以上の市民を代表し、この第2回市長会議に心からの連帯の気持ちをお伝えいたします。

ソフィア市は、バルカン半島の中心地に位置した、昔から伝統のある町の名前です。ソフィアという名前は「英知」を意味しております。昔から引き継がれた英知こそが私たち社会の本質的特徴です。

私どもは、平和のための世界人民会議や、そのほか多くの国際会議を主催いたしました。これは平和のために闘おうという人々の連帯を強めるためです。

1980年にソフィアは、平和の熱烈なる主唱者である市民の貢献に対して平和の町として賞状を授与されました。市内に記念碑を建立しましたが、これは世界のほかのところには決してないユニークな記念碑だと思います。平和の旗（バナー・オブ・ピース）と呼ばれています。世界各国の子供たちがこのバナー・オブ・ピースの記念碑のところで子供会議を開き、歌をうたい、絵を書き、詩を読み合いました。子供たちは友達と交流し、平和に生きることを祈りました。この記念碑の中には日本を含めた多くの国々から取り寄せた鐘がついています。

私どもは祝祭日にはこの鐘を鳴らします。特に子供たちが鐘をつきます。鐘を鳴らしながら自分たちの平和を求める声の世界の隅々まで鳴り響くようにと希望しているのです。ソフィア市民は、平和への強い誓い、そして強い支援を常に行動をもってあらわしてまいりました。バルカン半島非核地帯化の提案が行われたのはソフィア市でした。また、ブルガリア全国民がバルカン半島からの化学兵器全廃の承認を支持したのもソフィア市からでした。我々市民は、各都市を破壊の脅威から解放された地帯へとかえていくためのいかなる

手段、いかなるイニシアチブをも支持します。

平和を求めて闘うのに都市の大小、国の大小は問題ではなく、都市市民の間の連帯を通じ、私たちの世界にまだ残っている脅威の壁を取り払っていかねばいけません。

現在、ヨーロッパには、いわゆるヨーロッパ共通の家という構想が上がっています。ヨーロッパ共通の家の中に、ヨーロッパは共存しようとする声が高まっており、ヨーロッパで広い支持を得ようとしております。ソフィアはこう信じます。ヨーロッパ共通の家だけではなく、世界共通の家をつくることが可能であると。今、この瞬間に、そしてこの時間に、そしてこの日に、私たちは具体的に世界共通の家を建てるための努力をしているのです。

長崎市・広島市の主催者の皆様方に改めて心から敬意と感謝の気持ちをあらわしたいと思えます。なぜならば、長崎・広島市民の皆様は、私たちの強い平和への希求、願望、努力を非常によく理解してくれる市民の皆様だと思えます。

#### コーディネーター（土山秀夫）

それでは、引き続きましてドイツ連邦共和国のゲッチェンゲン市からお見えのレヴィ市長さんをお願いいたします。

#### ゲッチェンゲン(ドイツ連邦共和国)市長 アルトゥール・レヴィ

まず最初に、皆様方に対して45万の人口をもつ、ゲッチェンゲンとミュンデン市民とガッセル市の市民を代表いたしまして、ごあいさつ申し上げたいと思えます。

そしてこの3つの都市には多数の団体があり、軍縮による平和のための活動に取り組んでいます。また、これらの団体の活動分野は異っていても相互に協力し合っています。毎年数多くの会議であるとか、講演、ディスカッション、そして大会などがございます。このような種々の団体の中でディスカッションが行われ、また、特別な情報が流されます。その中には医師の団体や科学者の団体もあり、平和、軍縮についての話し合いをしています。そして、軍備、核兵器、生物化学兵器の開発、実験、そして生産の危険性についての情報を定期的に流しております。

我々は、非常に大きな危険性が人類に到来しているということを確認しております。人類に対して警告を与えたのは、特に広島・長崎の2つの原爆によってでありました。我々の努力で、常にこのような惨事が世界のいかなる場所でも行われないようにしなければならぬわけでありまして。ゲッチェンゲンでは、この方向

に向けての努力がなされております。

そして18名の非常に有名な科学者が、1957年の4月12日にゲッチェンゲンからドイツ連邦政府に対して宣言を行いました。これは間接的には世界に向けての宣言であったわけでありまして。このアピールには、有名な物理学者などが含まれております。例えばマックス・ボーン、核分裂を発見したオットー・ハーン、カール・フレドリッヒ・フォン・ワイゼッカーが含まれておりました。これらの科学者は、核兵器の生産・実験・使用についていかなる取り組みもしてはならないと宣言しました。ただし、その当時、これらの科学者は連邦政府と違う政策を支持していたので、この宣言は党の政策に繁栄されませんでした。当時の首相から、この宣言を受け取った当日、これは軍事・外交の問題であり、このようなことを科学者が判断することはできないし、また科学者がアピールするような権利はないと言われたわけでありまして。それに付け加えまして、国防大臣は、政府に対するこのアピールは間違っていると断言いたしました。このアピールは、他の科学者あるいは核兵器を生産している東西の科学者に対してなされるべきだったのです。32年前の宣言について詳しく言いたかったのは、まさにこの点であります。

つまり、どのような生命であっても、現在に生き、あるいは次世代の人間であっても、動物であっても、植物であっても、我々はモラルのある責任を取らなければならないということでありまして。つまりすべての政治家、すべての化学の分野の科学者、そして宗教のリーダーの人々、それぞれが協力して、ただ単に生物化学兵器も含め、核兵器の生産と開発を防止するだけではなく、それと同時に、この地球と呼ばれるこの惑星上での生命あるものに終末を迎えないようにするために、すべての兵器の廃絶をしなければなりません。私たちが政治・科学・宗教の壁を越えて、世界中で協力して取り組むならば、核兵器の全廃を目指すこの世界会議は過去の誤ちを繰り返さず、将来の核戦争の危機を必ずや防ぐことができます。

#### コーディネーター（土山秀夫）

ありがとうございました。

それでは、引き続きましてイタリアのアッシジ市からお見えになりましたピアッティさん、お願いいたします。

#### アッシジ(イタリア)助役

エマニュエル・ピアッティ

小さな町・アッシジ市を代表し、お話をさせていただきます。

アッシジの名前ですが、聖フランシスコの名前と密接に結びついており、また平和運動をしている町として有名だと思います。平和を共通のテーマとした、多くのイニシアチブが出されているのを嬉しく思います。また、世界や皆様の国で私どもの存在を認めていただくため、ご招待いただいたことを光栄に思います。都市の集会は市民の集まりであり重要だと思います。それは常に市民に良い影響、良い利益を与えます。アッシジもこのような連帯を強く推進しております。私どもは、国際連帯、そして平和行進、ノーベル平和賞受賞者との集まりなどを主催してまいりました。

1986年10月27日に全世界の宗教の代表が、宗教者代表会議のためにアッシジに集まり、共通の祈りをささげました。翌年、日本の歴史ある京都で同じ平和会議が開催されました。国連は、平和都市アッシジをピースメッセンジャー（平和の使節）に認定いたしました。平和は人が考え、生きていく上で必要なもので、人と人、国と国をつなぐ新しい方法であります。平和を通し、暴力、戦争、世界分断の根を特に人の心の中から、つみ取ってしまわなければいけません。私たち各人が状況を変えるようにしなければなりません。連帯・対話・兄弟愛を通し、平和の道を歩まなければいけません。平和は真実や正義でもって実現されねばなりません。平和は、愛によって強くなり、自由によってつくられるものです。自由が必要です。平和のための必要条件、そして決して奪い奪いすることができない条件は、平和を見出し、平和を維持するための権利であります。

現在人類や自然の生存は、今まで以上に私たちが取り組んでいる平和問題にかかっています。この重大な問題に対して具体的に回答をするために個々人あるいは地球上の平和勢力間のレベルでの協力が必要とされています。平和に関して政治的・文化的なイニシアチブや自発的に活動している団体が急速に成長してきた今日、私たちは強力な指導者や自己保存と成長を助長する力に保障された地球の平和を見出し、実現するため、共通点、共同プログラムを見つけ出すことをもはや延期することはできません。

アッシジの聖フランシスコは、仲間を呼ぶ言葉として、「兄弟」という言葉を初めて使いました。それ以来、聖フランシスコは、人々にとって「ブラザー・フランシスコ」となりました。この選択は臨時でうわべだけのものではなく、質・量ともに深い意味があります。この選択は、それぞれの生物の発生した起源にも見られるものです。兄弟は父母の愛のもとに生れたもので、兄弟としてあるいは兄弟愛の精神で生きるとは個人的な決断というよりも深く静穏な受諾の結果であります。親族、肉親の間だけの兄弟のきずなではな

く、この兄弟、人類のきずなを全世界に、そして愛し合える人たちに広げねばなりません。同胞の精神によって人工的な愚かな壁を取り崩すことができるでしょう。異文化、異伝統、異宗教の人々の間でも強いかけ橋を築くことができるでしょう。兄弟愛においてあらゆる生物は無視されたり、恥をかかされたり、あるいは評価されることもなく、人類の文化や愛を構築するための共通の方針に有用であるという認識の上に立ち歓迎され受け入れられるでしょう。この愛でお互いに尊敬し合い、考え方を尊重すべきです。

以上のことを聖フランシスコが私たちに教えてくれました。この聖フランシスコのメッセージが全世界に浸透することを希望します。人類は、宇宙市民となる必要があるでしょう。こうして人類の間の調和、協調を築くことができます。兄弟になればお互いが容易に理解できます。自然・同胞を失うのを恐れず、愛とか熟慮とかいった態度で尊敬することができるでしょう。人間は、神がつくった物を使う権利がありますが、これを乱用し、支配し、搾取するべきではありません。聖フランシスコは、宇宙の王ではなく、慎ましい人間であり、彼の妹や母のように創造の中に生まれました。兄弟愛の精神は、アッシジのフランシスコの生涯に共通したもので、世界がますます小さくなって脅威がますます大きくなった今日、まさに的をえたメッセージです。フランシスコから学びましょう。聖フランシスコは、全員の兄弟です。かけがえのない、すばらしい地球に住んでいることを自覚し、愛の名のもとに共に理解を深めましょう。

コーディネーター（土山秀夫）

次も、同じくイタリアのコモ市からお見えのアドリアーノ・サンピエトロさん、お願いいたします。

コモ(イタリア)市

アドリアーノ・サンピエトロ

ご参会の皆様、私はアドリアーノ・サンピエトロと申します。メダ市長にかわりましてお話を申し上げます。

私は第1回世界会議の後、あらゆる平和事業に貢献し、さらに会議参加者に配布された有用な文書に基づき、1985年に設立されたイタリア都市連帯の名において述べさせていただきます。

コモ市は、この会議の執行委員会の副議長といたしまして、ヨーロッパそれから世界各レベルにおきましていろいろな活動をしてきております。そこで、我々が過去数年間、信念として持っているものについてお話を申し上げたいと思います。



平和文化を広め、政府が役割を果し、イタリアをはじめヨーロッパ、世界の都市が軍縮と平和の目標をもって世界の状況を見極め、世界のイニシアチブをとって、日本の友人の方々とともに真の平和を求めていきたいと考えています。地方団体によって創設された非核政府組織が、世界のあらゆる暴力をなくし、人々の連帯を通して平和と発展を構築すべきだと思います。国連の力を借り、世界のイニシアチブをうまく調和させるため、私たちのイニシアチブを国家間の連帯にしていく必要があります。そうすることで国際関係における民主主義の価値が高まります。機関・宗教活動・人々の活動に助けられた都市が、さまざまな活動を通して、目標を達成できるのです。それで、私たちは、核軍縮のためには、交渉を促し、基本的合意をとりつけられるように連帯や相互信頼によって大いに貢献してきたと信じています。今回また連帯による平和を構築し、第2次世界大戦勃発50周年を記念し広島・長崎に再び参りまして、ヨーロッパの連帯・取り組みについてお話しする必要があります。これを現実のものとするためには、一般市民から国際機関に至るまで強力なイニシアチブをとる必要があります。うまく協調していくためにも、イタリア政府やイタリアの都市の全国会と連絡をとり、各イタリアの都市からでた平和のイニシアチブをまとめていく必要があります。そして当面は一国やヨーロッパで会議をもち、世界におけるヨーロッパの役割を創出していくべきです。

この、我々の目標といたしましては、全国会に加入している都市間での連帯をつくり、それに市民を参加させて文化交流などの市民活動を行う。そして未来に希望をもち、平和的文化教育を学校で行うことです。すべての人々、すべての子供に対してこういった教育を行っていきたくて考えております。違ったアプローチでもって歴史・地理を書き換えられる平和のオペレーターを育成するため平和学校を創設することが不可欠だと思います。歴史の真実を反映していない前の解釈を訂正するためにもピースオペレーターのみで教科書のみで書き換える必要があります。歴史の真実を反映していない楽観的な生活をしている人を知性でもって教育するためにも教科書を書き換える必要があります。これを世界的レベルで行えるならば、どんなにすばらしいことでしょうか。これは希望であり、近い将来、世界の都市のために実現すべきユートピアであります。

もう一つの理由は、イタリアでは特にそうですが、人だのみにするものや、財政上の援助を必要とするものを連帯させるように努めなければならないと思います。言葉だけでなく行動によって連帯を強めていかな

ければならないと考えます。過去における政治的怠慢によって起こってきた問題を解決し、連帯と責任感でもって真の自由を確立しなければなりません。イタリアの都市には、小学校から高等学校まで平和文化を教えているところがあります。私たちの経験を結集すれば学校の教科書を作ることも可能です。「もう二度と」これは私たちの仕事で使われる合い言葉です。

我々は、人類に脅威を与えてきたような事実が過去にはありましたけれども、それを再度起こしてはなりません。ですから、我々は行動を起こさなければなりません。

どうもありがとうございました。

コーディネーター（土山秀夫）

ありがとうございました。

それでは、引き続きましてイタリアのラクイラ市からお見えのロンバルディ市長さん、お願いいたします。

ラクイラ(イタリア)市長

エンツォ・ロンバルディ

私は、イタリアの長靴の真ん中にありますローマから100キロ離れたところのラクイラ市の市長です。アブルッツィ地方第1の都市です。このような会議は、我々の地域社会、そして全世界が平和に到達するためのイニシアチブとして非常に有意義な会議であります。この意味で皆様方、特に長崎市・広島市の皆様方は熱情をもって勇敢に平和のための努力をしていらっしゃることに敬意を表したいと思います。

我々都市においては、平和の意識を強め、市民の平和達成に向かっての力を結集しなければいけないと思います。国際政策においては、私たちの信念を強く明示することで核兵器の制限・廃棄・国際紛争を解決する手段としての戦争放棄を人々の協力によって実現することができます。地域社会は、各市民の感情を直接的にあらわすことができる場所であり、その市民の声を反映させ、市民が世界平和に向かって意識を高め、努力させるために教育は重要なことであります。

この点においてラクイラ市は多くのイニシアチブをとり、長年努力してきました。とりわけ、重要なものは平和のための国際都市会議をラクイラにおいて毎年8月28日に開催しております。ペルドナンザという事業の一環として695年間毎年この平和の集まりを主催しています。この会議には、イタリアの都市、また外国の都市の代表が集まり、交流をし、平和のための運動をお互いに紹介し合って交流をしています。全世界の平和実現の過程においては、各都市がその市民の日

常生活を通して平和のための努力をすることが重要だと確信しております。

ラクイラ市には、重要な工場、また官民の研究所、その他の工業施設があります。例えば、ミサイル・航空機の電子システム、また、衛星・コンパクトディスクの部品、自動車用電子システム、エネルギーなどをつくる工場であります。このほかに、本市は直接軍事と関係があります。この数年間に、核物理学者たちがイタリアのグランツォというところのアルピニス山脈の山頂に研究所をつくりましたが、これが私の町の近くにあります。この世界最大の地下研究所は、10キロメートルの長さのトンネルの中にあり、宇宙などからくる放射線から防護するために天井の上には2,000メートルの厚さの岩があります。この汚染のない環境のもとで研究が行われております。このグランツォ研究所においては、イタリアの研究者だけではなく全世界の研究者、アメリカ、ソ連、中国、日本の研究者などが交流して一緒に全世界の利益のための研究をしています。35のプロジェクトを今世紀中に実現しようという目標も設定いたしました。しかし、この研究所が戦争に関する研究をすることに我々は反対をしています。それは平和でなく戦争を近づけることになってしまうからです。ラクイラ市といたしましては、この研究所が平和に限っての研究をするように要請をしているところでもあります。今後、軍事施設が存在しているところ、あるいは研究所などは、戦争の研究ではなく平和に限った研究を行うように、各都市は努力すべきだと考えています。

また、このような研究所をコントロールすることが必要だと思います。坂本先生が基調講演で非常に重要なことをおっしゃいました。情報についてです。情報は行動の基礎となるものであります。都市の行動の基礎として情報が必要です。私たち都市は、そして市民は直接的な情報を必要としていると思います。報道、マスコミの情報だけではなく、より直接的な情報を得なければいけないと思うわけです。このような情報、交流が各都市を通し、全世界で行われ、全世界的な都市間の情報ネットワークをつくる必要があるという考え方を支持したいと思います。市民が欲しない戦争に巻き込まれることがないように、私もそういう提案を申し上げたいと思います。ぜひ都市相互の情報交換を行いましょ。データを交流しデータを集めましょ。この市長会議に、できる限り多くの都市が参加し、情報を出し合い、世界の平和を広げたいという提案をいたします。

この市長会議が今後、恒久的に、永続的に行われますることを希望しております。平和の重要な担い手とし

て、世界の人々を助けることができることを望みます。この市長会議を通し、各都市の声を強く全世界に訴えたいと思います。地域社会は平和への真の貢献ができ、政府を助けることができます。人々の平和を求める声の代弁者なのです。

コーディネーター（土山秀夫）

次は、リベリアのモンロビア市からお見えのジョンソン市長さん、お願いいたします。

モンロビア(リベリア)市長

L. クウィア・ジョンソン

広島及び長崎の市長、そしてお集まりの市長の皆様方、私は、リベリア共和国大統領でありますサムエル・K・ローエから、また、国民からも、そして特に、モンロビアの市民を代表いたしまして、第2回世界平和連帯都市市長会議開催にあたり、ごあいさつ申し上げます。

私は、このような国際的に著名な方々の前で、しかもおごそかな場でお話を申し上げることを大変光栄に思っております。ちょうど44年前の8月6日と8月9日、アメリカ合衆国が、当時繁栄しておりました工業都市であります広島・長崎をそれぞれの原爆の投下対象地として第二次世界大戦中に選択したのであります。そしておよそ広島は4分の3が破壊され、そして莫大な数の人々が死亡しました。また、長崎でも同様であります。これは人類の歴史の中で、かつて経験されなかった全滅破壊でありました。今日広島・長崎は再建されましたが、現在、また一つの対象の都市と選択されてしまったわけであります。今回は、幸運なことに核の攻撃地ではございませんでした。核兵器反対の世界的な声をあげる場所に選ばれたのです。この数日間、世界中の市長が集まり、核兵器廃絶に向けての都市の役割を話し合っております。この2つの都市以外に最適な市はないと考えております。

モンロビアの市民を代表いたしまして、心よりこの大虐殺の被害者となられた霊のご冥福をお祈り申し上げます。

また、家族を失った方々、生き残られた方々に対しても同情申し上げます、そしてこのような恐ろしい災難が決してこの広島・長崎の人々に2度と起こってはいけなと考えております。

こういった歴史的事実を一つの道具として、世界の人々に対して自由、平和を求める手段を、そして軍拡から軍縮を通していかに共存することができるでしょうか。核兵器の廃絶の方法を訴え、そして現在では何十億ドルもの資金と多くの人材が核兵器の開発に費や

されておりますが、それを今度は疾病、貧困、飢餓、環境汚染、それから麻薬乱用をなくす、撲滅するために使うべきであると考えられるわけでありまして。

リベリア自身が一つの平和と自由の産物であるわけでありまして、そして、国連及びアフリカ統一組織の一員といたしまして、リベリアでは、軍備管理、軍縮の決議のみならず、これらの組織の加盟国間の平和達成を目的とする決議を終始一貫して支持してきました。

地域レベルでは、近隣のシェラレオネ、リベリア、ギニアの経済機構であります。モロ川連合や西アフリカ諸国経済共同体を設立し、平和活動を行っております。国家レベルで、あるいは国際レベルであっても、法律に従わずには真の平和を求めることはできません。そこで、それを認識したリベリアは、1968年に法律を通じた世界平和機構というものの設立に大きな役割を果たしたわけでありまして。しかしながら、このような国際的な、また国家レベルの活動にもかかわらず、まだ真の平和というのは幻想であり、現実にはほど遠いわけでありまして。そして核兵器が世界では多く生産されております。また、これは量的にみましても、技術レベルでも、核兵器に対する開発が進んでいるわけでありまして、人類の絶滅というのは、現実にはあり得るものであるわけでありまして。

そこで、真の世界恒久平和を求め、そして核兵器の廃絶を求めるわけでありましてけれども、その中で米ソ間でのINFの条約を高く評価すると同時に、これは核兵器削減の第一歩であると思っておりますが、しかし、この条約というのは、ただ単に陸上配備の核兵器の削減に過ぎないわけでありまして。条約には、両国が化学兵器、生物兵器、通常兵器を開発し、海上及び空中の核兵器を開発することには触れてないのです。化学物質を国境外へ配備することにより建造物あるいは設備を破壊することなく、人命を奪うことができるわけでありまして。そこで、議員であっても、あるいは市長であっても、また、各市の市民はこの核兵器の生産をしている国々に対して圧力を加えなければなりません。その政府が核兵器の実験及び生産を停止することを求めるように圧力をかけなければなりません。

真の世界恒久平和というのは、核兵器を全廃にしたからといって達成できるものではありません。何百万人の世界の人々が飢餓と無知と疾病と、それから基本的な人権が侵されているという状態では真の平和は望めません。地域戦争、それから宗教による対立、またイデオロギーによる戦争、また環境汚染、麻薬の乱用、毒物の廃棄などで多くの人々が苦しむようでは平和は実現できません。都市または自治体といたしましては、真の恒久的平和を国家政府にまかせるだけでは実現で

きないわけでありまして。平和は世界的視野で考えなければならぬのです。

そこで、市長の方々に對して以下の提案を申し上げたいと思っております。そして、この提案を決議の中に盛り込んでいただきますよう理事会をお願いいたします。

第1点目は、市民及び市長は、それぞれの国の政府に対して核兵器の全廃に対して圧力をかけなければならないということでありまして。

第2点目は、世界的な飢餓、貧困、疾病、環境汚染、薬物の乱用、またその取り扱い、暴力、人権侵害などについての処理を優先的に行われなければならないということでありまして。

第3点目は、1984年に世界市長会議という組織がつくられました。世界の主要都市の約1,000名の市長が加盟しており、その本部はアメリカのワシントンDCにあります。その基本的な目標は、信頼、貿易、観光、そして技術移転、そして姉妹都市提携を促進することにより、平和・協力・連帯・相互理解を推進することでありまして。

この組織は非常設のものでありますので、その加盟都市が世界連帯都市市長会議の加盟都市に自動的になれば重複せず、世界平和達成という努力がまとまって行われるものと考えます。

第4点目は、それぞれの都市を非核地帯とし、それを市の条例でもって各都市内での核兵器の生産施設・毒物廃棄、また核兵器の実験を廃止すること。

第5点目は、先進国・発展途上国間で姉妹都市関係を結ぶということ。そして、これによりまして平和、文化交流、それから相互理解を貿易、観光、信頼、技術交流を通して行っていくということ。

第6点目は、それぞれの地域内で学校教育、またメディアを通し、現在の核をめぐる状況に対する市民の認識を高め、また地域社会の中で核が世界平和と連帯を脅かすものだという認識を高めていくということ。

第7点目は、上記の目的達成のため、都市間で情報交換システムをつくり上げること。

最後に、結論といたしまして、市長の方々に申し上げたいことがございます。我々市長というのは、今行動を起こさなければなりません。そして市の間での連帯協力を持ち、平和のために政府を援助しなければなりません。この第2回世界平和連帯都市市長会議にご参加の皆様は、きっと人類を救う、そして世界を救うことに行動を起こされることと思っております。そうすることによりまして、我々はただ単に我々の子供だけではなくて、また、その子供、子々孫々に対して、また生まれてこない世代に対しても貢献することができるのだと思っております。

どうも、ありがとうございました。

コーディネーター（土山秀夫）

今までで7つの都市の代表の方々の大変貴重なご意見あるいはご提言をお受けいたしました。

ちょうど前半の時間が経過いたしましたので、ここでコーヒブレイクを取りたいと思います。後半は3時45分から始めたいと考えております。

=休憩 午後3時32分=

=再開 午後3時49分=

コーディネーター（土山秀夫）

それでは、後半のセッションを始めさせていただきます。

最初に、オランダのミデルブルフ市からお見えのルッテン市長さん、お願いいたします。

ミデルブルフ(オランダ)市長  
クリス・G. J. ルッテン

土山先生、本島市長、荒木市長、お集まりの皆様方、第2回世界平和連帯都市市長会議に参加できましたことを大変名誉に存じます。

第1回目の市長会議が開かれてから4年がたちました。この4年間のうちに国際環境には有意義な前進がありました。軍縮、とりわけ米ソ間の核兵器廃絶に向けての注目すべき前進がありました。

核軍縮における、これらの特筆すべき進展があったにもかかわらず、我々の前途には困難な長い道のりが残っています。私どもは、世界恒久平和を実現するために各国政府の努力だけに頼ることはできません。これまで、我々の都市は、崩壊による内部からの生存への脅威と、それから大量破壊と戦争という外部からの脅威に直面してまいりました。

特に、核戦争という外部からの脅威に市民は長い間苦しんで恐怖におののいてまいりました。今日そして明日の都市の立場は、全人類に対して共同の責任を負うというものでなければいけません。そういう方向にこそ都市の将来、そして市民の将来が存在するのです。都市、政府の代表とし、私たちは人間中心の都市環境を擁護し、強化する責任を果たさなければなりません。

第二次世界大戦後44年が過ぎました。本年1989年でも戦火の傷跡はまだ残っています。恐ろしい戦争が残した恐るべき破壊は、長崎・広島的大量殺戮の傷跡として残っておりますし、また私の市、ミデルブルフの1940年の爆撃についても同じであります。戦争によっ

て亡くなった人々の犠牲をむだにすることなく、またそれによって障害を負うことになった人々のためにも苦しい経験を経て前進しなければいけません。

世界は、1945年8月に日本で起こった惨禍を決してくり返してはならないと思ひ、平和を実現し、核兵器廃絶に向けての連帯を強化するよう取り組んでいます。国際機関に対してと同様、市民に対しても私たちはアピールをしなければいけません。国、人種、文化、政治、社会、経済状況の壁を超越し、都市間連帯を強固なものにし、市民間の相互理解を促進するべきだと思っています。

第1回市長会議、また広島・長崎アピール実現のために私のミデルブルフ市は、全世界の平和実現のため、ささやかながら努力し、イニシアチブをとってまいりました。市民の意識を高めるために積極的に情報提供、展示会、平和教育を市民に行ってまいりました。市民は、核軍縮、平和への意識を高めることができました。それがきっかけとなって都市平和政策全国協議会が設立されました。この協議会は、各都市での平和イニシアチブの調整役をしています。私の都市もこの組織のメンバーであります。

また、私の市の市議会は、現在東ヨーロッパの適当な都市と4番目の姉妹都市提携の努力を始めているところです。核兵器廃絶はされなければいけません。しかし、それだけでは十分ではありません。世界平和のためには富める国と貧しい国のギャップをなくさなければいけません。世界平和の脅威を取り除かなければいけません。長崎、フォルクストン、そしてウィルボード間の姉妹都市提携を通して西アフリカの小さな島国である発展途上国カボベルデの工芸技能教育の費用を共同で出しています。

東と西、また北と南の相互理解、信頼を醸成すれば、現在の問題を解決することができます。また常に、軍縮、世界平和に向けての役割と責任を認識しなければいけません。この会議により、核兵器をはじめとするあらゆる兵器の廃絶、世界平和のために強い一歩を踏み出すことができることを希望しております。

ありがとうございました。

コーディネーター（土山秀夫）

それでは、引き続きましてアメリカのセントポールからお見えのロング議員さん、お願いいたします。

セントポール(アメリカ)市議会議員  
ロバート・C. ロング

本島市長、そして荒木市長、そしてご参会の皆様、私はロングと申しまして、ミネソタ州セントポールの

市議会議員でございます。このような素晴らしい国、そして素晴らしい平和的な町にやっけてまいりまして、このとても重要な会議に出席できることを光栄に存じております。

私にとりましては、特に、長崎は姉妹都市として私どもと35年間の歴史がございます。日米間で初めての姉妹都市として、1955年に提携されたものでありまして、そしてこの長崎会議のときに私の誕生日を迎えるということで、今回は特別な機会だと思っております。特に、本島市長には、感謝を申し上げたいと思います。私どもの都市といたしまして、平和への努力、それから市長のご努力、また議会のご努力によりまして、皆様も同意していただけたと思いますけれども、この会議は、本当に迅速にそして素晴らしく組織された会議だと思っております。皆様方と一緒に感謝申し上げたいと思います。

本島市長は、セントポール市にもおいでになったことがございまして、私どもの市長も長崎に参ったことがございます。そして我々の今後の平和と環境をつくり上げる決意の印として植樹をしたわけでございます。昨年夏、本島市長が来られたときには、長崎の純心学園の学生77名をセントキャサリン大学に連れてきてくださりまして、次の世代の平和をも誓うということになったわけでございます。

私の話を手短かにまとめたいと思っておりますけれども、コメントに入る前に、少し申し上げたいことがございます。

日本のことわざで「日本にいるときには日本人に従え」ということがございます。ですからスケジュール通りに迅速に私のスピーチを終わりたいと考えております。

この会議で素晴らしい発言とアイデアが幾つも出ました。これらの意見を我々の心にとめていかなければなりません。今こそ行動を起こすべき時だと思っております。この会議の潜在力を生かし、この世界各国から集められた市長の方々のご意見を世界平和のために行動に移さなければなりません。と言いますのは、国家政府がやることを待ってはられないからです。市民、労働組合、それから草の根運動がこの世界平和の問題を取り上げるべきであると思うのですが、私たちに時間はありません。

次に申し上げますことは、ジョン・F・ケネディ元大統領が話したことでありますけれども、彼は「核兵器問題は、超大国の問題だけではない。この核兵器による破壊は風、水、恐れとともに広がって、富める者も貧しい者も若い者をも巻き込んでいく。人類は戦争を終了させなければならぬ」と言っております。国家

政府のみでは世界平和を実現することができません。ですから、都市がここに集まり、4年前もそうでありましたけれども、今後も真の世界平和を確立するまでこの会議を続けなければなりません。何百万人を代表する市の代表がここに集められたということは、すべての人が世界平和を求めているわけでありまして、これを行動に移さなければならぬわけでありまして。

都市のリーダーといたしまして、地域レベルでの行動を起こさなければなりません。そして我々の地域が破壊されることを防止しなければなりません。これは福祉だけではなく、核戦争から守り、そしてそれと同時に必要なサービスを我々の市民に提供しなければいけないわけでありまして。私たちの絶滅をもたらす核兵器の製造に何十億ドル、何百億ドルも費やす前に、飢えている人に食べ物を、家のない人に家を、失業者には職を提供し、そして教育を受けていない者には教育を施していかなければなりません。ミネソタ州だけでも、過去4年の間、5万2,000人の失業者が出ております。これは予算が平和目的よりはむしろ軍事目的で使われているためであります。アメリカ市長会議報告によりますと、10%の軍事費削減で飛行機の高価な座席トイレを設けることができます。また、子供たちを教えるための新しい教師を40万人雇ったり、子供の世話をするヘルスワーカーを3万人雇うことができます。さらに、低所得層の人や家のない人に300万戸以上もの家を提供することができます。ですから、我々の国家レベルの優先順位を今度は核兵器を製造している軍産複合体の利益よりも、地域レベルの活動に向けていかなければならぬわけでありまして。

我々は、長崎そして広島にまいりました。その結果、特別な責任を果たさなければならなくなったわけでありまして。なぜなら私たちは核戦争の惨状を直接この目で見たからであります。ですから、核兵器による核戦争を防止し、長崎がこの核戦争の被害者となる最後の都市にしなければならぬわけでありまして。我々はほかの都市も既に行っておりますけれども、この都市を訪れて、そして市のレベルから国家レベルを動かして核兵器廃絶、世界平和を求めると同時に動かなければならぬわけでありまして。

そして、我々がとらなければならぬ4つの具体的なステップをお話し申し上げたいと思っております。パークレーからリベリア、アッシジに至る都市の多くの具体策を聞きました。そして注目しなければならぬ4項目があります。それぞれの都市に戻り、パークレーにはありますが、市民の平和委員会というものをつくり出し、そして地域レベルでの平和活動を行っていかなければなりません。そして政治的な圧力をつくり出し、

国家政府を動かすようなことをしなければなりません。

また、非核地帯をつくらなければなりません。私、ここに長崎の市民平和憲章を持っております。皆様方の配布資料の中にも入っておりますけれども、これは1989年3月に公布されております。セントポールと長崎は姉妹都市でありますので、真の姉妹都市になるためには非核地帯にならなければならないわけであり、ですから、国に戻りましたら、セントポールでその法令をつくり出したいと考えております。皆様方も姉妹都市の関係があると思いますけれども、このような関係をぜひともつくらなければならないわけであり、その姉妹都市間の中で、そして国家間の中で、特に私は、アメリカではソ連との姉妹都市関係を結んでいきたいと考えてノビエスビルグと姉妹都市関係を結んでおり、私も先日そこを訪れたところでございます。ただ単に、姉妹都市関係を結ぶだけではなく、お互いに交流を深めるといふこと、協力関係を持つといふこと、2つの都市の間で世界的な問題に関して一つの条例をつくり出すといふことが必要でしょう。

私どもは本島市長と話し合いをしております。長崎とセントポールの姉妹都市プログラムとして地球の環境、オゾン層をフロンガスから守ることを法律で規制していくように働きかけていこうと話しているわけです。

最後に、この会議の終了時に、我々は決議をしなければ残念なことになるといいますので、皆様方と同時に荒木市長、本島市長のおっしゃった世界平和の必要性、また環境面、飢餓、それから住居問題についてのお話がありましたけれども、ここで提案をしたいと思っております。

皆様方のテーブルに一つの決議案が配布されていると思っております。これは各国の各都市のアイデアを含めております。そして「存続に関する世界サミット開催を求める決議」とタイトルを付けております。これは数年前、広島と長崎で話し合ったものに基づいております。ほかの言語に翻訳する時間はありませんので、英語で読み上げてみます。

世界の人々は、核戦争、環境汚染及び全世界の貧困から我々の地球を守るため、団結して立ち上がらなければならない。

世界の都市は、国家政府だけの力ではこれまで世界平和を達成できないでいるから、我々の地球を守るため、団結して対処しなければならない。

そういうわけで、第2回世界平和連帯都市市長会議に出席した代表団は、荒木市長、本島市長及び会議の主催者すべてに対して、この歴史的な会議を開催し、世界平和への着実な取り組みを示してくれたことに対

して心から感謝する。

さらに、会議代表団は、この会議を永久的なものとし、核戦争の脅威がなくなり、真の世界平和が達成されるまで必要に応じて一堂に会し、情報交換することを決議する。

さらに、代表団は、核保有国の首脳及び都市や世界のリーダーを1990年8月に広島・長崎へ正式に招待し、将来のすべての核実験を停止する包括的核実験禁止条約に調印することを、会議実行委員会に対して求めることを決議する。

さらに、核兵器の問題と同じく、飢餓問題を提起した第3世界の都市のため、1990年に開催するこの会議の間に、地球破壊を防止し、世界恒久平和を確立するための一層の措置を講じることを目的として、広島と長崎で1991年夏に、存続に関する世界サミット（世界サミットSOS）を開催する準備機関として、企画委員会を設置することを決議する。

以上のことを申し上げたいと思っております。

以上で私の話を終わり、余り時間を割かないようにしたいと思っております。そして明日起草される長崎アピールにできればこの決議を取り入れていただきたいと思っております。特に、本島市長に対してお礼を申し上げたいと思っております。

ご清聴ありがとうございました。

コーディネーター（土山秀夫）

ありがとうございました。

ただいまは長崎と姉妹都市のセントポール市から大変いろいろな示唆に富むご決議の提案をいただきまして、非常にありがとうございました。

今、お読みいただきました内容、趣旨といったものは、私どもが現在作成中の長崎アピールの中にほとんどすべて包括されておりますが、なお、きょう起草委員会を開きましたときに、本日のこの趣旨も十二分にさらにお伝え申し上げまして、明日の発表にさせていただきますと思います。ありがとうございました。

それでは、引き続きましてソビエト連邦のビリニュス市からお見えのリンケビチェス書記さんからお願いいたします。

ビリニュス(ソビエト)市執行委員会書記

ヴィクトラス・リンケビチェス

議長、ありがとうございます。

お集まりの皆様方、私はビリニュス市の代表でございます。ビリニュスは、ソ連の西の方にあります小さな町で、人口は60万人です。私のこのビリニュスの所属しておりますリトアニア共和国は、ソ連の最も西に

位置している小さな共和国です。日本からは非常に遠く、大きな距離が日本と私の共和国を分けています。しかし、私は大きな喜びをもってこの会議のために飛んでまいりました。広島・長崎市長に心から感謝の気持ちを感じています。また、組織委員会皆様の努力にも感謝をしております。

ソ連の人民は、広島・長崎の悲劇を悼んでおります。と言いますのも私たちも悲劇を経験したからであります。私は、違う町に生まれましたけれども、ビリニウス市におきまして、私は戦争の悲惨さを体験いたしました。リトアニア市は、東と西の十字路となっております。何千年にもわたり何回も何回も戦争が行われました。爆破され、爆撃され、人々は撃たれました。戦争の最初の局面が私の町で戦われました。私は、当時は若者でした。私の親が家の外にいました。そこで我々子供3人だけが家に残っていたのです。私の目前で家が壊されました。家が焼け落ちました。死体がそこらじゅうに転がっていました。私は、妹2人を連れて必死に逃げました。今でも覚えています。大変な悲劇の経験をしました。一生忘れることができないと思います。私の市民は、この恐怖を決して忘れることがないでしょう。ほかの国々、市民苦しみに心から共感を示し、同情します。

ガガーリン宇宙飛行士が、人類として初めて地球の周りを宇宙飛行いたしました。ガガーリンが地球に帰ってきて何と言ったかご存じでしょうか。「小さな惑星である。しかし、何と美しい惑星です。」とガガーリンは言いました。私は、リトアニアから東京に来る飛行機の中で、このガガーリンの言葉を思い続けていました。たったの9時間で東京に着きました。近いものです。

100年前、何か月もかからなければ東京に来ることはできなかったことでしょうか。ガガーリンの言ったことは正しかったのです。小さな惑星である。大きな距離があったとしても、技術の結果、今は近い距離になったのです。しかし、技術によって多くの問題が作り出されました。とりわけ、世界が共通の家であることを認識しなければいけません。自分たちのことを、人類のことを考えるべきです。国民のことだけではなく、全世界の運命をともに考えるべきです。

まず、生態に関する問題があります。私の町には大きな原子力発電所があります。ご存じでしょうか。2つの原子炉がつけられました。他に原子力発電所を建設するのはわかりません。しかし新たな原子力発電所の建設は、大きな責任がかかることとなります。私のところにある発電所はヨーロッパで最大規模ですので、市民に対して、市当局に対して、また、東ヨーロ

ップの人の運命にも責任を持たなければいけないこととなります。

それから、平和擁護の問題も重要な問題です。私は、広島記念式典に参列いたしました。そこで、犠牲者に祈りをささげました。「安らかにお眠りください。過ちは決して繰り返しませんから」、この碑文を心に深く刻みました。130都市以上の代表が、そして30カ国以上の代表がここに結集したということは、あらゆる国の、あらゆる都市の連帯をあらわしていると思います。悲劇を繰り返してはなりません。全力を尽くし、悲劇を繰り返さないようにやるべきです。広島・長崎は美しい都市であり、美しいアピールを採択することができましょう。このアイデア、イニシアチブを支持し、世界に広げていくべきだと思います。

私は、この後ビリニウス市に帰りましてから、最初にやろうと思っていることがあります。それは、市民に報告をすることです。今日心に誓いました。あらゆるビリニウス市の新聞を通し、テレビ、ラジオを通し、報道を通し、私はできる限り正確にこの市長会議の内容を報告します。私の目で見たこと、耳で聞いたこと、体験したことをビリニウス市民に伝えるつもりです。皆様の平和の闘いをも伝えたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

組織委員の皆様、心より感謝申し上げます。

市長、ありがとうございました。

コーディネーター（土山秀夫）

ありがとうございました。

次は、ベトナムのホーチミン市からお見えのヌイブ市長さんのお話なのですが、ベトナム語でお話になりますので、一旦それを英語に直しまして、さらに他の国語に訳させていただきます。それでは、ヌイブ市長さん、よろしく願いいたします。

ホーチミン(ベトナム)市長

ダエン・ビイン・ゲップ

議長、そして長崎市長、広島市長、ご来賓の皆様、そしてご参会の皆様、自己紹介をさせていただきます。

私は、ホーチミン市の市長でございます。この会議に出席いたしましたベトナムのユニークな都市からまいりました。まず、最初に私は心より第2回世界平和連帯都市市長会議に対しお祝いを申し上げるとともに、広島市・長崎市の両市長に対し、核兵器廃絶と世界平和を目指し、人類が熱望する会議を開催していただいたことに心より感謝申し上げます。

私は、ホーチミン市の400万人の市民を代表いたしまして、広島・長崎市民の両市の市民の方々の、原爆

投下の結果、廢墟と化した市から成功裏に美しい近代的な都市、活発な都市をつくり上げられたことに対して尊敬の念と、また、同情の念を申し上げたいと思います。

そこで、私はこの会議の目的、また意義に対して同意するものでありますし、核戦争に反対し、世界平和を守る者に対して同意をするわけでございます。それをよりよく確立するために、最も効果的にこの第2回世界平和連帯都市市長会議を成功裏に収めるために、以下のような提案をさせていただきたいと存じます。

第1点目は、この会議終了後、私どもはより多くの世界の市長に対し、この世界平和を守る運動に対して参加するように求めなければなりません。より力を強化し、核戦争に反対し、平和を求めていかなければなりません。

第2点目は、この世界市長会議を4年に1度開くことについてです。これは広島・長崎で開かれるわけでありまして、これは一つの動きのイニシアチブを取るものでありますけれども、さらにもっと活気づけるために、そして広くこの運動をコンスタントに行っていくために、地域における市長の会議を2年に1度開くことを提案いたします。それぞれの地域、例えば太平洋・アジア地域、ヨーロッパ、アメリカ、中東などの地域の主要都市で2年に1度、非核に対するの会議を開くことを提案いたします。

第3点目は、この世界平和を守る努力というのは、ただ単に核による荒廃に反対するのみならず、それと同時に、通常兵器が使われる地域戦争に対しても反対をするものであります。この地域戦争でも、やはり過去のベトナム戦争のような被害者を多く作り出し、また環境破壊を起こすものであります。

第4点目は、この核武装反対の動きというのは、世界平和を求めためでありますけれども、これは社会正義とともに進まなければなりません。と言いますが、それは全人類に対するの平等であり、また幸福をもたらさなければならないからであります。そして、一歩ずつこの都市間の差をなくし、また地域間での差をなくしていかなければならないからであります。

第5点目は、世界平和のための連帯と同時に、この会議に参加されている市長の方々は、より団結を固くし、そして協力をを行い、行動を通して協力をさらに強化していかなければなりません。例えば姉妹都市協定を結ぶ、そして経済、文化、科学技術の面での協力、援助を行っていかねばなりません。

最後になりましたけれども、我々ホーチミン市の市民といたしましては、世界平和に貢献し、そして太平洋・アジア地域での平和に貢献を特に行いたいと願っ

ております。そして、地域社会の安定、平和、繁栄、そして相互信頼、協力、そして友情を深めていきたいと考えております。

ご清聴ありがとうございました。

コーディネーター（土山秀夫）

ありがとうございました。

それでは、引き続きまして日本の保谷市からお見えの都丸市長さん、お願いいたします。

保谷市長 都丸哲也

私は、1982年に保谷市が憲法擁護、非核都市の宣言を行ったということについてあらかじめ述べておきます。

1つは、日本がベトナムを初めアジアの皆さん、世界の皆さんに加害者として大変ご迷惑をかけたということへの反省であります。そしてもう1つは、何と云っても、2度と広島・長崎の経験をしてはいけないという、この2つの理由で平和宣言を行ったわけであり

ます。さて、科学技術の発達は核兵器を生み、現在、世界には5万発に上る核兵器があり、その1%が核戦争に使用されるだけで人類の生存が危うくなると言われています。国際学術連合会議（ICSU）の解説によれば、万一、米ソ間に戦争が行われ、約6,000メガトンの核兵器が使用されたと仮定した場合、多数の死傷者が出るだけでなく、5,000万トンから1億トンの煙や煤によって核の冬が出現し、寒冷と干ばつが生じ、1年後には全世界で25億人の人々が飢え死にするであろうと予測されています。

これまで、私たちの考え方では、平和の基礎として、まず国家の安全が求められていました。しかし、核の時代に入った今日、国際学術連合（ICSU）の予測に見られるように、ひとたび核戦争が起これば交戦国間だけでの被害ではなく、国境を越えて地球上すべての地域に被害を及ぼすこととなり、もはや国家はその意思とはかかわりなく、国民の安全を保障することは不可能になったことを示しています。核兵器で固められた国家の存在は、逆に人類の絶滅をもたらす危険性をはらんでいるということになり、核の時代においては、国家は市民の生存権を保障することはできないことを物語っています。

このような考え方に基づいて、私は1982年以来、市民とともに反核運動に取り組んでまいりました。今日30名の市民が長崎に到着いたします。

地球上のどこかひとたび核戦争が勃発すれば、国境を越えて広範囲にわたり、殺戮と破壊が行われ、市民



は生存権を強制的に脅かされることから逃げることはできません。そうだとすれば、私たちは当然のこととして自衛措置を講ぜざるを得なくなります。その方法は、市民の一人ひとりが核兵器の廃絶という意識を確立し、それらを統合して国境を越えた連帯を図り、核兵器廃絶を実現するために必要な力を形成するほかはないと考えるのです。

自治体における非核の宣言は、市民一人ひとりの核兵器廃絶の願いを統合する最適の単位であり、その地球的な連帯を図ることが本日の会議の目的であると思うのであります。

しかしながら、日本における非核自治体の数はまだ約1,400にとどまり、総数の50%にも達していません。私たちは、去る8月4日広島において総会を行い、すべての自治体が非核の宣言を行うように、さらに運動を強化することを誓い合いました。

私たちはまた、非核憲法を有するフィリッピン等と連帯をし、アジア太平洋非核地帯確立のために今後とも関係各国の非核宣言都市と協力関係を強めるとともに、非核三原則の法制化を日本政府に要求するなど、全力を挙げて取り組むことをお約束し、連帯のごあいさつを終わります。

以上です。どうもありがとうございました。

#### コーディネーター（土山秀夫）

ありがとうございました。

それでは、最後になりますが、高松市の脇信男市長さん、お願いいたします。

#### 高松市長 脇 信男

私は、ヒロシマ・ナガサキは核戦争に至らしめないザ・デイ・ビフォアの聖地であり、反核運動の発信基地であると、こういう認識から報告いたします。

世界の歴史を通じて、都市はいつの時代でも文明の発祥の地です。都市は、本来的に平和を欲求しています。いかに敏腕な行政官が都市を立派なデザインで飾ろうと、世界に核兵器の脅威が存在する限り、一瞬にして灰塵に帰してしまうでしょう。ノー・モア・ヒロシマ、ノー・モア・ナガサキの2語は、都市のルーリング・パッションでなければなりません。

高松市は、都市づくりの基調を「平和と健康と教育の新しいふるさと」に置いております。具体的施策として、これまで次の事業を行ってまいりました。

1. 1970年以来、毎年5月「都市と平和」をテーマにパネルディスカッション「憲法記念市民のつどい」を開催し、広範な市民と討論をしてきております。
2. 10年前、市制90周年記念事業の一つに市民総参

加で「平和の群像」を中央公園に建立、都市永遠の平和のシンボルとしました。

3. 同じく市制90周年記念事業として3カ年の年月を費やして「高松空襲戦災誌」の決定版を官民一体で発刊いたしました。

4. 1984年「非核平和都市宣言」市議会で満場一致で可決し、市庁舎玄関に常時懸垂幕を掲揚しております。

5. 毎年8月初め高松空襲戦災、原爆被爆写真展を香川県生活協同組合、原水禁、原水協、被団協の運動団体共催、高松市後援で市役所庁内ホールで開催してまいりました。

6. 図書館に平和関係フィルム、空襲戦災資料の収集に努めております。核兵器廃絶、軍縮の世界的潮流の高まる中で、高松市平和記念館建設の気運が高まってまいっておりますので、官民一体でつくり上げようとただいま構想中であります。

最後に、先ほどリベリアのモンロビア市長さんが提案されましたが、非核平和都市宣言をした全国の都市自治体は、その宣言文を各国語に翻訳をし、国際連合の各機関や核保有国の政府、及びその都市自治体に届ける運動を提案して、私の報告を終わります。

#### コーディネーター（土山秀夫）

ありがとうございました。

以上で予定いたしました13名の方々からのご意見発表をいただきましたが、あと余り時間も残されておりませんが、せっかくの機会でございますので、フロアの方からこの際ぜひご意見を述べたいとおっしゃる方がいらっしゃいましたらお1人かお2人、どうぞ。

#### アーバイン(アメリカ)市長

#### ラリー・A. アグラン

議長、ありがとうございます。また、素晴らしい演者の皆様、ありがとうございます。

この機会をお借りいたしまして、非常に効果的にセントポール市のロング市議会議員さんがおっしゃったことを強調したいと思います。私どもの前に決議文の案を出してくださいました。ここで具体的な行動を始め、それを考えるためのたたき台になると思います。生産的なことを行い、具体的なことをやる、これをこの会議の成果とすることができると思うのです。

読ませていただきましたが、2つのキーポイントが入っていると思います。最後から2つ目のところで、この会議の理事会にお願いをして正式に核保有国の首脳を招聘する、また他の世界の都市指導者を招聘し、来年の夏、広島・長崎に集まり、包括的核実験禁止条

約に署名をしてもらい、それによって核実験を停止させるという点が入っています。非常に重要だと思うのです。この要素、下から2つ目のパラグラフが何らかの形で我々が批准するべきだと思います。ですから、理事会の方で、我々の決議を行動に移していただくという方向が望ましいと思います。そうすれば、核保有国の代表である我々も、都市に帰ったとき、これをたたき台として元首に圧力をかけ、元首に対して広島・長崎に行って、そこで包括的核実験禁止条約に署名してくださいということができると思います。理事会がそういう行動をおとりくだされば、そういう国の元首が「イエス」と言ってくれば、来年盛大なお祝いをする事ができるでしょう。もし「ノー」という返事が帰ってくれば、我々はさらなる責任を持ち地方の指導者として各国に戻り、さらに「イエス」と言わせるように運動をすることができると思うわけであり、彼らの「ノー」ということは、人類を侮辱することになるからであります。

また、この決議案の最後のところですが、核実験禁止条約の批准を目指す「グローバルリミット・オン・サバイバル」設立のための準備委員会を設けてほしいのです。これはグローバルSOSと呼んでいます。

また、ホーチミン市長がおっしゃいましたように、私たちは、平和運動のために恒久的な、継続的な機構が必要だと思います。また、環境保全、環境擁護、地球の貧困をなくすための具体的な機構が必要であると思います。

議長は、機会をお与えくださいましたので、この決議案を支持するという気持ちを述べたいのであります。そして全体会議あるいは理事会の方でこれについて投票していただくようお願いをしたいと思います。

以上です。

コーディネーター（土山秀夫）

ありがとうございました。

大変貴重なご提言をいただきました。先ほどのセントポールの方からの決議文といい、これは広島・長崎両市長さん、それから理事になっておられる市長さん方とも、またご相談いたしまして、何とかこの精神をぜひ生かしていただくように、私からもお願いしたいと思っております。

それから、もう一つは、今日の午前中、私のご提案申し上げました各都市の情報のネットワークづくりのことにつきましても、大変多くの方からいろいろなご質問とか、ご賛同を得ておりますので、これもまた両市長さんとよくご相談させていただきまして、明日の閉会式までに、どういう形になるかわかりませんが、

お答えできればと考えております。ありがとうございました。

時間がありませんが、最後にお一人、お願いいたします。

ジャージー・シティ(アメリカ)市議会議員  
ジェイミー・ヴァズケス

ジャージー市というのは、この参会の市長の方々から比べますと小さな都市でして、23万人の人口でございます。地理的には、ジャージー市の中に自由の女神があるのではないかと考えております。ニューヨークではなくて、私どもの市に存在するのではないかと申し上げますのは、自由の女神はジャージー市の住所を有するからです。

私どもは、非核都市であり、他都市と姉妹関係を持っております。数々の国際会議に出席しまして、常に会議として何をなすべきかということ、何を達成すべきかということを考えております。そして、我々はそれぞれの国に帰り、また都市に戻っていくわけであり、また都市に戻っていくわけであり、例えば私は、この情報をできるだけいろいろな方々に分かち合いたいと思います。アメリカの国民、それから私の市の市民にこの情報を伝えたいと考えております。ただ単に、我々の支持者だけではなくて、また対立者に対しましても、単にこれを批判するだけではなくて、一緒に協力して我々の一つの何かを達成しなければならないという話をしたいと考えております。

そして、ここで多くの情報を得ましたので、それを持ち帰ります。そして世界的なグローバルSOSを支持したいと思います。と言いますが、これは核兵器の問題だけでなく、世界的な問題を扱っているからです。ですから、マニラからお越しになりました市長が、市民の感情のお話をなさいました。この市民は、何百万マイルも離れたようなところの核兵器に対して死の恐怖を感じているわけであり、世界の安定について同じことをデリー市長をはじめ他の市長の方々も主張されました。そこで、私はグローバルSOSを1991年には広島・長崎で開くことを強く支持したいと思います。そして個人としまして、そして皆様としてもお考えいただきたいと思っております。

ここにいる多くの人々にとっても、そして私にとってもこの会議はたいへん意義深いものであることを言っておきたいと思っております。そして昨日、エレベーターの中で若い方とお話をいたしました。その方は、人生の中でここに来るために多くのお金を貯金してきたというお話をなさいました。「これは価値があるかどうか」と聞きました。そうすると「私がためたお金の10倍も

価値があった」と言ったのです。つまり、これはこの会議の非常によい点を語っていると思います。そして、我々は国に帰り、そして都市に戻っていかねばなりません。こういったものを持ち帰っていかねばなりません。

市長の方々、そして長崎、それから日本の国民の方々にお礼を申し上げたいと思います。

ありがとうございました。

コーディネーター（土山秀夫）

フロアから、あとお1人だけを、最後にいたしたいと思います。

ロサンゼルス市 ジョン・T・ウィリアムズ氏

議長、代表の皆様、ご出席の皆様方、私は、長崎市・広島市を4年前にも訪問いたしました。それは第1回目の世界市長会議のときでした。今回は2回目の会議でありまして、1回目よりもより意義があるものだと思います。そしてまた、これがこの市長会議として全体会議の最後のものです。つまり、来世紀、21世紀に入る最後の10年の最後の会議の最後の全体会議です。

特に、開会における荒木市長のごあいさつ、また本島市長のごあいさつの中に述べられておりました内容は非常に有意義でありました。このセッションの内容も非常に重要です。また、坂本先生の基調演説の内容も非常に意義がありました。ただいま人類生存世界サミットの構想がロング市議会議員によって提案され、非常に重要だと思われました。このようなグローバルSOSを招集するという事は非常に意義があると思います。人類生存のサミットをこの市長会議の主催のもとにやるということによって、ここで言われたあらゆる表明、ここで表明されたあらゆる懸念、ここで発表されたあらゆることを実行に移す機会を持つことができ意義が大きいと思うのです。

また、我々は地球の生存のための道を歩み出しているんだということを行動をもって示し、21世紀に向けての生存の決意を行動をもって示す機会になると思いますので、ぜひグローバルSOSの構想を採択していただきたい。これを支援するための行動を示していただきたいということを強く訴えるものであります。ぜひグローバルSOSの実現を願っております。

ありがとうございました。

コーディネーター（土山秀夫）

ありがとうございました。

それでは、最後にジョンソン市長さん、ごく手短に

お願いいたします。

モンロビア(リベリア)市長

L. クウィア・ジョンソン

議長、そして市長の皆様方、私は一つ問題を持っております。と言いますのは、非常に多くのことが語られ、そしてこの決議文の中に盛り込まれていることでございます。それは手続き的な問題だと思えます。いかにこの決議を実現するかということでございます。本日の会議は、市長会議でございます。私どもは、最終的にこの会議の結論を決めることをまかされているわけでありませぬ。

まず最初に、私が問題としているのは、この世界平和連帯都市市長会議で何をなすべきか、そして何を決議すべきかということ論議しなければなりません。そしてアクションプログラム（行動計画）、これは1985年に決議されたものを、いかに評価するかということでもあります。それと同時に、真に平和な都市間の連帯をどうするかということ、具体的にこれを達成するためにどうすればいいか、その手順を考えるべきだと思うんです。その上に立って決議文を分析していくことが必要でしょう。重要性を、その大切さを認めなければならぬわけでありませぬ。

そして、会議に持ち込む前に決議文を査定し、評価し、分析する事務局が必要であります。私にはこの決議文が妥当なものか確信をもてませんので、早急な決定がなされる前に事務局にこの決議文を評価し、分析するようお願いいたします。この会議の目的を考え、過去4年間の成果を考慮し、非常に複雑なすべての決議案を発布する前によく検討していただきたいと思えます。その後で、我々の核兵器廃絶の決議に対して、各国の代表にここに来ていただいて、賛同の署名をしていただければいいと思えます。これは私が国際会議に出席した経験から申し上げたいことです。

ご清聴ありがとうございました。

コーディネーター（土山秀夫）

ありがとうございました。

本日いろいろご提案いただきましたことは、これはこちらの第2分科会の方は皆さんおわかりですが、第1分科会にご参加の皆さんはこのことはわかっておりませぬ。ですからこういうものもみんな一緒にいたしまして、今夕開かれませぬ長崎アピールの起草委員会に十分お諮りして、今のご提案のとおり慎重にこの問題を検討させていただきたいと思えます。

まだ、いろいろご発言のご希望の方もいらっしゃると思えますが、申しわけございませぬ。時間が大幅に

超過しておりますが、最後です、手短にお願いいたします。

#### 不詳

私は、モンロビア市長が今、おっしゃったことに賛成です。ジョンソン市長さんが具体的なことが決まっていなくて述べたことは正しいと思います。必要なこと、何が可能か、何が実行可能か、また十分に考えていません。いろんな立場があります。モンロビア市長がおっしゃった5つのTについて、貿易は友好関係を推進する最良の方法ですし、その他姉妹都市提携、観光も大変重要な要素です。しかし、それ以外にも何かがあると思うんです。そういう具体的内容を知らなければいけません。非公式なグループを設けて、そこでよく審議して内容を図るべきだと思います。提案自体は素晴らしいことです。オーストラリアのキャンベルタウン市長もここで広島・長崎で見たことを集めて展示会をやるというような提案をされました。それも素晴らしいことです。また、フィルムを見せる、そしてこの悲劇をいろんな人に知ってもらおうと、そしてまた、私たちのこの市長会議などもフィルムにして展示するというようなことも素晴らしい内容です。これがモンロビアの市長も言われましたように実行性のある提案の1つだと思います。

つまり、実践可能な、実際的なアイデアを小グループの間で吟味して事務局に出すべきだと思います。

もう一つ、私どもは信じられない破壊というものを広島・長崎で見ることができました。しかし現在、この都市は短時間のうちに再建され、素晴らしい都市へと変わったのです。素晴らしいホテルですし、これまでこの町で見たものは人々の熱意であり、青少年は素晴らしい人間で、子供たちも可愛らしい。人間の精神は素晴らしいものです。人類の苦悩を見たのですが、そこから新しい命が生まれ、新たな復興を実現されました。この精神を役に立て、これをもとにぜひグローバルSOSをやるべきだということは賛成です。その前に、実際的によく地に足をつけて、よく内容を審査してほしいと、それだけをお願いします。

#### コーディネーター（土山秀夫）

ありがとうございました。

私の進行の勝手もございまして、まだまだご発言になりたい方がおられますが、大変申しわけございません。

今、各都市の代表の方々から、この席でご意見あるいはご提案をなさいました。その中には、大変今後の各都市が何をなすべきかという具体的なご提案が数多

く含まれておりました。私どもは、このことを十分かみしめまして、これから後、いかにその精神を生かし、また今後の行動の一つの指標となるようなものを表現できるか。さらにいろいろ詰めさせていただきたいと思います。

いずれにいたしましても、各都市での具体的な取り組みと将来への展望というものを大変熱心にご討議いただきました。私は、必ずこういった皆様方のご熱意が地球の平和と人類の将来に明るい灯をともし礎として大きなきっかけをつくったものと確信いたしております。

本日は、どうも大変長い間、ありがとうございました。これをもって閉会させていただきます。

#### 司会（松永国際文化会館次長）

どうもお疲れさまでございました。

これで本日の会議はすべて終了いたします。

# 特 別 講 演

---

193

8月9日（午後2時32分～午後2時52分）

ホテルニュー長崎 鳳凰閣

国際連合事務次長 明 石 康

「国連から見た平和と軍縮の展望」…………… 195



司会（松尾蘭子）

皆様、こんにちは。

今日、午前中は長崎の平和祈念式典にご参列いただきまして、誠にありがとうございました。お疲れ様でございました。

それでは、昨日に引き続きまして、長崎会議を開かせていただきます。

ただいまから「国連から見た平和と軍縮の展望」と題しまして、明石康先生よりご講演をお願いいたします。

ここで明石先生をご紹介させていただきます。明石先生は、現在、国際連合軍縮問題担当事務次長としてご活躍されております。特に、本年4月国連主催の国連軍縮京都会議においては、総括司会を務められた方でございます。

それでは、明石先生、よろしくお願いいたします。

## 特別講演

### 国連事務次長 明石 康

冒頭に心からの敬意をあらわし、また荒木広島市長並びに長崎本島市長が、市長間の平和と連帯の会議を組織化され、主唱していらっしゃるこのイニシアチブに心より敬意と感謝の気持ちをあらわしたいと思います。

本日、世界中の多くの都市の市長の方々に、国連から見た世界の展望、平和と軍縮の展望を、44年前、広島とともに筆舌に尽くしがたい悲劇を体験し、世界が原子の新時代を迎えることになった都市、長崎市で講演させていただくことを大変光栄に存じます。長崎の地に立つことは、いかなる人にとってもそうですが、特に、平和と軍縮に携わる者には感慨深いことです。

原爆が広島と長崎に落された年、ディーン・アチソン氏は、原爆は「人間社会にとって、車よりも革命的な発明だ」、「もし、この発明が破壊を目的として使用されれば勝者も文明も滅びてなくなるだろう」と述べました。何と将来を見通した発言であろう。しかし、彼の述べたことを国家元首たちが肝に銘じるようになったのは数十年後になってからです。レーガン大統領とゴルバチョフ書記長が「核戦争では勝利国などあり得ないのだから、決して戦ってはならない」と熱弁を振ったのは1985年、ジュネーブにおいてでありました。このような大量殺戮兵器が、今や外交の手段として認められず、殺しを目的として使用すべきでない

考えられていることを思えば、いくらか慰めになります。核兵器は、敵国の大攻撃を抑止するための武器とみなされているのです。

今日の国際政治情勢は、ほんの数年前と比べても全く違っています。米ソ関係は急速に好転し、両国間では信頼関係が確実に築かれつつあります。実質的な軍縮協定に達するための条件は1945年以降、最良の状態にあります。この状況を喜ぶだけの根拠はありますし、この軍縮機運を盛り上げるために最善を尽くさなければならぬと思います。

今日、相互安全保障に対して人類は共通の関心を持っております。すべての国々が基本的に安全保障に関心を持っていますが、それは他国の安全保障を犠牲にして得るものではなく、すべての国の安定と相互信頼を高めるものです。同時に、安全保障は大体において軍事力に頼るものだという考えはすたれ、そのかわり経済、社会、文化、生態系、人道的な面にも及ぶという意識が広がっています。

今日、最も顕著な進展が見られるのは、東西間の認識が大きく変わったヨーロッパにおいてであります。これまで何年にもわたる交渉は実を結ぶことがなかったのですが、本年、春に北大西洋条約機構（NATO）とワルシャワ条約諸国間で通常兵器削減交渉が再開し、お互いに積極的な提案を出し合っています。このような交渉は1年以内にも合意に達するのではないかと期待されています。

同時に、1985年のヘルシンキ会議及び1986年のストックホルム会議に基づいて、軍事活動の事前通告から軍事活動の監視団駐留まで、ヨーロッパでは具体的な信頼醸成措置がとられています。

昨年、米ソ間で戦後初の核軍縮協定が批准され、中距離核戦力が全廃されることになりました。廃棄されるのは5万といわれる現存核兵器の約5%に過ぎませんが、INF条約の象徴的・政治的価値は非常に大きいものがあります。相互検証のための詳細な条項を含んでおり、兵器削減数が相互に同じでないことも注目に値します。

ワシントンでの会談において、レーガン大統領は「信じよ、しかし、検証せよ」という句を引用しました。実際、検証は依然として相互の信頼が確立していない現在の世界において不可欠なのであります。

米ソ両国が、現存数の50%にまで及ぶ戦略核兵器の大幅削減交渉を再開したことは勇気づけられます。艦艇用巡航ミサイル検証や対弾道ミサイル条約遵守の問題は依然残りますが、国際社会は米ソ間の戦略兵器削減交渉が締結することに期待を寄せています。

交渉において、冷戦時代のようなイデオロギー的

るいは論争的な響きが現在ないことは注目に値します。実際、交渉は能率よく進んでおり、技術的問題に重点が置かれ、いわゆる「検証のずれ」を小さくすることに多大の努力が払われています。私は、軍縮交渉に携わっている人々が「やっかいなのは細かい部分なのです」と言ったのを聞いたことがあります。国家首脳の政治的洞察力と分別及び技術専門家のたゆまぬ努力を結集し、さらに重要な軍縮協定が近い将来締結され、私たちみんながより安全な世界で暮らせるようになることを期待いたします。

しかしながら、安定と平和維持を脅かすものが新しくあらわれてきましたが、そのうち2つだけに触れたと思います。その1つは、新兵器が精巧化し、それを製造する知識や所有が広がっていることです。世界のいたるところで技術や科学の進歩が進み、古い兵器は廃棄され、非常に精巧な新兵器へとかわりつつあります。軍縮で兵器の量が減少しても、そのかわり質をめぐる兵器戦争が起こらないように見守ることが大切です。核兵器だけでなく化学兵器やミサイル技術の知識が拡散するのは極めて憂慮すべきことです。科学や技術の進歩が相互の紛争や対立を煽らず、人類のために利用されるようにすることが我々の課題です。

2つ目は、発展途上国の大部分の生活状態は満足できるというにはほど遠いということです。このような国々では、自分自身の暮らしも満足にできないため、地域・民族・宗教及び他の紛争や論争をしばしば生み出すこととなります。米ソ両国が世界に貢献しても、その効果がないと気付き、同盟国間のつながりが弱まれば、世界中で民族紛争や地域紛争が盛んに勃発することも考えられます。

北の経済的繁栄及び安楽な生活と、ほとんどの発展途上国が経験している貧困と絶望感とがはっきりとした対照をなしています。東西間の対立が次第に薄れるに従い、我々は小さくて劇的ではないかもしれないが、さまざまな、また生命にもかかわる南の問題に真剣に取り組まざるを得なくなっています。この点については、坂本先生が基調講演でお話をされました。

それでは、ここで国連の軍縮状況についてお話をしたいと思います。40カ国が参加しているジュネーブの軍縮会議では、最も重要な優先順位として化学兵器廃絶の条約を結ぼうとしております。それからまた、さらに宇宙を軍事使用しないように、また、核実験を禁止するという事で多くのコンサルテーション（話し合い）が行われています。毎年国連総会では、60以上の軍事制限及び軍縮に関する決議が採択されています。そして、最近関心を集めている新しいテーマとしては武器移転の問題、それから検証における国連の役割に

ついて、軍事産業を民主的に転換するような問題などが含まれています。コンセンサスに基づいて軍縮に対して現実的なアプローチをするという傾向が疑いもなく出てきています。

平和は人類が最も強く望んでいるものでありながら、政治的、経済的、心理的要因によって左右されるものなのなのです。人間関係のようなものです。国家間の相互信頼と理解を確立することは、個人間でと同じくらい難しいことです。国家間の利害が絡み合い、相互に依存している現代では、平和軍縮問題を政治家や外交家のみにかかせておくわけにはいきません。すべての市民、特にここに一堂に会している都市の市長さん方のような市民のリーダーは、平和希求・軍縮協定締結促進の機運を盛り上げるため、国家・都市間の相互理解や対話を強化するという重要な役割を担っています。

政治家というのは、平和のための仕事をしていくためには、その選挙民の支援、監督、刺激などを必要としております。市民のリーダーというのは、ほかの人たちと比べてみても経済、文化的な交流をその他の国々の市民の人たちと頻繁に行っており、首都にいる国のリーダーよりも、そういった相互依存などについてよく現実のものとして感じているのではないのでしょうか。したがって、市民、そして市レベルから国へと平和を持ち上げていくということが可能であると思います。つまり、私たちは政府の民主的なコントロールがますます求められ、そして受け入れられている時代に住んでいるのです。40年前、今これほど人権の普遍的な基準が受け入れられるようになって考えた人はどれだけいるのでしょうか。1948年の国連のあの人権に関する宣言であります。世論は、こういった問題に対して非常に重要な役割を果たしているのです。国連の総会では、世論の重要性にかんがみまして1982年には、世界軍縮キャンペーンを行っています。これは第2回国連軍縮特別総会との兼ね合いで行われたものであり、お集まりの皆様方には参加された方もいらっしゃると思います。

このような会議が、これから先も共通の価値に対する認識を高める再確認をするために、それからまた、共同の活動のために使われていくようにしていかなければなりません。それからまた、平和軍縮のための決意を新たにし、より安全で、そして健康な地球にしていき、生きがいのある、実りのある地球に、我々の世代のためにも、将来の世代のためにもしていかなければならないと考えています。

ご清聴ありがとうございました。



# 全 体 会 議 V (長崎アピール発表)

197

8月9日 (午後2時58分～午後3時28分)

ホテルニュー長崎 鳳凰閣

司 会 長崎平和推進協会  
松尾蘭子

元広島大学学長 飯島宗一

長崎アピールの発表 ..... 200

長崎市長 本島 等



### 司会（松尾蘭子）

ただいま第2回世界平和連帯都市市長会議「長崎アピール」の発表を行う全体会議Ⅴを開かせていただきます。

この会議の司会は、コーディネーターの飯島先生にお願いしたいと思います。飯島先生、よろしくお願ひいたします。

### 飯島宗一コーディネーター

それでは、起草委員会を代表いたしまして、長崎アピール起草の経過についてご報告を申し上げたいと思います。

このアピールの起草委員としては、ただいま壇上に上がっていただいているベルリン市長のエアハルト・クラックさん、コモ市長のアンドロ・メダさん、サクラメント市長のアン・ルーディンさん、それから既に時間の関係でお帰りになりましたが、ハノーバー市長のヘルベルト・シュマルステークさん、ボルゴグラード市長のユーリー・スタロバトフさん、その方々に加えて広島市の荒木市長、長崎市の本島市長に起草委員をお願いしてございます。

私とその起草委員会のコーディネーターをさせていただき、さらにサブコーディネーターとして坂本教授、土山学長にご協力をお願いいたしました。

昨晚、起草委員会を開催いたしまして、その場で練られ、作成された長崎アピールの内容は、お手元にお届けしてあると思います。この内容については、のちほど本島市長からご発表をしていただきたいと思います。

起草の経過について申し上げますと、この長崎アピールの内容及びその精神については、起草委員会のすべての方々がご了解になり、ご賛成でございました。広島アピールとあわせてこの長崎アピールをご覧くださいと、我々がこの数日間、広島・長崎でもったところの素晴らしい会議の内容と、その目的としようとしたところが明確に要約されていると私は信じております。

もちろん、このアピールの原案を補う意味で、起草委員会ではいろんなご意見が出されました。例えば平和という概念、あるいはその平和という理想を達成するために我々の都市は何をすべきか、殊にその都市というものを我々自身がどのようにとらえるか、というような極めて基本的な問題をしっかり考えなくてはいけないというご指摘が一部の委員からなされ、そのご趣旨を起草委員会は十分に認識をしたように私は思います。

しかしながら、この平和が人類にとって最も大切な

価値ある問題であり、またほとんどそれは人間の権利であると言っても差し支えないほど切実なものであるということ。あるいは都市が、単なる地域行政上の単位ではなくて、人間がそこに住み、そこでそれぞれの人生を見事に達成するための、まさに生活の場です。それは人々の生命と生活にとって極めて重要な意味をもった存在であるという認識は、広島アピール、長崎アピールを通じて、私は脈々としてその底流をなしていると思いますし、また、過去数日間の我々の会議を考えますと、大変素晴らしいことに、私どもはその2つの精神において、この実り多い会議を持つことができたということを確認をもって発言することができるのではないかと思います。

また、「生存のためのグローバルサミット」というような、より積極的な国際的行動を起こすべきであるというご提案も分科会の中でご提案があり、起草委員会は、この問題をアピールに反映させる問題についても慎重な議論をいたしました。しかしながら、この問題は、その実現の可能性等は大変周到な準備と検討を要する課題であります。既に広島アピールでは、その中で世界の人々、なかんずく各都市の指導者は、広島・長崎の被爆地を訪れ、被爆の実相を知る努力をすることということ述べておりますし、また、両者のアピール全体が全世界の都市の力を結集して核軍縮と環境の保全、よりよき人間生活の開拓ということを強くうたっておりますので、このグローバルサミットを開こうというご提案の趣旨は十分に2つのアピールの中にも生かされていると存じます。

問題は、さらに我々のこの都市の会議が一層コミュニケーションを深め、具体的な連帯行動を進展せしめ、そして、世界の主要国の政府首脳を動かすに足りるところの、先ほどの明石さんのご講演で言えば地球的な市民レベルの世論を大きく形成していくということが肝心なことであると考えられます。その意味では、この問題は恐らく我々のこの会議が、今後具体的にどのような組織とどのような行動を固めてさらに活動を広げていくかという課題に帰するのではないかと思います。この問題は、さらに理事会あるいは広島・長崎両市長、さらには多くの加盟都市の方々に与えられている一つの今後の大きな課題とご考慮をいただきたいと、私どもは考えております。

以上のような、この長崎アピールの本質を補うようなさまざまなご意見が出、その討議を重ねました結果、初めに申し上げましたように、このたびの長崎アピールを確定をいたしました。

以上が長崎アピール起草委員会の経過でございます。何かご意見がございますでしょうか。もし特にご意

見がなければ、長崎市長の本島等さんをお願いをして、  
この長崎アピールを発表していただきたいと思ひます  
が、よろしゅうございますでしょうか。  
ありがとうございます。

それでは市長、お願いします。  
本島長崎市長  
(長崎アピール発表)

## 長崎アピール

戦争が起これば、真っ先に被害を受けるのは都市であり、そこに住む市民である。平和で安全な市民生活を守るという共通の責務を持つ我々、世界の24カ国、91都市の代表は、ここナガサキに集い、第2回世界平和連帯都市市長会議を開催した。

我々は、改めて原爆被爆の実相と被爆者の苦しみに触れ、「今、地球の平和を考える」をテーマに、平和を脅かしているものは何か、平和実現のため何をしなければならぬか、都市と市民は何ができるのかを真剣に討議した。

我々は、4年前、平和構築のための都市の役割が極めて大きいことを確認し、都市間の連帯を強め、核兵器の廃絶と軍縮、飢餓と貧困の絶滅を目指して努力することを誓い合った。

そしてこの間、平和を希求する都市の連帯の輪は広がり、非核宣言都市は増加し、各都市は平和への多彩なアプローチを展開してきた。

世界においては、米ソ両国のINF全廃条約の調印、戦略核兵器削減交渉の再開、欧州通常戦力の削減交渉など国際政治の新しい局面が開かれた。

しかしながら、核実験は依然として続けられ、核兵器の高性能化、海の核軍拡、核保有国拡散の懸念など核戦争の危機は今なお続いている。世界の人々は、原子力潜水艦や水爆搭載機の事故に強い不安を抱いている。また、化学兵器や生物兵器の拡散、通常兵器の増強などが行われているのが現状である。

さらに、南北問題や資源問題、民族的確執や人権の抑圧、私利優先の経済活動などが複雑に絡み合っており、軍事紛争や飢餓、貧困の解決を困難にしている。また、大気や海洋の汚染、緑の激減、生態系の崩壊など、生命の基盤である地球環境の破壊が進んでいる。一方、原子力発電所の事故の多発や核廃棄物の最終処理の問題も大きな懸念となっている。

このような現状を直視すると、平和への道程はなお遠く、我々の責任はますます重大になっている。我々は自らの実践とその教訓から、平和を希求する世論を喚起することが現状を打開する最大の力であることを確信し、次の行動目標を掲げて努力することを決意し、全世界の都市と市民がともに前進するよう訴える。

- 1 各都市は、自国で連帯の輪を広げ、自国政府に対して、核戦争の阻止、核兵器の廃絶、軍縮の実現を目指して積極的に取り組むよう要請すること。
- 2 非核自治体宣言運動を推進し、核兵器の製造、配備に関する施設については、各都市の責任によりでき得る措置をとること。
- 3 大気と海洋の汚染、森林破壊と砂漠化、オゾン層の破壊などの地球環境の悪化を防止するための運動を積極的に展開すること。
- 4 人権や言論の抑圧、貧富の格差と差別意識など平和を脅かしている諸問題をいろいろな角度から取り上げ、平和教育を推進すること。
- 5 飢餓、貧困などを解決するために各都市はでき得る限りの支援活動を行うこと。

我々はこれらの目標の実現のために、国境を越えて都市間の交流と相互理解を深めるとともに、情報ネットワークを生かして、国際的都市連帯の強化に一層の努力をすることをここに誓うものである。

さらに、この会議の総意として、各国政府及び国際機関に次のことを訴える。

- 1 核兵器は、人間の生存権を奪う最たる存在であり、人類にとって絶対悪である。核実験の即時全面禁止と核兵器の廃絶を目指す国際条約成立のため、誠意をもって努力すること。
- 2 速やかにあらゆる軍事紛争の平和的解決を図り、化学兵器、生物兵器の生産、貯蔵の禁止と通常兵器の削減のため英知を結集すること。
- 3 軍備競争に注がれている膨大な軍備費と科学技術を人類の福祉向上に振り向け、貧困、飢餓、環境破壊など当面する諸問題の解決のため積極的に取り組むこと。

1989年8月9日

世界平和連帯都市市長会議

## 飯島宗一コーディネーター

どうもありがとうございました。

ただいま頂戴をした盛大なる拍手で、皆さんからこの長崎アピールの採択をご承認いただいたことと私は感謝いたします。

フランス語、ドイツ語、ロシア語、イタリア語等の長崎アピールのそれぞれの文章は、この日本文と英文とを基礎にいたしまして、なるべく早く作成をいたしまして、それぞれ皆さんにご報告をし、お分けするようにしますから、ご了解をいただきたいと思います。

最後に、この起草委員会の作業のためにも、また、今会期全体を通じての私どもの議論のためにも、大変に協力をし、役に立ってくださった同時通訳のメンバーの方々に厚くお礼を申し上げたいと思います。

ご発言があるようですから、どうぞ。

## ジム・クレマー・キャンベルタウン市長

1行めの「戦争が起れば真先に被害を受けるのは都市であり、そこに住む市民である」という事実は正しいと思いますが、今回の会議の出席者の中にも都市というには小さい地域から来られた方々もあるので、「都市」だけでなく、「都市と町」にさせていただけないでしょうか。小さいことですが、お願いします。

## 飯島宗一コーディネーター

それは皆さんのご賛成があれば「町」を入れることには、一向に差し支えありません。

ただ、この場合の都市と言っておりますのは、村も町もあるいは非常に大きな都市も含めて一括して「都市」という名前前で呼んでいるということをご了解いただきたいと思います。

それから、これからは不幸にして戦争が起れば、兵士よりもまず都市の市民が犠牲になることを、恐らくこのアピールの起草の文章の念頭においていると思います。

どうします。どうしても入れますか、タウンを。

第三世界の問題も私どもはぜひ考慮していただきたいということをお願いしたんですけども、長崎もそして広島のアピールの中にも、この第三世界の問題が触れられておりません。英語版資料の2ページに「other issues」という語句が入っておりますが、この「other issues」ということの中に、あるいは第三世界の問題も入っているんだと思います。しかし、「other issues」といった漠然とした表現ではなく、この表現の中にぜひ第三世界の対外債務の問題というような具体的な表現を挿入していただければと思いま

す。これは私たち全員に関係のあることなのです。

生態系の破壊あるいは熱帯樹林の破壊、あるいは環境の破壊といった言及はあるわけですがけれども、対外債務だけが抜けており、第三世界の平和・開発と関わりのある大きな問題として、この対外債務にも言及していただきたいと思います。

## 飯島宗一コーディネーター

それらの問題はよくお読みいただければ、決して第三世界のことを忘れていたわけではなくて、今もご指摘があったように環境の問題、飢餓の問題、貧困の問題、さらには私利優先の経済活動の問題、あるいは膨大な軍事費をこの人類の福祉向上に向けるべきであるという文脈の中には、当然第三世界に対する重大な関心が含まれているとご理解をいただきたいと思います。

起草委員会の中にもそういうご指摘がございました。そのときには、今私が申し上げたようなことの中に、第三世界の問題は十分含まれているという認識で、この原文を決定したということでございます。もちろん、ご指摘の点も大変重要なことですから、今後ともこの会議の大きな課題として取り組んでいかなければならないことは当然であると私も思います。

それでは、この長崎アピールの採択を再度拍手で確認をしていただいてよろしゅうございますか。

## 司会

ありがとうございました。

全体会議V、長崎アピールの発表を終わらせていただきます。

飯島先生を初め坂本先生、土山先生、起草委員の皆様、本当にご苦勞様でございました。

引き続き閉会式を行いますので、皆様、そのまましばらくお待ちください。



# 閉 会 式

203

8月9日（午後3時32分～午後3時51分）

ホテルニュー長崎 鳳凰閣

司 会 長崎平和推進協会  
松尾 蘭子

## 1. 閉会あいさつ ..... 205

世界平和連帯都市市長会議会長

広島市長 荒木 武

世界平和連帯都市市長会議副会長

長崎市長 本島 等

## 2. 参加者代表謝辞

サクラメント(アメリカ)市長

アン・ルーディン ..... 206

## 3. 閉会宣言

長崎市助役 古井 一喜 ..... 207





## 司会 (松尾蘭子)

ただいまより第2回世界平和連帯都市市長会議の閉会式を始めさせていただきます。

それでは、初めに本会の会長であります広島市長荒木武よりごあいさつを申し上げます。

## 閉会あいさつ

### 世界平和連帯都市市長会議会長 広島市長 荒木 武

このたび第2回世界平和連帯都市市長会議が、前回は上回る世界27カ国、120都市の参加を得て滞りなく終了できましたことは、皆様方のご協力のたまものであり、心から厚くお礼を申し上げます。

8月5日の広島での開会式に始まり、本日の閉会式まで暑い最中の、しかも長期間の会議に、皆様方にはさぞかしお疲れのこととお察し申し上げます。

広島・長崎では、数多くの都市から貴重なご報告をいただき、またご意見を賜り、誠にありがとうございました。そして、平和への決意を結集した広島アピール、長崎アピールが採択されましたことは、世界平和連帯都市市長会議の結束を象徴する最大の成果であり、大きな喜びとするものであります。

広島・長崎両アピールに盛り込まれております内容は、今、世界が直面した焦眉の急を要する全人類の課題であります。私は、こうした緊急を要する課題を我々の総力を結集して取り組めば解決できないことはないと固く信ずるものであります。とりわけ、核兵器の廃絶や通常兵器の削減、さらには化学兵器の全廃は、我々が理想とする戦争のない世界を築く上で、ぜひとも達成しなければならない課題であります。

私は、このたびの会議を通じ、皆様方の平和への熱意をひしひしと感ずるとともに、この世界平和連帯都市市長会議が21世紀の人類の平和と繁栄を橋渡しする新しい門出になったと言っても過言ではないと思います。

世界は今、大きな転換期を迎えております。軍拡から軍縮へ、不信から信頼へと、そのうねりはますます大きなものになろうとしております。4年前にこの会議を開催いたしました当時とは、国際情勢は好転し、将来への確かな展望が開ける情勢になってまいりました。今回の会議を契機として、よりよい世界を築くため、さらに一層、このうねりを大きく確かなものにしていこうではありませんか。

未来への道は、我々一人ひとりの努力によって切り開くことが可能であり、平和への努力なくしてはバラ色の未来を築き得る保障はございません。広島・長崎で花咲いた都市連帯の輪が、今後世界の隅々まで広がり、世界の真の平和が訪れることを強く望むとともに、皆様方のますますのご健康と各都市のご発展をお祈り申し上げます。

最後になりましたが、この会議を通じて、広島・長崎の両市民並びに関係機関のご協力をいただき、とりわけ被爆者やボランティア通訳の皆さんのご協力のもとに会議が無事終了いたしましたことに対し深く感謝いたしまして、閉会のごあいさつにかえる次第でございます。

ありがとうございました。

## 司会

次に、長崎市長 本島等よりごあいさつ申し上げます。

## 閉会あいさつ

### 世界平和連帯都市市長会議副会長 長崎市長 本島 等

私が申し上げようと思っていたことは、全部広島市長さんが言ってしまいました。

そこで、急いで考えたのですけれども、一言お願いを申し上げたいと思います。東南アジアに行きますと「日本という国がなければ非常に幸福なのにね」という言葉がはやっています。日本は急に世界の表面に出てまいりましたので、いろいろところで世界のたくさんの人と交流をしていく上に、無礼なことがあったり、あるいは皆様に失礼なことがあったりします。それにもかかわらず大変な経済的な発展を遂げました。日本人の中には、非常に世界の人たちに威張る人もたくさん出てまいりました。

特に、原爆がなぜ落とされたかということ、我々はいつも考え続けています。原爆は、約1世紀にわたって日本が中国や朝鮮、東南アジアを侵略した、その報復として落とされたということを我々は反省をいたしております。それにもかかわらず、戦後の日本は急速な経済発展をたどりました。多くの人たちは日本を「エコノミック・アニマル」と呼んでおります。私たちもこの物質的なものに対して精神的なものがなかなかついていけないということも、よく知っています。

そして、世界のどこに行っても、何となくたくさんの人たちが行動をし、土産物をよけい買い集め、そして非常に皆様方に失礼なことを申し上げたりいたします。

しかし、本当は日本人は善意のある民族だと、そういうふうに考えてほしいのです。あの大きな戦争を心から反省をしていることも、よく皆さん考えてほしいと思います。これからの私たち21世紀の日本は、世界の人たちとどれだけ仲良くしていくか。特に、東南アジアやアジアの人たち、発展途上国の人たちと、どのように一緒に手をつないでいくかということを、私どもは一生懸命考え続けていますけれども、十分なところまでいっていないということを非常に残念に思います。

どうか、長崎に来たこの折に、日本に来たこの折に、日本人が一生懸命国際社会の中で本当に喜ばれる一員になろうと努力をしているということを、そして皆さん方のいろいろな助言といえますか、提案、またここが悪い、あそこが悪いというような、そういうご指導をお願いしたいと思っています。

私にとって、私の人生の中で、これほど思い出になる会はありませんでした。私は、もう死んでもいいなと思っています。

皆さん方がお帰りになりましたら、どうぞご家族を大切にしてください。日本では、特に、大切にしないという人もおりますけれども、皆さん方はどうかご家族をくれぐれも大切に、市勢発展のために力を尽くしてほしいと思います。

そして、私は、皆様からよくよく学びました。市長というのは、道をつくったり、学校をつくったり、そういうハードな面ばかりではなくして、本当は平和というようなもの、その他のソフトな面を本当に市民教育的立場で指導することが、市長の本当の任務だということを、つくづく皆様から教えていただきました。

皆様方のそれぞれの都市の今後のますますのご繁栄を心からお祈りいたしまして、私の心からなるお礼の言葉にかえたいと存じます。

ありがとうございました。

## 司会

それでは次に、ご多忙中のところ世界各都市よりお集まりいただいた各都市市長を代表しまして、アメリカ・サクラメント市のアン・ルーディン市長にごあいさつをお願いいたします。

## 参加者代表謝辞

サクラメント市長 アン・ルーディン

第2回世界平和連帯都市市長会議の参加者を代表いたしまして、開催市の方々にお礼を申し上げたいと思います。

素晴らしい機会をいただいて、本当にありがとうございました。

このような会議を通じて、戦争の持つ意味を考えさせられました。戦争の直接的な影響を受けた人の話を伺うことができました。この数日間に私たちは決して忘れることのできない体験をさせていただいたと思います。お互いを知り合い、そして話し合い、そして同じ目標を各市長さんが持っているのだという認識を新たにいたしました。

私たちがお互いを仲間として受け入れれば、悪の帝国は存在しないと思います。私たちはみんな人間であり、みんな同じものを望んでいると思います。国の指導者にもこういう経験をしてほしいと思います。

4年前に、私は初めて広島にまいりました。そして、そのとき以来、ぜひ超大国の指導者の人たちに、私たちが見たものを見せたいと思いました。私たちが聞いたものを聞いてほしいと思いました。そういったことを通じて、核をなくす、それからまた、包括的な核実験停止条約を結ぶための理解、合意が得られるようになるのではないかと思ったのです。ここであれ、世界のほかのところであれ、そういう合意がなされなければなりません。早くそうなってほしいと願っています。また、私たちとしては、自分の市町村に帰り、そして新たな決意を胸に秘めながら積極的に、自分たちの地域社会の中でいろいろな形で活動をしていきたいと思っています。市民や政策決定者をいろいろなレベルで啓蒙していかなければなりません。

国家安全保障というのは、軍事的な野心とか、軍事費増強によっては得られません。安全保障というのは、教育が行き渡り、健全で生産的な市民生活を行うことによって達成できます。また、貧困、飢餓、病気、または環境の破壊がないような状態で初めて平和は生まれるのだと思います。

今回のこの会議の討論を通じて、私はそういうことを学びました。4年前、第1回のこの連帯都市市長会議が開かれたときにも、同様の討議が行われました。私たちは、お互いをよりよく知り合うようになり、政治的なイデオロギーを越えた連帯ができるようになったと思います。昨年、科学者をはじめとしたソ連とア

アメリカのチームが、アラスカ沖で氷に取り囲まれてしまった鯨を共同で救出しました。そのときの鯨は、助けてくれたのは、米ソという違った政治システムのところから来た人とは知らなかった。助けてもらえればそれでよかったと思います。それが世界の人たちにも言えるのではないのでしょうか。これは非常に高度な協力の象徴であると思います。お互いを知り合って、お互いを尊重し合う、そして私たちの能力を認め合う。政治的なイデオロギーを越えて認め合うことが大事だと思います。鯨を助けたときと同じようにして、世界を戦争から、テロリズムから解放することができるのではないかと思います。新しい方法を紛争解決のために見出していかなければなりません。

それからまた、国連をこれから先、支持、支援していかなければなりません。国連の場で紛争を解決していかなければなりません。私は、アメリカが国連から撤退することには反対であり、そしてまた、私のアメリカの同僚も同じように考えていると思います。世界の市長の方々と一緒に、この地球という惑星を守っていかなければなりません。地球以外に私たちの住むところはありません。

ご清聴ありがとうございました。

#### 司会

ありがとうございました。

それでは、最後に第2回世界平和連帯都市市長会議の閉会宣言を行います。

閉会宣言は、ヒロシマ・ナガサキ平和アピール推進委員会副委員長・古井一喜より行います。

#### 長崎市（古井一喜助役）

広島・長崎で6日間にわたり、熱心な会議が繰り広げられましたが、皆様方のご協力に対し心から感謝申し上げます。

この会議を機会に、世界の都市の連帯が今後ますます深まり、核兵器廃絶と世界平和達成への一助となりますことを心から祈念いたします。

これをもちまして、第2回世界平和連帯都市市長会議の閉会を宣言いたします。

#### 司会

8月5日より本日まで広島市及び長崎市で開催しました第2回世界平和連帯都市市長会議も、これをもって滞りなく終了することができました。

各国からご参加くださり、熱心にご討議いただきました。また、本会議を実りある会議にさせていただきました参加市長の皆様、ありがとうございました。

また、貴重なご意見をいただきました先生方、パネリストの方々、被爆者の方々、本当にありがとうございました。

皆様のご多幸をお祈りしまして、この会議を終わらせていただきます。本当にありがとうございました。



# 資料編

---

〔資料Ⅰ〕新聞報道	211
〔資料Ⅱ〕会議実行委員会	216



## 〔資料Ⅱ〕 会議実行委員会

## 広島会議実行委員会

委員会の役職名	職 名	氏 名
委 員 長	広 島 市 長	荒 木 武
副 委 員 長	広 島 市 助 役	福 島 隆 義
委 員	広 島 市 助 役	椎 名 彪
〃	広 島 市 収 入 役	佐々木 眞 二
〃	広 島 市 市 長 室 長	池 田 正 彦
〃	広 島 市 企 画 調 整 局 長	樋 渡 敬 宇
〃	広 島 市 総 務 局 長	村 上 健
〃	広 島 市 財 政 局 長	石 橋 正 行
〃	広 島 市 衛 生 局 長	吉 田 哲 彦
〃	広 島 市 経 済 局 長	和 泉 禎 一
〃	広 島 市 民 病 院 長	島 山 哲 朗
〃	広島平和文化センター理事長	河 合 護 郎

## 顧 問

委員会の役職名	職 名	氏 名
顧 問	広 島 県 知 事	竹 下 虎之助
〃	広 島 県 議 会 議 長	末 田 隆
〃	広 島 商 工 会 議 所 会 頭	橋 口 収
〃	広 島 市 議 会 議 長	瀬 川 吉 郎

## 幹事会

幹事会の役職名	職 名	氏 名
幹 事 長	広 島 市 市 長 室 次 長	久保田 浩 二
幹 事	広 島 市 企 画 調 整 局 次 長	白 崎 徹 也
〃	広 島 市 総 務 局 次 長	山 田 康
〃	広 島 市 財 政 局 次 長	伊 藤 利 彦
〃	広島市衛生局原爆被害対策部長	松 浦 洋 二
〃	広島市経済局商工・消費部長	藤 井 克 己
〃	広島市民病院事務局次長	計 田 博 男
〃	広島市平和記念資料館長	川 本 義 隆
〃	広島市平和記念館長(兼)	脇 坂 清
〃	広島平和文化センター事務局長	

## 長崎会議実行委員会

委員会の役職名	職 名	氏 名
委 員 長	長 崎 市 長	本 島 等
副 委 員 長	長 崎 市 助 役	古 井 一 喜
委 員	長 崎 市 助 役	橋 本 敏 春
〃	長 崎 市 収 入 役	林 田 進
〃	長 崎 市 教 育 長	黒 岩 竹 二
〃	長 崎 市 総 務 部 長	湯 川 司 郎
〃	長 崎 市 財 政 部 長	五 貫 淳
〃	長崎市原爆被爆対策部長	片 岡 正 則
〃	長崎市商工観光部長	内 野 秀 臣
〃	長 崎 市 衛 生 部 長	入 江 定 男
〃	長 崎 市 議 会 事 務 局 長	川 村 邦 男
〃	長崎国際文化会館館長	加 藤 彰 彦

## 顧 問

委員会の役職名	職 名	氏 名
顧 問	長 崎 県 知 事	高 田 勇
〃	長 崎 県 議 会 議 長	初 村 誠 一
〃	長崎商工会議所会頭	中 部 長 次 郎
〃	長 崎 市 議 会 議 長	佐 藤 了
〃	長崎平和推進協会理事長	秋 月 辰 一 郎



## 第2回世界平和連帯都市市長会議報告書

平成3年2月発行

編 集 世界平和連帯都市市長会議事務局  
発 行 于730 広島市中区中島町1-5  
財)広島平和文化センター内  
電 話 (082) 241-5246





